A Book on

How the serpent deceives the whole world

BOOK TWO

私たちは嘘をつかれたのか？神は殺人者なのか？

GOD ON TRIAL

Have we been lied to?

Is God a Killer?

OSWALD AND DENICE GRANT

私たちは嘘をつかれたのか？神は殺人者なのか？
オズワルドとデニス・グラント

グレース・アンリミテッド・ミニストリー　電子メール：graceunlimitedministries@hotmail.com
ウェブ上でご覧ください：grace-unlimited-ministries.org, godontrial.org
私たちのコミュニティに参加してください: members.godontrial.org

Copyright © 2020 Grace Unlimited Ministries, All Rights Reserved.

すべての権利は留保されています。本書のいかなる部分も、著作権者の事前の許可なしに　、複製、検索システムへの保存、または電子的、機械的、写真複写、記録、またはその他の方法でのいかなる形式または手段での送信を禁止します。
国際標準図書番号：978 0 9958 189 0 3
カナダで印刷

内容

序章
1. 神とは何者か
2. 愛は"天国"
3. アガペー愛
4. 敵
5. ルシファーの罪
6.不公平　感
7. 法への攻撃
8. 汝がたが，わたしは，わたしの玉座を高貴にするであろう。
9. 庭の二本の木
10. 庭の混乱
11. 自由、平等なアクセス、公平性
12. 善悪の知識
13. 罰と報酬
14. 暴力
15. 注文
16. 神の善とサタンの善との対比
17. 作品の法則
18. 審査の様子
19. ジャスティス
20. 恐怖
21. 21.光があればいい
付録 - EGWの略語のキー

序論

人間である私たちは、「神は存在するのか？もし存在するとしたら、神はどのような方なのか？本書では、その第一の問いに答えることよりも、第二の問いを探っていきたいと考えています。この本を手に取った方は、すでに神の存在は決まっていると思っていただきたいので、主に神の性質に焦点を当てていきます。

聖書全体を貫くテーマ、神と悪魔の戦いというテーマを掘り下げなければ、神とはどのような存在なのかを知ることはできません。これは、私たちの日常生活の裏で宇宙で繰り広げられている非常に複雑で魅力的な物語です。私たちが意識しているかどうかにかかわらず、この継続的なドラマは、一人一人の人間に個人的に影響を与えており、宗教の違いにかかわらず、私たちの生活に直接的な関連性を持っています。

私たちは、あなたを探求に連れて行こうとしています。私たちは、宇宙規模の物語を発掘するために、私たちと一緒に来るように招待します。これはフィクションではありません。これは父と子、強大な天使、つまり父と子の完全な創造と人類の物語です。これは反逆、裏切り、名誉毀損、プロパガンダ、そして悲劇の物語です。しかし、それはまた、救済と希望、そして悪と死の究極的な根絶の物語でもあります。これは神、御子イエス・キリスト、堕天使ルシファー、そしてあなたと私の物語です。

本書の基本的な目的は、エデンの園の真ん中に立っていた二つの木、「いのちの木」と「善悪の知識の木」に照らして、この物語の舞台裏を検証することです。この二本の木の研究を通して、読者が神とサタンの間の大論争に関わる問題をより深く理解することができるようになることを願っています。我々はそれを行うように、我々は不必要に神から疎遠に私たちのすべてを維持している一連の嘘を明らかにします。

私たちは、ルシファーがかつてどのような存在であったのか、何が彼を神から遠ざける原因となったのか、そして彼の反逆の根本的な理由を学びます。私たちは彼の狡猾さと欺瞞を明らかにし、どのようにして私たちを神から引き離すことに成功したのかを明らかにします。私たちは、私たちを神との恐れのない関係に戻すために、神の御子が果たす役割を見ていきます。また、私たち自身が知らず知らずのうちにこのドラマに巻き込まれていたことを示し、戦争を終わらせるために私たちがしなければならないことを示します。

人は神についての答えを見つけようとすると、必然的に戦争というテーマに行き当たります。例えば、黙示録のこの一節を見てみましょう。

> そして、天で**戦争が起こった**。ミカエルとその天使たちは竜と戦い、竜とその天使たちは戦ったが、彼らは勝てず、もはや天に彼らの居場所はなかった。それで、**全世界を欺く**悪魔とサタンと呼ばれる昔からの大蛇である大蛇が追い出され、彼は地上に投げ出され、その天使たちも一緒に追い出された（黙示録12:7-9、強調）。

ここには豊富な情報があります。主人公のミカエルとその天使たちは、敵対するドラゴンとその天使たちと戦争をしていました。この戦争は何だったのでしょうか？

ドラゴンは強力なシンボルであり、力の象徴でもあります。ギリシャ語では、"**ドラゴン**"はdrakonで、"a fabulous kind of serpent (おそらく魅了することになっている)" (Strong's Concordance)となっています。**ヘビ**」のギリシャ語は ophis, "through the idea of sharpness of vision); a snake, figuratively, (as a type of sly cunning) an artful malicious person, especially satan)" "(Strong's Concordance)とあります。**悪魔**」を表すギリシャ語はディアボロス（diabolos）で、「取引者、具体的にはサタン、偽りの告発者、中傷者」（Strong's Concordance）、「サタン」はサタナス（satanas）で、「告発者」（Strong's Concordance）となっています。

これらの言葉はすべてルシファーに当てはまり、彼をよりよく理解するのに役立ちます。彼は確かに魅力的で注目すべき人物ですが、狡猾で狡猾で悪意のある人物でもあります。彼は虚偽の告発者であり、中傷者です。

私たちの世界には、蛇と竜のイメージが浸透しています。ロゴ（例：アメリカ医師会）からビデオゲーム、映画、タトゥーなど。私たちの世界には「蛇」と「ドラゴン」のシンボルがあふれています。これは無関係ではありません。"黙示録に記載されている"古の蛇は"全世界を欺く"のです。

ヘビは「その天使たち」と共に天から「地上に」追い出されました。創世記の中では、もう一つの糸が出てきます。天で始まった戦争は、地上の特定の場所、エデンの園に移され、そこで蛇が復活しました。エデンの園は地上での最初の犯行現場であり、非常に貴重な証拠品です。天国で始まった戦争とその背後にある本当の問題についてのより多くの情報を与えてくれます。

エデンには2本の木がありました：生命の木と善悪の知識の木。これらはシンボルであり、二つの王国を表していました。それらを通して、私たちは神と悪魔の間の戦争に関わる基礎的な問題を学びます。

神は創造主であり、生命の与え手である-神は生命の木の原理である。善悪の知識の木は蛇と関連していました。神はこの木が死をもたらすと言われました。アダムとエバはこの木を食べてしまい、その結果、地球は戦場となり、この戦争の舞台となりました。神が予言したように、ここでは死は日常茶飯事になっています。しかし、死の原因は誰にあるのでしょうか。神なのか、それともサタンとその知識の木なのか？

この戦争はまだ終わっていないそれは時代を経て今日に至るまで進行しており、あなたと私はその真っ只中にいるのです。この物語は、人類の歴史と密接に結びついており、聖書の中では、一連のシンボルを通して展開されていますが、これらは聖書自身が説明しています。実際には、私たちがこれらを私たち自身の従来の知恵で解釈しないことが不可欠です。そうすることによって、私たちは全く間違った結論に達するかもしれません。使徒パウロは、若き日のテモテに、真理の言葉を正しく分けるように指示しました。

> **真理の言葉を正しく分けて**、恥じる必要のない働き手である、神に認められた自分を示すために精進しなさい（2テモテ2:15、強調します）。

パウロの諌めは、私たち全員のためのものです。この研究を掘り下げていくうちに、神の敵が神の性格について誤ったイメージを私たちに与えていることが明らかになってくるでしょう。そして、彼はこれを巧妙な方法で行い、すべての"全世界"を欺いています。これらのことを正しく理解するためには、「真理の言葉」を「正しく」分割しなければなりません。

自分が騙されていると思いたくない人はいません。特に、自分が真実を持っていると信じている人はそうです。聖書にドラゴンが全世界を欺くと書かれているならば、私たち一人一人が注意を払い、その数の中から自分を除外しないようにしなければなりません。もし私たちがだまされているのなら、その方法を知りたいと思いませんか？

この本では、主に聖書に頼ることにします。しかし、私たちはまた、神とサタンの間の戦いについて、私たちが出会った誰よりも多くの洞察力を持っている著者の言葉を引用します。

エレン・グールド・ホワイト（EGW）は、初等教育を受けただけの女性であったが、ロジャー・クーンの調査（1983年現在）によると、レーニン（222言語）、ジョルジュ・シメノン（フランス・ベルギーのミステリー作家-143）、レオ・トルストイ（122言語）に次ぐ、4番目に翻訳された現代作家となった。

エレン・G・ホワイトの著作は1983年に117カ国語に翻訳され、1996年にはすでに140カ国語に翻訳されている。彼女に続いて、カール・マルクス、ウィリアム・シェイクスピア、アガサ・クリスティ、ヤコブとウィルヘルム・グリム、イアン・フレミング（ジェームズ・ボンド）、アーネスト・ヘミングウェイがクーンのトップ10にランクインしています。

サタンの欺瞞に関する彼女の発言の一つを考えてみましょう。

> **天国でのサタンの働きの原理は、この世でサタンが人間の工作員を通して働くのと同じ原理です**。このような腐敗の原理によって、地上のすべての帝国と教会はますます腐敗してきました。**サタンが全世界を欺き、腐敗させているのは、これらの原理を**働かせることによって、**最初から最後まで行われているのです**。サタンは、もともと天の宇宙で始まったこの同じ方針の働きを続けています。彼は、**ノアの時代に世界を堕落させた彼**の**暴力**で全世界を活気づけています{4BC 1163.8, emphasis added}。

この文章は、サタンの欺瞞について何を明らかにしているのでしょうか？第一に、サタンは"腐敗する原則"を持っていることを教えています。第二に、彼の「腐敗する原則」は、彼が天国で始めた「同じ政策の働き」であることを教えています。このことは、サタンの「腐敗する原理」が、天から始まった神への反逆の中心にあることを示しています。また、サタンがこれらの原則を地上に持ち込んだことも明らかにしており、それによって、"最初から最後まで"私たち全世界を欺いていることを示しています。

"堕落した"という言葉の聖書的な意味は何ですか？本質的には、「堕落」とは、純粋で変化のない形から、不純で変化した状態に変化させることを意味します。何かを堕落させるということは、それを正しい形や元の形から変えることであり、それによって価値を下げてしまうことです。この場合、サタンが堕落させた「原理」は、価値が低いだけでなく、致命的なものになってしまいました。

では、サタンが天で始めた「腐敗する原理」、「政策的な働き」とは何なのでしょうか？彼は「最初から最後まで」何について私たちを欺いているのか、そしてどのようにそれを行っているのでしょうか？暴力」とは何が関係しているのでしょうか？答えはエデンの園にあります。もしかしたら「善悪の知識の木」が関係しているのではないかと考えたことはありませんか？

究極的には、サタンの攻撃の焦点は神です。サタンは神を、厳しく、厳しさがあり、執念深く、報復的で、専制的で、罰的で、恣意的で、殺人的な暴君として描いています。その神の絵は、可能な限り真実とはかけ離れたものです。サタンがしたことは、彼自身の性格の属性と「腐敗した原則」を神に投影したことです。悪魔は、もし私たちが神についての真実を知るようになれば、私たちの心の戦いに負けて、創造主を愛するようになるかもしれないことを知っているのです。

イエスは「わたしを見た者は父を見た」と言われました。私たちがイエスを見るとき、私たちは真の神を見ることができ、そのとき、私たちは神の真の証人となることができます。

> あなたがたはわたしの証人であり、わたしが選んだわたしのしもべであり、あなたがたがわたしを知り、信じ、わたしが神であることを理解するために』と主は言われる。わたしの前には神はいなかったし、わたしの後にもいない」（イザヤ43:10）。
>
> わたしは宣言し、救い、宣言した。あなたがたの間に外国の神はいなかった。
>
> わたしはその時から，あなたがたに告げて，それを宣言したのではないか。あなたがたはわたしの証人である。わたしのほかに神はいるのか。わたしは一人も知らない』（イザヤ44:8）。

サタンは神と人間の敵です。彼は神について私たちに嘘をついています。しかし、すべてが失われたわけではありません。そして、この知識は敵の力から私たちを解放してくれるのです。あなたはどう思いますか？

この探求に乗り出すにあたり.....心を開いていただきたい。もしかしたら、この戦争がこのような観点から語られているのを聞いたことがないかもしれません。あるいは、あなた自身がこれを幅広く研究し、このトピックについてすでに強い意見を形成しているかもしれません。私たちは、私たちの言うことをすべて最終的な言葉として受け止めてほしいと頼んでいるわけではありません。あなたと同じように、私たちも答えを見つけるのに苦労しています。私たちが求めているのは、単にこの証拠を秤にかけていただくことだけです。

これが究極の「誰がやったのか」の事件であるのは、私たちのそれぞれの心の法廷で行われているこの裁判で裁判にかけられているのは神ご自身だからです。犯行現場と証拠を総合的に分析することで、読者はこの裁判の問題点を全体的に把握することができると同時に、いくつかの非常に具体的な疑問にも答えることができるのではないかと期待しています。その結果、神とサタンの性格、そしてサタンの反逆の性質に大きな光が当てられることでしょう。私たちの目的は、神の敵が神に対して行ったすべての虚偽の告発や嘘から神の罪を晴らすことです。神は殺人者なのか？

1. WHO IS GOD?

聖書には神についての記述がたくさんありますが、最も簡潔なものはヨハネ1章4節8節の「神は愛である」とヨハネ1章5節の「神は光である」にあります。

これらの言葉は、私たちが神を理解するのに役立つのでしょうか？答えはイエスかノーか、それは私たちが何を意味するのかによって異なります。何事もそうですが、私たちは自分の人間的な経験や考えに基づいて用語を定義する傾向があります。これは絶対にしてはいけないことです。

神について勉強するときには、まず、神の言葉である聖書を読むことが非常に重要です。第二に、聖典に自分の言葉や用語を定義させることです。逆のことをすると、トラブルに巻き込まれたり、本来の目的とは全く逆の結論になってしまうことがあります。例えば、「罪」、「咎」、「無法」、「神の怒り」や「神の奇妙な行為」などの言葉はすべて聖典の用語であり、聖典が定義するようにしなければなりません。

また、聖書を読む際には、聖書には大きな論争、戦争、ミカエルと「偉大な赤い竜」との間の論争など、「壮大な中心テーマ」があることを心に留めておかなければなりません。

> **聖書はそれ自身の暴露者である。聖典は聖典と比較されるべきものである**。学生は、聖書を全体として捉え、その部分の関係を見ることを学ばなければなりません。生徒は、その壮大な中心的なテーマ、すなわち、**世界に対する**神の**元々の目的、大論争の勃興、贖いの業につい ての**知識を得るべきです。**覇権を争っている二つの原則の性質を理解し**、歴史と預言の記録を通して、その働きを偉大な完結に至るまで辿ることを学ぶべきです。彼はこの論争が**人間の経験のあらゆる段階**にどのように入り込んでいるのか、**人生のあらゆる行為の**中で、彼自身が**二つの対立する動機の**一方か他方かをどのように明らかにしているのか、そして、彼がそうするかどうかは別として、彼が論争のどちらの**側にいるのかを今も決めているのかを**見るべきです。

この記述に注目してください"彼は覇権を争っている二つの原則の性質を理解し、歴史と預言の記録を通して、その働きを偉大な完結まで辿ることを学ぶべきである。"これらの「覇権を争う二つの原則」とは何でしょうか。それらはどのようにして「人間の経験のあらゆる段階に」入るのでしょうか？彼らはどのようにしてお互いに「拮抗」しているのでしょうか？私たちはこの大きな論争について何かを見逃してしまったのでしょうか？この引用から、この二つの原則がここでの中心的な問題であるように見えます。先に述べた「二つの拮抗する動機」の一つである神とその原理から始めます。

神を説明するために使われる言葉そのものをどのように定義しているのでしょうか？愛とは何か？光とは何でしょうか？聖書によると、これらの言葉は何を意味しているのでしょうか？

新約聖書では、"愛"という言葉はギリシャ語のアガペーに由来しています。アガペーは、聖書の一部のバージョンでは"愛"と訳され、他のバージョンでは"慈善"と訳されています。アガペーとは、イエスやパウロをはじめとする新約聖書の作家たちが、特定の種類の愛、つまり神に特有の愛を指すときに使った言葉です。この愛は、私たちがよく知っている愛とは全く違うものです。この言葉については近々勉強することになりますが、今のところは、神は愛であり、神はアガペの愛であるという事実に焦点を当ててみたいと思います。

"神は愛である"という文を調べてみると、使徒ヨハネの構文が非常に分かりやすいことに気づきます。彼は"神は愛である"と言っていますが"神は愛を持っている"とは言っていません愛であることと、愛を持つことは大きく異なります。これは重要な違いであり、ヨハネがこの言葉を使っていることは、愛、アガペーの愛は神の本質であり、単に神の属性の一つではないということを私たちに注意させようとしていることを示しています。

アガペーの愛は神の存在の本質です。それゆえ、それは神が被造物全体を支配する永遠の道徳律法でもあります。神の愛の律法は、永遠に過去のものである神の至高で不変の律法なのです。それはなぜでしょうか。

神はすべてのものの創造主であり、したがって神はすべてのものの上におられます。創造主である神は、創造物のハードウェアを構築するだけでなく、そのオペレーティング・システムを決定し、そのパラメータ、つまり動作するルールを設定する権利を持っています。神が創造するものは何であれ、神が誰であるかを反映しています。神の創造は神の心と心を表現し、神の性格を明らかにします。アガペーの愛が神の本質である以上、アガペーに勝るものはありません。したがって、神のアガペー愛の法則の絶対的な至高性に勝るものはありません。神はすべての被造物に永遠に生きる能力を吹き込んでおられますが、それはアガペの愛に適合して初めて可能になるのです。

私たちの中には、神の本質と神の属性の区別で混乱している人がいます。神の本質がアガペの愛であるならば、神の属性とは何でしょうか？神の属性は神の愛の反映であり、神の愛が目に見える形で現れる様々な方法です。神の属性は神の性格、神の本質、神の愛の法則を具現化したものであり、神の本質であるアガペ・ラブと常に調和していなければなりません。

聖書は、神は不変、不変であると言っています。マラキ3:6には、「わたしは主であり、変わることがないから、ヤコブの子らよ、あなたがたは滅びることがない。不変は神の属性の一つです。これらの聖句は、神が常にアガペの愛の性格に従って行動し、対応しておられることを教えています。このように、神の性質は二元論的なものではなく、単一的なものなのです。

神は変化しないので、悪に直面しても、神は常に愛の性格に忠実でなければならないということを意味します。もし神が不変であるならば、神は愛のパラメーターの外では決して動くことができません。つまり、神の愛の法則も変化しないということです。そして、神は永遠であるので、神の愛の法則も同様です。これらは神に関する究極の真理です。

一つは、神は純粋なアガペーであると言うことができます。しかし、アガペーの定義では、アガペーとは純粋で、純粋で、混じりけのない、堕落していない、混じりけのないものであるため、「純粋なアガペー」と言うのは冗長です。聖書では、神の純粋さと人格の単　純さは"聖なる"という言葉によって定義されています。ヘブライ語でもギリシャ語でも、この言葉は清く、道徳的に清く、不純物のないことを意味しています。聖書的に言えば、この言葉は「堕落した」という言葉の反対語であり、まさにサタンの原理を特徴づける言葉です。

神だけが聖なる者です。神の性質は単一であり、純粋であり、混じりけのないものです。このように、アガペー愛の神として、創造主は対立する原則や混合した原則を使うことはできません。言い換えれば、神はある瞬間には一方通行で、次の瞬間には別の方法をとることはできません。神は、善と悪が入り混じった分裂した人格をお持ちではありません。"純粋さ"は、善悪の知識の木に含まれる混合物を"食べた"私たちのすべてから神を離れて設定します。

このような純粋さの考え方は、聖書でも光と闇の比喩を通して表現されています。聖書にはこう書かれています。

> 神は光であり、神のうちには全く暗闇がありません（1ヨハネ1:5）。

光」、「純潔」、「聖なる」という言葉はすべて、神について同じことを表現しています。

私たちのほとんどは、神が不滅であり、不滅であり、全能であることに同意するでしょう。ヘブライ語のテトラグラムトンYWHWとJHVHは「自己存在」または「永遠」を意味します。私たちはこれを当たり前のことだと思いがちですが、通常は疑問に思うことはありません。しかし、なぜ神は不滅なのか疑問に思ったことはありませんか？

イエス様は、このことに光を当てるかもしれない、とても興味深いことをおっしゃっていました。

> ...すべての王国は、それ自身に反して分裂し、荒廃し、分裂した都市や家は、それ自身に反して立つことができません（マタイ12:25）。

イエス様によると、もし王国が「自分自身に反して」分裂した場合、それは「荒廃した状態になる」、つまり終わりを迎えることになるとのことです。もし神が不滅であるならば、神の王国が荒廃することはないと結論づけるのは論理的です。ですから、神の王国が荒廃することは決してないので、神の王国はいかなる方法でも「分裂」してはならないと結論づけることができます。ここに神の不死の秘密があるのでしょうか。神の国が不滅であるのは、神の国が「それ自体に反して分割されていないから」ということでしょうか？

これは非常に重要な概念です。"神は光であり、神の中には全く暗闇がない」ということは、神が光と暗闇の間に分かれていることは一切ないということであり、神は決して矛盾した二元性を持っているわけではないということです。彼は、いつでも、どんな時でも、どんな状況でも、ただ光である。進めていくと、「それ自体に対して分割された」とは何を意味するのかを理解することがいかに重要であるかが明らかになってきます。今のところは、「完全」という言葉が聖書的に定義されているように、神の完全性を構成するのは、神の完全性が分割されていないことだと言うことにしましょう（この言葉が聖書にどのような意味を持つのかは、後ほど説明します）。繰り返しになりますが、私たちは自分の解釈で言葉を定義するのではなく、聖書が言葉を定義するようにしなければなりません。

要約すると、「聖なる」、「清い」、「清い」、「光」、「分断されていない」、「全く暗闇がない」というのは、アガペの愛という神の唯一無二の性格を表現するためのさまざまな表現です。これらは、聖書が私たちにこの事実に注意を向けるために用いている方法のほんの一部です。

そこで私たちは自分自身に問いかけます。なぜ神は私たちが神の性格のこの側面に注意を向けることに力を注いでおられるのでしょうか？それは，神を真に理解し，神の美しさを見るための重要な鍵がこの部分にあるからでしょうか。

2.　ラブイズヘブン

アダムとエバが地球上に悪の洪水の門を開かなかったら、人生はどうなっていただろうかと考えたことはありますか？あるいは、痛みや破壊、死が全くない世界に住んでいたらどうなっていただろうと想像したことはありませんか？

天国のようなものを見たことも経験したこともない私たちにとって、天国を想像することは難しいことです。しかし、天国が何であれ、私たちは"天国だ！"と知っています。

私たちはしばしば、素晴らしい、肯定的な、絶対に楽しい経験を修飾するためにこのフレーズを使用しています。もし友人が「クリスマスにフィジーに行ってきたんだけど、あぁ、絶対天国だったよ！」と言ったとしたら、それ以上聞く必要はありません。私たちは彼または彼女が何を意味しているかを正確に知っているだろうし、私たちは彼らの休暇の正確な詳細を知らないだろうとしても、私たちは彼らが平和で、リラックスして、徹底的に楽しい時間を持っていたことを知っているだろう。

次に私たちが尋ねるのは、天国を「天国」にするものは何でしょうか？詩篇の中のこの一節を見てみましょう。

あなたは，**わたしに人生の道を**示される。あなたの御前では喜びに満ち，あなたの御前では喜びに満ちている。
あなたの右手は永遠の快楽である（詩篇16:11、強調）。

これは天国の描写ですね。"生命" "喜びの充足" "永遠の快楽" 楽園ですね私たちの友人のフィジーでのバカンスのようですね。そして、天国は「喜びの充足」と「永遠の快楽」がある場所なのでしょうか？もしあなたの答えが神の「臨在」であるならば、あなたは絶対に正しいです！他に何があるでしょうか？他に何があるのでしょうか？

詩篇は神の「臨在」について語っていますが、「いのちの道」についても言及しています。申命記の中で、モーセは「いのちの道」と「呪いの道」を対比させ、後者を血みどろの言葉で描写し、想像を絶するものは何もありませんでした。このもう一つの破壊的な「道」はどこで、どのように、誰によって生まれたのでしょうか。それは「いのちの道」を示す神に由来するのでしょうか、それとも他の誰かに由来するのでしょうか。

もし神が愛であり、愛が神の本質であり、神の完全な性格であり、人生のあらゆる側面を支配するための基準となる特異な原理であるならば、神は死にも関与することができるのでしょうか。もし愛が神が宇宙の最も小さな出来事の中でさえも利用する法則であり、神の性格を反映したものであるならば、神は痛み、苦しみ、不幸、破壊を引き起こす暗闇にも関与することができるのでしょうか？

もし神が愛であるならば、神は愛から、愛によって、愛のために、愛を通して、愛の中に、すべてのものを創造されました。聖書のメッセージは、神は愛であり、神の愛は命であるということです。神の愛は"いのちの道"です。

ソロモンが神の律法である戒めと"生き方"を結びつけている箴言集の次の節を見てみましょう。

> 戒め**は**灯りであり、**律法は**光であり、訓戒は**生きる道で**あるからです（箴言6:23、強調）。

> 賢**者の律法は命の泉であり、**人を死の罠から遠ざけるためのもの**です**（箴言13:14、強調）。

パウロは次の節で同じ原理を述べています。

> キリスト・イエスにあるい**のちの霊の律法**によって、私は**罪と死の律法**から解放されたからです（ローマ8:2、強調します）。

パウロは、神の律法を「いのちの律法」である「いのちの霊の律法」と指摘するだけでなく、この世にはもう一つの律法、「罪と死の律法」が存在することを明らかにしています。罪と死の律法」とは何か、それはどこから来たのか、誰から来たのか。今、私たちは死がどこから来たのかを知っています。「それを食べた日には、必ず死ぬ」（創世記2:17）。では、この律法も愛といのちの神のものなのでしょうか。

私たちは、神の律法がいかに神聖なものであるかを理解しなければなりません。

> **神の律法は神ご自身と同じくらい神聖なものです。それは神の意志の啓示であり、神の性格の写しであり、神の愛と知恵の表現です**。被造物の調和は、生き物も無生物もすべてのものが、創造主の法則に**完全に適合しているかどうかにかかっています。**神は、生物だけでなく、自然界のすべての営みを管理するための法則を定められています。すべてのものは固定された法則の下にあり、それを無視することはできません。しかし、自然界のすべてのものは自然の法則に支配されていますが、地球に住むすべてのものの中で、人間だけが**道徳的な法則に従うこと**ができます。被造物の最高の仕事である人間に、神は神の要求を理解し、神の律法の正義と恩恵を理解し、人間に対するその神聖な主張を理解する力を与えられています。

神の律法は「神の意志の啓示であり、神の性格の写しであり、神の愛と知恵の表現である」。神の律法とは、聖書が「義」と呼ぶものであり、神の方法、何が正しいかという神の考えです。"義"はまた、神の正義を意味することもあります。

ヘブライ語で「義」とは、「正しさ、正しさ、道徳的な美徳」を意味します（ストロングズ・コンコーダンス）。神の正義、神の「正しさ、正しさ、道徳的な徳」は、常に神のアガペの愛と調和しています。このように、神の正義は常に親切で、優しく、公平で、無条件で、慈悲深く、公平で、自由を与え、平和で、非暴力的で、愛に満ちています。それは決して厳しく、懲罰的で、残酷で、部分的で、条件付きで、恣意的で、支配的で、強制的で、暴力的なものではありません。

しかし、世の中には偽の「正義」があり、神の義に反した「正しさ、直さ、道徳的な美徳」があります。この偽物は、上に挙げたような否定的な方法をすべて使っています。

神のアガペの愛の律法は神がどのような方であるかを表すものです。

> サタンの力に惑わされた人間が神の律法に背いたとき、神は失われた種族を救うためにも、その律法を変えることができませんでした。神は愛であり、**律法を変えることは自分自身を否定することであり、宇宙の善を結びつけている原則を覆すことになるのです**{Messenger June 7, 1893, par.6, emphasis added}。

神の律法には「宇宙の善と結びついている」原則が含まれており、この律法を変更することは「ご自身を否定する」ことになることに注意してください。

ですから、私たちは、神の律法が愛の律法であることを確立しました。しかし、神の律法はどのように表現されているのでしょうか。それは何ページもの長さの書かれた法典で、理解するには慎重に研究しなければならないのでしょうか。それは今日私たちが目にする細かい文字と意味の分からない専門用語でいっぱいの法律文書のようなものでしょうか。

いいえ。彼の律法はそれよりもはるかに単純ですが、それ以上に重要なことがあります。神の律法は道徳的な律法であり，これは非常に重要なことです。道徳の律法は，神が創造された知的な存在のそれぞれの心の中にあります。私たちが言いたいのは、道徳的な判断に基づく私たちのすべての決定は、私たちの心からもたらされるということです。現代的な概念で言えば，神の道徳律とは，神が創造するすべての「装置」に付属している「ソフトウェア」であり，最適な機能を保証するソフトウェアなのです。

天国を天国としたのは何だったのでしょうか。天国では神の意志（神の律法）がすべての人によって行われ、すべての人が神の愛という道徳的な律法によって生きていたという事実ではなかったのでしょうか。すべての知的な存在が、神のアガペーの愛に進んで従ったために、神の人格を模倣したからこそ、天国は天国ではなかったのでしょうか？アガペの愛の法則の共同利用によって、調和と平和と生命が天国に存在し、純粋な喜びの場所になることができたのではないでしょうか。

法治主義的な道を歩んでいるのではないかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、このまま読み進めてください。律法の意義については、適切で正確な聖書の立場があります。私たちは皆，自覚しているかどうかにかかわらず，道徳的な律法，すなわち「いのちの御霊の律法」と「罪と死の律法」によって生きています。これらは二つの道徳律法，すなわち，生の道徳律法と死の道徳律法です。私たちは，対立する動機によって作動するこの二つの対立する原則を区別することができなければなりません。

私たちが心の中に描いた至福の天国の条件が可能になったのには、ただ一つの理由があります。それは、永遠の昔から神が愛の法則、つまり「いのちの霊の法則」で宇宙を支配していたからです。

愛が常に存在している状態を想像できますか？すべての交流が他人の最大の利益を念頭に置いて行われる場所？怒鳴ることも、嘘をつくことも、盗むことも、傷つけることも、破壊することも、ごまかすことも、ごまかすことも、泣く必要もない場所ではないでしょうか？その代わりに，優しさ，気遣い，心配り，最大限の敬意がある場所。それは愛の道徳律が支配する天国です。

しかし、愛は法律のようなものを感じさせず、雑用ではない。

> しかし，天国では，奉仕は合法の**精神**では行われません。サタンがエホバの律法に反抗したとき，**律法があるという考えは，ほとんど考えられていないことへの覚醒として天使たちにもたらされました。天使の務めにおいて、天使はしもべとしてではなく、息子としての役割を果たしています**。彼らと創造主との間には完全な一致があります。**彼らにとって従順とは何の労苦でもありません。神への愛が彼らの奉仕を喜びとしています**。栄光の希望であるキリストが宿るすべての魂の中で、キリストの言葉が繰り返されています。詩篇40:8 {MB 109.2, emphasis added}。

愛の状態にあるということは、喜びで満たされているということであり、私たちが誰かを愛するとき、それは彼らと一緒にいる喜びです。愛は様々なポジティブで素晴らしい思考や感情を呼び起こすものであり、人生の指針とすれば、それに従うことは面倒なことではありません。愛の最大の喜びは、他の人を幸せにすることです。もし絶対的にすべての人が神の愛で満たされていたら、世界は平和な場所になるでしょう。すべての人が大切にされ、誰も取り残されることはありません。使徒ヨハネは言っています。

> これが神の愛であり、私たちが神の戒めを守ることであり、神の戒めは悲しむべきものではありません（第一ヨハネ5:3）。

神の戒めを要約すると、「互いに愛し合う」ということです。互いに愛し合うことには、何も「悲しむ」ことも、負担になることもありません。うまくいけば、私たちは皆、ある程度の愛を経験したことがあるでしょう。愛に満ちた関係にある人は、義務ではなく、喜びから自由にお互いのために物事を行います。この愛の法則を強制することはできません。私たちはこの法則を他の人に強制することもできません。すべての人が自分自身でこの法則を受け入れるか否かを決めなければなりません。愛は決して力で動くことはありませんし、強制することもできません。定義によれば、愛と自由は手を取り合って行動します。もしそうでなければ、私たちは愛以外のものを扱っていることになります。

ルシファーが罪を犯す前は、天の存在は、神の愛の律法の下で享受した喜び、幸せ、調和のとれた状態に反するものを知らなかったのです。彼らの神やお互いとの関係は、この純粋な喜びで満たされていました。神と仲間に対する彼らの完全な献身は自由意志の表れでした。それは愛の交換であり，神は彼らを愛し，彼らは神を愛し，彼らは互いに愛し合っていました。彼らはお互いに悪を見ていませんでした。

宇宙の住人は、確かに恐れて神に従ったわけではありません。それどころか、当時は恐怖などというものは全くありませんでした。どうしてそれが分かるのでしょうか？ヨハネ1章4節18節の次の一節を考えてみましょう。

> 愛には恐れはありませんが、完全な愛は恐れを打ち消します。しかし、恐れを抱く者は、愛のうちに完全なものにされていない。

この一節には多くのことが書かれていますが、もし神が愛であり、本当に「完全な愛」であるならば、完全な愛を持つ神のいる宇宙には恐れがないはずだという事実に注意を向けるだけで十分でしょう。したがって、恐れは侵入者であり、神から生まれたものではありません。

恐怖と愛は両方とも動機となり、実際には強力なものです。すべての思考と行動の唯一の動機が愛である世界を想像してみてください。そんなことが可能でしょうか？はい、これが罪を犯す前の状態でした。すべては愛だけが動機となり、すべてのことが完全に調和していました。アガペーの愛の神の宇宙は完璧で、神の愛の政府、楽園でした。

しかしある日、ルシファーはその基準に挑戦しました。彼はその基準に欠陥を見抜き、その結果、神の愛の政府に対して戦争を始めました。

> 地上の宇宙では壮大な反乱が起きています。その反乱の偉大な指導者はいないのでしょうか？サタンは、彼自身が扇動したあらゆる種類の反乱の生命と魂ではないのでしょうか？彼は神からの最初の偉大な背教者ではないのでしょうか？反乱は存在する。ルシファーは自分の忠誠心から反乱を起こし、神**の政府に戦争を起こす**{4BC 1163.4, emphasis added}。

ルシファーが神の完璧な愛のシステムに対して戦争をしていることは想像に難くありません。誰かが彼に言うべきだった "壊れていないなら 直すな"と

ルシファーは神に対する戦争を始めたとき、神についての混乱をもたらしました。神の完全な愛のシステムに対するルシファーの攻撃は、神の心に直接的を絞ったものでした。ルシファーが神の政府を攻撃した瞬間、神の心が試されました。世界の歴史の中でこの時期に私たちに向けられた神のメッセージは、神の真の愛の心を明らかにすることができる唯一の真の証人に耳を傾けることです。

私たちの多くは、地球の歴史の終わりに近い時期に生きていることを自覚しており、それゆえに、黙示録三章のラオディケ教会の時代に生きていることを自覚しています。私たち、ラオディケ教会に対して、神は言われています。

> また、ラオディケの教会の天使には、『これらのことは、忠実で真の証人であるアーメンが言う、神の創造の始まり（黙示録3:14）』と書いてある。

ラオディセアは真の証人に耳を傾けるように手招きされています。聖書のどこにも「まことの証人」という言葉はありません。なぜなら，ラオジケヤは神の試練の時に生きている教会だからです。ラオジケヤの時は、神様の裁きの時である三人の天使のメッセージの時でもあります。

> 神を畏れ、神の裁きの時が来たので、神に栄光を与え、天と地、海と水の泉を造られた神を礼拝しなさい（黙示録14:6、強調）。

神の裁きの時は私たちにとって朗報です。この裁判の証拠を見れば、告発者であるサタンの告発がすべて虚偽であることが明らかになるからです。神の愛の政府が完全であるだけでなく、生物が共存するための唯一の実行可能な方法であることが分かるでしょう。

3. エイジープラブ

私の目を開いてください、あなたの律法から不思議なものを見ることができますように。
詩篇119:18）。

幾千の金貨よりも、あなたの口の法の方が私にとって良い
と銀（詩篇119:72）。

あなたの義は永遠の義であり、あなたの律法は永遠の義である。
は真理である（詩篇119:142）。

あなたの律法を愛する者には，大きな平安がある。
につまずきます（詩篇119:165）。

愛は隣人に害を与えない、だから愛は成就する
律法の（ローマ１３：１０）。

すべての律法は、この中にさえ、一言で成就しているからです。"あなたがたは自分の
隣人を自分のように」（ガラテヤ5:14）。

もし、あなたが本当に聖句通りに王室の律法を満たしているならば、「あなたは
あなたの隣人を自分自身のように愛する」と、あなたはよくやっています（ヤコブ2:8）。

神の統治の法則はアガペー愛の法則ですが、アガペー愛とは具体的に何なのでしょうか。聖書はこの神の愛のタイプをどのように定義しているのでしょうか。アガペは、愛に関する有名な章である第一コリント13章に美しく記されています。

愛は忍耐強く、愛は優しい。それは嫉妬しない、それは自慢しない、それは誇りに思っていません。礼儀正しくない行動をしない、それは自分自身を求めていない、簡単に挑発されていない、考慮に入れて間違って苦しんでいません。悪事の記録を残さない。不義を喜ぶのではなく、真理を喜ぶ。不義を喜ぶのではなく、真理を喜ぶ。アガペーの愛は、来るものすべてに耐えます。それはすべての人の最善を信じる準備ができています。その希望はどのような状況下でも色あせず、弱まることなくすべてのことに耐えます。アガペの愛は決して失敗することなく、色あせることもなく、時代遅れになることもなく、終わりを迎えることもありません（第一コリント13：4-8、様々なバージョンから引用）。

神の何と美しい描写でしょう！神はとてもユニークで、私たちが知っているものとは違っています。神はとてもユニークで、私たちが知っているものとは全く違っています！この一節は、神が忍耐強く、親切であることを教えています。この箇所は、神が忍耐強く親切であることを教えています。傲慢でもなく、無礼でもなく、嫉妬深いわけでもなく、自分の道を主張することもなく、簡単に怒ることもありません。私たちは神を私たちを見下している厳しい裁判官だと思いがちですが、これは神を理解する上で重要なことです。神は不義を喜ぶのではなく，真理を喜ぶのです。神はすべてのものを負い、すべてのものを信じ、すべてのものを望み、すべてのものを耐え忍んでおられます。神の愛に終わりはありません。これらは、神についての基礎的な真理です。

この言葉は、神の愛は自己に焦点を当てたものではなく、他者に焦点を当てたものであることを教えてくれます。それは無条件です。他者のために「良い」ことをするときには、利己的な意図はありません。アガペの愛は、たとえ自分を犠牲にしてでも、他人のために行動を起こします。これがアガペラブなのです。

この言葉はまた、神には自慢することも誇りに思うこともないことを教えています。これは重要なことです。なぜなら、神は、すべての存在の中で、自慢すべき最も輝かしいものを持っておられるからです。宇宙、地球、そしてすべての生命体を考えてみてください。このような壮大で複雑な生き物を夢見て、計画し、生命を吹き込むことができる者は誰でも、自慢する理由があるでしょう。それなのに、神は謙虚で、自己中心的ではなく、愛情を持ってご自身を捧げておられます。神は自己犠牲的であると言うこともできますが、「自己犠牲」という言葉は、愛というよりも義務のために行動することを意味し、懺悔志向の考えを助長することにもなりかねません。イエス様が私たちのために命を与えてくださったのは、自己犠牲ではなく、私たちをひどい最期から救うために、すべてのものを喜んで手放すという行為でした。自分よりも他人を優先する人にとって、与えることは自然な衝動であり、犠牲ではありません。そのような人にとっての犠牲とは、他人のニーズよりも自分のニーズを優先することです。

聖書の他のどこにこのタイプの愛が定義されているのでしょうか？神の愛の最も良い例と定義は、イエス・キリストです。真の愛、神の愛は、彼の言葉、彼の人生、そして彼の死の中で明らかにされています。ですから、私たちは第１コリント１３章にある上記の表現を使って、イエス様を描写することができます。

彼の人生を振り返ってみると、彼は忍耐強く、親切であったことがわかります。嫉妬したり、自慢したりすることはありませんでした。傲慢でもなく、無礼でもなく、自分のやり方を主張することもなく、簡単に怒ることもありませんでした。イエス様は、過ちの記録を残されませんでした。不義を喜ぶのではなく、真理を喜ぶのです。イエスはすべてのことを受け入れ、すべてのことを信じ、すべてのことを望み、すべてのことに耐え、十字架の上での死、最も苦しく屈辱的な死にも耐えられました。十字架にかかっている間でさえも，彼の愛は決して終わることはありませんでした。

イエスは最も偉大なだけでなく、世界がこれまでに見たことのないアガペー愛の唯一の生きたデモンストレーションでもあります。イエスはアガペの愛を目に見える形で表現された方です。与えること、癒すこと、励ますこと、持ち上げること、力を与えること、新しくすること、そして、善を行い、決して害を与えないしもべとなることを目的として生きられました。イエス様の愛を最もユニークなものにしているのは、イエス様が私たちと一緒にいられるように、これらすべてのことをしてくださったということです。イエス様は、私たちが永遠に共に過ごすことができるように、私たちを天の家族と再会させる「喜びのため」に、このようなことをされたのです。

…私たちの信仰の創造者であり、完成者であるイエスに目を向けてください。

山の上の説教』の中でのイエスの教えは、アガペー愛の神の統治の原理を啓示したものです。神は別のシナイ山でモーセに律法を与えられました。モーセはその律法を受け取り、サタンの厳かで、厳しく、懲罰的で、残酷で、破壊的な正義感を通して解釈しました。イエスは再びシナイ山に戻り、私たちに再び律法を与えてくださいましたが、今回の律法は恵みと真理に満ちています。

律法はモーセによって与えられ、恵みと真理はイエス・キリストによってもたらされました（ヨハネ1:17）。

律法の擬人化であるイエスは、私たちに愛を教えておられます。敵を愛し、私たちを呪う者を祝福し、私たちを憎む者には善を行い、私たちを悪用し迫害する者のために祈るように教えておられます。もし私たちが自分を喜ばせる人だけを愛するならば、私たちは世間の愛とどれほど違うのでしょうか。イエス様はこれらの記述の中で無条件の愛を定義していたのではないでしょうか？

イエスは、なぜ私たちに敵を愛するように言われたのかに注目してください。「あなたがたは天におられる御父の子となるために。

第一コリント13章の最後には、「信仰、希望、愛、この三つのものがあり、これらの中で最も偉大なものは愛である」と書かれています。信仰と希望は、アガペの愛の神に基づいていなければ、何の意味もありません。もし私たちの信仰と希望がアガペの愛ではない神に基づいているならば、それらは粉々に砕け散るでしょう。もし私たちの信仰が、「闇のない光」ではない神、分断された性格の神に向けられているならば、私たちの信仰は間違った方向に向かっていることになります。私たちはそれを「信仰」と呼んでいるかもしれませんが、その信仰は間違った神の概念に基づいているので、それは間違った信仰です。偽りの神に向けられた信仰です。聖書はこの信仰を実際に「不信仰」と呼んでいます。偽りの神々を崇拝することは、単に溶けた像にひれ伏すことではありません。

真理を拒否することで、人はその創造主を拒否します。**神の律法を踏みにじることで、彼らは律法を授けた者の権威を否定します**。木や石の偶像を作るのと同じように、誤った教義や理論で偶像を作るのは簡単です。**サタンは神の属性を偽って表現することによって、人に神を偽りの性格で思い込ませるのです**。多くの人がエホバの代わりに哲学的な偶像を祭っていますが、生ける神は、御自分の言葉やキリストや被造物の中に明らかにされているので、崇拝されている人は少ないのです。何千人もの人々が自然を神格化していますが，彼らは自然の神を否定しています。偶像崇拝は別の形ではありますが、今日のキリスト教世界には、エリヤの時代に古代イスラエルに存在していたのと同じように、本当に存在しています。**多くの公言している賢者の神、哲学者、詩人、政治家、ジャーナリスト、洗練されたファッショナブルなサークルの神、多くの大学や大学の神、さらにはいくつかの神学機関の神は、フェニキアの太陽神バアルよりも少し劣っています**{DD 29.1, emphasis added}。

これは明確で直接的な言葉です。ここでは何も噛み砕くことはありません。本質的には、もし私たちがイエスが明らかにされた神を見なければ、実際には、私たちはバアルを崇拝していることになり、利益と怒りの両方の恣意的な二重の神を崇拝していることになります。それはとても単純なことです。何よりも、世界はイエス様の神の啓示を必要としているのです。

神の子は、**世界には神の知識がないと肯定**的に宣言しましたが、この**知識は最も価値のあるものであり**、神自身の特別な**贈り物であり、神がこの世にもたらした計り知れない宝でした**。神の**メッセージを信じるすべて….の人は、イエスを持ち上げ、人をキリストに指し示し、「世の罪を取り去る神の小羊を見よ」と言わなければなりません。**LHU 36.5, emphasis added}。

信仰も希望も、イエスが私たちに啓示してくださったアガペーの愛の神にその実現を見いだします。信仰と希望は、それ自体は実は無意味なものです。それらは、キリストによって啓示された真の神に向けられ、神のアガペの愛を通して働くときにのみ、成就するのです。

私たちは御霊を通して、信仰による義の希望を熱心に待ち望んでいるからです。なぜなら、キリスト・イエスにあっては、割礼も無割礼も何の役にも立たず、**愛によって働く信仰があるからです**（ガラテヤ5:5,6、強調）。

イエス・キリストによって啓示された真の愛の神への信仰と希望を持つとき、私たちは真の信仰と真の希望を持つことができます。例えば、使徒パウロになる前のサウルの経験を考えてみましょう。パウロは様々な意味で私たちの模範となり、彼の人生は、私たちが神についての真理を見るのに役立ちます。

ダマスコへの道でイエス様に出会う前のパウロは、熱心な神の信奉者でした。実際、彼はパリサイ人であり、律法に非常に精通していました。パリサイ人であった彼は、宗教的な現状を脅かす者を迫害するほどの熱烈な狂信者でした。彼はステファノの殺人者たちが彼を石打ちにして死なせている間にも助けていました。

> すると、彼らは大声で叫び、耳を止めて、一斉に彼に向かって走り出し、彼を町から追い出し、石打ちの刑に処した。そして、目撃者たちはサウルという若者の足元に服を敷いた（使徒言行録7:57-58）。

これは熱意だしかし、それは見当違いの熱意です。パウロが改心後に言っていることに注目してください。

> **それ**は、私**が以前は冒涜者であり、迫害者であり、不敬虔な者であったにもかかわらず、忠実で**あると評価して、私を聖職に就かせてくださったからです。そして、私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛によって、非常に豊かでした（第一テモテ1:12-14、強調）。

パウロは「かつては冒涜者であり、迫害者であり、不敬虔な者であった」と言っています。以前は」とはどういう意味でしょうか？ダマスコへの道でイエス・キリストに出会う前、イエスを通して神のアガペの愛を学ぶ前の自分がそうだったということです。

冒涜したり，迫害したり，横柄な態度をとったりしたことは，すべて「不信仰のうちに」行われたことです。パウロは、迫害者であり、人を侮辱し、虐待し、人を傷つけるような横柄な人であったときに、不信仰のうちに行動していたのです。実際、彼が冒涜者であったのは、神の名の下に、神のアガペの愛の性格に完全に反すること、すなわち、人々を迫害したり、傷つけたりするようなことをしていたからです。これが彼を"冒涜者"にした理由です。

しかし、パウロはここで「不信仰」という言葉を再定義し、間接的に「信仰」という言葉も再定義しているのではないでしょうか？私たちは、不信仰が信仰の反対語であることを知っています。しかし、パウロの過去を見てみると、ある種の信仰を持っていたのではないでしょうか？彼はパリサイ人で、神の「律法」を厳格に守っていました。そして、神の「名」の下に人々を迫害していましたが、これはすべて彼の「信仰」に基づいて行われていました。しかし、彼の信仰は、神がアガペの愛であるという理解に基づいていませんでした。そのため、彼の信仰は役に立たず、「的外れ」になってしまいました。

神様のお人柄についてのマークを欠いているのは、「罪」であり、そこにある最も悲惨な罪です。実際、私たちがすぐに見るように、すべての罪はこの罪から生まれます。

アガペーの愛に沿って、イエスはサウルをすべての非難と罪悪感から赦してくださいました。実際、イエスは、彼が残酷なことをしていたことを非難したり、非難したりすることさえしませんでした。暴力的なサウルに対処したイエス様の方法に注目してください。

"サウル、サウル、なぜ私を迫害するのですか？"彼は言った "主よ、あなたは誰ですか？"すると主は言われた "私はイエスであり、あなたが迫害している者です。あなたにとって， 鞭を蹴るのは難しい」と言われた。そこで彼は震えて驚いて言った，「主よ，あなたはわたしに何をしてほしいのですか？そこで主は彼に言われた、「起き上がって町に行きなさい、そうすれば、あなたがたは何をしなければならないかが告げられるだろう」（使徒9:4-6）。

イエス様がどれほど優しく優しくサウルに接して下さったか、どれほど優しく敬意を持って私たちに接して下さったか。サウルの罪悪感を彼の顔にぶつけ、彼の闇をさらけ出すのではなく、彼の知性と心に訴えかけ、尋ねます。"サウル、サウル、なぜ私を迫害するのですか？""なぜ私に従っている者たちに怒りと暴力を振るうのか説明してくれないか？"私たちがあなたに何か害を与えたのか？"

サウルの答えは、彼がこのような神を知らなかったことを明らかにしています。むしろ，サウルが崇拝していた神は，ギリシャの神ゼウスに似ていました。"主よ，あなたは誰ですか」と彼は尋ねました。これは新しい神であり、ソールはこれまでこのような優しい神を経験したことがありませんでした。

イエス様についての何かが、サウルがすぐにイエス様を自分の主と認める原因となりました。彼はすぐに，自分の人生のすべてが神について誤解していたことを認識しました。そして，その一瞬の認識の中で，本当の意味での悔い改め，つまりメタノイア，心の変化の中で，サウロは宇宙の真の神に身を委ねたのです。彼は震えて驚きながら，「主よ，わたしに何をしてほしいのですか？

イエスのサウルに対する恵みは「非常に豊か」でした。これは、アガペの愛にあるキリストが、過ちの記録を残さないからです。これが私たちが礼拝してきた神様でしょうか。これが私たちがお互いを非難したり、恨みを抱いたりすることなく、お互いを尊重し、接する方法なのでしょうか。

私たちのほとんどは、アダムを通してサタンが罪をこの世にもたらしたこと、そしてイエスが「神の小羊がこの世の罪を取り除いてくださる」ことを知っています。

> それゆえ、一人の人を通して罪が世に入り、罪を通して死が生じたように、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのです（ローマ5:12）。

> 見よ!世の罪を取り去る神の小羊（ヨハネ1:29）！

もし私たちが「罪」という言葉を、神の性格についての「的外れ」という文脈で理解するならば、サタンがこの世にもたらした罪は、神に対する歪んだ見方であり、神を過酷で恣意的な殺人者であるように見せかけていたことが分かるでしょう。イエスはこの世の罪を取り除いてくださり、アガペの愛の真の神を明らかにすることによって、神に対するこのような誤った見方を取り除いてくださいました。

この誤った見方が、イエス様に出会う前のパウロの原動力となっていました。彼は創造主についての的を外し、その結果、"冒涜者であり、迫害者であり、不敬虔な人"となりました。しかし、パウロには希望がありました。後に、彼はヘブル書にこう書いています。

さて、信仰とは、期待されていることの実体であり、見られていないことの証拠です（ヘブル11:1）。

そして、コリントの信徒への手紙では、信仰が愛によって働かなければ、何の意味もないと言っています。

また、預言の賜物を持ち、すべての神秘とすべての知識を理解し、すべての信仰を持っているので、山を取り除くことができても、**愛を持っていないのに、私は何でもないのです**（第一コリント13:2、強調）。

信仰とは、まだ見えていない何か、まだ希望にすぎない何かの実体であり、確信であり、保証です。信仰と希望は、私たちが神の愛をつかむための道具にすぎません。

私たちは何を望んでいるのでしょうか？より良い人生、より良い世界？私たちは、神の愛と光が私たちの痛みや苦しみの中から覗くことを望まないのでしょうか？望むもの」とは、愛と平和が君臨する世界のことではないでしょうか？あなたの国が来て、あなたの御心は天にあるように地上でも行われる」（マタイによる福音書6章10節）という言葉は、愛と平和と命と安全を切望し、失敗した世界を救うために神の愛を待っているすべての人間の心の叫びではないでしょうか？

信仰は目に見えないものの証拠である」という言葉は、肉体的な視覚のことではありません。この節の霊的な意味は、イエス様に関するヨハネの言葉を読むと、より明確になります。

いつの時代も神を見た者はいません。御父の懐におられる唯一の御子を、御父は宣言されました（ヨハネ1:18）。

"誰もいつでも神を見た者はいない"ということは、イエス以前に父なる神の人格を理解していた者がいなかったことを示唆しています。なぜでしょうか？それは、この世の誰もが、サタンの嘘のレンズを通してしか神を見ていないからです。それゆえに、私たちの神に対する見方は歪んでいるのです。

それこそが、神が御子をこの世に遣わされた理由です。キリストだけが真の神を「宣言」したのです。誰も見たことがなく」、イエスだけが「宣言した」のは、父であり、親切で、愛情深く、無条件で、公平で、謙虚で、暴力的ではない神です。

一人子は御父の懐から出た者であり、それゆえに、イエスは神の姿を現した者なのです。イエス様が宣言されたのは、神の肉体的な姿ではなく、神の性格でした。わたしを見た者は父を見た」（ヨハネ14：9）と言われた時、イエスは「わたしが誰であるかわかりますか。これが神の姿です」と言っていたのです。イエス様は、アガペー愛の神の本質を目に見える形で啓示された方です。彼こそがアガペ愛の定義なのです。

ですから、私たちが神が破壊者の働きを解きほぐし、あらゆる種類の病気や病気を癒すのを見るとき、私たちは神を見るのです。神が無差別に罪を赦しておられるのを見るとき（神の時代のユダヤ人にとっては神への冒涜でしたが、サタンが日夜神の前で私たちを非難するのに使った罪です）、私たちは神を見るのです。神が姦淫した女に向かって「わたしはあなたがたを非難しない。神が、絶望的な絶望から人類を癒し、高揚させるために、飢えと渇きの中で、真の愛の神の純粋な知識を私たちにもたらすために、日夜絶え間なく働いておられるのを見るとき、私たちは神を見ることができます。

恐ろしい侮辱に直面して、黙って謙虚に苦しんでいる神を見るとき、私たちは神を見るのです。暴徒に引き裂かれ，唾を吐きかけられ，肉体的，精神的な傷を負ってズタズタにされても，抵抗することなく，祝福と赦しを宣言している姿を見るとき，私たちは神を見るのです。十字架にかかっているご自分を見るとき、容赦ない愛の中で、罵ることも復讐することもなく、神を見ることができます。これは人格の単一性です。これは、心が一途であるということです。これは純粋なアガペの愛であり、それ以外の何物でもない心です。

イエスはエマニュエルであり、"私たちと共におられる神"です。彼は、世界がこれまでに見たことのない神の唯一の真の姿なのです。彼を見ることによって、私たちは神を見ることができます。彼は神を理解する唯一の真の方法であり、神についての唯一の真の「光」であり、神の性格についての唯一の真実です。彼こそが神なのです。

4.　敵

我々は皆、彼が誰であるかを知っている。ルシファー、サタン、悪魔。しかし、悪魔は必ずしも「悪魔」ではありませんでした。エゼキエル書28:12によると、彼は驚くべき、荘厳で、輝かしい、美しい生き物でした。エゼキエル28:12によると、「知恵に満ち、完全な美しさを持っていました。また，彼は音楽家としても優れていました。

堕落して以来、ルシファーの悪魔的な経歴は伝説や神話を通じて人類の歴史に記録されてきた。彼は、オカルト主義者の錬金術の精霊であるメルクリウスである。隠蔽主義的な「知恵」のヘルメスであり、「隠蔽学」や「隠蔽的に封印された」（秘密のカルトの秘密という意味で封印されている）という言葉や用語が作られた後の言葉である。

ローマの歴史家プルタルクは、神々は大いなる悪魔であったと主張し、聖書も同様の主張をしています。このように、サタンと彼の堕落した天使たちは、自分たちの創造物である「神々」という概念を通して、人類を自分たちの考え方に誘導しようとしているのです。悪魔は、古代エジプト人のトト、セス、イシス、オシリス、そしてマアトである。ギリシャ人のゼウス、ダイアナ、アポロ、アルテミス、ローマ人のジュピター、ミネルバ、ヴィーナスなど、ほんの一部を挙げればきりがありません。すべての文化や時代にはそれぞれの神々がいますが、それらはすべて一つであり、同じものです：この強大な堕天使の原理を具現化したものです。

神々は神々の「知恵」を教え、神々を崇拝する人々はその知恵を学ぶ。しかし、神々は神を装った悪魔であり、古代の哲学者や歴史家でさえこのことを知っていました。古代の哲学者や歴史家もこのことを知っていました。このように、神々はその「知恵」によって、神の真の知識を歪曲するのです。

私たちの現代文化では、悪魔は潜入しています。彼は多くの人々、特にいわゆる文明世界の人々、特にキリスト教徒に、悪魔は実際には存在しないと確信させています。ある人にとっては、「サタン」や「悪魔」という言葉はタブーであり、パッセなのです。世俗的な世界では、サタンは単なる架空の漫画のような人物にすぎません。神秘主義者や新時代人は、悪は単に暗黒のエネルギーであり、特定の超自然的な存在とは無関係の抽象的な概念であり、宇宙的現実の必然的な要素である暗黒のエネルギーであると信じています。

それで…悪魔と天使は本当に存在するのか？歴史では存在するとされている。古代の哲学者や詩人もそう言っている。聖書にも書いてある

> それで、全世界を欺く悪魔とサタンと呼ばれる昔の大蛇である大蛇が追い出され、彼は地上に投げ出され、その天使たちも一緒に追い出された（黙示録12:9）。

彼が存在しないと言うことは、大論争の正確な記録としての聖書の権威を否定することになります。彼の存在を否定することは、聖書の最大のテーマである、彼と神との間の戦いを見逃すことになります。イエス・キリストは、イエス・キリストが「稲妻のように天から降ってくるのを見た」（ルカ10:18）と言い、荒野での誘惑の時などに、しばしばイエス・キリストについて語り、個人的にイエス・キリストと会話をしたと言っています。彼の存在は旧約聖書と新約聖書の両方で完全に証明されています。

> サタンの存在と悪霊の働きは、旧約聖書と新約聖書の両方で完全に確立された事実です。アダムの時代からモーセの時代まで、そして、最新の福音書を書いたヨハネの時代まで、**サタンは活動的で個人的な代理人であり、悪の元凶であり、神と人間の敵であると認識されています**。想像力や迷信がこれらの事実に独自の彩りを与え、異教徒、ユダヤ人、さらにはキリスト教諸国の伝説や伝統と結びつけてきたのは事実です**が、神の言葉で明らかにされたこれらの**事実**は、最も厳粛で重要なものです**。目に見える世界と目に見えない世界の結びつき、神の天使の働き、悪の天使の働きは、**人類の歴史と不可分に絡み合っています**。私たちは、天使**たちの純粋さからの堕落**、リーダーであり反逆の扇動者であるルシファー、彼らの連合と政府、彼らの様々な命令、彼らの偉大な知性と繊細さ、そして人間の純潔と幸福に対する悪意のある計画について語られています。私たちは、堕落した敵よりも強大な方、すなわち、その権威によってサタンの力が制限され、制御されている方について語られており、また、不義の元凶に用意された罰についても語られています{4SP 331.1, emphasis added}。

聖書は、サタンを「活動的で個人的な代理人であり、悪の元凶であり、神と人の敵である」と認識しています。預言者エゼキエル 28 章によると、サタンは「不義の元凶」であり、エゼキエル 28 章によると、不義はサタンの中から始まったとされています。この「不義」という言葉は、私たちの多くにとってはあまり意味がありません。漠然と悪の形を伝えているだけで、時代遅れの言い方かもしれませんが、実際の意味は曖昧です。しかし、もしルシファーがその"元祖"であるならば、この言葉は非常に重要な意味を持っています。私たちは次の章でこの言葉を探求し、その研究はルシファーの力の隠された謎を明らかにするでしょう。私たちは、「不義」が本当にルシファーが創始した最初の悪であることを確認し、エデンの園までその痕跡をたどっていきます。しかし、罪を犯す前のルシファーは、神の愛の王国においてどのような役割を果たしていたのでしょうか。彼の名前であるルシファーは何を意味していたのでしょうか？

ストロング・コンコーダンスでは ルシファーは"日の星"と定義されているラテン語では、ルシファーは「光の担い手」を意味します。聖書では「朝の子」(イザヤ 14:12)とも呼ばれています。堕落する前の彼は光に満たされた存在であり、聖書の真理と生命の強力な比喩である。それゆえ、彼は真理といのちの「光の運び手」であり、神についての真理、いのちの神についての光でした。彼は神についての知識を伝える光の運び手だったのです。

聖書のいくつかの箇所には、彼の始まりと終焉について書かれています。これらの聖句は、彼の全歴史を簡単に要約しています。ここでは、これらの聖句の中のほんの数節を紹介しますが、読者の皆様には、これらの聖句の全容を調べてみることをお勧めします。イザヤ書１４章では、彼をバビロンの王として扱っていますが、ルシファーとしても特定しています。

"天から落ちてきたとは
ルシファーよ、朝の息子よ！
どのように切り捨てられているのか。
国家を弱体化させた者！
あなたが心の中で言ったからです。
"私は天に昇る
私は神の星の上に私の王座を高揚させる。
私もまた，会衆の山の上に座る。
北の最も遠い側で。
私は雲の上の高みに登っていきます。
私は最高位の者のようになります。
しかしあなたがたは，シェールに連れて行かれるであろう。
竪穴の最も低い深みへ」（イザヤ14:12-15）。

エゼキエル28章は彼をタイレの王と呼んでいますが、タイレが存在する前のエデン（神の園）と結びつけています。

"あなたは完璧の印鑑だった
知恵に満ちていて、完璧な美しさを持っています。
あなたはエデンの神の園にいた
貴重な石はすべてあなたを覆っていた
サルディウス、トパーズ、ダイヤモンド。
ベリル、オニキス、ジャスパー、サファイア、ターコイズ、エメラルドにゴールドを加えたもの。
あなたのティンブルとパイプの出来栄え
"あなたが創造された日に準備された"
"あなたは油注がれたケルブが カバーしていた
私はあなたを設立しました。
神の聖なる山の上にいたのですね。
焼け石に水の中を行ったり来たりしながら歩いていましたね。
あなたは創造された日から、あなたのやり方で完璧だった。
"不義があなたの中に見出されるまで"
"あなたの取引の豊かさによって
あなたは内なる暴力で満たされるようになった。
そして、あなたは罪を犯した。
だから私はあなたを冒涜的なものとして投げつける
神の山から
そして私はあなたを滅ぼしました、ケルブを覆う者よ。

燃える石の中から」（エゼキエル28:12-16）。

ヨハネの黙示録は、シンボルを通して、彼の歴史の詳細を埋めていく。
見よ、七つの頭と十本の角を持ち、その頭には七つの玉が付いていた。その尾は天の星の三分の一を引き寄せて地に投げ捨てた。そして竜は出産の準備をしていた女の前に立ち、その子が生まれるとすぐにその子をむさぼり食らうようにした。彼女は男の子を産んだが，その子は鉄の棒ですべての国を支配することになっていた。そして，その子は神と神の御座に捕らえられた。それから女は荒野に逃げた。神が用意した場所がある荒野に逃げ込んで、千二百六十日をそこで養うようにした。そして、天で戦争が起こった。ミカエルとその天使たちは竜と戦い、竜とその天使たちは戦ったが、彼らは勝てず、天にはもはや彼らの居場所はなかった。それで、大蛇が追い出された。悪魔とサタンと呼ばれ、全世界を欺く大蛇は地上に投げ出され、その天使たちも一緒に追い出された（黙示録12:3-9）。

ここには豊富な情報があり、多くの本の材料になります。私たちはこれらの言葉、シンボル、および比喩の意味を採掘するとき、私たちは本当に何を、どのように、いつ、そしてなぜルシファーが神に背を向けたのかを理解し始めます。

最初から決めておかなければならない一点があります。ルシファーの神への攻撃は、神ご自身を中心としたものでした。それは神の本質、すなわち神のアガペー愛の性格に向けられていたのです。神の本質と神の律法は一体であり、同じものですから、神の律法への攻撃は神ご自身に向けられていました。

ルシファーが天国から追放される前に、**彼は神の律法を廃止しようとしました**。ルシファーは、聖なる天の堕落していない知性は律法を必要としないが、自らを律することができ、斑点のない完全性を保つことができると主張したのです。ルシファーは天上の創造された存在の中で最も高貴な覆いのケルブであり、**神の玉座に最も近い位置にあり、神の威厳と力の栄光を最も豊かに与えられた神の政府の管理と最も密接に結びつき、識別されていました**。1, emphasis added}。

ルシファーは　"神の律法を廃止しようとした"彼の理由は？"彼は聖なる天国の堕落していない知性は 律法を必要としないと主張したが 自らを律することができ 斑点のない完全性を維持することができると主張した"

これがルシファーの主張であることを心に留めておかなければなりません。しかし、この主張の背後にある彼の本当の意図は何だったのでしょうか？彼は本当にそのような主張で天使の三分の一を欺くことができたのでしょうか？彼はどのようにして彼らが道徳的な法則なしに「斑点のない完全性」を維持することを期待していたのでしょうか？それとも、これらの主張の背後に別の道徳律法、別の原則（神の律法に反するもの）が潜んでいたのでしょうか？

ルシファーは、神の政府がアガペー愛の彼の道徳的な法則によって権限を与えられていることを知っていたし、彼はすべての知的な存在が彼らの行動を秩序づけるために倫理の道徳的なコードを持っていなければならないことを知っていた-すべての人が何らかの道徳的な法律、任意の道徳的な法律を持っている必要があります。彼は、法が必要不可欠なものであり、神の宇宙の不可欠な部分であることをよく知っていました。このことを知っていながら、彼は単に法律を完全に排除しようとはしなかったでしょう。むしろ，彼は神の道徳律法に代わるものを考案しました。

神の政府は**道徳的で**あり、**真理と愛が**有力な力となるべきです{DA 759.1, emphasis added}。

神はご自分の律法に背く力を持たずに人間を創造されたかもしれませんし、アダムの手を禁断の果実に触れさせなかったかもしれません。

すべての知的存在は"自由な道徳的行為者"である。自由は選択を意味します。私たちの選択は簡単です。神の道徳的律法かサタンの道徳的律法のどちらかを選ぶことができます。"いのちの霊の律法"か"罪と死の律法"か命の道か呪いの道か光か闇か生か死か

ルシファーは「神の玉座に最も近い位置にあり、神の政府の運営に最も密接に関係していました。このことを考えると、彼の神の律法に対する攻撃は、控えめに言っても驚くべきものです。完璧で完璧な宇宙に住み，「神の玉座に最も近いところに立って神の律法を推進していた」彼の心の中に，どうして反逆が生じたのでしょうか。上に引用したイザヤ書のこの一節をもう一度注意深く見てください。"朝の子ルシファーよ，あなたはどのようにして天から落ちてきたのか。朝の子ルシファーよ、あなたは何と天から落ちてきたのか。

ルシファーは落ちました-彼は、彼が今自分自身を見つけているものよりもはるかに優れた状態から落ちました。彼が落ちたのは、アガペの愛という神の意志が支配する純粋な喜びと完全な調和の場所である天国からでした。天国が人が到達できる最高の経験であるならば、神の至高の創造物である彼がこれほど輝かしい存在であったことを考えると、彼はどうしてそれに逆らうことができたのでしょうか。彼の反乱の「理由」に注目してください。

サタンが反抗した原因は何だったのでしょうか？彼の罪には何か**正当な理由があったのでしょうか？罪の発生**場所は指摘されていますが、**罪の理由は見つかりません**。2, emphasis added}。

天国への罪の入り口は説明できません。もし説明できるとしたら、罪には何らかの理由があったことを示すことになるでしょう。しかし、罪の理由としては、その理由を説明することはできませんでしたので、その起源は永遠に謎に包まれたままです。2, emphasis added}。

サタンが神とその律法に反抗して立ち上がるための「理由」も、必要も、言い訳もなかった。なぜでしょうか？神の政府の中では、すべてが完全に整っていたからです。神の律法は、喜びと快楽と永遠の命がある人生の道でした。宇宙は完全に調和しており、死のようなものはありませんでした。もしルシファーが反抗する理由があったならば、神と神の律法を転覆させる正当な理由があったはずです。しかし、何もありませんでした。神の政府は完全であり、すべての知的な存在は神の愛の下で繁栄していました。ルシファーが神に反抗することを選んだ理由は、私たちには理解できませんが、彼が神の道徳律法の欠陥を見ていたことは明らかです。彼はそれが存在しないにもかかわらず、それを見たのです。しかし、彼はそれを修正しようとすることで、死と破壊をもたらすことに成功しました。なぜなら、彼は生命の源である創造主から私たちを引き離す道徳的なシステムを作ったからです。

イザヤは、彼が倒れたとき、彼は私たちを引きずって、地の国々である私たちを弱体化させたと言っています。ヘブライ語で「弱体化」とは、「衰弱する」という意味で、「倒れる、衰える、衰える、合わなくなる、衰える」という意味です（ストロング・コンコーダンス）。この弱体化の過程はゆっくりとしたものではありますが、確実なものでした。聖書によると、アダムとその同時代人は千年近く生きました。そして、彼らは私たちに比べれば、彼の時代には巨人でした。人類は、一般的に考えられているように、ますます後退し、進歩していません。私たちは、肉体的にも、知的にも、道徳的にも、あらゆる意味で下降してきました。

ルシファーはどのようにして私たちをこのような状態にしたのでしょうか？どうやって腐敗と死をもたらしたのか？彼はどのようにして私たちを"ひれ伏させた"のでしょうか？単に神の律法を廃止しようとしたのでしょうか？はい、彼はそれをしましたが、それ以上のことをしました。もし私たちが「死」の道をたどるならば，私たちはエデンの園，善悪の知識の木に行き着くのです。

創世記2:17、神はこの木について、アダムに「この木を食べた日には必ず死ぬ」と言われました。この木に代表される律法が死の源なのです。

諸国を弱める」者は、呪いと死の道という新たな道をもたらした。この道は善悪の知識です。さて、私たちが選ぶべき道は二つあります。

それは、生命の木、神の愛の道徳的律法である生命の木と、サタンの道徳的律法である善悪の知識の木です。これらの道の結果は非常に深刻です。ここで私たちは生と死を扱っています。なぜなら、神は「善悪の知識の木を食べれば死ぬが、生命の木を食べれば永遠の命を得ることができる」と言われたからです。

私たちには選択の余地があります。生と死は私たち一人一人に密接に影響を与えます。それならば、自分の選択が何であるかを知ることが重要ではないでしょうか？私たちはこのテーマを研究するべきではないのでしょうか？ルシファーについて，不正とは何かについて，そして不正を通して彼がわたしたちにしたことについて，もっと多くの答えを見つけることができるでしょう。

5. ルシファーの罪

ルシファーは神に反逆したことがわかりました。彼は神の政府、より正確には、神が神の宇宙を支配していた法律、アガペ愛の道徳的な法律、無条件、公平、無私の愛に反抗しました。

ルシファーは、神の統治に対して批判を抱き始めました-またしても、これには理由がありませんでしたが、それは起こりました-そして、その過程で、彼は神の統治の中で見た問題の解決策を持っていると確信するようになりました。これが彼の反乱の始まりです。

> **ルシファーは、神の律法の結果として、天にもこの地上にも間違ったものが存在しているという立場をとりました。これは、神の政府に恣意的であるという罪をもたらしました**。しかし、これはすべての虚偽の創造者によってでっち上げられた虚偽です。神の政府は自由意志の政府であり、自由意志の行為ではない反抗や服従の行為はありません{ST June 5, 1901, par.4, emphasis added}。

ルシファーは、神の統治に問題があると主張していましたが、その問題は神のアガペー愛の法則でした。彼が「天にも地にも存在する」と認識していた「間違い」は、神のアガペー愛の律法でした。そして、神はルシファーの新しい考えに合わせて自由の法則を変えようとしなかったので、ルシファーは神が恣意的であると告発しました。神の法はすべての人の自由意志を保護しており、ルシファーはこれが問題だと考えていました。彼はそれを変えようとし、強制服従を導入しようとし、神が彼の計画に従わないので、彼は神を恣意的であると告発しましたが、実際には彼は恣意的な法制度の施行を提案していたのです。

> ルシファーは、ケルブを覆うように栄光に包まれていました。しかし、神が創造し、力を託されたこの天使は、神のようになりたいと思うようになりました。彼は、**神の統治を批判する考えを提案すること**によって、彼の仲間の何人かの共感を得ました。この**悪の種は、**最も誘惑的な方法で撒き散らされ、それが**多くの人々の心に芽生えて根付いた**後、彼は自分自身が最初に他の人々の心に植え付けた考えを集め、**神の政府に対する**他の人々の心の考えとして、最高位の天使たちの前に持ってきました。この**ように、彼自身が考案した巧妙な方法によって、ルシファーは天に反逆を導入しました**{4BC 1143.1, emphasis added}。

"批判の思考"これ自体が問題ですなぜですか？"批判の思考"は悪魔の心の中から始まった。彼はそのような思考をした最初の心であった。彼は、完璧なものしかないところに、何か間違ったものを見ていたのです。天国には何の欠陥もありませんでしたが、彼はそれを見ていました。ファリサイ派の人々は、安息日にとうもろこしの穂を摘んでいる弟子たちを批判したとき、同じことをしました。イエス様の答えは次のようなものでした。

> しかし、もしあなたがこの意味を知っていたら、『私はあわれみを望み、生け贄を望まない』ということを知っていたら、罪のない者を非難することはなかったでしょう（マタイ12:7）。

ファリサイ派の人々は、何もないところに欠陥があると考えていました。同じように、ルシファーの「批判の思考」は、批判の原因にならないものに向けられていました。しかし、それ以上に、彼の「批判の思い」は、彼の心がすでに神の律法から逸脱していたことを明らかにしています。パウロがテトスへの手紙の中で言っていることに注目してください。

> 清い者にはすべてのものが清いのですが、汚れた者、不信仰な者には清いものはなく、心と良心さえも汚れています。彼らは神を知っていると公言していますが、働きにおいては神を否定し、忌み嫌われ、不従順であり、すべての良い働きをする資格がありません（テトス1:15-16）。

神は純粋で聖なる清らかなお方であり、神にとって「すべてのものは純粋である」のです。私たちはどこにでも、すべての人の中に悪を見ているので、このことを理解するのは難しいかもしれませんが、神は私たちが最も絶望的だと考えているような場合でも、私たちの中にだけ価値を見ておられます。イエス様はすべての人の中に美しさを見出され、非難することなく、それに応じた扱いをしてくださいました。イエス様のもとに人々を引き寄せたのは、人を非難することなく見ることができたからです。また、イエス様が彼らの中に見た可能性を反映するように、彼らの心と行動を変えたのは、この非難の欠如でした。

批判すること自体が、今のルシファーから出てきたものが何であれ、怪しくて歪んでいたという症状です。彼の心はもはや純粋ではありませんでした。彼は不信心者となり、最初の不信心者となり、彼の心は汚れたものとなりました。彼はもはや神を本当の姿として知らず、「忌み嫌われ、不従順であり、すべての善い行いをする資格がない」となったのです。彼は、神様を本当の姿で見ず、描写しないという罪を犯したのです。

> ルシファーが最初に罪を犯した正確な瞬間があった。"罪が入った場所を特定することができる" {4BC 1163.6}。

つまり、このようなことが起こった時期の具体的な「場所」と、それを取り巻く状況をピンポイントで把握することができるのです。

この「場所」については、エゼキエル書に記述されています。これは、ルシファーがルシファーであることから悪魔であることへと変化した重要な瞬間であり、神のアガペの愛から転向した瞬間です。彼はその後、神とは正反対のものになりました。それでは、拡大して預言者の言葉を見てみましょう。

> あなたは神の園エデンにいました。あらゆる宝石があなたを覆っていました。あなたのティンブルとパイプの細工は、あなたが創造された日にあなたのために準備されていました。あなたは油注がれたケルブであり、私があなたを定め、あなたは神の聖なる山の上にいて、火の石の中を行ったり来たりしていた。あなたは**創造された日から、不義があなたの中に見出されるまで、あなたの道は完全であった**。豊かな取引によって、あなたがたは内なる暴力に満たされ、罪を犯したのです（エゼキエル28:13-16、強調）。

これらの節は多くのことを明らかにしています。彼らは、反逆する前のルシファーと神との関係、そして神の宇宙における彼の職業と役割を明らかにしています。彼らは、彼の堕落前の道徳的な状態を示し、その後、彼の性格に何が起こったかを説明しています。私たちはまた、ここで神について多くのことを学ぶことができます。これらの言葉は「採掘」されなければなりません。そうすることによって、私たちは豊かで隠された宝を見つけることができます。

> あなたは神の庭のエデンにいた…

ルシファーはエデンの園にいたしたがって、エデンの園は、私たちにとって重要な、重要な情報を持っているに違いありません。エデンの園はルシファーの反乱の糸をまとめて、彼が何をしたかを暴露しています。ルシファーの最初の反乱は天で始まりましたが、「咎」が説明されているのはエデンの園です。ルシファーはエデンのどこにいたのでしょうか？ルシファーは「不義が彼の中に見出された」前にいたのでしょうか、それとも後にいたのでしょうか。

私たちは，彼が善悪の知識の木にいたことを知っています。それ以来，聖書ではしばしば「忍び寄るもの」として言及される蛇は，彼の人物，彼の原則，そして地上での彼の働きの象徴となっています。世界の主要な異教宗教を表面的にでも探ってみると、その崇拝システムに何らかの形で蛇が関与していることがわかります。

では、蛇がイヴに「物売り」をしていた「木」に代表される原理とは何でしょうか？これは、彼が宇宙の他の部分に対して行ったのと同じ「物売り」だったのでしょうか？蛇がイヴに食べさせようとしたこの木には、どのような利害関係があったのでしょうか？聖書にはこう書かれています。

さて、蛇は、主なる神が造られた野の獣よりも狡猾だった。彼は女に言った　"神は本当に言われましたか『園のすべての木の実を食べてはならない』と？"そこで女は蛇に言った　"私たちは園の木の実を食べてもよいが，園の真ん中にある木の実については，神は言われた　"あなたはそれを食べてはならないし，触ってもならない。そこで蛇は女に言った「あなたは必ず死ぬことはありません。神は知っておられる。"あなたがその木を食べた日には、あなたの目が開かれ、あなたは神のようになり、善と悪を知るようになる。"そこで女は，その木が食用に適していて，目に心地よく，賢くなるのにふさわしい木であることを見て，その実を取って食べた。また、彼女はその実を夫にも与え、夫は食べた（創世記3:1-6）。

この会話は私たちに多くのことを明らかにしています。ヘブライ語でârûwmは「狡猾で（通常は悪い意味で）狡猾、慎重、不器用」という意味です（ストロング・コンコーダンス）。彼のイヴへの質問は、彼が善悪の知識の木に利害関係を持っていたことを明らかにしています。彼はカリスマ性と狡猾さと欺瞞を駆使して、彼女にそのようにさせようとしましたが、「園のすべての木を食べてはならない」という神の本来の言葉さえも歪めてしまいました。彼はまた、自分が嘘つきであることを証明しました。なぜなら、神は「あなたは必ず死ぬ」と言ったのに、その反対の「あなたは必ず死んではならない」と断言したからです。

彼の木を食べる前、アダムとエバは善と悪を知らなかった。つまり、彼らはすべての交流の中で、アガペーだけを知っていたのです。彼らはアガペの愛の目を通して、無条件で公平な無私の愛を通して、お互いと神を見ていました。彼らは純粋であり、彼らにとっては、　"すべてのものが純粋であった"。サタンの木から食べた後，アダムとエバは，部分的で条件付きの自己中心的な目を通して，善と悪の目を通して，お互いを，そして神を見るようになりました。彼らはお互いに悪を見始め、新しい主人の足跡をたどって、お互いを批判し始めました。彼らが神と交わした会話がこのことを裏付けています。

ヘビにとって、すべてはイヴがこの木を食べることにかかっていました。彼は果実で彼女を誘惑したそれが彼女の利益になると主張して"それを食べれば目が開かれる"と

この木は蛇にとって何の意味があったのか？その意味は？そもそもなぜ「いのちの木」の隣にあったのか？なぜ「死の木」と呼ばれなかったのでしょうか？善悪の知識の木は単なる服従のテストだったのでしょうか？それとも大論争の中で非常に重要な何かの象徴だったのでしょうか。この出来事があまりにも昔に起こったことを考えると、私たちは気にする必要があるのでしょうか？それとも一部の人たちがしてきたように、単に神話として却下すべきなのでしょうか。

それを否定することはできません。ルシファーはそこにいた。これは主要な証拠の一つだそれを捨てるのではなく、我々はそれが何を意味するかを発見するまで、掘って、掘って、さらに掘らなければなりません。これを解明することが重要だこの木は、アダムとエバがそうであったように、今日の私たちにも関係しています。蛇のように、この木は、私たちの目の前に潜んでいて、私たちの目には見えないように、親切で公正な外見の下にカモフラージュされています。実際、その真の意味は、これまでにない方法で私たちの世代に明らかにされようとしています。

罪を犯す前のアダムとエバのこの木の理解は、単に神が「食べてはいけない、食べたら確実に死ぬから」と言われただけでした。彼らにとって、この木の意味は、単に従順さのテストだったのです。さらに、この木が表していた道徳体系はまだ初期の段階であり、当時はまだ苗木に過ぎませんでした。現代では、この木は成熟して実を結び、その実が熟して、木から落ちる準備ができています。

私たちは、この木が、ルシファーがまだ天国にいる間に考え出した腐敗したもの、つまり基礎となる言葉の原理を表していると提案したいと思います。この木が表している原理とは、彼の中にあった「不義」のことです。この木の中には、神に対するルシファーの欺瞞がすべて埋め込まれています。この木の意味を理解しなければ、私たちは完全に神と人間の敵の嘘に取り込まれてしまいます。私たちはこの木について詳しく調べていきますが、まず、ルシファーが罪を犯す前の人物であり、なぜ彼が神に反抗したのかを理解しなければなりません。

すべての宝石があなたのカバーだった...

ルシファーは"すべての宝石"で覆われていた。"すべて"とは何も欠けていないことを意味し、神は彼を完全なものにするために必要なすべてを持って創造したのです。

"Precious"-yâqârは、"貴重な"という意味。それはまた、「明るさ、明確な、高価な、優れた、太った、名誉ある女性、貴重な、評判」（ストロングの辞書）を意味することができます。聖書の他の場所では、この言葉は"親愛なる"、"壮大な"、"素晴らしい"と訳されています。サムエル記１章では「稀な」と訳されています。

> また、当時、主の言葉は**珍しく**、広く啓示はありませんでした（第一サムエル3:1、強調）。

箴言17:27では、yâqârは「優れた」と訳されています。

> 知識を持つ者は自分の言葉を慎み、理解のある者は**「優れた」**精神を持っている。愚かな者であっても、平安を保っているときは賢い者とみなされ、唇を閉ざす者は理解のある人とみなされる（箴言17:27-28、KJVを強調しています）。

この節の文脈を考えると、ゲゼニウスのヘブライ語・カルデア語辞書は、yâqârは「おそらく『静かな精神で』、静かであること、おとなしくあることを意味する」と論じています。新欽定訳では、実際にはこの推論に従っています。

> 知識のある者は言葉を惜しまず、理解のある者は「**平静」な**精神を持っている。28 愚か者であっても、平静を保つときには賢い者とみなされ、唇を閉じるときには鋭い者とみなされる（箴言17:27-28、強調されている）。

この修飾語「尊い」は、その対象であるルシファーを覆っていた石が、実際には非常に特別なものであったことを示しています。それが何を意味するものであれ、石は彼に優れた、壮大で、立派で、冷静で、柔和で、謙虚な精神を与えました。彼の中に見出された不義は、彼を柔和で謙遜とは正反対のものにしてしまいました。

私たちはここに、神が特別な資質を授けられた被造物を見ています。エゼキエルは彼について言った

"あなたは完全な印章であり、知恵に満ち、美しさに満ちていた"（エゼキエル28:12）。

ヘブライ語で「封印」という言葉は、何かを封印するという最終的な意味を表しています。

…古代人は、私たちがロックを使用している多くのものにシールを置くことに慣れていた…ロールや手紙から、シールを受信して完了したときに、意味が生じる…（Gesenius' Lexicon）。

神がルシファーを創造した時 神は彼に封印をした "お前は完璧だ 私はもう終わりだ ここでできることは何もない"とルシファーは最高の男だった

…全ての宝石…

石」という言葉は、聖書の中ではかなり重要な意味を持っています。イエス様を「礎石」（詩篇118:22、イザヤ書28:16、マタイ21:42など）として、また、イエス様の弟子たちを「生きた石」（第一ペテロ2:5）と呼んでいます。石を意味するヘブライ語の言葉はエベンで、「建てるという意味を通した石」という意味です（ストロング辞書）。エベンは根語のbânâhから来ており、「建てる、子供を得る、作る、修理する、設置する、確実に」という意味です（ストロングス辞書）。

ゲゼニウスの辞書では　このように説明されている"家、神殿、都市、城壁、防御のように建てる、建てる、建てる…誰かのために家を建てる、つまり安定した住居を与えることを意味し、比喩的には、その人を繁栄させることを意味する。

bânâhという言葉から生まれたもう一つの言葉は、「（姓の建設者としての）息子」を意味するbênという言葉です（ストロング辞典）。この最後の言葉はイザヤ書9:6で「裂け目の修理者」であるイエスを指して使われています((イザヤ書58:12)。イエス様は、ルシファーが神の国に引き起こした裂け目を修復するために遣わされました。イエス様は、ルシファーが中傷した神の名を再建するために来られたのです。

わたしたちのうちに子が生まれ、わたしたちのうちに子（ベーン）が与えられ、政府はその肩の上に置かれるからです。そして、その名は、すばらしき、相談者、強大な神、永遠の父、平和の王子と呼ばれるであろう（イザヤ9:6）。

この言葉を通して描かれている考え方は、罪を犯す前のルシファーは、彼が創造された目的を果たすために必要とされるすべてのもの、すなわち、アガペー愛の神の普遍的な王国の周りに保護の壁を構築したり、建てたりするという「すべての宝石」を与えられていた非常に特別な存在であったということです。

…サルディウス、トパーズ、ダイヤモンド、ベリル、オニキス、ジャスパー、サフラワー、エメラルド、カーバンクル、ゴールド…

これらの石の意味を理解しようとするとき，モーセの聖所にあった大祭司の胸当てを思い出します。神はモーセに大祭司の服装について非常に詳細な指示を与えられました。大祭司の服装の細部には象徴的な意味があり、神と神のアガペー愛の心を理解するのに役立つように設計されていました。

大祭司の衣の一部である「被り物」は胸当て（裁きの胸当てと呼ばれる）であり、その上には金で作られた十二個の石（三列四列）が置かれていましたが、そのうちのいくつかはルシファーの「被り物」にも含まれていました。その胸当ては以下のように説明されています。

> あなたは裁きの胸当てを作らなければならない。あなたがたはエフォドの技巧にしたがって、金、青、紫、緋色の糸と、上質の麻布で織られたものを作らなければならない。それは二重にして四角にし、一幅を長さとし、一幅を幅とする。あなたはその中に石を四列に並べて置かなければならない。第一列はサルディウス、トパーズ、エメラルドで、これを第一列とし、第二列はターコイズ、サファイア、ダイヤモンドで、第三列はヤシンス、メノウ、アメジストで、第四列はベリル、オニキス、ジャスパーである。これらの石は金ではめられている。石にはイスラエルの子孫の名が記され、その名に応じて十二人の名が記され、それは印の刻み目のように、それぞれの名が記されている。

胸当ては、祭司の心臓である胸の上に置かれていました。このように、胸当ては「裁きの胸当て」と呼ばれていました。

大祭司の胸当ての石にはそれぞれヤコブの十二人の息子たちの名前が刻まれていました。ヤコブの息子たちは地上に神の王国を建設する者たちでした。彼らには神のオラクル、すなわち神のアガペー愛の律法が与えられていました。彼らがそれに従うならば、大きな論争の中でその安全を求めることを選んだすべての人間のための「安全な家」を建てることになります。これらの息子（石）は人類のための「安定した住まい」の導管となることになっていました。

イエス様がその場に来られた時、イエス様は十二人の使徒を任命されました。使徒たちの名前は、新エルサレムの土台に刻まれています。

> さて、都の壁には十二の土台があり、その上には小羊の十二使徒の名が記されていた（黙示録21:14）。

なぜ使徒の名前が新エルサレムの土台に書かれていて、ヤコブの息子たちの名前が書かれていないのでしょうか？それは、使徒たちがイエス・キリストの御姿で目撃した純粋な福音、すなわち神の純粋な啓示を広めたからかもしれません。このように、使徒たちは、神の都である新エルサレムの「建設者」であり、「石」なのです。彼らは神のアガペの愛の律法をもって、それを建設するのです。

ペテロは第一の手紙の中で、この旧約聖書の「石」という概念に言及しています。

> ですから，生まれたばかりの乳飲み子のように，すべての悪意，すべての欺瞞，偽り，偽善，ねたみ，悪口を捨てて，みことばの純粋な乳を求めなさい。あなた**がたもまた，生きている石のように，**人には拒否されたが，**神に選ばれた尊い石のように，生きている石として，イエス・キリストを通して神に受け入れられる霊的ないけにえをささげるために，霊的な家，聖なる神権を築き上げようとしているのです。それ**ゆえ，聖典にも，「見よ，わたしは**シオン**に**選りすぐりの尊い礎石を**置く。**"信じる者には尊いが"　"不従順な者には" "建設者が拒んだ石が礎石となり" "つまずきの石となり" "罪を犯す石となる"**彼らはつまずき、自分たちも任命された言葉に従わないからだ。しかし、あなたがたは選ばれた世代であり、王の神権、聖なる国、神ご自身の特別な民であり、**暗闇の中から神の驚くべき光の中にあなたがたを召された神の賛美を宣べ伝えることができるのです**。

イエスは"生きた石"であり　命の石である。イエス様は人に拒絶されましたが、"神に選ばれた尊い方"です。イエス様は、神様の家全体が建てられた「大きな礎石」なのです。私たちもまた、"生きる石"となるべきであり、人に拒絶されても、"神に選ばれた"のです。私たちは「生きている石」として、「暗闇から神の驚くべき光の中に」私たちを呼んでくださった「神の賛美」を宣言しなければなりません。イエスがアガペの愛の父について啓示してくださったことを信じるとき、私たちは暗闇から出てきます。このことが何を意味するのか、あわれみを得ることがどれほど重要なことなのか、学びを進めていくうちに分かってくるでしょう。

ルシファーの覆いには九つの石しかありませんでした。金は大祭司の胸当てにあったように、「設定」でした。

これらの石はこのような意味であると解釈する人もいます。ルシファーは確かに人類が創造される前は完全な印章であり、すべての宝石は彼の覆いでした。しかし、神が人類を創造されたとき、神は創造に新たな次元を加えられました。胸板の中の3つの余分な石は、人類の3つのタイプの関係を表しています。これは、（例えば、天使のように子孫を作らないのとは対照的に）人間のユニークな創造能力に関連しています。私たちはまだ自分のユニークさや特別さに気づいていません。もしかしたら、いつか私たちは気づくかもしれません。

聖書の中にも石について言及されている例があります。エゼキエル書では、預言者は神がルシファーを「火の石の中から」滅ぼされると言っています（エゼキエル書28:16）。火の石」の意味は、預言者イザヤによって記述されています。イザヤは、神と対面した時、自分の罪深さに愕然とし、神の前では裸になったように感じました。しかし、神の反応は、象徴的な「火の石」を通して、愛と恵みとあわれみを彼に注がれたのです。イザヤの言葉を聞いてみましょう。

"災いなるかな、私は取り返しがつかないのだから！
私は汚れた唇の男だからだ
私は汚れた唇の民の中に住んでいる。
私の目が王を見たからだ
"万軍の主"
それからセラフィムの一人が私のところに飛んで来て，その**手には生きた石炭を持っていた。**
彼は祭壇からトングで取っていた。そして彼は私の
と口にして言った。
裁判中の神
"見よ、これがあなたの唇に触れた。
あなたの咎は取り除かれる。
そして、あなたの罪は清められた」（イザヤ6:5-7、強調）。

生きた石炭」は「火の石」であり、神の無条件のアガペー愛、私たちに対する神の恵みとあわれみを表しています。箴言書にも同じような象徴があり、無条件の愛の文脈で表現されています。

敵が空腹ならば、食べるためのパンを与えなさい。
また喉が渇いている者には、水を与えて飲ませなさい。
彼の頭の上に火の炭を積むのだ。
主はあなたに報いてくださる（箴言25:21-22）。

そして、使徒パウロはソロモンの言葉を響かせています。

だから、「敵が飢えているならば、彼を養い、彼が喉が渇いているならば、彼に与えなさい。
そうすれば、あなたがたはその人の頭の上に火の炭を積むことになるからです」（ローマ12:20）。

したがって，火の石は，神の広大な愛とあわれみの心の光り輝く象徴です。炎の石は不動（岩）の象徴であり，神のアガペー愛の無条件の性質を表しています。
火」が神の愛であるというこの比喩は、聖書の別の節でも確認されており、神の愛は「火の炎」として表現されています。

愛は死のように強く、嫉妬は墓場のように残酷で、**その炎は火の炎であり**、最も激しい炎で**ある**（ソロモンの歌8:6、強調）。

ルシファーが覆われていた九つの石は、おそらく第一コリント13章にあるように、アガペの愛の様々な面を象徴しているのではないでしょうか。それは、ストレッチかもしれませんが、検討する価値があります。

1. 愛は長く苦しむ（すべてのものに耐える、すべてのものに耐える-忍耐を失うことはありません
2. 愛は優しい（失礼な振る舞いをしない
3. 愛は人を妬まない
4. 愛は自分をパレードさせない、膨らませない（プライドがない
5. 愛は自分を求めない（利己的ではない
6. 愛は挑発されず、悪を考えない（他人のことや他人に向かって、純粋で、他人のことだけを純粋に考える）。

7.愛は不義を喜ぶのではなく、真理を喜ぶ。
8.愛は万物を信じ、万物を願う（自分の将来を非常に肯定的に考えている
9.愛は失敗しない(愛は絶対にやめない)

これらがルシファーを覆っていた「宝石」であるならば、ルシファーは完全な存在でした。しかし、なぜルシファーには九つの石があり、大祭司の胸当てには十二個あったのでしょうか。おそらく、人類が創造されたことによって、神の性格の他の三つの側面が明るみに出たからでしょう。これらは次のとおりです。

1. 自由度の高さ
2. 公平性
3. 平等なアクセス

もしこの解釈にメリットがあるとすれば、大祭司の胸当ての石が9個ではなく、この3個の石で12個であったことを説明することができます。自由、公平、平等なアクセスは、神のアガペの愛の基本的な属性であり、神がご自身の政府を運営される律法です。しかし、その真の意味は、これから見るように、罪の文脈の中でしか生かされません。

あなたのティンベルとパイプの仕事は、あなたが創造された日にあなたのために準備されています。

"Workmanship"-mlâkâh-は、「適切に、代理職、すなわちミニストリー、一般的には雇用」（ストロングのコンコーダンス）を意味します。

"ティンブレル"は打楽器で　タンブールのような楽器だ彼の"パイプ"は"宝石のためのベゼル"を意味します。しかしゲゼニウスの辞書には"宝石をセットするためのソケット、pala　gemmarum（ジェロームが正しく表現した）、その黄色さからそう呼ばれています…他の人はパイプと理解していますが、これは「貫通する」という意味の語源から来ています。

この「パイプ」という言葉、ネケブは聖書全体で一度しか出てこないので、他の文脈と比較することはできません。しかし、これらの「パイプ」はフルートを意味する可能性もあります。なぜでしょうか。

エゼキエル28:18の数節には、ルシファーのことが書かれています。"あなたがたは、多くの不義によって、あなたがたの聖域を汚した。"ヘブライ語の"汚した"という言葉はシャラールで、"産む"という意味ですが、"笛を吹く"という意味もあります。

> châlal - 原始的な語源; 正しくは、(暗示的に)傷をつける、溶かす; 比喩的には(人、場所、物を)冒涜する、(自分の言葉を)破る、(開運楔のように)始める; 分母的には(H2485より)笛を吹く.-　始める（人が始めた）、汚す、破る、汚す、食べる（普通のものとして）、最初に、そのぶどうを集める、相続する、パイプを吹く、楽器を弾く、汚す、（自分を）冒涜する、売春婦、殺す（殺される）、嘆く、汚す、傷つく（ストロングズ・コンコーダンス）。

オシリス、クリシュナ、パン、ココペリなどの古代の神々がフルート奏者であったことから、この研究には興味深い新次元がもたらされている。この研究に興味のある方は、ワシントン大学の図書館にあるデニス・グラントによるモーツァルトのオペラ「魔笛、魔笛と対抗勢力の道徳的法則」に関する論文を読んでみてください（www.grace-unlimited-ministries.orgにリンクがあります）。この調査のラインに何らかのメリットがある場合は、ルシファーは、事実上、宇宙のパイパイパーになりました。

ルシファーの天のミニストリーは、間違いなく何らかの形で音楽に関わっていたように見えます。あなたの音色とパイプの技量」という記述は、彼が音楽家であったことを示しています。そして、彼は天使の中でも最も高い位置にいたので、おそらく彼は天の音楽の名手だったのではないかと推測することができます。音楽は天国の言語だったのでしょうか？そして、ルシファーは音楽を通して神のメッセージを伝えたのでしょうか？もちろん、私たちはこれを事実として知っているわけではありません。

あなたが選ばれたケルビだった…

"油注がれた"という言葉に 辿り着きましたルシファーは単なる油注がれたケルブではなく、油注がれたケルブでした。このことは、黙示録ではその数が次のように表現されていますが、天使たち全体の中で、彼のユニークさと特別な役割を示しています。

それから私は見たが、王座のまわりに多くの天使たち、生き物たち、長老たちの声が聞こえ、その数は一万倍一万人、千人の数であった（黙示録5:11）。

これは、それが何であれ、膨大な数であり、彼がこの膨大な群衆のリーダーであったように、彼が堕落する前のルシファーの役割について新たな視点を与えてくれます。これを知ることはまた、彼がどのような影響力を持っていたのか、そして彼の影響力が彼の反乱の中でどのように演じられたのかを理解するのに役立ちます。

ヘブライ語の「油注がれた」という言葉（mimshach）には興味深い意味合いがあります。意味は「拡大する意味で、（翼を広げて）広げて、油を注がれた」（ストロングのコンコーダンス）。

ミムシャッハはmâshachから発展したもので、"油でこすること、つまり油を注ぐこと、意味するところは奉献すること、また絵を描くこと"です。(Strong's Concordance) ルシファーは、非常に特定の目的のために創造され、奉献されました。彼はどのような立場にあり、どのような職業に就き、どのようなミニストリーのために創造されたのでしょうか？彼の「のびのびとした」「のびのびとした翼」とは何を意味していたのでしょうか。次のセクションでは、この質問に答えることになるでしょう。

チェルブは、天国の最高位の天使です。ルシファーは「覆う」ケルブだったので、彼はさらに高く、天の最高位の天使になりました。ヘブライ語で「覆う」という言葉は çâkak で、「網戸のように絡み合って、囲んだり、覆い隠したり、（比喩的に）守ったりする」という意味です。

ルシファーはプロテクター、ディフェンダーであったことがわかります。伸びた翼は、何かを「スクリーンのように」絡み合わせ、囲い、覆い、保護することの象徴です。

イエスご自身もまた、保護の象徴として「伸ばした翼」という考えを用いられました。

"エルサレムよ、エルサレムよ、預言者と石を殺す者よ
彼女のもとに送られた者たち！私は何度もあなたの子供たちを集めたかった
雌鳥が羽の下に雛を集めるように、一緒にいたが、あなたは
喜んでいない」（マタイ23:37、強調）！

ルシファーのタスクは、比喩的な "石"のように、 - これは、構築し、保護し、すべての生き物のための安全な環境を作成し、宇宙が保護されていたことを確認することでした。彼は守護者の神聖なオフィスを与えられていた。彼は何を守り、守り、守るのでしょうか？それが何であれ、それは神にとって非常に重要なものであったに違いありません。

このことを理解するためには、モーセが砂漠に建てた地上の聖所に移動しなければなりません。聖所は「天のものの写しであり、影である」（ヘブル8:5）ので、それを見ることによって、私たちは「天のもの」を知ることができます。聖所は必ずしも天の建物の写しではなく、天のものの写しだったのです。黙示録には、「わたしはその中に神殿を見なかった。

もし神殿を単に文字通りの建物として見るならば，神殿の象徴的な意味を通して神がわたしたちに伝えようとしているメッセージを完全に見落とすことになります。これらのことこそが，今まさに私たちが調べていることなのです。神のお人柄，サタンの反逆，そして神が人類を取り戻し，宇宙の残りの部分を啓発するために進められた計画，すなわち救いの計画のすべての段階です。地上の聖域でのすべての活動と物体は、大論争が始まってから今までに起こったこと、そしてこれから起こるであろうことを反映したものであり、神がこの問題にどのように対処されているかを明らかにしています。聖所を通して、私たちは、神が神の統治の基礎となる原理、すなわちアガペの愛によってのみ対処されてきたことを学びます。

このように、地上の聖域では、反乱を起こす前のルシファーの目的と天での立場を知ることができます。

> あなたがたは純金であわれみの座を作り、その長さを2.5キュビト、幅を1.5キュビトとする。あなたがたは金で二つのケルビムを作り，あわれみの座の両端に金槌を用いて作らなければならない。一方の端に一つのケルビムを作り、他方の端にもう一つのケルビムを作り、その両端のケルビムをあわれみの座と一体のものにしなければならない。また、ケルビムはその翼を上に伸ばし、その**翼であわれみの座を覆い、互いに向かい合って**、ケルビムの顔はあわれみの座に向く。あなたがたはあわれみの座を箱舟の上に置き、箱舟の中に、わたしがあなたがたに与えるあかしを入れなければならない。そこでわたしはあなたがたに会い、あわれみの座の上から、あかしの箱の上にある二つのケルビムの間から、わたしがイスラエルの子らに戒めとしてあなたがたに与えるすべてのことについて、あなたがたと話をする（出エジプト記25:17-22、強調）。

モーセの聖域には，二人の覆うケルブがいました。二人とも「あわれみの席」の上で翼を広げていました。慈悲の席は「証」と呼ばれる十戒の錠剤が入っている箱舟のふたでした。二人のケルブは，あわれみの席と証の箱舟を「覆う」か，またはその上に立っていました。

十戒は，人類のために特別に適応させたアガペ一愛の神の律法のコンパクトなバージョンです。彼らは神との関係，そして同胞である人間の家族との関係を体現しています。一言で言えば，聖なる聖所は，まさに神の御座の間を表し，十戒は神の愛の性格の写しです。"あわれみの席"は"あわれみの玉座"という言い方もできます。"座"という言葉は、神の玉座のことを指しています。玉座は神の政府の象徴であり、あわれみが神の政府の基盤であることから"あわれみの席"と呼ばれています。

> 義と正義はあなたの御座の基礎であり、あわれみと真理はあなたの御顔の前にあります（詩篇89:14）。

憐れ**みのうちに王座が確立され、**ダビデの幕屋で、真実にその上に座られ、裁き、正義を求め、急がれる。
義」（イザヤ16:5、強調）。

ですから、あわれ**みを得て、**困っている時に**助けてくれる恵みを見つける**ために、大胆に**恵みの御座**に来ようではありませんか（ヘブル4:16、強調）。

覆う油注がれたケルブ」として、ルシファーは神の慈悲の政府を守る2つの「覆う」、「守る」ケルブの1人でした。そのため、彼は宇宙全体の中で神に最も近い位置にいました-彼は保護者であり、愛と慈悲の神の法則を守る者でした。それは神の愛の法則によって永遠の命が可能になるからであり，神の法則こそが命を守るものだからです。神の律法は共存のための完璧なメカニズム、つまりシステムです。神の宇宙には死はありませんでした。ルシファーは自分が守っていたものに反抗することで、死を生み出したのです。

ルシファーの雇用は、アガペー愛の法則とすべて関係していました。アガペの愛は神の人格の本質であるので、神の国の最も重要な要素でもあります。律法の番人」は当然、天において最も重要な地位とみなされるでしょう。それゆえ、ルシファーの称号は、彼を宇宙の中で大きな力と影響力を持つ場所に昇格させたのです。

エゼキエルは、神ご自身がルシファーを神の聖なる山の上に置かれたと言っています。"エゼキエル　28:14）。神はルシファーに、宇宙の中で最も特権的な位置を与え、神の前にいる、まさにその目的のためにルシファーを創造されたのです。

王国は法律なしでは生き残れない。秩序が保たれるのは法によってです。天国でも同じです。神には法則があり、それによって宇宙の存続が左右されています。しかし、神の律法は完全な調和と秩序を創造します。神の秩序は、この世の秩序とは全く異なります。

これらの事実を考えると、ルシファーは神のアガペー愛の律法をよく知っていたと結論づけることができます。彼は律法の基礎が「あわれみ」であることを知っていました。彼はその完全な律法によって生きる能力を持って創造され、愛と憐れみが彼自身の性格を支配する唯一の原則でした。このように、ルシファーが大きな力と影響力を持つ立場にあったと言うとき、彼が反乱を起こす前は、彼の力と影響力はアガペー愛のパラメーターの範囲内でのみ行使されていたことを理解しなければなりません。

反乱を起こす前の彼は、神の愛の律法に従って、絶対的な喜びをもって、何の留保もなく生きていたと考えてよいでしょう。そのため，彼は自分自身の中で，神との間で，そして他のすべての被造物との間で，平和と調和を楽しんでいました。彼は柔和で謙遜で、しもべの心を持っていました。彼は他に何も知りませんでした。このようにして、彼は創造された日から、神の永遠の愛の原理を完全に受け入れ、それによって宇宙は支配されていました。しかし、アガペのおかげで、彼にはそれ以外の選択をする自由がありました。そしてある日、彼はそうしました。

その運命的な日、ルシファーは神とその律法に反旗を翻した。それは神の政府に対する戦争になった 彼がそれまで保護していた 慈悲の律法を標的にした戦争だ

そして、天で戦争が起こった。ミカエルとその天使たちはドラゴンと戦い、ドラゴンとその天使たちは戦った...（黙示録12:7）。

なぜですか？ルシファーは神の律法に対してどのような批判をすることができたのでしょうか？私たちは可能性のある答えを持っていますが、まず深く掘り下げて、彼が「自由の完全な律法」（ヤコブ1:25）に反抗したとき、彼の心の中で何が起こったのかを見てみましょう。

あなたは創造された日からあなたのやり方で完璧だった...

私たちは決定的な瞬間に到達しました。エゼキエルは、ルシファーはそのやり方が「完全」だったと言っています。結局のところ、彼は「完全の印章であり、知恵に満ち、美しさにおいて完全であった」（エゼキエル 28:12）のです。彼は神の至高の創造物でした。彼には全く欠点がなく、悪の傾向もありませんでした。

しかし、聖書によれば、「彼のやり方で完全」とはどういう意味でしょうか？ tâmıym-「完全な」という言葉は、「完全な」という意味で、「完全な」という意味です（ストロング辞典）。完全」とは、完全であること、完全であること、分割されていないことを意味します。また、「完全である」とは、道徳的に不完全であること、欠点や点のないこと、高潔であること、完全であること、真実であることを意味しています（『ストロングの辞書』）。これは、ルシファーが道徳的に純白で、黒い斑点が全くないことを意味しています。彼の中には、矛盾、反対の混合、二面性、二重性が全くありませんでした。彼は神のように純粋で神聖であった。

Derek-"ways"とは、「道、比喩的には、人生のコースや行動様式」（ストロング辞典）を意味します。"人生の道"と"行動様式"とは？それは自分の道徳的、倫理的な規範ではないのか？人の性格を決めるのは 道徳的な規範ではないのか？これは、ルシファーは道徳的に欠陥があったことを意味します。彼は、「完全な」「全体的な」単一の非二元論的な性格を持っていましたが、それは「完全な」「全体的な」単一の非二元論的な道徳的な法則に基づいています。

神の律法は「完全」で「聖」である。

しかし、自由の完全な律法に目を向け、それを継続し、聞く者を忘れるのではなく、業を行う者は、この者が行うことによって祝福される（ヤコブ1:25）。

それゆえ、律法は聖なるものであり、戒めは聖なるものであり、公正なものであり、善いものである（ローマ7:12）。

律法が「完全」で「聖なる」ものであるのは、それが純粋で、二元論的ではなく、腐敗しておらず、不変だからです。このように、ルシファーはどのような方法でも分裂していませんでした。彼は無条件の愛に突き動かされ、公平であった。神がそうであるように、彼はいつも同じで、どのような状況でも変わることはありませんでした。

このすべては、"不義が彼の中にあった"とき、ルシファーは神のようなものではなくなったことを意味しています。彼は「完全な」「全体的な」存在から、分断された、二重心の存在へと変化したのです。使徒ヤコブは、聖書がヘブライ語の旧約聖書であったため、ヘブライ語の言葉をよく知っていました。彼はまた、「完全」という言葉を「全体」という言葉に関連して使っていました。

> しかし、忍耐にはその完全な働きがあるように、あなたがたは完全で**完全**なものとなり、何も欠けていないようにしなさい。あなたがたの中に知恵を欠く者があるならば、すべての人に惜しみなく与え、また恐れずに与えてくださる神に求めさせなさい。しかし，何も揺らぐことなく，信仰をもって求めさせなさい。揺らぐ者は，風に流されて翻弄される海の波のようなものだからである。その人は、自分が主から何かを受けようと思ってはならない。**二重の心を持つ人は、すべての道において不安定です**（ヤコブ1:4-8 KJV、強調しています）。

罪を犯す前のルシファーの完全性は、彼が彼のすべての方法で「安定していた」と推測されます。しかし、彼は自分ではそうではありませんでした。彼をこのようにしたのは神のアガペー愛の法則でした。彼は創造主の中に見たものを反映しただけなのです。神は、創造主に見たものを反映させることのできる知的な存在を創造します。これはミカ書に記されている聖書の原則です。

> **すべての人はそれぞれの神の名のもとに歩む**が、私たちは永遠に永遠に私たちの神である主の名のもとに歩むのである（ミカ4:5、強調を加える）。

私たちを含むすべての知的な生き物は、神の概念に従って歩んでいます。私たちが神を理解しているかどうかは、他の人との関係を決定し、自分自身の判断にも影響を与えます。このことは、なぜ神が私たちが神のありのままの姿で神を知ることを強く求めておられるかを説明しています。

> これは永遠の命であり、**唯一の真の神であるあなたと、あなた**が遣わされたイエス・キリストを彼らが**知る**ためである（ヨハネ17:3、強調）。
>
> "わたしの民は愚かで、**わたしを知らない**。彼らは愚かな子供であり、理解力がない。彼らは悪を行うためには賢いが、善を行うためには知識がない」（エレミヤ4:22、強調）。
>
> 私たちは、神の子が来られ、私たちに理解を与えてくださったことを**知っ**ています。これこそが真の神であり、永遠の命である（第一ヨハネ5:20、強調追加）。

"全体"であるということは、"汚れのない"という意味でもあります。驚くべきことに、聖書の他の箇所では、この言葉は汚れのない、汚れのない生贄の子羊を表すために使われています。この子羊の場合、tâmıymは「真っ白で、黒い斑点のないものでなければならない」ということを意味しています。これは、神が私たちに何を示そうとされているかをよりよく理解するための比喩です。純白で真っ白な子羊は、来るべきメシヤを指し示す象徴であり、メシヤの純粋な性格を表していました。これがメシアのメッセージです。

これで、聖書の黒と白、光と闇の比喩がどこから来ているのかがわかるようになりました。モーセは書いています。

あなたがた**の子羊は傷のないものでなければならない**。

汚れのない」犠牲の小羊は、バプテスマのヨハネが言ったイエスの象徴でした。"見よ、世の罪を取り去る神の小羊を」（ヨハネ1:29）と言われました。

完全な」小羊として、イエス様は「完全な」「全体的な」性格をお持ちでした。イエス様には暗い部分が全くありませんでした。これは、イエス様が完全にアガペの愛とあわれみの律法に従って生きておられたことを意味し、一度もその律法から外れたり、逸脱したりすることがなかったことを意味します。イエス様の性格は、無条件で、公平で、分け隔てなく、混じりけのないものでした。イエス様のお人柄は、すべての方法において、単一で安定していました。

エゼキエルのルシフェルの記述は、神の子羊が完全な道を歩んでおられて、その道を歩んでおられる方で、神の子羊が汚れのない方であるように、ルシフェルもかつては汚れのない方であったことを暗示しています。このように、罪を犯す前のルシファーは、キリストと同じように純粋で分断されていない性格を持っていました。

悪は、神の政府に反抗したルシファーから始まった。堕落する前のルシファーは、その優秀さで際立っていたカバーリング・ケルブであった。**神は彼を、できるだけご自身に似せて、善良で美しくした**（『レビューとヘラルド』1901年9月24日号）{4BC 1163.1, emphasis added}。

転機となったのは、ルシファーがその完璧な状態から変化する原因となったのは「咎」でした。それが何であれ、不義はルシファーをキリストとは正反対の存在にさせました。ルシファーは、条件付きで、部分的で、分裂し、二重心になり、矛盾が入り混じって、その結果、すべての方法で不安定になりました。実際、オカルト主義者たちはルシファーのことを、金属である水銀にちなんで「メルクリウス（錬金術の精霊）」と呼んでいますが、これはまさにこの金属が不安定で不安定であることに由来しています。メルクリウスについて、有名な精神科医であり錬金術師であるカール・ユングは、次のように述べています。"彼は善人には善であり　悪人には悪である"これは状況に応じて変化する不安定な性格の表れです。これがルシファーの姿である。"不義が彼の中に見出された"

対照的に、イエスは善人には善であり、悪人には善である。彼は山の説教の中でこのことを述べています。

"あなたがたは、『隣人を愛し、敵を憎みなさい』と言われたことを聞いたことがあるだろう。しかし、あなたがたに言います、あなたがたの敵を愛し、あなたがたを呪う者を祝福し、あなたがたを憎む者に善い行いをし、あなたがたを悪用し迫害する者のために祈りなさい、そうすれば、あなたがたは天の父の子となります。もしあなたがたが自分を愛する者を愛するならば、あなたがたにはどんな報いがあるでしょうか。徴税人も同じことをしないのか。また、あなたがたが兄弟たちにだけ挨拶をするならば、他の人よりも何をしているのか。徴税人でさえそうしないのか。それゆえ、あなたがたは、天の父が完全であるように、完全でなければならない」（マタイ5:43-48）。

要するに、イエス様は次のように言われています：過去には、あなたは条件付きで部分的になるように言われていました：隣人を愛し、敵を憎み、「私たちは敵に対抗する」という観点から考えなさい。しかし、もしあなたが神が完全であるように完全でありたいのなら、善人にも悪人にも善良であり、敵にも味方にも善良でありなさい。無条件でありなさい。公平でありなさい。これが神の在り方だからです。

これが聖書の文脈から見た「完全」「全体」の意味です。神は善から悪へ、あるいは悪から善へと変わることはありません。神はいつでも、どのような状況でも善い方です。そして、ルシファーが神から逸脱したのはここであり、彼は二重人格、二重心を発達させ、その存在全体を汚してしまったのです。

ルシファーがどのようにしてイヴを欺いたのかを調べれば、単一性と二重性という正確なテーマが働いていることがわかります。聖書は、蛇がどのようにしてイヴを欺いたかを具体的に教えています。

しかし、蛇がその狡猾さでエバを欺いたように、あなたがたの心がキリストにある単純さから堕落してしまうことを恐れます（第二コリント11：3）。

この節から何を学ぶことができるでしょうか？まず、蛇がイヴを欺いたこと。次に、蛇は「狡猾さ」、つまり巧妙さ、狡猾さによってエバを欺いたことです。ヘビの狡猾さは「詭弁」と表現するのが最適です。

イブは、蛇の形をした悪魔の**嘘つきの詭弁に屈**しました。彼女はその実を食べましたが、すぐには害はありませんでした{Con 14.3, emphasis added}。

…人は騙され、**サタンの詭弁**によって心が暗くなった。彼は神の愛の高さと深さを知りませんでした。彼にとっては、神の愛を知ることに希望がありました。神の人柄を見ることによって、彼は神に引き戻されるかもしれないのです{DA 761.5, emphasis added}。

"詭弁"というのは興味深い言葉です。それはギリシャ語の根源である"*ソフィア*"から来ているからです。定義すると、詭弁とは、誤った知恵に基づいた、誤った、誤った、欺瞞的な推論のことです。サタンの知恵とは、エデンの園にある「善悪の知識の木」にある知識のことです。イブはこの木が「人を賢くするのに望ましい」と見たとき、その実を取って食べました（創世記3:6）。

聖書の中では、「大いなる知識」という言葉は、ヘブライ語では「知恵」という言葉と平行して使われています。

ヨブは知識を持たずに話し、その言葉は知恵を持たない」（ヨブ34:35）。

主を恐れることは知識の始まりであるが、愚か者は知恵と教えを軽蔑する（箴言1:7）。

主は知恵を与えられ，その口からは知識と知識が出てくる。
理解（箴言2:6 KJV）。

さて、私たちは聖書から、アダムとエバがこの木を食べて以来、サタンの「知恵」が世界を支配してきたことを知っています。したがって、いわゆる従来の「世の知恵」は、彼と彼の律法を代表する彼の木から来ているに違いありません。ここに欺瞞の可能性があることがわかりますか？誰が「知恵」そのものに疑問を持つでしょうか？

サタンは神とその愛を拒絶しました。そして、私たちが採用した彼の新しい「知恵」は、創造主の知恵である無限の無条件の愛を、私たちの視界から遮ってしまいました。彼の詭弁に埋め込まれた欺瞞は、唯一の命の源である創造主から私たちを引き離し、これは霊的な死です。この霊的な死は、私たちが肉体的な死を迎えることを運命づけました。霊的な死が先に来て、肉体的な死は霊的な死の結果であり、結果なのです。しかし、私たちがサタンの知恵によって生きてきたことは事実ですが、私たちにとっては、神の知恵である神の愛の完全さを知らなかったので、まだ希望があったのです。同じように、霊的に真理に生まれ変わるならば、肉体的な命はその後に続きます。

そして、あなたがたは、あなたがたの罪**と、あなたがたの肉の未割礼で死んでいたが、神**は、あなたがたのすべての罪を赦して、神と共に生かされたのである（コロサイ2:13、強調しています）。

私たちは、知らないことを受け入れたり、拒否したりすることはできません。私たちにとっては、「神の愛を知ること、神のあわれみと赦しを知ることにある希望」があり、それがイエス様が私たちに与えるために来られたものでした。御子イエス・キリストという人にある神の愛を見ることによって，私たちは"神に引き戻される"という希望がありました。サタンの「知恵」は全く知恵ではなく、神の愛こそが宇宙の生命を持続させるための究極の知恵であることを知ることができるという希望がありました。

先に述べたように、聖書によれば、神を知ることは非常に重要です。イエス様は、永遠の命そのものが、神を知る真の知識の中に組み込まれていることを示唆しているように見えました。もし私たちが神を知っていれば、私たちもまた、永遠の命を持っていることを知ることになります。イエス様の言葉をよく考えてみてください。

> **これは永遠の命であり、唯一の真の神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知るためのものです**。私は地上であなたに栄光を与えました。私は、あなたが私に与えてくださった仕事を終えました（ヨハネ17:3-4、強調しています）。
>
> モーセが荒野で蛇を持ち上げたように、人の子も持ち上げられなければなりません。それは、神がご自分のひとり子をお与えになったので、神を信じる者は誰でも、滅びることなく、永遠のいのちを得ることができるからです（ヨハネ3:14-16）。
>
> それは、わたしを遣わしてくださった父が、わたしに命令を与えてくださったからです。ですから、わたしが話すことは何でも、父がわたしに言われたように、わたしも話すのです」（ヨハネ12:49-50、強調）。

神を知るということは、私たちが永遠の命を持っていることを知るということです。イエスは、神の「命令」、私たちに対する神の意志が「永遠のいのち」であることを知っていました。

第二コリント11:3に戻りますが、この箇所から学ぶことができる第二のことは、サタンがどのようにしてエバを欺いたかということです。

> しかし、蛇がその狡猾さでエバを欺いたように、あなたがたの心がキリストにある単純さから堕落してしまうことを恐れます（第二コリント11：3）。

サタンはイヴの心を「堕落させた」のです。これは、彼女の心が最初は純粋だったことを意味していますが、蛇は彼女の心をどうにかして再配線することができたのです。サタンがしたことは、彼女の心を「狡猾さ」という言葉で表現された嘘で再プログラムしたということです。堕落した」という言葉は、彼が純粋だったものを不純なものに変えたことを示唆しています（読者が思い起こせば、彼は堕落した原理を持っています）。

しかし、彼は何を堕落させたのでしょうか？彼は彼女のキリストに対する見方を堕落させたのです。彼はキリストに対する彼女の理解を、その正しい、あるいは元の形から、改変された、堕落した形、つまり偽りの形に変えることに成功したのです。このようにして、彼女の神の性質の概念を変えることによって、彼は彼女自身の性質も変えてしまいました。彼女はもはや神の姿ではなく、サタンの姿で作られたのです。パウロが恐れていたのは、サタンがコリントの人々にも、そして最終的には私たちにもこのようなことをするのではないかということでした。

少し理由を考えてみましょう。地球を創造したのはキリストでした。キリストはアダムとエバに「昼間の涼しいうちに」会いに来られた方でした（創世記3:8）。キリストは毎日、顔を合わせてアダムとエバに会い、その出会いがどれほど素晴らしいものであったかを想像することしかできません。では、蛇はどのような方法で、イヴにキリストについて違った考えを持たせたのでしょうか。彼女の心が「キリストにある単純さから」堕落したのは、具体的にどのようなことを意味していたのでしょうか？

ギリシャ語のハプロテスは"シンプル"という意味で、"シングルネス"を意味しています。実際、「単一性」がこの言葉の主な意味です。このように、蛇に騙される前のエバは、イエス・キリストを本当の意味で「単一性」を持ったお方として見ていましたが、蛇に騙されてからは、キリストをそのように見なくなりました。彼女の心は、イエス・キリストを「単一性」とは正反対のものだと思うように堕落していました。彼女の心の中では、キリストは"斑点"となり、"汚れ"となり、"二重心"となっていました。

したがって、もしルシファーが不義が彼の中に見出されたときに、「全体」や「全体」であることや、性格の「単一性」を持つことを止めてしまったならば、不義は分裂した、分裂した原理でなければなりません。それは二元論、黒と白の混合、光と闇の混ざり合い、つまり二重心を含んでいて、その原因となるものでなければなりません。

驚くべきことではありませんが、この正確な反対の混合物は園にあり、善悪の知識の木に具現化されています。ここには、黒と白、あるいは光と闇のような反対のものが混ざり合った二元論が含まれていて、その原因となっています。エゼキエルがエデンの園を直接指し示しているのは、そこでルシファーに何が起こったのか、そして彼が神の人格と律法との戦いの中で何をしたのかを知ることができるからです。

これまで見てきたすべてのことを考えると、不義は善悪の知識の木に代表される何かでなければなりません。この「何か」は、ルシファーが「完全」で「完全」であった時に持っていた「単一性」を失う原因となったものです。この"何か"は、彼が天国と天国の原則から落ちた原因となったものである。"アガペー"、"シンプルさ"、"単一性"だけが存在する天国。

善悪の知識の木は、特定の何かを表す必要があり、それが何であれ、それはルシファーの原罪でなければなりません。それは反対の二元性が含まれているので、蛇が "知恵"として売り歩いた善と悪のこの知識は、一定ではありません、それはアガペとして安定していないので、それは前後に良いと悪の間で揺れて、我々は後で詳細にこの話をします。

しかし、神はアガペーの愛であり、アガペーは不変であり、不変であり、堕落しないので、神は善と悪の間を行ったり来たりすることができません。パウロはローマ人への手紙の中で、神の無修正性について述べています。

> **彼らは自分たちが賢いと自称して、愚か者となり、堕落していない神の**栄光を、堕落した**人間**、鳥、四つ足の獣、這うようなものに似せた像に変えてしまった（ローマ1:22-23、強調）。

しかし、この二重性の木から食べた後、アダムとエバは、神を正確にそれと同じように認識するようになりました。それが彼らが神から隠れた理由です。神を恐れていたからです。彼らは今、彼を善と悪の神として、二重の性格を持っていると見ていました。

すべての親は、彼らが自分の小さな、かわいい、貴重な子供を罰した最初の時を覚えているに違いありません。その疑いもなく、信頼していた赤ちゃんは、親の威嚇的な口調、態度、暴力的な行動に完全に驚きを持って取られたに違いありません。二度目に親がその子を罰するために来たとき、その子はどうなるのでしょうか？彼/彼女は逃げてしまうのでしょうか、それとも恐怖におののくのでしょうか？それまで愛情を注いでいた親子の関係はどうなるのでしょうか。これがアダムとエバに起こったことです。神は彼らを罰してはいませんでしたが、禁断の木を食べたために、彼らはサタンの影響力に身をさらし、サタンは「善悪の知識」に組み込まれた原則を通して、彼らの神に対する考え方や見方を堕落させてしまいました。彼らは自動的に神が彼らを罰するために来ていると仮定した。

ルシファーは彼の純粋さを失った 咎の二元論のために 彼の内在性をこれは、彼の反乱で何が起こったのかを理解する上で基礎となるものです。彼の中に見出された」不義は、「全体的な」質、つまり、タムイムという言葉が暗示しているように、イエスがこの地上での生と死の中で明らかにされた、人格の単一性からの逸脱を伴いました。不義理は、ルシファーを比喩的な「傷」や「斑点」に満ちた存在へと変貌させました。視覚的な補助として、彼は今では、黒と白が混ざった斑点のある子羊のように見えました。

では、善悪の知識とは何か？これを理由にしてみましょう。罪の前にルシファーの中にあったものは、アガペー愛の神の道徳律だった場合 - ルシファーは "彼の方法で完璧だった"と "方法"は "人生のコースや行動様式"を意味し、これは彼を完璧にしていたものである - 彼が不完全になる原因となったものは、別の道徳律、彼は内側に "内"に "分割"された道徳律でなければなりませんでした。不義とは何なのでしょうか？ルシファーが考案した道徳律、つまり善悪の道徳律なのです。

これが最初の問題であり、天国での戦争の根本的な原因でした。ルシファーが神に反旗を翻したのは、自分は神よりも優れた原則を持っていると感じたからです-彼は自分の新しい、善と悪の二重の道徳律法が、アガペー愛の神の単一の道徳律法よりも優れていると感じたのです。私たちが点をつなぎ続けると、このことはますます明らかになるでしょう。

サタンは反逆した時、天に「原則」を持っていました。これらの原理は、彼が地上で使うのと同じ原理です。

> **天国でのサタンの働きの原理は、この世でサタンが人間の工作員を通して働くのと同じ原理です**。これらの腐敗する**原理によって、**地上のあらゆる帝国と教会はますます腐敗してきました。サータンはこれらの原理を働かせることによって、最初から最後まで全世界を欺き、堕落させているのです。彼は、もともと天の宇宙で始まったこの同じ方針の働きを続けている**。彼は、ノアの時代に世界を堕落させた彼の暴力で全世界を活気づけています**{4BC 1163.8, emphasis added}。

天国で働くサタンの原理」とは何か？エゼキエルはエデンの園を指し示しています。ルシファーの原理である「善悪の知識」の定式化は、天で始まりました。アダムとエバが善悪の知識の木の実を食べることを選んだとき、彼の原理は地上で実行されました。彼らの選択は、ルシファーに、彼の堕落した原則に基づいて地上に政府を樹立する権利を与えたのです。

彼の原則を特徴づけるものは何ですか？それは「堕落している」ということであり、それは不純で、混合した、二重のものであることを意味します。サタンが"欺く"のは、これらの"腐敗した"原理の"働きかけ"によるものです。彼の堕落した原理は非常に欺瞞的で、「地上のすべての帝国」と「教会」さえも、言うまでもなく、天使の三分の一をも支配しています。このように、サタンは彼らを通して全世界を欺いているのです。

> それで、**全世界を欺く**悪魔とサタンと呼ばれる、昔の大蛇が追い出されたのです（黙示録12:9、強調しています）。

サタンは、アダムとエバ以来、"最初から最後まで全世界"を欺いてきました。彼の仕事は長い間潜入して行われていたので、マスクが外されることになっています。

6. 異質性

君は創造された日から 不公平が生じるまで 君のやり方は完璧だった...

ルシファーは完璧の総体だったが...ここで物事が変わり始めた。彼は完璧だった何かが何らかの形で彼の中で 湧き上がるようになったそれは"不義"でしたこの言葉から、少なくとも二つのことが結論づけられます。1.1.ルシファーは、一度不義が彼の中に見出されると、彼の完全性、完全性を失った。2.彼がその完全性と性格の内在性を失う原因となったのは、不正そのものでした。ですから、ここでは咎が犯人です。

我々は完全にルシファーに何が起こったのかを探る前に、我々は彼の全体の没落は、この特定の言葉に収束することを認識する必要があります。不公平は彼の落下の理由であり、したがって、それは天国での戦争の理由です。

不義とは何かをどのようにして知ることができるのでしょうか？まず、いくつかの質問をすることから始めましょう。イエス様はそれをどのように使われたのでしょうか？聖書には他にどのようなことが書かれているのでしょうか？もしこの言葉を聖書的に理解することができれば、私たちはルシファーの反逆をより深く理解し、善悪の知識の木の真の意味を理解することができるでしょう。

INIQUITY-HEBREW

ストロング辞典によると、旧約聖書には「咎」と訳されたヘブライ語の単語が10個あります。ここでは、そのうちの二つだけを列挙します。

‘evel;または‘âvel;および（女性の）‘avlâh;または‘ôwlâh;または‘ôlâh; (道徳的な)悪:-。
不義、変態、不正、不義、不義。
‘âvôn; 変態性、すなわち（道徳的な）悪：過ち、不義、いたずら、罰。
咎、罪。

ヘブライ語の"エベル"は英語の"悪"と非常によく似ています。完全なる言葉の研究では 咎を次のように定義しています

不公平、不義を意味する男性単数名詞。この単語は
とは、正しいやり方から逸脱したものを指します。それは
ぞく
正義のような言葉には神は関知しない
不正義（完全単語学習）。

ヘブライ語の１０個の言葉はすべて、「咎」を道徳の倒錯という文脈で表しています。これらの言葉を総合すると、不義は「道徳的な悪」、「道徳的な歪み」、「道徳的な変態」と定義され、「不都合なこと」、「罰」、「悪事」、「不義」、「違反」、「非難」、「妨害」と定義されます。

この言葉には「曲がっている」という要素もあります。これはイエス様がまっすぐにしてくださる曲がった状態です。バプテスマのヨハネは、まさにそのようなことをする人として、救い主についてのイザヤの預言を引用しました。

> すべての谷は満たされ、すべての山と丘は低くされ、曲がった場所はまっすぐにされ、荒れた道は滑らかにされ、すべての肉は主の救いを見る（ルカ3:5-6）。

イエス様は、ルシファーが曲がっていたものをすべて元の正しい位置に戻してくださいます。そうすれば、私たちは神の「救いを見る」ことができるようになるのです。

咎」を表す他の言葉の中には、「無」と「無存在」という要素も含まれています。咎によって欺かれた者は、滅びの道を歩むことになり、永遠の死、完全な消滅、無存在に陥るからです。聖書はこれを「滅び」と呼び、この終わりに苦しむ者を「滅びの子」と呼んでいます（イエスを裏切った使徒ユダの場合）。このことについては、近々出版されるキリストの十字架についての別の本で詳しく説明されます。

不公平とは，「正しいやり方」からの逸脱です。私たちは「正しい行いの方法」とは神の方法であり、私たちの方法や世間の方法ではなく、どちらもサタンの方法に基づいていると言ってもよいでしょう。神のやり方とは、正しいやり方です。そのため、不義は義の外にあることを行い、神と直接対立します。不義は、神様の義と正義とは全く対立しています。実際、聖書はしばしば「不義」という言葉を「不正」という言葉と同じように使っています。次の節に注目してください。神といえば、彼らは言う。

> 彼は岩であり、彼の仕事は完全であり、すべての彼の道は正義であり、真理の神であり、不正のない[evel]のために、義とまっすぐな彼です（申命記32:4、強調）。

> あなたがたの先祖たちは、わたしから遠く離れ、偶像に従い、偶像崇拝者となってしまったのです。

> だから、あなたがた理解ある者たちよ、わたしの言うことを聞いてください。

まず第一に、これらの節は明らかに不正と正義の問題を結びつけています。これらの聖句から、実際には不正であり、それだけではなく、まさに「邪悪」なものである「正義」の種類があることも理解できます。また、神様の中に不正や不正があると思わないように、神様は私たちに注意を促しておられるような印象を受けます。神は私たちに「神の道はすべて正義」であり、神には「不正」はないと言っておられます。また，主は「悪を行う」ことも「不義を行う」こともないことを知っていることを確認しています。

なぜ神は自分を咎から遠ざける必要があるのでしょうか？なぜ神は、自分が咎を犯していると思われないようにするようにと言われるのでしょうか？この必要性があるのは、私たちがこのことについて混乱していたからであり、また、私たちが神を不義の神であると思い込んでいたからです。咎とは何かを正確に理解すれば、私たちがどのようにしてそのようなことをしてきたのかが分かるでしょう。

もし、神の義に沿った神の正義が、不義である咎（不義の正義）と直接対立するのであれば、私たちは、神の正義を誤解して、咎に沿った正義のブランドのように見せかけないようにしなければなりません。このことは、後に「正義」という言葉を論じるときに明らかになります。

興味深いことに、不義は「偏見」や「賄賂を取る」とも関連しています。

> わたしたちの神である主との間には不義はなく、偏見も賄賂もないからです」（第二歴代誌19:7）。

進んでいくと、不正と賄賂がどのように関係しているかが明らかになってきます。一度だけ、イエス様の命を奪おうとしていたファリサイ派の人々と話していた時、イエス様は言われました。

> あなたは悪魔である父親のものであり、あなたが望む父親の願望である。**彼は初めから人殺しであり、真理**に立っていないのは、彼の中に真理がないからです。彼が嘘を語るときは、自分の資力から語るのであって、彼は嘘つきであり、その父であるからである（ヨハネ8:44、強調追加）。

イエスはどのような「始まり」を指しておられたのでしょうか？ルシファーの心をつかんだのは、最初の反抗的な考えではなかったのでしょうか。もしそうだとしたら、まだ誰も殺していないのに、どうして彼は人殺しになったのでしょうか？それは彼の中に見出された不義には死の原理、死に向かう人を導く道徳的な法則が埋め込まれていたので、彼は殺人者だったのでしょうか？

イニシテイ-ギリシャ

新約聖書には3つのギリシャ語で "咎"を表す言葉がありますそれは、「罪」を意味するparanomia、「不正」を意味するadikia、そして「違法」を意味するanomiaです。ヘブライ語と同じように、これらのギリシャ語の単語は、道徳と同様に法律の文脈で存在します。さらに、「無法」、「法の違反」、「違法」、「法の侵害」、「不正」、「法への反対」、「道徳的な不正」を意味しています。

これらの定義を考えるとき、私たちは神のいのちの律法、アガペの愛の律法と関連して理解しなければなりません。例えば、無法とは「律法の欠如」ではなく、神の律法の欠如を意味します。罪の人、無法者（テサロニケ2:9）は、神の律法を取り払うのではなく、自分の目的に合わせて律法を変えてしまうのです。

同じように、不義は偽者であり、新しい律法であり、神の律法のスピンオフであり、それ自体が本物であると宣伝しています。そのため、私たちの心の中では神の律法が上書きされ、その結果、私たちは真の律法に背くことになります。次の節を考えてみましょう。

> 律法によって悪を企てる咎の御座が、あなたと交わることができるでしょうか（詩篇94:20）。

この節については後ほど詳しく説明しますが、ここでの考えは、不義は「法によって悪を仕組む」ということです。不義は「正義」を装った法の中に組み込まれた不正であり、それによって私たちを欺いているのです。

不公平-イエスによって定義されたもの

パウロは、イエス様が神からの知恵であると述べています。

> しかし、あなたがたはキリスト・イエスにあって、神からの知恵となってくださった方です（1コリント1:30）。

イエスは、「不義」と呼ばれるこの非常に基本的な概念について、私たちに大きな洞察を与えてくれます。イエスはこの言葉をどのように使い、定義したのでしょうか？

イエス様が「咎」という言葉を使われたのは、以下の４回だけです。これらの節を読み進めていく中で、「不義」を生み出したのはルシファーであることを心に留めておいてください。不義とは、彼が神の道徳的な律法であるアガペー愛から目を背けたときに、彼の心の中に生じた元々の考えでした。

a. 偽りの預言者-マタイ7:15-23

イエスが最初に"不義"という言葉を使ったのは、弟子たちに"偽預言者に気をつけろ"と警告した時でした。

羊の皮を被ってあなたがたのところに来る偽預言者に気をつけなさい。あなたがたはその実によって彼らを知ることになる。人はとげの茂みからぶどうを採るのか、あざみからいちじくを採るのか。そうであっても、良い木には良い実がなるが、悪い木には悪い実がなる。良い木は悪い実を結ぶことはできないし，悪い木は良い実を結ぶこともできない。良い実を結ばない木はすべて切り倒されて火の中に投げ込まれる。だから、あなたがたはその実によって彼らを知ることになる。わたしに向かって「主よ、主よ」と言う者は誰でも天の国に入るのではなく、天にいるわたしの父の御心を行う者である。その日、多くの者がわたしに言うであろう、『主よ、主よ、わたしたちはあなたの御名によって預言し、あなたの御名によって悪霊を追い出し、あなたの御名によって多くの不思議を行ったことがありませんか』。わたしはあなたがた**を知らなかった。あなたがたはわたしから離れなさい**。

これらの節は、咎について何を語っているのでしょうか？第一に、不義とは、偽預言者たちの道徳的な律法であることがわかります。彼らは外見は良いように見えて、「羊の皮を被った」状態でやってくるので、私たちは彼らに注意しなければなりません。しかし、内部ではオオカミのように獰猛で凶暴です。私たちはすでに、彼らが正反対の二面性によって行動していることを見ています。

すぐに分かるように、不公平は暴力と密接に絡み合っています。最終的に偽預言者は暴力的な行動によって彼らの正体を明らかにします。不義の働き者」について次のように述べています。

現代の聖化を主張する人々は，自慢げに前に出てきて，「主よ，主よ，あなたはわたしたちを知らないのですか。わたしたちはあなたの名によって預言し，あなたの名によって悪魔を追い出し，あなたの名によって多くのすばらしいわざを行ったことがありますか。ここで説明されている人々は、自分たちの行いのすべてにイエスを織り込んでいるかのように見せかけて、気取った主張をしていますが、現代の聖潔を主張しながらも、**神の律法と対立している**人々の代表にふさわしいのです。キリストは彼らを「不義の働き者」と呼んでいます。なぜなら、彼らは欺く者であり、彼ら**の性格の奇形と、邪悪な心の内なる邪悪さを隠すために、義の衣を着ている**からです。サタンは最後の日に降りてきて、滅びる者の中にある不義のすべての欺瞞に満ちた働きをする。サタンの威厳は、偽預言者の目の前で、人の目の前で、自分が本当にキリストご自身であると主張して、奇跡を起こします。ですから、**神の偉大な力を持っていると主張する者は、エホバの律法という偉大な検出器によってのみ見分けることができます**。主は、もしそれが可能であれば、彼らはまさに選民を欺くだろうと言われています。**羊の衣はとても本物のようで、本物のようで、狼は、神の偉大な道徳的基準に行き、そこで彼らがエホバの律法の違反者であることを見つけるときにのみ、見分けることができません**（『レヴューとヘラルド』1885年8月25日号） - {5BC 1087.8, emphasis added}。

繰り返しになりますが、この引用文を読んで私たちが飛びつくのは、「不義の働き人」が二面性を持っているという事実です。彼らは聖化を主張していますが、「神の律法と戦っている」のです。彼らは「義の衣を着て、自分の性格の奇形、内なる邪悪な心の邪悪さを隠している」のです。彼らは混ざり合っていて、外見は羊のように見えますが、内面は猛獣のようなオオカミです。彼らは不純であり，堕落しています。それは「エホバの律法という偉大な探知機によってのみ見分けることができる」ということです。神の偉大な道徳的基準」に従うことによってのみ、彼らが神のものであるかどうかを知ることができます。もしわたしたちが「エホバの律法に違反していることが分かったら」，彼らは不義に満ちており，間違いなく偽預言者なのです。

イエス様は、これらの偽預言者たちは、自分たちが神を礼拝し、神の御心を行っていると信じているので、自分たち自身が欺かれていると言われていますが、実際には悪魔の御心を行っていて、悪魔に力を与えられているのです。彼らはどのようにしてこのように騙されるようになったのでしょうか？

イエスのたとえ話に出てくる偽預言者たちは、自分たちの行いそのものに騙されているのではないでしょうか？結局のところ、彼らは預言し、悪魔を追い出し、素晴らしい行いをしているのです。これらの行いは「良いこと」ではないのでしょうか？しかし、イエスは明らかにされています：これらの業は、真の神の名の下に行われたものではありません。内面では、これらの偽預言者たちは羊ではなく、猛獣のような狼であり、神が彼らの奇跡の背後にいるということはあり得ないのです。

イエス様が私たちを堕落した木を指し示しているのはとても興味深いことです。

> すべての良い木は良い実を結ぶが、悪い**木は悪い実を結ぶ**。良い木は悪い実を結ぶことができず、悪い木は**良い実を結ぶことができない**。良い実を結ばない木はすべて切り倒され、火の中に投げ込まれる。だから、その実によってあなたがたは彼らを知ることになる（マタイによる福音書7:17-19、強調）。

エデンの園の真ん中にある二本の木のことを考えてみてください。そこには良い木がありました。この木は、良い実を結び、生命の木となりました。このように、それは良い木でした。申命記30:15は、私たちのために、善と悪が何であるかを定義しています。

> 見よ！私は今日、あなたがたの前に**生と善と死と悪を**定めた。

この定義によると、生は善に等しく、死は悪に等しい。もう一つの木、「善悪の知識の木」は、「善と悪の両方の知識の木」であるため、謎に包まれています。イエス様と申命記の基準に従えば、この木は悪い実を結び、死をもたらすので、良い木にはなりません。しかし、もしこの木が悪い木だとしたら、どのようにして善と悪の両方を持っているのでしょうか？"悪い木は良い実を結ばない"　ここで何が起こっているのでしょうか？この難問を解決するにはどうすればいいのでしょうか？

答えは、この木は堕落した木です。それゆえ、この木の主張は偽りなのです。この木は羊の皮を被った狼です。もしこの木が堕落しているならば、その実も堕落しています。この木は善と悪の混合物であるが、善のふりをしているのは嘘である。この木は逆の二面性、つまり「二重心」を持っていて、キリストの特徴である単一性を持っていません。このように、偽預言者の根本的な問題は、彼らがこの木と同じように二元論的であるということです。彼らの道徳的な律法は神の純粋なアガペー愛の律法ではありません。善悪を知る木が腐敗しているように、彼らの道徳は腐敗しています。この腐敗した道徳はイエスとの共通点がないので、イエスとこの木との結合は絶対に不可能なのです。

B.麦とタレス

次にイエスが「咎」という言葉を使うのは、マタイ13:24-30です。これは、麦とタレのたとえ話です。見かけ上は麦に似ているが、麦と一緒に生えているのは、敵である悪魔によって蒔かれたタレである。

> もう一つの譬えをかれは彼らに示して言った。"天の国は、自分の畑に良い種を蒔いた人のようなものである。しかし、人が眠っている間に、その敵が来て、麦の中にタレを蒔いて、自分の道を行った。しかし、穀物が芽を出して実を結ぶと、その麦の中には、さざれも出てきた。そこで、主人のしもべたちが来て、彼に言った、『あなたの畑に良い種を蒔かなかったのですか。どうしてタネが出てくるのですか」と言った。彼は彼らに言った『敵の仕業です』。召使いたちは彼に言った，『では，私たちが行って集めてきて欲しいのですか』と。しかし、彼は言った、『いいえ、あなたがたわらを集めている間に、あなたがたわらと一緒に小麦も根こそぎにしてしまわないように。収穫の時には刈り入れ人たちに言ってやる、『まず、たわらを集めて束にして燃やしなさい。

イエス様は36〜43節でこのたとえを説明されています。

> イエスは大勢を追い払って家に入られた。弟子たちがイエスのところに来て言った，「畑のいずしのたとえを説明してください」。イエスは答えて言われた。"良い種を蒔く者は人の子である。畑とはこの世のことであり，良い種は王国の子であるが，いずしは邪悪な者の子である。それらを蒔いた敵は悪魔であり、収穫は時代の終わりであり、刈り取る者は天使である。それゆえ、たわらが集められて火で焼かれるように、この時代の終わりにも同じことが起こるのです。人の子は御使いを遣わされ、御国からすべての不快なものと、無法を行う者を集めて火の炉に投げ込む。その時、泣き叫ぶ者と歯をゆする者が出てくる。その時、義人は父の国で太陽のように輝く。聞く耳を持っている者は、聞くことができる」（マタイ13:36-43）。

良い種を蒔く者は人の子です。イエス様が地上におられた時、どのような種を蒔かれたのでしょうか？イエスは永遠の福音と永遠の御父に関する良い知らせの種を蒔かれました。これは，イエスの御父の唯一無二の人格，すなわち，すべての人間に対する永遠の無条件の公平な愛についての真理でした。

イエスは、ルシファーが地面に投げつけた律法を拡大するために来られました。イエスは、不義の王国が私たちに押し付けた死を滅ぼすために来られたのです。イエスが蒔いた「種」は、神が愛と恵みとあわれみであり、私たちが神の愛する子供であることを知らせるものです。

羊の皮を被った狼のように、さわらは真実のように見えるが、真実ではない。ここにも欺瞞があります。見物人もタレも騙されているのです。私たちは両者を見分けることができず、イエス様は両者を分けようとしないようにと警告されています。私たちは、神の真の礼拝者と偽りの礼拝者を見分けることができません。やがて、神の国では、「収穫」の時、つまり「時代の終わり」に、不快なことや「不義」を行うすべてのものが根こそぎ排除されます。

b. 律法学者とファリサイ派

イエス様が三度目に咎という言葉を使われたのは、マタイ書の二十三章です。これは、外見は美しく見えても、中は「死んだ人の骨でいっぱい」で、すべてが不潔であったファリサイ派の人々に対する、イエスの有名な叱責です。これは、善悪の知識の木に代表されるサタンの死の原理によって引き起こされた死を指しています。

> それからイエスは大群衆と弟子たちに語って言われた。"律法学者とパリサイ人はモーセの座に座っている。だから、彼らがあなたがたに守るように言うことは何でも、守って行うが、彼らの行いにしたがってはならない。彼らは重い重荷を縛って、背負いにくくし、人の肩にのせているからである。しかしかれらの業はすべて人に見られるように行う。かれらは，その植物を広くし，その衣の縁を広げている。祭日の最高の場所、会堂の最高の席、市場での挨拶、そして人から「ラビ、ラビ」と呼ばれるのが好きなのです。しかし、あなたがたは「ラビ、ラビ」と呼ばれてはならない。地上の者を自分の父と呼んではならない。また、教師と呼ばれてはならない。しかし、あなたがたの中で最も偉い者は、あなたがたのしもべとなる。また、自分を高ぶる者はへりくだり、へりくだる者は高ぶる」（マタイ23:1-12）。

イエスは、彼らの問題の根源である不義を正確に指摘しています。

> "災いなるかな、律法学者とファリサイ派の偽善者たちよ。あなたがたは白塗りの墓のようなもので、外見は美しく見えるが、中は死んだ人の骨とすべての汚れに満ちているからだ。あなたがたもまた、外見は人には正しく見えるが、中は偽善と無法に満ちている」[INIQUITY, KJV]（マタイによる福音書23:27-28、強調）。

Strong's Concordanceによると、hupokritēsは"仮定のキャラクター（ステージプレーヤー）の下での俳優、つまり（比喩的に）広め役"である。偽善者は偽りの、二面性のある人です。彼は、彼がそうではない何かであるように見え、この理由のために彼は信頼することはできません。

いわゆる神の従者と呼ばれるこれらの人々には、彼らの本当の姿を明らかにする二つの特徴があります。

パリサイ人が人々に課した重荷とは何だったのでしょうか。彼らが主張していた多くの条件は、人が神の好意を得る前に満たされなければならないというものではなかったのでしょうか？彼らは、本来ならば救いにつながると思われる働きのシステムを推進していました。これらの不義の業は、サタンが何千年にもわたって世界を抑圧してきたのと同じ教義です。イザヤ書に書かれているように、サタンは主な抑圧者なのです。

> …何と抑圧者が止まり、黄金の都が止まったのか！主は悪人の杖（律法）を破り、支配者の笏（律法）を破り主は悪しき者の杖（律法）と支配者の笏（律法）を折られた。(イザヤ14:4-6、強調)。

対照的に、イエス様の重荷、イエス様の愛は軽く、重くはありません。

> 働いている者、重荷を背負っている者は皆、わたしのところに来なさい。わたしのくびきを受けて、わたしから学びなさい。わたしは心がやさしく、心が低く、そうすれば、あなたがたの魂に安らぎを見いだすことができる。わたしのくびきは簡単で、わたしの重荷は軽いからです（マタイ11:28-30）。

偽りの教師たちが行うことはすべて、"人に見られるために"というプライドの精神で行われています。これは、ルシファーの中で生じた不正に特有の特徴であり、不正の「賄賂」の要素と関連しています。このことについては、後ほど詳しく説明します。

これらの偽りの教師たちは、ただ表示するのが好きで、教師や霊的指導者と呼ばれるのが好きなのです。彼らは、自分たちの名前が一般的なものであること、自分たちの支持者がいるという事実に喜びを感じています。彼らは自分たちの善行や知恵に注目し、知恵の本当の源であるイエス・キリスト、「道であり、真理であり、いのちである」（ヨハネ14:6）を人々に示す代わりに、自分たちの善行や知恵に注目しています。彼らはキリストを図から外しているので、偽善と不義に満ちているのは仕方がありません。

イエスは、私たちは人の賛美から離れて、匿名ですべての善行を行うべきだと教えられました。繰り返しになりますが、このような偽りの信者たちの悲しい状態は欺瞞です。

c. マタイ24-世界の終わり

イエスが4回目にして最後に咎という言葉を使われたのは、マタイ24章の中で、偽預言者の欺瞞に対して再び警告されています。

…多くの偽預言者が立ち上がり、多くの者を欺くようになる。また、無法[INIQUITY, KJV]があふれるので、多くの人の愛[AGAPE]は冷たくなります（マタイ24:11-12;強調しています）。

"偽りの預言者…""多くを欺く"これらの節のすべてに共通しているのが「欺瞞」であることにお気づきですか？狼や偽預言者も含めて、関係者全員が騙されているように見えます。イエス様は、私たちが欺瞞を見抜く方法を教えておられます。イエス様だけがこの欺瞞を私たちから取り除くことができます。イエス様がいなければ、私たちは絶望的に惑わされてしまいます。

しかし、なぜ不義はそれほど欺瞞的なのでしょうか？それは、不義が正しいように見え、正しいことをし、正しいことを考え、正しいことを信じているように見えるからです。実際、不義は知恵を擬人化したように見え、実際には知恵の一種ですが、それはサタンの知恵なのです。しかし、それはサタンの知恵なのです。そして、それが知恵として売り払われているので、それは欺くための驚くべき力を持っています。

ソロモンはこの現象を箴言集の中で簡潔に扱っています。

人には正しいと思われる道がありますが、その終わりには死の道があります（箴言14:12、KJV）。

マタイ24章によると、不義は人間の精神に根付いているので、その欺瞞的な力は地球の歴史の最後の最後まで強く残っています。しかし、不義は正しいように見えますが、それは愛ではありませんし、あわれみでもありません。実際、イエス様は、不義が「あふれる」ので、多くの人の愛（アガペー）は冷たくなると言われました。このように、もし私たちがそれを許すならば、不義はアガペの愛を中和する驚くべき能力を持っています。イエスは、最後の日には特に不義が盛んになることを示されました。これは、欺瞞が蔓延することを意味しています。

ここでは、全体像を見てみましょう。この四つの箇所を分析すると、イエス様が「咎」という言葉を使われた時、それは欺瞞の文脈で使われたこと、特に神の信奉者の間で使われたことが分かります。天使の三分の一がサタンの不義の原理に騙されていたことを考えると、この原理がどれほど強力なものであるかが分かります。

私たちが見てきた聖句の中で騙された信者は、それぞれ偽りの外見をしていました。羊のように見えたものは本当は狼であり、小麦のように見えたものは本当はたわらであり、本当の預言者のように見えたものは本当は偽預言者でした。これらはすべて，自分たちが何かではないかのように見えたのです。彼らは善良であるように見え、素晴らしい行いをしているように見えましたが、根本的には悪であり、「不義の働き者」だったのです。

また、全世界で不義が横行しているにもかかわらず、イエス様は神の信奉者だけを対象とされたことも重要な意味を持っています。このことから、不義は特に宗教の中で、あるいは少なくとも偽りの、あるいは偽りの宗教の中で繁栄しているように見えると結論づけられます。

ですから、ヘブライ語とギリシャ語の定義をイエス様の「不義」という言葉の使い方と組み合わせれば、次のような結論になるかもしれません。

1. 異質性は道徳と関係がある：道徳的な悪、道徳的な歪み、道徳的な変態性　　である。
2. Iniquityは"to go amiss"という意味になります。
3. 不義とは、邪悪さ、不義を意味します。
4. 不公平は罰と非難を伴う。
5. 不公平とは、無法、法の違反、違法、法の逸脱である。
1. 非公平とは、道徳的な不正だけでなく、法に反した不正である。
2. 不義とは、曲がったこと、歪んだこと、罪を犯すこと、神の道徳律法の倒錯である。
3. 不義理は極めて欺瞞的であり、傍観者だけでなく演者をも欺く。
4. 非公平は善良に見える、正しい考えと行動
5. 5. 不公平は人類に重い重荷を課しています。
6. 不公平は人を二面性、偽善者にさせる。
7. 不義はプライドに満ちている（人に見られる作品）。
8. 不公平はアガペの愛を破壊する（多くの人の愛は冷たくなる）。
9. 不公平は腐敗を伴う（純粋ではない）。
10. 不公平は暴力を伴う（猛獣化する狼）。
11. 不義　　を行う者は、敵であるサタンによって「蒔かれた」のです。
12. 不公平は最後の日には「あふれる」でしょう。
13. 不公平は無につながり、死に至る。
14. 不公平は大論争の末に根絶される。
15. 不公平は偏見を伴う。
16. 不公平は賄賂を伴う。

これらの定義はすべて、神の律法の文脈の中で理解されなければなりません。例えば、不義とは、神の律法を道徳的に曲解したものです。不義は神の愛の律法から外れています。不義は善であると自負していますが、実際には悪であり、神の律法による不義であり、神の義の原則に違反しています。不義は罰と非難を促進しますが、これは神の愛の律法に反しています。それは「無法」であり、神の律法や神の律法の精神を完全に欠いていることを意味します。アガペー愛の律法に違反しているのです。咎が「無法」であるのは、神の律法に違反しているからです。咎は偉大な正義を誇っていますが、神の書物では、その正義は実際には不正なのです。

これが、不義は曲がったものであり、歪曲であり、罪であり、神の道徳律法の倒錯なのです。これらの理由から、不義は非常に欺瞞的です。それは良いように見えますし、考えたり行動したりすることが正しいように見えますが、人間に重荷を課し、神から遠ざかってしまうのです。

では、不義とは何でしょうか？それは道徳的な律法であり、サタンの道徳的な律法であり、神の律法を倒錯させたものです。それが道徳的な律法であるがゆえに、不義は非常に欺瞞的なものです。私たちは皆、道徳的な傾向があるのではないでしょうか？私たちは皆、自分の道徳は神に由来すると思っているのではないでしょうか？しかし、もし私たちの道徳が神から来ていないとしたらどうでしょうか？何が正しくて何が間違っているかという私たちの内なる感覚が、サタンの欺瞞に基づいているとしたらどうでしょうか？もし私たちがサタンの道徳律法によって生きているとしたら？私たちが「良い」「賢い」と思っていることそのものが、私たちを欺いているのでしょうか？

私たちの道徳心を試される方法があります。私たちは人に重い重荷を課すことに関与していますか？私たちは愛と憐れみよりも作品を重視していますか？私たちの心は愛で満たされているでしょうか，それとも正しいことに執着しているでしょうか。私たちは裏表の顔をしているでしょうか。私たちはある人には善良で、ある人には意地悪をしているのでしょうか。私たちは敵を愛しているのでしょうか、それとも憎んでいるのでしょうか。それとも、錬金術師のメルクリウスのように、善人には善、悪人には悪を行うのでしょうか。私たちは、表向きは正しいことを善の名の下に、暴力を行使したり、容認したりしているのでしょうか？私たちは他人を非難するか？もしそうならば、私たちは彼らが罰せられるに値すると信じますか？私たちは、暴力や無作法が悪行を正すための方法であると信じていますか、それとも愛がより良い解決策であると信じていますか？私たちは部分的ですか？私たちは誇り高いですか？私たちは賄賂を受け取りますか？私たちは報酬を得るために良いことをしますか？

…あなたの中にあった

不義はルシファーの中に「見出された」ということを理解することは非常に重要です。foundを表すヘブライ語の単語はmâtsâで、「現われる、すなわち、現われる、存在する」という意味です（ストロングのコンコーダンス）。このことは、不義の始まりが神ではなく、ルシファーの中にあったことを示しています。

不義理は最初、ルシファーの心の中の思考として始まりました。胎教の段階では、彼の神からの背を向けることは、疑問を抱く思考の形で始まりましたが、時間が経つにつれて、本格的な反逆へと発展していきました。彼の考えに続くすべての行動は確かに罪深いものでしたが、彼の中に最初に見出された咎は、最初は単なる考えに過ぎませんでした。その後の彼の邪悪な行動は、彼の思考過程の中で最初に始まったことに対する反応に過ぎませんでした。彼の行動は、それらの思考の物理的な現れだったのです。

つまり、最初は、咎は経験的に、外面的にそれを示すことができませんでした。そのため、最初はその完全な堕落を明らかにすることができませんでした。悪と災いのためのその巨大な可能性は、天使たちによって、あるいはルシファー自身によっても、まだ完全に観察することができませんでした。

自分の考えが自分の行動に先行し、実際に行動を予測するという原則は、箴言23:7に記されています。"その人が心で思うように、その人もまたそうである。イエス様もまた、心の中で欲情することさえも姦淫であると言われた時に、この原則を確認されました。

> あなたがたは、昔の人たちに「姦淫してはならない」と言われたことを聞いたことがある。しかし、女を見て女を欲しがる者は誰でも、心の中で女と姦淫している（マタイ5:27-28）。

咎はルシファーの中で、そしてルシファーの中だけで始まっていることを理解することは非常に重要です。なぜかというと、ルシファーはわたしたちを欺き、「不義」の原則が神ご自身が用いている原則であると信じ込ませたからです。ルシファーの道徳律法の意味をさらに研究すると、神が不義の道徳律法を用いていると私たちに思わせるためのルシファーの欺瞞の程度が分かるでしょう。

7.　法への攻撃

あなたの取引の豊富さによって…

ルシファーは何を取引していたのか？彼の反乱の初期段階での「交易」とは、経済システムの創造を指しているのでしょうか？私たちが研究してきたこれらの節の文脈の中で、そのような兆候はありますか？

ヘブライ語では、ルクラーは単に「（物売りとしての）貿易：商品、交通」を意味しています（ストロング・コンコーダンス）。これまで見てきたことを考えると，これは一体何なのでしょうか。七日目のアドベンチストの解説書にある次の言葉に注目してください。

"あなたの商品の多さによって、彼らはあなたの中を暴力で満たし、あなたは罪を犯した。この**場所では、「人身売買」は腐敗した行政の象徴です**。

この節の「人身売買」という言葉は「紋章」であり、文字通りではなく、むしろ象徴的なものであることを意味しています。"この文脈での「人身売買」は、ルシファーの「腐敗した政権」を象徴する言葉です。彼の政権が腐敗していたのは、これまで述べてきたように、彼が天で考案した腐敗した原則によって支配されていたからです。

ルシファーが反乱のこの段階で「行商」をしていた可能性があるものは一つだけです。それは、彼の堕落した原理か道徳的な法則である不義です。エゼキエル自身が選んだ言葉は、ルシファーが売りつけていたものが不義であることを示しています。この箇所では、「豊かさ」という言葉が二度も使われていることに注目してください。16節でエゼキエルは言います。

豊か**な取引**によって、あなたは内なる暴力に満たされ、罪を犯した。

そして、18節で彼はこう述べています。

あなたがたは、あなたがたの**悪事**の**多**さによって、あなたがたの聖域を汚した。あなたがたの**交易**の**悪事**によって。

英語の「豊富」と「多数」という言葉は、同じヘブライ語の「rôb」から訳されています（ストロングのH7230）。Rôbは最初にルシファーの「商品」を修飾するために使われ、次にルシファーの中にあった「不義」を修飾するために使われています。このように、「商品」という言葉が意味するのは「不義」であることが推論できます。ルシファーは自分の商品（自分の堕落した管理に使う堕落した原則のセット）を全宇宙に売り渡しました。神のアガペー愛は自由に基づいた原則であるため、ルシファーは彼の新しいアイデアを販売する自由を持っていただけでなく、宇宙のすべての知的存在はまた、それに賛成か反対かを決定する自由を持っていました。他の居住惑星にも善悪の知識の木があります。

主は私に異世界の景色を与えてくださいました。翼が与えられ、天使が都から、明るく輝かしい場所へと私に付き添ってくれた。その場所の草は生きた緑であり，そこにいる鳥は甘い歌をささやいていた。その場所の住人は大小さまざまで，気高く，荘厳で，愛らしい人たちであった。彼らはイエスの姿をしており，その表情は聖なる喜びに満ちており，その場所の自由と幸福を表していた。私は彼らの一人に、なぜ彼らは地上のものよりもはるかに美しいのかと尋ねました。答えはこうだった　"我々は神の戒めに厳格に服従して生きてきたからだ" "地上の者のように不従順によって堕落していないからだ"**それから私は二本の木を見ました 一つは街のいのちの木によく似ていました両方の木の実は美しく見えたが、一方の木は食べられなかった。彼らは両方の木を食べる力を持っていたが、一方の木を食べることは禁じられていた。その時、私の天使が私に言った、「この場所では誰も禁じられた木を味わった者はいないが、もし食べたら倒れてしまうだろう」。**しかし，もし食べるならば，彼らは倒れてしまうだろう。

しかし、「堕落した政権」という言葉には莫大な意味合いがあります。まず第一に、ルシファーはどのようにして自分自身の行政を持つようになったのでしょうか？ルシファーは神の行政に雇われていたのではなかったのでしょうか？彼は光の運び手として、神の律法の推進者として、神のために働いていたのではなかったのでしょうか？

この小さな情報から、ルシファーは何か裏のあることをしていたような印象を受けます。おそらく天使たちの心の中で密かに律法を変えようと、神から与えられた権限を使っていたのでしょう。私達は既に、彼が神から与えられた力と影響力を使って、彼の欺瞞的な議題を推し進めていたことを知っています。

それは素晴らしい力と 栄光を持つ存在であり 神に敵対していたルシファーについて主は言われた "知恵に満ち、完全な美しさを備えた総体を封印した。"エゼキエル書28:12ルシファーは、ケルブを覆っていた。彼は神の存在の光の中に立っていた。彼はすべての創造された存在の中で最高の存在であり、宇宙に神の目的を明らかにする上で最も重要な役割を果たしていました。彼が罪**を犯した後は、彼を欺く力はますます欺瞞的になり、彼の人格を明らかにすることは、彼が父と一緒に保持していた高貴な地位のために、より困難になりました**{DA 758.4, emphasis added}。

ルシファーは欺くためにその地位を利用していました。事実上、神の前で、神の律法を損なう反乱政権を運営していたのです。彼の全目的は神の律法を取り除くことでした。

> **天国での大論争の最初から、神の律法を覆すことがサタンの目的でした。この目的を達成するために、創造主に対する反逆を始めたのですが、**天から追い出されたにもかかわらず、地上でも同じ戦いを続けています。人を欺き、神の律法に逆らうように導くことが、彼が一貫して追求してきた目的です。これが律法を完全に捨てることによって達成されようと、律法の戒律の一つを拒否することによって達成されようと、結果は最終的には同じになります。ある点で」違反する者は，律法全体を軽蔑していることを示し，その影響力と模範は違反の側にあり，「すべての罪」を負うことになります。ヤコブ 2:10 {DD 28.1, emphasis added}。

ルシファーは、従者を集めるために、策略と操作を使いました。彼は狡猾に神の法への不満を作り、彼が提案した変更はすべて神の政府のためだと主張しました。

> **ルシファーは、彼**の指揮下にある聖なる存在が彼に託した愛に満ちた忠実な信頼を利用して、彼自身の不信**と不満を巧み**に彼らの心に植え付けたので、彼の働きを見分けることはできませんでした。ルシファーは神の目的を**偽りの光の**中で提示していました**-反対と不満を煽るためにそれらを誤って解釈し、歪曲していました。**そして、天使たちが神の統治と完全に調和していないことを示す証拠として、自分の目的を果たすときには、このような表現を繰り返していました。彼**は自分のために神への完全な忠誠を主張する一方で、神の政府の安定のためには天の秩序と法則の変更が必要であると主張しました。このようにして神の律法への反対を煽り、自分自身の不満を自分の下にいる天使たちの心に植え付けようとしている間、彼は表向きは不満を取り除き、不満を持った天使たちを天の秩序に和解させようとしていました**。彼は密かに不和と反乱を煽っていましたが、完全な技巧をもって、忠誠**を促進し、調和と平和を維持することが**彼の唯一の目的であるように見せかけました{PP 38.2, emphasis added}。

彼の活動はどれほど卑劣で、秘密主義的で、巧妙なものだったのでしょうか。彼の戦略がガーデンで使用したものと同じであったことに注目してください：彼は問題を作成した後に自分自身を隠し、彼が何の関係もないように見せかけています。

> **ルシファーは最初、彼自身がコミットされていない立っているので、彼の誘惑を行っていた**。彼が完全に彼の側に連れて来ることができなかった天使は、彼は天の存在の利益に無関心であると非難した。彼自身が行っていた仕事そのものを、忠実な天使たちに課したのである。神の目的に関する微妙な議論で混乱させるのが彼の方針であった。単純なものはすべて謎に包まれ，巧みな曲解によって，エホバの最も平易な記述に疑問を投げかけたのです。**そして，神の政府と密接に結びついている彼の高い地位が，彼の表現に大きな力を与えました**{PP 41.3, emphasis added}。

最初から、この論争は神の律法についてのものでした。私たちは自分自身に問いかけなければなりません。なぜルシファーは神の律法を変えようとしたのでしょうか？考えられる唯一の理由は、何らかの形で、ある時点で、少しずつ、少しずつ、彼は愛の律法を効果がない、欠陥があると考えるようになったということです。だから、彼はそれを直そうとしたのです。次の文に注意してください。

サタンは、神の律法や裁きよりも優れた法律を提示できると主張し、天から追放されました。彼は地上でも同じような試みをしています。堕落して以来、彼は世を欺き、人々を破滅に導くために努力してきました。**神のあるべきところに自分と自分の装置を置くための彼の努力は、最も根気強く、しつこいものです。彼は世界を彼の罠の中に捕らえてしまいましたが、神の民の多くは彼の仕掛けを知らず、魂を滅ぼすために彼が望むだけの機会を与えているのです。**彼らはイエスを持ち上げ、滅びゆく大勢の人々に「世の罪を取り去る神の小羊を見よ」と宣べ伝えようとする燃えるような熱意を示すことはありません。12, emphasis added}!

"サタンは神の法と裁きよりも優れた法律を 提示できると主張していた"サタンは"法"を提示していた？法律？私たちは今までに、サタンが法律を持っていると聞いたことがありますか？もう一度、以下の引用文に注意してください。

反逆への神の対応は、**長い間隠れて行われてきた仕事の正体を完全に明らかにすることになります**。神**の律法を脇に置くこと**の成果は、すべての創造された知性の目にさらされることになります。**神の律法は完全に守られることになります**。サタン自身が、宇宙の証人の前で、**神の政府の正義と神の律法の義を告白する**でしょう{EP 237.1, emphasis added}。

しかし、どの**ように宇宙は**ルシファーが**安全で公正なリーダーでは**ないことを**知っているのだろうか？彼らの目には彼は正しいように見える**。彼らは神が見ているように 外側の覆いの下を見ることはできない彼らは神が知っているように知ることはできません。彼の正体を明らかにして、彼**の裁きが神の裁きではないことを**天使たちに明らかにするために働くことは、彼**が自分の基準を作り**、神の正しい怒りに身をさらすことになり、避けなければならない状況を作り出すことになるでしょう{CTr 11.5, emphasis added}。

サタンは「神の律法を脇に置いて」、「神の律法よりも優れた律法を提示できると主張し、そうすることで、彼は「自分の基準を作った」のです。しかし、私たちは、彼が律法を持っていることも、"自分の基準"を持っていることも聞いたことがありません。なぜでしょうか。それは彼の仕事が"隠れて長く続けられてきた"からです。それはどのようにして行われてきたのですか？それは、私たちが"彼の裁き"を"神の裁き"だと思っていたからです。

次に私たちが問わなければならないのは、これです。なぜルシファーは、神の律法は効果がないと考えたのでしょうか？神の律法は天国を楽園にしたのではなかったのでしょうか？結局のところ、天国は永遠の昔から平和と調和しか知らなかったのです。このような平和と喜びをもたらしたものに、どのような欠陥があるでしょうか。次の文は非常に重要なことを明らかにしています。

神ご自身が天の秩序を確立されていたので、そこから外れると、ルシファーは自分の創造主の名誉を傷つけ、自分自身に破滅をもたらすことになります{DD 2.2, emphasis added}。

"神ご自身が天の秩序を確立された。神の律法によって。そしてサタンは天の秩序から"脱却"していた。どのようにして？彼は神の律法よりも優れていると主張したのです。先ほど数段落を読みました

彼は自分自身のために神への完全な忠誠を主張する一方で、神**の政府の安定のためには、天の秩序と法律の変更が必要であると促しました**{PP 38.2}。

"彼は神の秩序と法の変更が必要だと主張した"何のために？"神の政府の安定のためだ"なぜ彼はこのようなことをしたのでしょうか？彼は本当に神の律法は秩序を作るのに 効果がないと信じていたのでしょうか？彼は新しい道徳律法に基づいて新しい「秩序」を確立しようとしていたのでしょうか？不義」が「アガペー」よりも優れていると考えていたのでしょうか？

預言者イザヤはルシファーについて語っています。
あなたが心の中で言ったからです。
"私は天に昇る
私は神の星の上に私**の王座を高揚させる。**
私もまた，会衆の山の上に座る。
北の最も遠い側で。
私は雲の上の高みに登っていきます。
私は最も高い方のようになる」（イザヤ14:13-14、強調）。

ルシファーは、神の玉座よりも自分の玉座を高くしようとしていました。彼は自分自身を神と対等な立場に置き、最高位の神と同じ権威を持っていると主張し、神のようになりたいと願っていました。しかし、ルシファーはどのようにして最高位の神のようになりたかったのでしょうか？聖書によると、神は律法権者です。

笏はユダから離れず、律法学者はその足の間から離れず、シローが来るまで。

主は私たちの裁判官であり**、主は私たちの律法者であり**、主は私たちの王であり、主は私たちを救ってくださるからです）（イザヤ33:22、強調）。

救うことも滅ぼすこともできるひとり**の律法者がいます。**あなたがたは誰なのでしょうか。

宇宙には唯一の真の法の支配者がいる、創造主である。創造主はどのようにして救われるのでしょうか。創造主は，その律法である命の律法を通して，アガペの愛の性格についての真理をわたしたちに与えることによって，救いを与えてくださいます。創造主はどのようにして滅ぼされるのでしょうか。創造主として、創造主にはそれを行う権利があります。生きているためには息をしなければならない存在を創造したのであれば、ある意味では、息をしないことを選んだ存在を破壊するのです。神は、神の律法を拒否する者を積極的に、あるいは恣意的に滅ぼされることはありません。私たちは神のあわれみの律法を拒否すると滅ぼされますので、この意味で神は律法を通して滅ぼされるのです。

偽りの哲学を通して、サタンは、感情的には神の戒めに忠実ですが、実際には忠実ではない多くの心に広く影響を与えています。神様のお人柄とはどのようなものでしょうか？- "あわれみ深く、慈悲深く、寛容で、善と真理に富み、何千人ものためにあわれみを保ち、不義と罪とを赦し、決して罪人を明らかにしない"**ここに，主イエスの性格が明確に示されており，主が律法の指導者として行動する原則が示されています**{Ms45-1894 (1894年11月) par.9, emphasis added}。

イエスは律法師として行動するしかしルシファーは言った "私は自分の王座を高揚させる" 新しい政府、新しい法律のセット... "私は最高位の者のようになる" "私は律法者のようになる" "私は自分の道徳的な法律を持つようになる"彼は自分の道を完全に行っていましたが 咎が自分の中に見出されるまでは 堕落した原理が彼の心を満たすまではね。新しい律法... 新しい世界秩序... 神の秩序よりも優れていると思われる秩序...調和と平和を維持することを唯一の目的としたより良い律法...神の政府の安定性を維持すること...驚くべきこと...誰がこんなことを信じるのでしょうか？

しかし、今、私たちは避けられない質問をしなければなりません：なぜルシファーは、神の政府が不安定であると考えたのでしょうか？彼の証拠は何だったのでしょうか？何が彼をそのように考えさせたのでしょうか？

少し理由を考えてみましょう。聖書から、この世の知恵はサタンの知恵と同等であることを知っています。このことを念頭に置いて、１コリントの信徒への手紙から抜粋した次の一節を考えてみましょう。

十字架のメッセージは、滅びゆく者にとっては愚かなもの**です**が、救われる私たちにとっては、神の力なのです。それは書かれているからです。

"賢者の知恵を滅ぼす
"慎重な者の理解を無にしてはならない"

賢者はどこにいる？律法学者はどこにいるのか。この時代のディスピーターはどこにいるのか。神はこの世の知恵を愚かにされたのではないか。なぜなら、神の知恵の中にあって、知恵によって世が神を知らなかったので、信じる者を救うために説かれたメッセージの愚かさによって、神は喜ばれたからである。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知恵を求めます。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを説きます。**なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです**（第一コリント1:18-25、強調追加）。

これらの聖句は、二つの知恵があることを明確に示しています-「世の知恵」と「神の知恵」です。世の知恵はサタンの知恵です。彼はまた、「この時代の神」でもあります（第二コリント4:4）。このように、従来の「知恵」がどうあるべきかを世間に知らせるのは、サタンなのです。

上記の一節は、サタンのこの世の知恵では神を知ることは不可能だと言っています。なぜでしょうか？それは、神の知恵は「世間」の目には全くの愚かさと弱さだからです。もしこれが「世」が神の知恵を見ているのだとしたら、サタンも同じように神の知恵を見ていて、それに反抗した理由があるのではないでしょうか？

> **最初から、神の律法に関する大きな論争が行われていました**。サタンは、神は不正であり、神**の律法は欠陥があり、宇宙の利益のためには律法を変える必要があることを**証明しようとしていました。律**法を攻撃する**ことで、律**法の**作者の権威を覆そうとしたのです。この論争では、神**の律法が欠陥があり、変更の対象となっているのか、それとも完全で不変であるのかを**示す必要がありました{PP 69.1, emphasis added}。

ルシファーはアガペーを "欠陥"、 "欠陥"、 "変更の対象"、欠陥があると見ていた。それはある時点で、彼は神の愛の律法を愚かで弱いものとみなすようになったのでしょうか？これが彼が神の愛の律法を攻撃した理由なのでしょうか？

ルシファーは、アガペー愛を馬鹿げたものであり、改革や完全に置き換える必要があると考えるようになったようです。彼は、アガペー愛の法則に基づいた神の管理は、宇宙を支配することができないと主張し、特に悪に直面した場合には、それはありませんでした。彼の心の中では、もしそれが愛だけに基づいているならば、秩序は存在し得ないと考えていました。すぐにわかるように、彼は自分の法則の背後にある力として力と暴力を導入しました。このことについてよく考えてみてください。私たちは、「秩序」を課すためには、力と暴力が必要だと思っていませんか？

…あなたは内部で暴力に満ちていた…

ルシファーは神の愛の道徳律法によって生きていましたが、彼は暴力を知りませんでした-彼は"完全"でした。しかし、本文ははっきりしています。彼は、不義が「彼の中に見出されると」、「暴力で満たされるようになった」のです。この言葉は、不義と暴力が彼の中にあったことを明確に示しています。彼の不義と腐敗した原則の「豊かさ」によって、彼は「内なる暴力で満たされるようになった」のです。暴力は不義の中に埋め込まれているので、暴力は不義の直接の結果であり、この道徳的な法則によって生きるすべての人もまた、"内なる暴力で満たされている"のです。

不義が暴力の源であることを理解することは極めて重要です。暴力は不義の産物であり、不義の産物でしかありません。もし不義がルシファーの中で生まれ、暴力がその結果であるならば、彼の反乱の前には、暴力は宇宙には全く存在しなかったと結論づけるのは論理的なことです。暴力は完全に悪魔的なものです。では、暴力を神に帰属させることができるでしょうか？もしそうだとしたら、神もまた悪魔的な存在であると言うことになりませんか？

不公平感、サタンの法則は力で動いています。暴力はその中に組み込まれています。これは歪曲であり、神の道徳的基準である神の愛の倒錯であり、そこには自由があり、力の反対の自由があります。神の恵みとあわれみの律法は、無条件で公平であったため、すべての人に適用されました。ルシファーは、これでは通用しないと考え始めました。彼の頭の中では、人はそれぞれのケースを個別に受け止め、状況に応じてポジティブにもネガティブにも対処しなければならないと考えていました。彼は誰もが同じ恵みで扱われるに値するわけではないことを推論し、いくつかは報われるべきであり、いくつかは罰せられるべきである。

ルシファーは、アガペの愛が今まで悪に直面していた場合、それはそれを "世話をする"にはあまりにも弱いだろうと信じるようになった。彼の心の中で、アガペは、それが報酬と罰の恣意的なシステムを欠いているため、正確に失敗するだろうメリットとデメリットシステム。だからこそ、ルシファーの視点では、悪に直面したときに神の律法は無力であると考えていたのです。そして、彼はそれを証明することができました。"あなたは何を意味する、彼はそれを証明することができましたか？"あなたは尋ねるかもしれません。彼自身のケースを見てください：彼は神に反抗していた、そして神はそれについて何をしていたのでしょうか？何もしていません。神は彼に殺人を許したように見えた。

ルシファーは、彼の新しい法律は、それが任意の報酬と罰のメカニズムが含まれているため、正確に悪の存在下で成功し、勝利すると主張した。彼はコマンドであった場合、彼は自分自身のような新興の世話をしていただろう、彼は迅速かつ効率的に物語の終わりの反乱者を片付けていただろう。暴力がどのように入ってきたかわかりますか？神の政府を安定させるのを助けるという口実の下に、彼がどのように「天の秩序」に反抗していたかわかりますか？

神は何をしていたのでしょうか？すべての意図と目的のために、神はルシファーが非難していた通り、愚かで弱い者であるように見えました。神はルシファーを止めもせず、片付けもしませんでしたし、彼の邪悪な考えを消すために脳の手術を密かに行ったこともありませんでした。しかし、神はそのようなことはしませんでした。神はサタンに彼の「政府のシステム」を発展させることを許しました。

> 物事を永遠の安全の基盤の上に置くことは神の目的であり、天の会議では、サタンが**自分の政府システムの基礎となる原理を**発展させるために時間を与えられなければならないことが決定されていました。サタンは、これらの原則が神の原則よりも優れていると主張していました。サ**タンの原理を**働かせるための時間が与えられ、それが天の宇宙に見られるようになりました{DA 759.2; emphasis added}。

神はサタンに「彼の政府システムの基礎となる原理を発展させるために」時間を与えていたのです。神がサタンに時間を与えたことに疑問はありませんが、神は力を使わないのです。

> 神は、人が小石を地に投げつけるのと同じように、サタンとその支持者を簡単に滅ぼすことができましたが、そうしませんでした。**反乱は力で克服するものではありませんでした。説得力のある力は、サタンの統治下でのみ見出されます。主の原則はこのようなものではありません。主の権威は、善良さとあわれみと愛に基づいており、これらの原則を示すことが、使用される手段なのです。神の政府は道徳的であり、真理と愛が有力な力となることになっています**{DA 759.1; emphasis added}。

"説得力はサタンの統治下でのみ見出される""主の原則はこの順序ではない""神の権威は善良さと慈悲と愛にかかっている"神はこの緊急事態に対応するために、ご自分の原則を変えようとはしませんでした。神は、善良さ、非暴力、自由、慈悲、愛の原則に基づいて立っていた。なぜなら、神は、それらが宇宙全体の生命のための唯一の安全装置であることを知っていたからだ。

ルシファーは「強制力」「力」「暴力」があるシステムを導入しようとしていました。したがって、彼の権威は、必然的に神の原則の反対に基づいて休むことになります。真実、善良さ、慈悲、愛はルシファーの政府には勝てないでしょう。その代わりに、嘘、力、暴力、邪悪さ、残酷さ、報復的な罰、すべてが"秩序"の名の下に繁栄するでしょう。

ルシファーは、神が反逆の道を進むことを許したのは愚かなことだと考えたに違いありません。時間が経ち、神は彼を止めるために何もしなかったので、彼は神の手口に重大な欠陥があることをさらに確信するようになりました。したがって、彼の心の中では、宇宙の利益のために、アガペは彼にそれが完了した取引だった行く必要がありました。

> **サタンは、神の律法は欠陥があり、宇宙の利益のために、その要件を変更する必要があると宣言していました**。律法を攻撃することで、彼は律法の作成者の権威を覆し、自分のために最高の忠誠を得ようと考えました。**しかし，救いの計画によって，律法の戒律は完全で不変であることが証明され，**最後には栄光と愛だけが宇宙全体で神に上り，栄光と名誉と賛美を玉座に座る神と小羊に永遠に代用することができるようになりました。5, emphasis added}.

ルシファーは、神の律法が「欠陥がある」と信じていたので、問題の解決策として自分の律法を進めました。彼が神の政府の安定のために必要だと考えた変更は、神の律法を削除し、彼の新しい律法を実行することでした。

誰もまだルシファーの反乱の影響を理解することができませんでした。暴力とその究極の結果である死は、宇宙では未知のものであり、ルシファー自身もまだ知らなかったのです。神は彼を覆うケルビムに警告し、この危険で悲惨な道に進まないように説得しようとしました。しかし、引き返す代わりに、堕天使は全開で前に進みました。

しかし、私たちは彼の律法の結果を知っています。我々はその中で生きているのだ。私たちは、この論争-原則のこの戦争のための操作の劇場です。そして、私たちが地球上の状況を見ると、これまでのところ、ルシファーの「新しい秩序」は全く良く見えません。

もし神がルシファーの提案を受け入れて、彼の暴力的な律法を実行していたらどうなっていたでしょうか？神はサタンのようになっていたでしょう。考えてみてください。もし神がサタンのようになっていたら、神はルシファーの反乱をその場で止めていたでしょう。しかし、そうしませんでした。なぜですか？

神はサタンのような存在ではありません。これは神が誰であるかではありません。これは神のやり方ではありません。

これは神の心、神の律法ではありません。神は完全な愛であることを思い出してください。そして、ルシファーは神の最高傑作であったことを思い出してください。

自分に逆らって立ち上がったら子供を壊しますか？殺人者になったら？その時、あなたは彼らを破壊しますか？それともその子を救うために 全力を尽くすか？子供が戻ってくることを 最後の最後まで 望むか？そして最後の瞬間に…それでも殺す？

神のアガペー愛の定義を覚えておいてください：アガペー愛は忍耐強く、親切である。アガペー愛は過ちを考慮しない。最高のものを信じようとする。その希望はどんな状況下でも色あせず、弱まることなくすべてに耐える…愛は決して失敗することなく、フェードアウトすることなく、陳腐化することなく、決して終わりを迎えることはない…神はルシファーへの愛を止めたことはありません。彼はまだ彼を愛しています。彼は常にこの息子の死を嘆くだろう。

神によって与えられた自由を利用して、ルシファーは神の「弱い」律法を取り除く計画を進めました。ルシファーは神が律法を持っていることを知っていたので、有利な立場にありました。しかし、天使たちは弱い立場にありました。彼らは「律法」というものがあることを知りませんでした。

天使たちは、それを知らずに愛の道徳律法によって生きていました。実際、サタンの反乱が起こる前は、被造物であるすべての存在は、それを知らずに、神の愛の道徳律法によって生きていました。

> …天国では奉仕は合法の**精神**では行われません。サタンがエホバの律法に反旗を翻したとき，**律法があるという考えは，ほとんど考えられていないことへの覚醒として天使たちにもたらされました**。天使の務めにおいては，天使はしもべとしてではなく，息子としての役割を果たします。彼らと創造主との間には完全な一致があります。彼らにとって従順さは決して苦行ではありません。神への愛が彼らの奉仕を喜びとしています。栄光の希望であるキリストが宿るすべての魂の中で、キリストの言葉が繰り返されています。詩篇40:8 {MB 109.2, emphasis added}。

ルシファーは、不義がアガペーよりも優れていることを皆に納得させることができれば、彼は宇宙の新しい支配者になるだろうと考えていました。しかし、不義が彼を狡猾にしていたので、彼はあまりにも賢いので、公然と物事を行うことができませんでした。彼は神より優れた者になろうとしたために敬遠されることを知っていました。しかしもし彼が新しい律法が実際に神から来たものだと天使を納得させることが出来れば彼にはチャンスがあるかもしれない律法の管理者として 彼は戦略的立場にあった彼は律法を変更して、それが本当の律法であるかのように見せることができました。天使たちは喜んで神の愛の律法に仕えているので、何も疑うことはないでしょう。

ルシファーは本当にこれで逃げ切れると思っていたのか？神は彼の正体を明かさないのか？神は物事を正してくれないのか？創造主は彼のハッタリを呼ぶだろうか？どうやらそうではない ルシファーがやったことだ そして逃げ切った彼の欺瞞は巧妙で、最初は天使の半分を奪った。最終的には三分の一だけが彼に味方した。だが彼の欺瞞は 天使以上に広がったそれは宇宙全体にまで及んでいた。次の言葉をもう一度考えてみてください

> しかし、どのように**宇宙は**ルシファーが安全で公正なリーダーではないことを知っているのだろう**か？彼らの目には彼は正しいように見える。**彼らは神が見ているように 外側の覆いの下を見ることはできない彼らは神が知っているように知ることはできません。彼の正体を明らかにして、彼の裁きが神の裁きではないことを天使たちに明らかにするために働くことは、彼が自分**の基準を**作り、神の正しい怒りに身をさらすことになり、避けなければならない状況を作り出すことになるでしょう{CTr 11.5, emphasis added}。

天使だけでなく、宇宙全体がルシファーの欺瞞に取り込まれた。彼らの目には彼のやり方が "安全で公正"に映っていました。彼らはアガペの愛の下に持っていた彼らの無邪気さでは、彼らはルシファーの巧妙な新しい法律の結果を理解することができませんでした。ルシファーは彼らには正しいようにさえ見えたのです。唯一の神は、彼がとても愛情を込めて作成した生き物に力とvio¬lenceの使用の究極の結果を予見することができました。

では、なぜ神はご自身を守らなかったのでしょうか？なぜ神はルシファーを止めなかったのでしょうか？神はどうしてこのようなことを許すことができたのでしょうか？ルシファーの言い分は的を射ていたのでしょうか？神は本当に愚かで弱かったのでしょうか？神のやり方には欠陥があったのでしょうか？ルシファーを生かすことによって失われるすべての命はどうなのでしょうか？世界のために、いや宇宙全体のために、一人の存在を滅ぼした方が良いのではないでしょうか？神はカイアファがイエスを告発するために使ったのと同じ議論を使うべきではないでしょうか。

> **その**年の大祭司であったカイアファは彼らに言った、「あなた方は何も知らないし、一**人の男が民のために死ぬことが、全国民が滅びることではなく、我々にとって都合が良いことだ**とも思っていない。

人間の知恵は、神がルシファーを殺すのは好都合であったはずであり、地球が「滅びる」のではないと主張するでしょう。しかし、ルシファーの計画が展開されたとき、神はそのようなことをしなかったので、神はそれが起こることを許したのです。

しかし、神はルシファーが自分の道を進むことの危険性を警告された。神は原因と結果を示したのです。神の警告は天使たちにも向けられていましたが、天使たちは皆、自分たちが望むように自由に行動することができました。この明確な警告にもかかわらず、ルシファーは頑なに反抗を続けました。

> 天国の評議会で天使たちはルシファーに嘆願した。神の子は、創造主の偉大さ、善良さ、正義、そして神の律法の神聖で不変の性質を彼の前に提示した。**神ご自身が天の秩序を確立されたのであり、そこから外れると、ルシファーは創造主の名誉を傷つけ、自分自身に破滅をもたらすことになります。しかし、無限の愛と慈悲によって与えられた警告は、抵抗の精神を呼び起こすだけでした**。ルシファーはキリストへの嫉妬が勝つことを許し、より決意を固めました{PP 35.3, emphasis added}。

このことを念頭に置いて、この問題を家庭に持ち帰ってみましょう。宇宙の調和は無条件の愛だけで成り立つのでしょうか？無条件の愛だけで地球上の秩序、調和、平和を保つことができるのでしょうか。私たちの周りの世界を見てください：無条件の愛は国家間の平和をもたらすことができますか？それは人類のすべての問題を解決することができるでしょうか？

これはおなじみの極論です。それは、私たちがそのど真ん中にいるからだ。愛対力/恐怖：どちらがより良い動機付けと秩序を維持しているのか？

ご覧のように、これは簡単な質問ではありませんし、神とサタンの間の大きな論争が始まったのはまさにこの問題だからです。私たちがこの質問にどのように答えるかによって、私たちは神とサタンのどちらかの側に位置することになります。

イエス様は、最後の日には咎が増えると言われました。咎には暴力が内在しているので、暴力も増加するでしょう。キリストはまた、最後の時代はノアの時代に似ているとも言われました。驚くことではありませんが、ノアの時代は暴力に満ちた時代でした。

> …彼の[マンカインドの]心の思いのすべての意図は、絶えず悪でしかなかった… (創世記6:5, emphasis added)。

> …そして、地もまた神の前に堕落し、地は暴力に満ちていた」（創世記6:11）。

宇宙は洪水の中で、「ルシファーが天で確立しようとした管理の結果」を見た。

他の世界の聖なる住人たちは、地上で起こっている出来事に深い関心を持って見守っていました。**大洪水の前に存在していた世界の様子を見ていると，ルシファーがキリストの権威を拒否し，神の律法を捨てて，天に統治を確立しようとしていた結果が明らかになっていました**。大洪水以前の世界に存在していた罪人たちの中には，サタンが支配していた臣下がいたのです。人の心の思いは絶えず悪でしかありませんでした。創世記6:5あらゆる感情、衝動、想像力が、**純粋さと平和と愛という**神の原則と対立していました。これは、神の被造物から神の聖なる律法の制限を取り除こうとするサタンの方針の結果として生じた、ひどい堕落の例でした。

サタンの律法の力は非常に欺瞞的で、善の名の下に、あるいは神の名の下に、私たちを邪悪な、意地悪な、暴力的な行為に駆り立てます。これを解決する唯一の方法は，神のアガペの愛の律法の抑制です。

…そして罪を犯した

彼の商売の豊富さによって 不義の豊富さによって ルシファーの新しい道徳的な法則 被り物のケルブは内側の暴力で満たされるようになり その結果、彼は「罪を犯した」のです。不義、暴力、罪は切っても切れない関係にあります。それらは密接に絡み合っています。暴力は不義の中に組み込まれているので、この道徳的な法則に基づいて行動する者は、本質的に暴力的なのです。これらのいずれかに神が関与していると言うことは、神が三つのすべてに関与していると言うことです。もし神が暴力的であるならば、神もまた咎人であり、罪人なのです。

ルシファーは、神の宇宙で初めて罪を犯した存在であることに注目してください。罪という言葉の聖書的な意味は何でしょうか？ヘブライ語とギリシャ語の定義を見て、イエス様がどのように定義しているかを見ていきます。

ヘブライ語の châtâ' は、「（比喩的にも一般的にも）正しく見逃すこと、したがって（比喩的にも）罪を犯すこと、推論的には、没収、欠落、償い、悔い改めること、（因果的に）迷いを導くこと、非難すること」（ストロング辞典）を意味します。

正しくは、「罪」とは、的外れなことを意味します。ギリシャ語の"罪"の定義は、このことを理解するのに役立つように、もう少し多くの意味を追加します。"マークを外して、賞品を分けてもらえないこと。特に（道徳的に）過ちを犯すこと。

間違った判断をすること、間違った判断をすること、間違っていることです。何に関して間違っているかというと、何に関して間違っているのでしょうか？ギリシャ語の定義では、道徳に関連しているとされています。罪とは、神の律法の代わりにサタンの道徳律法を使うことです。パウロはヘブル書の中で、イスラエルの子供たちの砂漠での反乱についての詩篇の言葉を引用して、言い換えています。

かれらはいつも**心の中で迷いに迷っている。**
私の道」（ヘブル3:10、強調）。

KJVはこう述べています。

かれらはいつも**心に誤りがあり**、わたしのことを知らない。
ヘブル3:10、強調されています）。

彼らは、神の道を知らなかったために、神のアガペー愛の道徳律法を知らなかったために、「いつも誤りを犯す」、あるいは心の中で罪を犯すのです。
最終的には、イエス様がこのことを理解するのを助けてくださいます。しかし、その前に、聖書が罪を単数形の「罪」と複数形の「罪」の二つの方法で表現していることを理解しておかなければなりません。違いがあるのでしょうか？イエス様は、主に単数形の「罪」に関心があるようです。
イエス様についての二つの新約聖書の預言は、イエス様がご自分の民を"罪"から救うと言っています。最初の預言は天使によってヨセフに与えられました。

ダビデの子ヨセフ、あなたがたの妻マリアを恐れてはならない。彼女は**御子**を生み、あなたがたはその名をイエスと呼ばなければならない。

イエス」という言葉はヘブライ語の「エホシュア」から来ています。1つ目はエホバ-「現存する方」-であり，2つ目はヤシャ-であり，これは救う，助ける，助ける，救うという意味の言葉を意味します。天使がヨセフに「イエス」と呼ぶように言ったのは、「イエスはその民を罪から救う」からです。彼はサタンの律法と，この律法が私たちの心に投影した神の偽りのイメージから，私たちを救い，助けに来て，助けてくださるのです。私たちは、この報いと罰の道徳的な律法が神の道徳的な律法だと思っていましたが、実際はサタンの律法でした。イエス様は、神が善悪ではなく、アガペーであることを私たちに示してくださいます。
第二の預言は、バプテスマのヨハネの父に与えられた。

あなたは主の御前に出て、主の道を準備し、神の民に罪の赦しによる救いの知識を与えるために、高みからの日の丸が私たちを訪れた神の優しいあわれみによって（ルカ1:76-78、強調）、主の御前に出て行くのです。

バプテスマのヨハネは、イエスが"罪の赦しによって、その民に救いの知識を与える"ための道を用意しました。罪の赦しとは、「自由、（比喩的に）赦し：解放、赦し、自由、赦し」（ストロング・コンコーダンス）を意味します。サタンの道徳律法の下では、罪は赦されず、罰せられていました。
伝統的にユダヤ教では、罪は生け贄を捧げることによってのみ赦されると考えられていました。ヨハネはその考えを捨て、バプテスマを通して罪を赦すようになりました。この救いの知識は、人々が自分たちが赦されたことを知る必要があったことを意味します。人々は、自分たちの罪の責めから解放されたことを知る必要がありました。これが彼らを救うものでした。なぜなら、イエスがミニストリーを始めたとき、イエスはバプテスマもせず、ただ「あなたがたの罪は赦されました」と宣言したからです。

イエス様は、救いの知識、神の恵み、赦し、赦しの知識を伝え始められました。そして、すべての罪が赦されたことを人々に伝え始めました。過去形です。彼らはすでに赦されていました。実際、彼らは常に赦されていたのです。福音は永遠の福音であり、永遠の良い知らせです。

これこそが、イエスが教えられるために来られた救いの知識でした。イエス様が「罪」をどのように扱ったか、そしてファリサイ派の人々がどのように反応したかに注目してください。

> イエスは彼らの信仰を見て言った "息子よ、あなたの罪は赦された""なぜこの人はこのような冒涜を話すのか？"神以外に誰が罪を赦すことができるのか？"... "麻痺した人に『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起き上がってベッドに入って歩け』と言うのとでは、どちらが簡単だろうか？しかし、人の子が地上で罪を赦す力を持っていることを、あなたがたは知っているだろう」 - 主は麻痺した者に言われた。

ファリサイ派の人々にとって、キリストの言葉は冒涜的なものでした。彼らはこれらの新しい展開に全く満足していませんでした。赦しの言葉の中で、キリストは彼らの経済全体、すなわち犠牲のシステムを脅かしていたのです。ファリサイ派の人々は、少なくとも年に一度は動物のいけにえによって天の赦しを得なければならないと考えるように導くことによって、人々を霊的・経済的な束縛の下に置いていました。これが神殿の経済を維持し、お金が彼らの国庫に流れ込んでいたのです。今、イエスは、全人類が神の政府によって赦され、赦されていることを発表することによって、彼らの生計そのものを損なっていたのです。

罪の赦しの問題は、神とサタンの間で行われている原則の戦いの中心にあります。サタンは「告発者」という意味の名前で、わたしたちは皆、何らかの形で罪を償わなければならないと考えています。彼は１ポンドの肉を要求します。このようにして、赦される前に、私たちが飛び越えなければならないあらゆる種類の輪を設けています。しかし、イエス様は、私たちはすでに赦されていると教えられました。イエスは，神がわたしたちの「罪」をわたしたちに押し付けたことがないことを教えられました。このことは，救い主が人々をどのように扱ったかを見れば明らかです。姦淫した女は，真っ向から赦されました。ザッケオもそうでした。上で述べた麻痺した者や十字架の上の泥棒，そして他のすべての人もです。

イエスの時代の霊的指導者たちは、罪と赦しに対する神の姿勢を知っていたはずです。それは彼らの巻物に書かれていました。

> ...あなたは私の魂を堕落の淵から愛をもって救い出してくださいました。
>
> あなたがたは金で甘いサトウキビを買ったわけでもなく、いけにえの脂肪で私を満足させたわけでもない。"わたし、わたしでさえも、わたしのためにあなたがたの罪を消し去る者であり、あなたがたの罪を覚えていない"（イザヤ43:24-25）。

私はあなたの罪を雲のように消し去ったあなたの罪を雲のように私のもとに帰りなさい。私はあなたがたを贖ったのだから。天よ、歌え、主はそれを成し遂げられたのだ。地の下の者よ、叫べ、山よ、森よ、その中のすべての木よ、歌え。主はヤコブを贖い、イスラエルの中でご自身を輝かせてくださったからである（イザヤ44:22-23）。

イエス様は、私たちの罪を赦すために来られたのではありません。イエス様は、私たちの罪がすでに赦されていることを知るために来られたのです。このことは、次の節に新たな意味を与えるでしょう。

これは新しい契約のわたしの血であり、罪の赦しのために多くの人のために流されたものです（マタイ26：28）。

すべての預言者たちは、彼の名によって、彼を信じる者は誰でも罪の赦しを受けることを証しています」（使徒言行録10:43）。

ですから、兄弟たちよ、この人を通して、罪の赦しが宣べ伝えられていることを知ってください（使徒13：38）。

イエスはどうして罪人と罪人をこれほどまでに違う扱いをすることができたのでしょうか。それは、イエスが御父の在り方を知っていて、それを反映していたからです。

さて、もう一つの罪がありましたが、イエス様によると、それは「罪」よりもはるかに深刻なものでした。使徒ヨハネによると、この「罪」は死に至る可能性がありました。

もし兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見た者があれば、その者は問うであろう。死に至る罪があります。そのことについて祈るべきだとは言っていません（1ヨハネ5：16）。

ヨハネによると、"死に至らない罪"と"死に至る罪"があります。これはどういう意味でしょうか？死に至る罪とは何でしょうか？その答えを得るために、私たちは再びイエス様に立ち返らなければなりません。次の節で、イエス様が「罪」という言葉をどのように再定義されているかに注目してください。

もし私が来て彼らに話しかけなければ、彼らには何の罪もなかったのに、今では罪の言い訳ができない（ヨハネ15:22）。

もし私が他の誰もしなかった業を彼らの間で行わなかったなら、彼らは罪を犯すことはなかっただろうが、今、彼らは私と父の両方を見て憎んでいる（ヨハネ15：24）。

聖霊が来られた時には、罪と義と裁きとを世に宣告されます。

アダムが「善悪の知識の木」を食べて以来、この世に生まれた人は皆、罪人であることを私たちは知っています。では、イエスはどのようにして、「もし私が来て、彼らに話しかけなければ、彼らは罪を犯さなかっただろう」と言うことができるのでしょうか？また、「もし私が彼らの間で、他の誰もしなかった働きをしなければ、彼らは罪を犯さなかっただろう」と言うことができるのでしょうか？

先ほども述べたように、イエス様はここで「罪」という言葉を再定義されました。"イエス様が話している言葉やイエス様が行っている業を信じないことです。言い換えれば、この罪とは、イエス様を御父の人格に関する最終的な権威者として受け入れないことです。しかし，御父を拒絶することによって，彼らは御父を拒絶していたのです。「彼らはわたしを見て，わたしと御父の両方を憎んだ」のです。そして，御父はわたしたちの罪をわたしたちに不利に扱ったことはありませんでした。この真理を拒否することは死につながる罪です。

イエスは、聖霊が来て、世の罪を告げると言われましたが、なぜでしょうか？"彼らが私を信じていないからです。"イエス様は、この"罪"を先ほどの"罪"と結びつけてはいません。この「罪」は、イエス様を信じないこと、イエス様の言葉を信じないこと、イエス様の働きを信じないことに関係しています。この「罪」は、私たちの「罪」が赦されることによって、イエス様が与えられるようになった救いの知識を信じないことに関係しています。イエス様によると、私たちに自由に与えられたこの恵みを拒否すると、私たちは「罪」の中で死ぬことになります。

> そして、イエスは再び彼らに言われた、「わたしは去っていく。私が行くところには、あなたがたは来ることができない」... 「それゆえ、私はあなたがたに、あなたがたは罪の中で死ぬと言った。

神は無条件の愛、公平な愛です。神は決して私たちの罪を私たちに押し付けることはありません。コリント１コリント１３章を思い出してください。この知識を拒否すること、神とはこういうものであるということを拒否すること、これは許されない罪です。しかし、私たちがこの良い知らせを拒否してしまえば、私たちが赦され、自由になり、赦され、赦されたと確信させるために、神ができることはもう何もありません。イエス・キリストを遣わすことによって、神はできる限りのことをしてくださいました。これ以上、神ができることや言うことは何もありませんでした。

> しかし、聖霊を冒涜する者は決して赦されることはなく、永遠の非難の対象となります（マルコ3:28-29）。

> 見ている者は見ても分からず、聞いても分からない。(マルコ4:12)。

これが罪だこれは"的外れ"です私たちが神の愛と恵みに覆われていることを見ない、知覚しない、理解しない、私たちが赦されていることを見ない、知覚しない、理解しない...これが人間性の問題です。

そして、これがルシファーの不義が行ったことです。それは、神の真の知識であり、その知識の中で、私たちが赦されているという知識であり、実際には罪を犯していないかのように考えられているという知識なのです。これは驚くべき恵みです。

ルシファーは、「告発者」であるサタンとなって、神の恵みの真の知識から道を踏み外しました。彼は非難のシステムを作りました。そして、他の人にも彼に加わるように導き、彼らも彼の非難に加わろうとしました。イエスは、「罪の赦し」によって救いの知識をもたらすために来られたのです。

> 神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、その右手を王子と救い主に昇格させました（使徒5:31）。
>
> ですから、兄弟たちよ、この方を通して、罪の赦しが宣べ伝えられていることを、あなたがたに知らしめてください。
>
> 主の血による贖い、罪の赦し、主の恵みの豊かさによる贖いがあります（エペソ1:7）。
>
> 主は私たちを暗闇の力から解放し、愛の御子の王国へと導いてくださいました。

その「的外れ」は、神が恵みの神であるという真理を見逃しているということは、イエスが生まれつき目の見えない男を癒したときに、再び強化されます。

> "私がこの世に来たのは 裁きのためである" "見えない者が見えるようにするためである" "見える者は盲目にされるかもしれない"その時、イエスと一緒にいたパリサイ人たちの何人かがこの言葉を聞いて、イエスに言った、「私たちも盲目なのか」。イエスは彼らに言われた。「もしあなたが目が見えていたなら、あなたには何の罪もなかったでしょう。ですから、あなたがたの罪は残っています」（ヨハネ 9:39-41）。

キリストは、アガペの愛という神の性質を知らない人々に明らかにするために来られました。無知によって盲目になった者には罪はありません。しかし、神を信じた後では、神を本当の姿で見ることができます。この良い知らせを受け入れれば、彼らは本当に自由です。使徒ヨハネは続けて言います。

> そして、私たちは、神の子が来られ、私たちに理解を与えてくださったことを知っています。これこそが真の神であり、永遠の命である（第一ヨハネ5:20）。
>
> あなたがたは真理を知り、真理があなたがたを自由にする（ヨハネ8:32）。

ある人たちは、自分たちが神を知っていると思っていますが、イエスのあかしは自分たちの理解とは一致しません。そのため、彼らはイエスの神の啓示を拒否します。しかし、彼らが「見た」ことは、イエスが教えられたことと一致していません。彼らの罪、つまり「しるしを見落としている」のです。

もし私たちがすでに赦されているのであれば、私たちを非難するのは誰でしょうか？ルシファーが罪を犯す原因となったのは、彼の中にあった不義でした。不義は彼の商売であり、その豊富さによって、彼は「内なる暴力で満たされた」ようになり、罪を犯しました。不義は彼を"的外れ"にしました。ルシファーはもはや神を本当の神として見ていませんでした。代わりに、彼は神を自分と同じようなものとして見た：非難する者、非難する者。彼は神を暴力的な神として見た

サタンの律法は非難的であり、その結果、彼の性格は非難的になりました。神は非難者ではないので、彼の非難的な性格は彼を神から非常に遠ざけました。糾弾は、光の運び手である「ルシファー」を告発者である「サタン」に変えたものです。

> 告**発者としてのサタンの働きは、天で始まりました**。これは人間が堕落して以来、地上でのサタンの働きであり、**この世の歴史の終わりに近づくにつれて、特別な意味でのサタンの働きとなるでしょう**。自分の時間が短いことを知った彼は、人を欺き、**滅ぼす**ために、より熱心に働くようになります。地上の人々が，弱さと罪深さの中にあってもエホバの律法を尊重しているのを見て，彼は怒ります。彼は、彼らが神に従わないと決心しています。彼は彼らの不甲斐なさを喜び、すべての魂を陥れて神から引き離すための仕掛けを用意しています。**彼は神と、あわれみと愛、憐れみと赦しをもって、この世で神の目的を遂行しようと努力するすべての人を非難し、非難しようとしています**{COL 167.1, emphasis added}。

神は決して非難しません。この反逆の期間中、神様は一度もサタンを非難したことがありませんでした。ミカエルは、「モーセのからだのことで悪魔と争っていたとき、彼を非難することはせず、『主はあなたを叱りつけられる』と言った」(ユダ9)。と言ったのです（ユダ9章）。

犯人はまたしても、不義です。この道徳的な律法は非難的で暴力的であり、その信奉者を神の真の知識から遠ざけるように導いてしまいます。すべての非難はルシファーとその律法に由来するものであることを理解することは非常に重要です。

8. 私は王座を昇格させる

大論争の学生の間で優勢な信念は、ルシファーの原罪はプライドだったということです。プライドが原罪だったのでしょうか、それとも他の何かだったのでしょうか？プライドが彼の原罪であったという見解は、次の節に基づいています。

> わたしは**天に昇り、神の星々の上にわたしの王座を高くする**。わたしはまた、北の最も遠い側にある会衆の山の上に座り、雲の高みの上に昇り、最も高い方のようになる（イザヤ14:13-14、強調）。
>
> あなた**の心が持ち上げられたのは、あなたの美しさのためであり、**あなたはあなたの素晴らしさのために、あなたの知恵を堕落させた（エゼキエル28:17、強調しています）。

何と信じられない言葉だろう。何という野心、何という思い込み、何という誇り！"私は出世する...私は王座を昇り...会衆の山の上に座り...上に昇り..."私は最高の高貴な者のようになる！"

罪のない存在が神に反抗したのは、これが初めてのことでした。ルシファーは天に昇り、神の天使である星々の上に自分の「玉座」を上げようとしているのです。これは神の心が謙虚で、柔和で、無欲で、愛にあふれ、永遠に喜びを与える神とは全く調和していません。ルシファーはこの道から完全に逸脱しており、イエスの謙遜さに反しています。

> キリスト・イエスは、神の形をしていて、神と対等であることを奪うこととは考えず、ご自身を無名とされました。そして、人としての姿を見出された彼は、自らをへりくだり、死に至るまで従順となり、十字架の死にまで至ったのです（ピリピ2:5-8）。

ルシファーが高慢になったのは間違いない。テキストは明らかです。しかし、彼の高揚の欲求には何が関与していたのでしょうか？何が彼のプライドを引き起こしたのでしょうか？プライドは彼の問題の中心だった、またはそれは何か他のものの副産物だったのですか？

ルシファーは自分の玉座を高揚させようとしました。さて、ここで私たちが見ることができる具体的なもの、つまり玉座を見てみましょう。玉座」とはどういう意味でしょうか？ルシファーは、宇宙を支配したいという意味で、神の上に自分を高揚させようとしたのでしょうか？自分を高揚させるために、神の統治を廃止しようとしたのでしょうか。確かに、このことは「私は自分の玉座を高揚させる」という言葉に象徴されているように見えます。"玉座"の意味は？

玉座は象徴です。文字通り、王様が座る椅子のような家具です。この椅子は、王とその王国とその法律の象徴となっています。玉座」という言葉は、主権、主権、支配、支配と同義です。

王には臣民、つまり地理的な領域に住む人々が必要である。王はまた、秩序が存在するように、民衆の間の調和と平和的な共存を確保するための規則と指針を必要としています。聖書が王の法の象徴として使っているのは「笏」です。聖書に出てくる「笏」という言葉は、しばしば「棒」や「杖」という言葉と入れ替わることがありますが、その象徴的な意味は同じです。

律法を司るメシヤがユダの部族から来るというヤコブの預言は、「笏」と「律法」を明確に結びつけています。

笏はユダから離れず、律法学者もその足の間から離れず、シローが来るまで。

他のテキストでは、「玉座」と「笏」を「義」と関連付けていますが、これは神のアガペー愛の律法です。

神よ、あなたの御座は永遠に永遠にあり、義の笏は**あなたの国の笏である**（詩篇45:6、強調）。

イエス様ご自身は「鉄の棒」で支配されているように描かれています。

その口からは鋭い剣が出ていて、それをもって国々を打つ。そして、ご自身は**鉄の棒**をもって彼らを**支配される**（黙示録19:15、強調）。

"鉄の棒"とは、聖書の言い方で、神の律法は強い、鉄のように強いという意味です。これは、神が力や暴力で支配するという意味ではありません。神の律法は永遠に続く永遠の律法なので、ルシファーが神の律法を取り除こうとしても、決して成功しないということを言い表しています。

覆うケルブとして、律法の守護者として、ルシファーは神が律法によって宇宙を支配しているという事実をよく知っていました。天国に昇り、神の天使たちの上に彼の玉座を高揚させる彼の願望は、彼が神の法を脇に置いて、彼自身の法を実行したいと思っていたことを意味します。彼は宇宙の律法を司る者になりたいという願望を抱くようになりました。彼は自分の統治方法が神の律法であるアガペー愛に匹敵するだけでなく、それをも凌駕するものになることを望んでいました。しかし、彼の統治方法は「咎の玉座」であって、義ではありませんでした。詩篇作家が言っていることに注目してください。

律**法によって悪を仕組む咎の御**座が、あなたと交わることができるでしょうか（詩篇94:20、強調）。

この節は非常に重要なことを教えています。"不義の座"は"律法によって悪を仕組む"ということです。これは何を意味しているのでしょうか。

ヘブライ語の yâtsar-devise- は、「形に成形する、特に陶工のように」という意味です (Strong's Concordance)。これは、何かを形に押し込むという考えです。ルシファーは悪を形、形、枠組みに押し込めました。その枠組みは道徳的な法則である。悪はこの法則の中に埋め込まれています。

詩篇作家が問いかけているのは、次のようなことです。邪悪な律法を使う邪悪な王座が、神との交わりを持つことができるだろうか、ということです。答えは「いいえ」です。神の律法の擁護者であるイエスは、「義を愛していた」が、ルシファーの不義の律法を「憎んでいた」のです。

> あなたがたは義を愛し、無法を憎んできました[INIQUITY, KJV]。

> サタンは、神の**国の規則に自分の印鑑を固定するために、神の国の政府を変えようとしました。キリストはこの願望に引き込まれることはなく**、ここでキリストに対する戦いが始まり、強くなっていきました。秘密裏に働いていたが、神には知られていたルシファーは、人を欺くような性格になった。彼は真実のために偽りを語ったのです{CTr 208.2, emphasis added}。

ルシファーが悪の法則を考案すると、彼はそれを広め始め、宇宙の知的存在にそれを「売りつけ」ました-これが彼の商売であり、彼の商品であり、彼の管理の腐敗した原則でした。

選挙運動のようなものだったのでしょう。実際、黙示録12:9「天に戦争があった」で使われている「戦争」を表すギリシャ語は、英語ではpolmos-pololemicです。ルシファーは大規模なポールミックを扇動しましたが、それは今もなお、この地上で荒れ狂うように続いています。

ルシファーの最高の野望は、「会衆の山の上に座る」ことでした（イザヤ14:13）。会衆」とは何でしょうか？私たちはヨブ記にそれについて読んでいます。

> さて、ある日、**神の子らが主の前に姿を現しに来たとき、**サタンも彼らの間に入ってきた。主はサタンに言われた、「あなたはどこから来たのですか」。そこでサタンは主に答えて言った、「地を行ったり来たりしているところから、また、地を行ったり来たり歩いたりしているところから」（ヨブ記1:6-7、強調）。

ここでは神の子らの集まりが　主の前に姿を現したと書かれているサタンも来ました。彼はどのような立場で来られたのでしょうか？彼は、「地を行ったり来たりして、地を行ったり来たりして、その上を行ったり来たりしている」地全体を支配する者の立場で来られました。地を行ったり来たりして、その上を行ったり来たりしている」とは、いったいどういうことなのでしょうか。その意味を、第三章の「*神の怒り」アンマスクド*でわかりやすく説明しています。"神の怒り」は天から啓示されています。そこでは、これらの言葉の古代ヘブライ語の意味が、サタンが報いと罰のシステムで地上を支配していることを完全に裏付けるものであることを読者は知ることになるでしょう。

ヨブ記に記述されているこの集会は、「神の子」が誰で、どのような立場でこの集会に来たのかを示しています。彼らもまた、宇宙に散らばっている他の王国の代表として来ました。なぜ彼らは神の前に姿を現しに来たのでしょうか。

"Present"-yâtsab-は、「（何かを）留まるように配置する」という意味である（ストロング辞典）。ゲゼニウスのヘブライ語・カルデア語辞典によると、yâtsabは「自分を立てる、立場を取る」、または「誰かのために立ち上がる、誰かの側に立つ」という意味もあることがわかっています。

これは、この「神の子ら」である神とサタンとの間の会議について、全く新しい理解を与えてくれます。この「会衆」とは、国家元首たちの会議でした。敵対者であり、告発者であるサタンが神とその律法に対して立ち上がっており、「神の子ら」は神の弁護のために立ち上がっていたのです。

会衆の山に座る」というルシファーの願望は、彼が律法を司る者として崇拝されることを望んでいたことを意味しています。彼は最終的には彼自身の法によって宇宙、 "会衆"を支配することを望んでいた。これが彼の反乱の根本的な理由でした。

ルシファーは、神だけが満たすことができる地位を欲しがっていました。創造主は被造物を死ではなく生のために設計されました。しかし、いのちは、いのちの愛という道徳的な法則によって生きることを条件としています。電池式のおもちゃは、正しい電池が使われているときだけ機能します。もし違う電池を入れてしまうと、おもちゃは正しく機能しないかもしれませんし、全く機能しないかもしれません。同様に、もし私たちが生命を持つためには、生命の法則である神の法則と調和していなければなりません。ルシファーの律法は、生命を破壊する律法です。これがどのように機能するかは、「恐れ」という章で説明します。

しかし、あなたは言うかもしれませんが・・・ルシファーの心は「美しさ」のために持ち上げられていたので、すべては「プライド」のためだったのです。ええ でも本文によると 彼は"素晴らしさ"のために "知恵"を堕落させたとも書かれています 彼の知恵とは外見や肉体的な美しさのことですか？

知恵と外見と何の関係があるんですか？何もないわしかし、それはすべて知性に関係しています。"美しさ"と"素晴らしさ"という言葉は　ルシファーの知性を表しています それは"不義"と呼ばれるものを 作ったものです彼は自分の"不義の玉座"が 律法で悪を仕組むものだと 思っていたに違いありません それが神と対等な立場に 彼を置いたのです "私は最も高貴な者のようになる"

では、プライドはどのようにして方程式の中に入ってくるのだろうか。この場所では『売国』は腐敗した政権の象徴である」という先ほどの引用文の後には、別の発言が続きます。

> トラフィック」とは、霊的な職に自己中心的なものを持ち込むことを意味します。霊的な奉仕においては、宇宙の利益のための目的と業以外には、神に受け入れられるものは何もありません。他の人に良いことをすることは、神の栄光に報いられるでしょう{4BC 1163.7, emphasis added}。

霊的な職に自己を持ち込むこと」とはどういうことでしょうか？咎とはどのように関係しているのでしょうか？私たちは、例を見れば、このことをよりよく理解することができるでしょう。

パリサイ人を例に挙げてみましょう。彼らは高慢で自己顕示欲に満ちていました。イエスは彼らを「不義の働き者」と特徴づけられました。このように、彼らは私たちがこのことを理解するための完璧な模範となります。彼らを通して、私たちはルシファーの高慢さの真の原因を認識することができるはずです。

> **しかし、パリサイ派の人々が大切にしていた原則は、あらゆる時代の人間性に特徴的なものでした。**パリサイズムの精神は人間の本性の精神であり，救い主がご自身の精神や方法とラビの精神や方法との対比を示されたように，救い主の教えはすべての時代の人々にも同じように当てはまります - {MB 79.2; emphasis added}。

> キリストの時代、ファリサイ派の人々は、徳**の報酬と**みなされる世俗的な名誉と繁栄を**確保するために、**絶えず天の好意を**得よ**うとしていました。同時に、彼らは人々の注目を集め、聖性の評判を得るために、人々の前で慈善の行為を行進していました - {MB 79.3; emphasis added}。

ファリサイ派は天の寵愛を受けようとしていたなぜですか？"徳の報酬"を得るためです彼らは、もし自分たちが高潔であれば、神が世俗的な名誉と繁栄を与えてくれると信じていたのです。このような考え方は、"あらゆる時代の人類の特徴"であることに注目してください。これは"人間性の精神"であり、サタンとその善悪の知識の木の精神と知恵によって力を与えられていることを知っています。

ファリサイ派の人々は，神の国は功罪制度によって機能していると信じていました。この一つの誤解が、彼らを完全に間違った道へと導いたのです。

しかし、神のアガペの愛は公平で無条件であり、ここでは功罪は関係ありません。私たちが神の好意を獲得したり失ったりするためにできることは何もありません。神の愛は、私たちの善し悪しに基づくものではありません。神の愛は、神が誰であるかに基づくものであり、神は愛です。神は単にわたしたちを愛しておられます。神は決してわたしたちを拒絶することはありません。神と神の生き方を受け入れるか拒否するかは、わたしたち自身が決めることなのです。神は絶対的な存在です。

神の好意を得るというこの概念はどこから来たのでしょうか？それは律法によって悪を仕組む 不義の王座から来ていますルシファーは、神の無条件で公平な愛の律法を拒否しました。彼はアガペの愛の神の本質と性質を拒絶し、この拒絶は無条件の愛を捨てることを含んでいました。

ここから私たちは、次から次へと続く一連の結果を目の当たりにすることになります。もしルシファーが考案した律法が、神の無条件アガペ一愛の統一的で混じり気のない不可分の律法と本質的に相反するものであったならば、彼の律法は反対の概念が混ざり合い、可分で条件付きのものであったのは当然のことです。

アガペーの否定は、彼が導入した原理が、自由に与えられる恵みとは正反対のものでなければならないことを意味していました。もしあなたが恵みを取り除いたならば、今あなたが持っているものは功罪のシステムになります。人はそのために何かをしなければならないので、それに値しなければなりません。今、「良い」仕事はポイントを稼ぎ、「悪い」仕事はポイントを失います。ポイントを失うということは、罰を受けるということです。

簡単に言えば、これは善悪の知識の木の背後にある原理であり、報酬と罰のシステムです。咎は、自分ができることだけでなく、他の人よりも優れていることに焦点を当てています。このシステムは競争の根源であり、その結果、プライドと利己主義を生み出します。このシステム自体が、サタンの高慢と自己高揚の根源なのです。このようにして、彼が高慢で利己的になったのは、彼自身の道徳律法の薄っぺらい性質によるものであった。

不公平はルシファーの中に「あった」ものです。したがって、それは神と正反対の原理でなければなりません。そのように、それは神の無条件のアガペー愛の原理を歪曲したものでした。アガペー愛に対する反動として、それはその正反対のものです。このように、咎は無私ではなく、条件付きで、部分的で、利己的なものでなければなりません。

ルシファーが神の無条件かつ公平な愛を宇宙の法のルールとして取り除いた瞬間、彼は恣意的な支配者によって課された恣意的なシステムを導入しました。彼が恣意的なシステムを導入した瞬間、彼は力、暴力を生み出しました。その結果、自由が取り除かれるのです。このように不義は自由、自由を取り除きます。

そして、彼が条件を作った瞬間、彼は階層も作りました-ある条件を満たせば、人はある特権を得ることができます。逆に、ある条件を満たさなければ、ある種の罰を受けることになる。不公平はピラミッドを作り、善と悪のバランスに基づいた功利の尺度を作りました。これは、作品に基づくすべてのヒエラルキーや宗教の基礎となっています。ルシファーがヒエラルキーを作った瞬間、プライドが生まれた。

彼が彼の法律を導入するとすぐに、ルシファー（およびその後、彼に続いて天使たち、同様にそれを採用した人類）は、善と悪の二重人格を獲得し、開発しました。彼と彼の信者は今、2つの明白な極性の反対の間で行ったり来たりしていました。二重人格は、神の不可分の律法に対するこの反逆の必然的な結果であった。ルシファーとその信奉者たちは、もはや「全体」や「完全」な性格を持っていません。

プライドもまた、ルシファーの報いと罰の道徳法則に支配されているすべての心の必然的な状態です。イエス・キリストの無条件の愛の原則の外では、これから逃れることはできません。イエス様とその教えだけが、私たちの心に潜むこの悪しき律法から私たちを救うことができるのです。イエスの教えは目を見張るようなもので、神の原則がどれほど不義からかけ離れているかを明らかにします。

ルシファーの「天に昇りたい」という願望は、自己高揚、高慢、自己顕示欲の最初の例でした。これが功利主義に基づくヒエラルキーの制度の始まりであり、天国で最も輝かしい天使である彼を頂点とした。これが適者生存の概念の始まりです。このレースの勝者は一人だけで、金メダリストは一人だけです。そして、「ナンバーワン」になるためのどんな手段も完全に正当化される。

それが可能であれば、ルシファーは、宇宙の唯一無二の君主になることに反対する者がいないように、何の考えもなく神を滅ぼしただろう。なぜですか？彼の新しい法則の本質的な理由は、トップに一人だけのための余地があったからです。その上、彼は最終的に、最初から彼が望んでいたこと、つまり、競争相手を殺すことを正確にやろうとしたのではないでしょうか？それは、彼がカルバリーでイエスにしたことではありませんか？

実力主義の行政は自己高揚を促進し、ヒエラルキーを育む。プライドはヒエラルキーに組み込まれています。サタンのヒエラルキーは、権力、プライド、貪欲、野心、欺瞞、汚職、怠慢、恐れ、強欲、怒り、偏見、悪意を生み出します。これらはすべて、神の御霊の実に反するものです。ヒエラルキーは人々を服従させ、良心の自由を奪います。いわゆる高い理想を達成するために、詐欺や偽造を行い、目標を達成するためには何もしません。残忍や殺人にまで手を染めます。カイファの判決の例のように、「国民全体が滅びるのではなく、国民のために一人の人間が死ぬことが、わたしたちにとって都合がいい」（ヨハネ11：50）のです。

ルシファーは原罪がプライドだと　信じさせたいだけだなぜですか？これを信じることによって、私たちは彼の善悪の法則を知らないままになるからです。そして、私たちは全世界に浸透している彼の法則を知らない限り、私たちは神から疎遠になり、アガペー愛の彼の永遠の法則に違反することになります。

イエス様が悪魔を「初めから嘘つきで人殺し」（ヨハネ8:44）と言われた時、それはルシファーが天で作った道徳律法のことを指していました。彼の功徳律法は、プライドや利己主義、権力欲を生み出すものです。

> ルシファーは神の力を求めたが、神の人格を求めたのではない。彼は自分自身のために最高の場所を求め、彼の精神によって作動するすべての存在が同じことをするでしょう。このようにして、疎外、不和、争いは避けられないでしょう。支配権は、最も強い者の賞品となります。**サタンの王国は力の王国であり、すべての個人は、他のすべての者を自分の前進の障害物と見なし、あるいは、自分自身がより高い場所に登るための踏み台と見なしています**{DA 435.2, emphasis added}。

サタンの法則は、地上のすべての政府が広範囲の腐敗に悩まされている理由です。実力主義の原則に基づいて作られたキャラクターは、誇り高く、自己中心的で、自己中心的で、恣意的になります。このような環境では、通常、最も強く、最も聡明で、最も貪欲で、最も冷酷な者が生き残る。

神様はこれとは全く違う。誇りもなく、利己的でもなく、ご自身で頂点に立ちたいという思いもない。それどころか、イエス様はご自分の玉座を人間と分かち合うことさえ厭わないのです。

私もまた、克服して父の座についたように（黙示録3:21）、克服した者には、私の玉座の上に私と一緒に座ることを与えよう。

イエス様の結婚の宴のたとえ話は、「ある王様が息子のために結婚の宴を開いた」という話をしています。この物語は、王の召使が結婚式に招待するために、さまざまな客を招待するために出かけたが、それぞれが来ない口実を見つけたことを語っています。譬え話の最後には、驚くべきことが書かれています。

"それゆえ王道に出て行って、見つけた者を結婚式に招待しなさいそこで、しもべたちは街道に出て、**悪人も善人も、**見つけた者をすべて集めた。すると、結婚式場は客でいっぱいになった（マタイ22:9-10、強調）。

イエス様はここで何をおっしゃっているのでしょうか？なぜ神は「悪い者」と「良い者」の両方をご自分の婚礼の宴に招かれるのでしょうか？イエス様は、神様の恵みの律法は無条件で公平であると言っているのではないでしょうか？この恵みを知って、このゲストたちは変容しました。それは、イエス様が地上におられた時にされたことではないでしょうか？悪い人と良い人と一緒に食べたり飲んだりしたのではないでしょうか？慈悲と恵みの神の国をすべての人に広げてくださったのではないでしょうか？

一方、サタンの不義の玉座は、功利主義に基づいた価値のはしごを作りますが、それは偽の功利とは言えません。高慢な者は他の人と同じように霊的に病んでいますが、それ以上ではないにしても、自分の病気に気がつきません。彼らはそれに気づかず、何も必要としていないのです。

イエスは言われた、『元気な人には医者は必要ないが、病気の人には必要ない。私が来たのは、正しい者を悔い改めに導くためではなく、罪人を悔い改めに導くためである」（マルコ2:17）。

聖書全体を通して、神は自分の霊的な必要性を見ている人たちに関心を示されています。

貧しく貧しい者は水を求めているが、水はなく、彼らの舌は喉の渇きに耐えられない。
I,
イスラエルの神である私は彼らを見捨てません（イザヤ41:17）。

咎は神の律法の違反であるから、咎は神のアガペーの愛の律法に反し、対立し、完全に切り離されているのです。このことを理解することは非常に重要です。私たちは、神の恵みの玉座とルシファーの不義の玉座を混同してはいけません。両者は世界的に離れていて、共通点は何もありません。

ルシファーは、より安定した種類の「秩序」が存在するためには、「無条件」の反対語である「条件」が必要だと考えていました。これが、彼が私たちが生きている報酬と罰のシステムを作った究極の理由です。私たちは質問をしなければなりません：このシステムは機能していますか？

9. 庭の二本の木

聖書によると、サタンは宇宙全体で彼の不義の原則を「売り歩いた」ことが示されています。これは、すべての生き物が、彼の律法を受け入れるか拒否するかという同じ選択肢に直面していたことを意味しています。

> 主は私に異世界の景色を与えてくださいました。翼が与えられ、天使が都から、明るく栄光に満ちた場所へと私に付き添ってくれた。その場所の草は生きた緑であり，そこにいる鳥は甘い歌をささやいていた。その場所の住人は大小さまざまで，気高く，荘厳で，愛らしい人たちであった。彼らはイエスの姿をしており，その表情は聖なる喜びに満ちており，その場所の自由と幸福を表していた。私は彼らの一人に、なぜ彼らは地上のものよりもはるかに美しいのかと尋ねました。答えはこうだった　"我々は神の戒めに厳格に服従して生きてきたからだ"　"地上の者のように不従順によって堕落していないからだ"**それから私は二本の木を見ました　一つは街のいのちの木によく似ていました両方の木の実は美しく見えたが、一方の木は食べられなかった。彼らは両方の木を食べる力を持っていたが、一方の木を食べることは禁じられていた。そのとき，わたしの従者がわたしに言った，「この場所では誰も禁じられた木を味わった者はいないが，もし食べようものならば，倒れてしまうだろう」**{EW 39.3, emphasis added}。

神の宇宙のすべての人は、「生命の木」と「善悪の知識の木」のどちらかを選ぶ機会がありました。これは、神がすべての被造物に与えられた自由の大きさを物語っています。すべての世界は一人ずつサタンの提案を拒否しましたが、サタンの指揮下にあった天使の三分の一を除いては、サタンの提案を拒否しました。神が地球を創造された時、サタンは熱心に見守っていたに違いありません。彼はエデンの世界にいて、他の世界と同じように、彼の原理は木の象徴の下に隠されていました。

> あなたは神の園である**エデン**にいた…（エゼキエル28:13、強調）。

> 主なる神はエデンの東の方に庭を植えられ、そこにご自分が造られた人を置かれた。そして、主なる神は地面から、見る者に喜ばれ、食物に適したすべての木を生長させられた。**いのちの木もまた、園の真ん中にあり、善悪の知識の木であった**（創世記2:8-9、強調）。

天地創造の六日目に、サタンは神がアダムを地中から作り上げるのを見ていたに違いありません。サタンは、神がアダムに「善悪の知識の木」を食べさせようと誘うタイミングと機会を待っていたに違いありません。また、神がアダムに「善悪の知識の木」について警告しているのを聞き、その言葉に心が沈んだに違いありません。

それから主なる神はその人をエデンの園に入れて、その園を管理するように命じられた。主なる神は人に命じて言われた、「**園のすべての木を自由に食べてもよいが、善悪の知識の木は食べてはならない。**

神は最初にアダムを創造され、その後、アダムに地球の支配権を与えられました。アダムは慈愛に満ちた忠実なしもべとして、アガペをもって地球を支配することになったのです。彼は人類の父であり、彼の子孫の保護者であり、地球、空気、水に生息する生き物の広大な配列の保護者であることが予定されていた。

神はイブを創られる前に、すべての動物を創られました。そして、アダムのところに連れてきて、アダムがそれぞれに名前をつけました。

地面から主なる神は、野のすべての獣と、空中のすべての鳥を造って、それらをアダムのところに連れてきて、アダムがそれらを何と呼ぶかを見てみた。アダムがそれぞれの生き物を何と呼ぶにしても、それがその名前であった。それでアダムは、すべての家畜と、空中の鳥と、野原のすべての獣に名前をつけた。しかし、アダムには彼に匹敵する助っ人はいなかった（創世記2:19-20）。

アダムは動物の王国の名前を挙げながら、神がどのようにして動物を雄と雌にしたのかを観察しました。アダムは、地球上のすべての生き物の中に「自分に匹敵する助け手がいない」ことに気づき、心が沈んでいきました。彼の心には穴が開いていて、その穴を埋めるのに適した人がいないことを神は悟らせたかったのです。神はアダムに、人生の目的は関係を愛する関係であることを悟らせたかったのです。そして、「神は人間が一人でいるのは良くないと見て」、エバをお造りになりました。

イブはアダムの伴侶であり、助け手であり、援助者であった。イブは全地球の大きな喜びの源となりました。母親であるイヴは、地球の人口を増やすための器となります。

神ご自身がアダムに伴侶を与えられました。神は「彼のための助け手」、つまり、彼にふさわしい助け手を与えられました。**イブはアダムの脇腹から切り取った肋骨から作られましたが、これは、イヴがアダムの頭として彼を支配するのではなく、劣った者として彼の足下に踏みつけられるのでもなく、彼と対等な者として彼の側に立ち、彼に愛され、守られることを意味していました**。人間の一部であり、骨の骨であり、肉の肉である彼女は、彼の第二の自己であり、この関係の中に存在するべき親密な結合と愛着を示している。"人はまだ自分の肉を憎んだことはないが、肉を養い、大切にしている。""それゆえ、人は父と母を捨てて、妻と結ばなければならない。

イブはアダムの奉仕と労働の恩恵を受け、アダムと一緒に地球とその将来の人口の世話をすることになりましたが、地球の安全の責任はアダムの頭に強くかかっていました。

神が「善悪の知識の木」についての警告を与えたのはアダムでした。エバが創造された後、アダムはその警告をエバに伝えましたが、神はエバではなくアダムに直接警告を与えました。

サタンは，女性が一人でいるときに近づいたほうが成功する可能性が高いことを知っていました。イブが夫の側を離れて「善悪の知識の木」に近づいたとき、ちょうどいい時が来たので、サタンは蛇の格好をして行動を開始しました。

> さて、蛇は主なる神が造られた野の獣よりも狡猾だった。彼は女に言った　"神は本当に言われましたか『園のすべての木の実を食べてはならない』と？""私たちは庭の木の実を食べてもよい。しかし、庭の真ん中にある木の実については、神は『食べてはならない、触ってはならない。そこで蛇は女に言った「あなたは必ず死ぬことはありません。神は、あなたがそれを食べる日にあなたの目が開かれ、あなたは神のようになり、善悪を知るようになることを知っておられるからです」（創世記3:1-4）。

蛇の基本的な嘘、人類を完全に間違った道へと導いた嘘は、神は善と悪を知っている、つまり神は善と悪によって運営されている、神の性格は善と悪の両方が混ざっているということを意味するという声明でした。

それはイヴに善悪の知識の木を食べるように説得することでした。彼は，イヴにそうさせることができれば，アダムもそれに従う可能性が高いことを知っていました。もしアダムがこの木に関する神の警告を直接無視させることができれば、彼らの不従順は彼（サタン）を地上の支配者とし、彼は自動的にアダムの支配権を得ることになります。そうすれば、彼は天で開発した原理を地上で確立することができます。アダムは宇宙の他のすべての世界から拒絶されていたので、地球、エデンの園は、彼の王国の原則を確立するための領域を見つける最後のチャンスだったのです。

善悪の知識の木は、サタンの象徴であった。"悪を法で仕組む悪の玉座"である。この木には超自然的な力はありませんでした。庭の真ん中にある二つの木は、二つの反対の原則を表していました。すなわち、神の生の原則、アガペーの愛の道徳的な法則と、サタンの死の原則、報酬と罰の道徳的な法則、善悪の知識を表していました。

生命の木は超自然的な力を持っていました。

> エデンの園の命の木の実は**超自然的な美徳を持っていました。それを食べることは永遠に生きることでした。その果実は死の解毒剤でした**。その葉は生命と不死を維持するためのものでした。しかし、人間の不従順によって死がこの世に入ってきました。アダムは善悪を知る木の実を食べました。これが彼の試練だったアダムは失敗し、彼の罪が私たちの世界に災いの水門を開きました{MM 233.5, emphasis added}。

しかし、彼女はまた、この木はイエスの象徴である「不死の唯一の偉大な源」である「型」であったとも言っています。

> **生命の木は、不死の大いなる源の一種であった**。キリストについては、「彼のうちに命があり、その命は人の光であった」と書かれています。キリストは命の泉です。キリストに従うことは、魂を輝かせる生命を与え、生き生きとさせる力です。**人は罪によって、いのちの木へのアクセスを遮断されてしまいました**。今、イエス・キリストによって、いのちと不死は光を与えられています....{MM 233.6, emphasis added}。

生命の木は、イエスの兄弟（キリストの人間の一族、人間の一種である）が「知らなかった」知識の源であった。

> 彼ら（イエスの兄弟）は、イエスの教育が自分たちのものよりも高い種類のものであることを認識していました。しかし，彼らは，イエスが命の木，つまり彼らが知らなかった**知識の源に**アクセスできることを見分けられませんでした{DA 86.2, emphasis added}。

究極的には、イエス様の言葉、生と死、それが「いのちの木」なのです。

> "わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は永遠の命を持つ。わたしの肉は確かに肉であり、わたしの血は確かに飲むからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしの内に宿り、わたしは彼の内に宿る。生ける父がわたしを遣わし、わたしは父によって生きているように、わたしを食べる者もまた、わたし.... 霊こそが霊であり、肉は何の益もなく、わたしがあなたがたに話す言葉は、霊であり、命である。**これは、いのちの木の実を食べることです**（写本112、1898年） - {5BC 1135.8、強調追加}。

人類はキリストの"知識の源"である 生命の木を知らなかったキリストは、私たちがいのちを持つことができるように、その知識を与えるために地上に来られました。ですから、イエスは誰もが持つことができる最大の宝なのです。

庭園にある二つの木は、祝福の道／いのちの道と呪いの道／死の道という二つの道を表しています。神は被造物を愛し、永遠に彼らと一緒にいたいと願っておられるので、神は「生命の木」の原理だけを宇宙を支配するために使うことを意図していました。神は私たちのために永遠の命を望んでおられます。

> 主の命令が永遠の命であることを知っています。ですから、私が話すことは何でも、父が私に言われたように、私も話すのです（ヨハネ12：50）。

私たちは園の中の二つの木を理解しなければ、神とサタンの活動を区別することができません。生と死の問題は、この二つの木と、それが表す道徳的な法則にかかっています。この二つの木の違いを理解して初めて、神の心とルシファーの悪事の範囲と性質についての完全な真実を理解することができるのです。

創造主は、それぞれに代表的な木を与えることによって、優越性を争う二つの法則を目に見えて分離しました。サタンは自分の木を作ったのではありません。園では、「知恵」、つまり善悪の知識を代表する木は物理的な木であり、神が創造したので、物理的な木は死ななかったのです。そして、神が創造されたものはすべて善であるので、善悪の知識の文字通りの物理的な木も善であったのです。この木は、物理的に言えば、"食べ物に良い"、"目に心地よい"木でした。

> そこで女は、その木が**食べ物に適していること**、**目に心地よく**、**賢**くなるのにふさわしい木であることを見て、その実を取って食べました（創世記3:6、強調しています）。

この木は、サタンが何かを創造することはできないので、神によって創造されなければなりませんでした。物理的に言えば、この木は致命的なものではありませんでした。イブは、この木が園の他の木と同じように、「食べるのに適している」、「目に心地よい」ものであることを見ました。この特定の木が致命的だったのは、従順さの試練であると同時に、致命的な原理を表していたという事実です。彼らはサタンを自分たちの師匠であり支配者として選び、そうすることで、知らず知らずのうちにサタンの不義の原理も選んでしまったのです。こうして、サタンがこの世の神となったのです。

> しかし、たとえ私たちの福音がベールに包まれていたとしても、この**時代の神がその心を盲目にし、**神の姿であるキリストの栄光の福音の光が彼らの上に照らされることを恐れて、信じない滅びに向かっている人々にはベールに包まれています。私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主キリスト・イエスを宣べ伝えているのです。なぜなら、暗闇から光を輝かせるように命じられた神こそが、私たちの心の中で、**イエス・キリストの顔にある神の栄光の知識の光を**与えるために輝いておられるからです（第二コリント4:3-6、強調追加）。

イブがこの木の実を「人を賢くするのに望ましい」と考えたという事実は、文字通りの意味だけではなく、それ以上のことがあることを示しています。根、幹、枝、葉でできた木の実が、どのようにして「人を賢くする」ことができるのでしょうか？それはできません。したがって、善悪の知識の木は、原理を表す象徴でなければなりません。賢明であるように見える原理…神とアガペーの愛の原理よりも賢明であることさえ自慢しています…しかし、それは欺瞞的であり、致死的なものです。そのような木には、「賢さ」の訴えがあり、人を賢くするためのある種の望ましさがあります。

善悪の知識の木は、サタンの不正の玉座、つまり腐敗した政府を表していました。エバがそれを食べた瞬間、サタンは状況を掌握し、自分の王国の臣下としてエバを主張しました。サタンは彼女に、世界と神を、善と悪の陰影-光と闇-として見るように教え始めました。こうして、イヴは善と悪を知るようになりました。そして、サタンは彼女を利用して夫を誘惑し、食べるように誘惑しました。

アダムは妻の選択に非常に取り乱したに違いありません。この木から食べると死をもたらすという神の警告を思い返し、妻を失うという思いと照らし合わせて考えたに違いありません。それは激しく苦しい闘いだったに違いありません。最終的に、彼は屈服して、結果がどうなろうと、妻と一緒になることを決めました。この一つの決断が、サタンが地球を支配するための扉を開いたのです。アダムとイブの不幸な選択は、彼に自分の王国と法を確立するために必要な領土を与えたのです。

今や地球は"不義"に支配されるだろうしかし、神はこの破壊的なシステムの下で、救いに来ることなく、人類が滅びるのを見過ごされることはありません。神の御霊もまた、人類と共に働かれるのです。これからは、二つの原則、二つの道徳的な法則が、すべての鼓動する心の中で、覇権を求めて争うことになるでしょう。

キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法によって、私は罪と死の律法から自由になりました（ローマ8：2）。

その二つの動機とは、「いのちの霊の律法」であるアガペー愛と、「罪と死の律法」である善悪の知識であろう。これが"二つの対立する動機"です。

聖書はそれ自身の暴露者である。聖典は聖典と比較されるべきものである。学生は、聖書を全体として捉え、その部分の関係を見ることを学ばなければなりません。彼は、その壮大な中心テーマ、世界のための神の最初の目的、大論争の勃興、贖いの業についての知識を得るべきである。**覇権を争っている二つの原則の**性質を理解し、歴史と予言の記録を通して、その働きを偉大な完結に至るまで辿ることを学ぶべきです。彼は、この論争が人間の経験のあらゆる段階にどのように入り込んでいるのか、**人生のあらゆる行為において、彼自身が二つの対立する動機の一方か他方かをどのように明らかにしているのか、**そして、彼がそうするかどうかにかかわらず、彼が論争のどちらの側にいるのかを今も決定しているのかを見るべきです{Ed 190.2, emphasis added}。

上記の引用は、「覇権を争っている」二つの法則や原則を、この大論争の中心に据えています。このことは、園にある二つの木の巨大な意味と、神とサタンの間の大論争の中心的な役割を浮き彫りにしています。

私たちは、この2つの原則がどのように人間の経験のすべての段階に入るのかを学ぶべきです。"人生のあらゆる行為の中で" "二つの対立する動機のどちらかを" "どのようにして明らかにするのか"そして、どのようにして、私たちがそうするかどうかに関わらず、私たちは"論争のどちらの側にいるかを"決めているのです。これらの言葉には意味が込められています。しかし、この二つの法律が何であるかを知らないならば、どのようにしてこの二つの法律の間で決断を下すことができるのでしょうか？

ルシファーが神の愛の律法に取って代わる特定の律法を持っていると信じている人はあまりいないでしょう。私たちは、彼がすべてのもののうち、道徳的な法律を持っているだろうとは、はるかに少ないと思うだろう。多くの人は、ルシファーが神の律法に代わるものとして持っていたのは、単に「無法」、つまり律法の欠如であったと信じています-悪魔崇拝者や霊能者が言うように、「汝の意志のままに」。

しかし、私たちは聖書が「無法」という言葉を定義していることを認めなければなりません。私たちはまた、サタニストの口から出てくるものを信じないように注意しなければなりません。彼らのリーダーのように、彼らは欺瞞に満ちているからです。彼らは間違いなく、二つの木についての真実を私たちに知ってほしくないでしょう。彼らはむしろ、「無法」とは何の法律もない、「汝の好きなようにしなさい」という意味だと信じたいのです。

私たちはまた、神のアガペの愛によって聖別されていない場合、私たちの「意志」はサタンの「罪と死の法則」によって完全に支配されていることを理解する必要があります。この地上に生まれた人は皆、罪深い性質を持って生まれてきます。つまり、私たちは皆、サタンの「善悪の法則」に支配された道徳的な性格を持って生まれてきたということです。したがって，もし本当に「自分の意志のままに」行うならば，実際には堕落した性質に陥り，実際にはエデンの園でサタンが導入した不義の律法によって動作することになります。私たちの「意志」だけに頼ることは、私たちを善悪のサタンの道徳律法に丸ごと帰してしまいます。

> サタンはエデンの園でエバを惑わせたように、今では人間を惑わせています。"あなたがたは神々のようになる」と彼は宣言し、「善悪を知り、善悪を知る」と。創世記3:5 スピリチュアリズムは「人間は神の頭に向かって……進行する創造物である」と教えています。もう一度言う。"裁きは正しい、それは自己の裁きだからである。…玉座はあなたの内にある。そして別の人はこう宣言する"正しく完全な存在とはキリストである」{HF 339.4}。
>
> こうして**サタンは、人間自身の罪深い性質を、唯一の裁きのルールとして代用したのです**。これは進歩であって、上に向かってではなく、下に向かっての進歩です。人間は、純粋さや善良さの基準よりも高くなることはありません。自己が最も高い理想であるならば、それ以上の高尚なものに到達することはありません。神の恵みだけが人間を高揚させる力を持っています。自分自身に任せておけば、彼の進路は下向きでなければなりません{HF 340.1, emphasis added}。

善悪の知識の木に代表されるルシファーの道徳律は、すべての人間が生まれた道徳律です。私たちが続けるように、私たちはこの法律が神との関係を含む私たちの関係のすべてに影響を与えた方法を正確に学ぶことになります。

10.庭の混乱

創世記には、善悪の知識の木を食べる前のアダムとエバの生活についてはあまり書かれていません。あちこちに情報の断片がありますが、それらを通して彼らの人生のイメージを組み立てることができます。しかし、創世記が提供する情報は限られていますが、園で何が起こったかを評価するために必要な情報はすべて揃っています。

まず、神は創造の週の6日目にアダムとエバをご自分の姿に創造されました。

> そして神は言われた。「人間をわたしたちに似せて、わたしたちに似せて、わたしたちに似せて、わたしたちに似せて、人間を造りましょう。海の魚、空の鳥、家畜、地中のすべてのもの、地に忍び寄るすべてのものを支配させましょう」。**そこで神はご自身の姿で人を創造され、神の姿で人を創造され、男と女を創造されました**。そして、神は彼らを祝福し、神は彼らに言われた。「実を結び、増殖し、地を満たし、地を治めなさい。

神に似せて造られたということは、アダムとエバが神と調和していることを意味します。アダムとエバの心，思考，感情，行動は，創造主のアガペ愛の道徳律法と完全に調和していました。アダムとエバは、神とお互いに対して無条件で、公平で、自己犠牲的で、他の人を中心とした愛を持っていました。彼らは、心の中にアガペの愛を持った人間を増やし、地球を満たしていくことになりました。

神はまた、彼らに地球とそのすべての生き物に対する"支配権"を与えられました。"支配"とは、râdâhとは、"踏みつける、すなわち服従させる、支配する、支配する"という意味です。アダムとエバは大地の支配者として、二つのことをすることになっていました。この言葉の意味は

> 服を着ること。勤める（あらゆる意味で）；意味合い的には、仕える、服を着る、主人、飼う、労働する。

> to keep: shâmar; 正しくは、(茨のように)垣根を張る、つまり警備する、一般的には、守る、注意する、見守る、という意味。

まだ罪がなかったのに、なぜ地球を「守る」必要があったのでしょうか？必要があったのは、サタンが大挙して現れたからです。彼らはサタンの木を食べてはいけませんでした。

アダムとエバは「支配権」を持つことになり、アガペーで地球を支配することになりました。私たちは、罪を犯す前の「支配」の意味を誤解してはいけません。当時の「支配」は、力や恣意的な支配を意味するものではありませんでした。サタンはこの言葉を、力や暴力の意味合いを持たせてしまいました。実際、サタンはすべての言葉にこのようなことをしてきました。例えば、これから見 るように、「正義」という言葉などです。

神はまた、人類に食物を与えられた。"種を産み出すすべてのハーブ"と"種を産み出すすべての木の実"である。

> そして神は言われた，「見よ，わたしは，地の表面にある種を産むすべての草と，その実が種を産むすべての木を，あなたがたに与えた。また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地に忍び寄るすべてのもの、その中に命があるものには、すべての緑の草を食用として与えた」、そうであった。神はご自分の造られたすべてのものをご覧になったが、それはとても良いものであった。それで、夕方と朝は六日目であった（創世記1:29-31）。

これらは、人間の体に最適な栄養を与え、神との霊的な結びつきを最適化するために、神が定められた食べ物でした。私たちの食事はベジタリアンの食事で構成されていました。動物は愛され，大切にされるべきものでした。動物はわたしたちにとって喜びと喜びの大きな源となりました。

"主なる神」はアダムとエバのもとを「昼間の涼しいうちに」、つまり朝に訪れます。二人は園の中で自由に過ごすことができましたが、「善悪の知識の木」を食べないように注意されました。

アダムとエバが禁断の木を食べた途端、彼らの性格は変わりました。それどころか、自分たちを救いたいという願望と、自分たちの新しい恣意的な支配者をなだめたいという願望に突き動かされたのです。また、彼らは完全に自己中心的になりました。彼らの焦点は、地球とお互いのための思いやりから、他のコストであっても自分の肌を自分の幸福を節約し、調達するために切り替えました。告発が飛び交うようになるまで、それは全く長くはかかりませんでした。

> "あなたが私と一緒にいるために お与えになった女は 木の実を私に与えた そして私は食べた"主なる神は女に言った "あなたがたが、これは何をしたのですか？"女は言った、「蛇にだまされて、私は食べた」（創世記3:12-13）。

神はご自身を二人の喧嘩っ子の間に見つけられました。"私がやったんじゃない，彼がやったんだ"いや，彼女がやったんだ！」と言っていました。アダムはすぐにイブだけでなく神を非難しました。"あなたが私と一緒にいるために与えた女"イブは蛇を責めることで 自分を許したなぜ彼らは指をさしたのでしょうか？答えは簡単です。罰から逃れるために、非難から逃れようとしたのです。なぜですか？

答えは、善と悪の知識です。この "知識"は、新しい二元性-善と悪-の観点から物事を見るためにそれらを教えて、彼らの心を引き継いでいたと、この新しいマインドセットを通して、彼らは部分的に善と部分的に悪として神を認識した。彼らは今、神を善と悪の両方として、非難者として、また自分たちを罰しに来る者として認識していたので、彼らは疑いと恐怖で満たされ、その結果、神から隠れてしまいました。彼らが神から離れてしまう原因となったのは恐れであり、根拠のない恐れでした。ジェフ・ベナーの『創世記の機械翻訳』によると、神が唯一の生命の源であるため、神から目を背けた瞬間、彼らはすぐに死に始めました。彼らはエントロピーの状態に入り、腐敗と無秩序に向かって歩き始めました。アダムとエバはすぐに霊的な死を経験しましたが、それは最終的には肉体的な死ももたらしました。

アダムとイブに何が起こったかは、私たちがエゼキエル28章で学んできた一節で表現されています。この一節は、サタンに直接語りかけています。

> あなたがたは、あなたがたの咎の多さによって、あなたがたの聖所を汚した（エゼキエル28:18）。

châlalという言葉は、この腐敗の過程を表現しています。その多くの意味の中には、"傷をつける"、"冒涜する"、"壊す"、"汚染する"、"売春する"、"殺す"、"嘆く"、"汚す"、"傷をつける"、"溶かす"などの言葉があります。

私たち人類はルシファーの「聖域」となり、これが彼が私たちにしてきたことです。彼は私たちを傷つけ、私たちを溶かし、汚し、壊し、汚し、殺し、汚したのです。これは、「笛」という言葉を意味の一つとして含んでいる同じ言葉です。宇宙の笛吹きであるルシファーは、人類にこれらすべてのことをしてきました。彼がしたことは、進化論とは正反対のことであり、秩序からカオスをもたらしたのです。秩序はカオスからは生まれません。秩序から生まれるのはカオスです。この原理は熱力学の第二法則であるエントロピーにあります。私たちが経験している混沌は、神の「秩序」から逸脱した直接の結果であり、それをもたらしたのはサタンでした。

善悪の知識の木から食べる前、アダムとエバは「男も妻も裸で、恥ずかしくありませんでした」（創世記2:25）。しかし、食べた後は「恥ずかしい」と思ったのです。

> その時、二人の目が開かれ、自分たちが裸であることを知り、イチジクの葉を縫い合わせて、自分たちに覆いを作った（創世記3:7）。

彼らの裸には何か意味があるのでしょうか？これには霊的な意味があるのでしょうか？私たちはこれを文字通りに理解すべきなのでしょうか、それとも象徴的に理解すべきなのでしょうか。聖書の中では、「衣」が非常に象徴的な意味を持っていることが分かっています。例えば、預言者ゼカリヤはこう書いています。

そして、大祭司ヨシュアが主の御使いの前に立っている姿と、サタンが右手に立って彼に対抗する姿を私に見せた。そして、主はサタンに言った、「主はサタンよ、あなたを叱りなさい。エルサレムを選ばれた主が、あなたを叱責してくださいます。これは火の中からむしり取られた焼き印ではないか。**"さて、ヨシュアは汚れた衣を着て、天使の前に立っていた。彼は答えて、彼の前に立っていた人々に話しかけて言った、「彼から汚れた衣を取り除け」と。そして彼に言った "見よ、私はあなたの不義を取り除いた、私はあなたに豊かな衣を着せよう"**

私は言った "彼の頭にきれいなターバンを被せてやれ"それで彼らは彼の頭にきれいなターバンを被せて服を着せた。主の御使いはその傍らに立っていた。そこで主の天使はヨシュアを諌めて言った。

"このように万軍の主は言う。
"あなたが私の道を歩むならば
あなたが私の命令を守るならば
それからあなたがたもまた，わたしの家を裁かなければならない。
またわれの法廷をも掌握している。
歩く場所を与えよう
"ここに立つ者たちの中で"
ゼカリヤ3:1-7、強調）。

"衣服"は"不潔な衣服"か"義の衣"と呼ばれる。

神の民の欠点にもかかわらず、キリストはご自分の関心の対象から目を背けることはありません。キリストには、**彼らの衣を変える力があります。汚れた衣を取り除き、悔い改め、信じる者にご自身の義の衣を着せ、天の記録に彼らの名に対して赦しを書き記される**。天の宇宙の前に彼らを自分のものとして告白します。彼らの敵であるサタンは、告発者であり、詐欺師であることが示されています。神はご自身の選ばれた者のために正義を尽くされる{COL 169.3, emphasis added}。

衣」という言葉は、神が与えられた義とサタンの咎を表す比喩です。サタンの咎は「不潔な衣」として表現され、神から与えられた義は「豊かな衣」として表現されます。ジェームズ王の聖書には、「わたしはあなたに衣替えをする」と書いてあります。神はヨシュアの不潔な衣を取り除かれた時、彼の不義を取り除かれ、アダムとエバが善悪の知識の木を食べる前の状態に戻されました。そして、神の道、いのちの道、アガペの愛の道徳律法、すなわち「いのちの木」を守り続けるようにと指示されたのです。これは、イエスが姦淫した女に「私もあなたがたを咎めないから、行って罪を犯してはいけない」（ヨハネ8：11）と言ったのと同じことです。

別の例では、ヒビト人のシェケムがヤコブの娘のディナをリアから奪ったとき、ヤコブの息子たちは、彼を部族のすべての男たちと一緒に殺して、ひどい復讐をしました。そこで神はヤコブに言われた。

"立ち上がって、ベテルに登ってそこに住み、そこに祭壇を作り、あなたが兄弟エサウの顔から逃げたときにあなたの前に現れた神に捧げなさい」（創世記35:1-2）。そしてヤコブはその家族と彼と一緒にいたすべての人に言った、**「あなたがたの間にある外国の神々を捨てて、あなたがた自身を清め、あなたがたの衣を着替えなさい」**（創世記35:1-2、強調）。

ヤコブは「外国の神々」を片付けることを「清め」と「衣」を変えることと同一視していました。外国の神々は不純なもので、その性格は善と悪が混ざった不純なものです。彼らは、善い行いには恣意的な報酬を与え、悪い行いには恣意的な罰を与えることを教えています。

神はまた、アーロンのために聖衣を作るようにモーセに指示した。

あなたがたは、あなたがたの兄弟アロンのために、栄光と美のために、**聖なる衣を**作らなければならない（出エジプト記28:2、強調）。

衣服を神聖なものにするものは何ですか？"聖なる"という言葉は、清潔な、純粋な、特別な、汚れのない、という意味です。"聖なる衣"には象徴的な意味しかありません。正義の象徴であり 純潔の象徴であり "混じりけのないもの"です

ソロモンは言う。

あなたの衣はいつも**白く**、頭には油がないようにしましょう（伝道者の書9:8、強調）。

白のみ-白と黒の混合物ではなく，「善の知識」（白）と「悪の知識」（黒）に見られるような混合物である。そして、イザヤは言う。

目覚めろ 目覚めろ！ザイオンよ、力をつけよ、聖なる都エルサレムよ、**美しい衣を着ろ。洗礼を受けてい**ない者や**汚れた者は、もはやあなたがたのところには来ないから**である（イザヤ52:1、強調）。

イザヤ書の別の一節は、不義の衣は本当に「網」にすぎないことを示しています。

彼ら**の網は衣服にはならず、その働きで身を覆うこともなく、彼らの働き**は不義の働きであり、暴力の行為は彼らの手の中にある（イザヤ59:6、強調）。

体を覆う衣服が、"業"によって自分を覆うことと平行していることに注目してください。彼らの「網」は「衣服にはならない」のですが、それは不義に根ざした「業」だからです。上記の箇所は、不義の領域に住む人々が「業」で自分を覆おうとしていることを示しているように見えますが、これらはただの「業」の網にすぎません。また、不義が暴力とどのように対比されているかにも注目してください。

他の箇所では、イザヤは「救いの衣」と「義の衣」について語っています。

主**は私に救いの衣を着せてくださり**、義の**衣を私に着せてくださいました**。

イエス様ご自身は、神の愛の律法である義を「語る」ので、「栄光の衣」を身にまとっているように描かれています。

> エドムから来て、ボズラから染めた衣を着て、その**衣を着て栄光に満ち**、その力の偉大さで旅をしている者は誰か。

預言者ヨエルは最終的に問題の核心に迫り、このシンボルを文字通り受け取るのをやめ、その重要な精神的な意味を認識するように私たちに伝えています。

> だから、あなたの**心を裂いて、あなたの衣を着ないで、あなた**の神である主のもとに帰りなさい。

ジョエルは「みんな、わからないのか」と言っているようです。衣服はあなたの心の象徴です。ローブを引き裂くような愚かなことをするのはやめましょう。代わりに、あなたの肉の心があわれみを愛し、優しさを愛し、暴力を捨て、神があなたを清めてくださいますように！」と言っているようです。

結局のところ、衣服は心の中にあるものの象徴であり、思考や行動の根源がどこにあるのかを示すものなのです。心は"裁きの場"です。私たちの心は純粋なのか混ざっているのか、片思いなのか両思いなのか。私たちは生まれながらにして両思いの性質を持っていますが、もし私たちが心を神に委ねるならば、神は私たちを神のイメージに、神の単純な性格に戻すことができるのです。

サタンの善悪の両義的な律法の破壊から私たちを救おうとする神は、ダビデのような叫びをスピーディーに聞く。

> 神よ、私の内に**清い心を**造り、私の内に不動の霊を新たにしてください（詩篇51:10、強調）。

ダビデがここで言及している清らかな心とは、混じりけのない、汚染のない、腐敗のない心のことです。

アダムとエバは文字通り裸だったのでしょうか？この節では、彼らは裸だったと言っていますが、もっと重要なのは、その比喩です。黙示録三章の最後の教会であるラオディケアもまた、裸でありながら、そのことに気付いていません。イエスはラオジケアに直接語りかけて、「あなたがたは、自分が惨めで、惨めで、貧しく、盲目で、**裸である**ことを知らない」（黙示録3:17、強調）と言われています。

ラオディセアは罪の後に裸になった-アダムとエバは罪を犯す前に裸になりました。このことは、裸であること自体は悪いことではないということを示しているように思えます。

善悪の知識の木を食べた後、アダムとエバの目は自分たちの裸を見て開かれ、それを見たとき、彼らは恥と恐怖で満たされました。善悪の知識の木は、そこから食べる前には持っていなかった自分たちの裸を意識させたのです。一方、ラオディケ人は、裸でありながら、そのことに気づかず、それに気づかないのです。なぜでしょうか？ラオディケ人は自分の状態には何の問題もないと思っているからです。彼らは自分たちが正しい道を歩んでいて、真理を持っていると心から信じているからです。

恥ずかしながら、アダムとイブはイチジクの葉で衣服を縫いました。なぜイチジクの葉なのでしょうか？それは、善悪の知識の木の「布」から縫い付けられた、自分たちが食べた木で作られた衣服だったのでしょうか？もしそうだとしたら、この木はリンゴの木ではなく、イチジクの木でした（これはイエスがイチジクの木を罵ったことをすぐに思い起こさせます）。また、彼らが縫った衣は、ヨシュアの「汚れた衣」と同じ意味を持っていたのでしょうか？彼らは「作品」で自分自身を覆っていたのでしょうか？

ヘブライ語の「恥ずかしい」という言葉はbuwsh-「青ざめる、つまり恥じらう、混乱する」(Strong's Concordance)である。

詩篇九十七篇では、ブブシュは「混乱した」と訳されている。

> 天は彼の義を宣言し、すべての民は彼の栄光を見る。**偶像に仕える者、偶像を自慢する者、すべて**の神々よ、彼を礼拝しなさい（詩篇97:6-7、KJV、強調）。

詩篇71篇では「混乱」と訳されている。

> 主よ、あなたに信頼を置きます。

預言者ダニエルは、神と神の義と私たちの不義を対比させ、私たちの不義を"顔の混乱"と呼んでいます。彼は言います

> 主よ、義はあなたに属しますが、私**たちには顔の混乱があります…**(ダニエル9:7, KJV, emphasis added)。

> 主よ、わたし**たちの顔の混乱は、わたしたち**の王たち、王子たち、そしてわたしたちの父祖たちに**属する。私たち**が神に反逆したにもかかわらず、私たちの神である主には、あわれみと赦しがあります（ダニエル9:8-9、KJV、強調）。

神は慈悲深く寛容ですが、私たちは神に反抗してきました。なぜでしょうか。それは，わたしたちが神に対して罪を犯したからです。それゆえ，わたしたちは「顔の混乱に属する」のです。わたしたちは善悪の知識のプリズムを通して彼を見ています。わたしたちは彼を愛の神として、また怒りに満ちた罰の神として見ています。

"To belongeth confusion of faces"は、私たちの性格が二つの顔を持っていることを暗示しています。私たちの「顔」は愛と怒りの間で変化しますが、それは善と悪が混在しているからです。これは「顔の混乱」であり、愛に満ちた顔が憎しみに満ちた顔に変わったり、逆に憎しみに満ちた顔に変わったりします。

その結果、私たちはまた、神を私たちのイメージに似せてしまうために、神を混乱させてしまうのです。私たちは、神は確かにあわれみ深い方だと信じていますが、神のあわれみは懲罰的な正義と混同されているとも考えています。しかし、そうでしょうか。聖書は神の正義をどのように定義しているのでしょうか？私たちはこのテーマに一章を割いていますが、それは大きな論争の中で非常に重要なことだからです。

私たちは皆、私たちのキャラクターが善と悪の間で変動することを知っています。誰かが私たちに悪であるとき、我々は彼または彼女に悪である。誰かが私たちに良いならば、または、我々は彼らに良いです。私たちの善良さは、私たちがイエス-キリストで見るもののような内側の、不動の、不変の文字ではなく、私たちの周りの人々の良さに基づいています。善と悪の知識は、私たちがそのようにしてきました - "私たちは顔の混乱に属しています。しかし，神はアガペーであり，変わることはありません。もし神が私たちの行いに比例して変化し、私たちが良い時には良い人であり、悪い時には意地悪な人であるとしたら、神は条件付きの存在になってしまいます。これは、神が無条件のアガペー愛の神ではなくなってしまうことを意味します。

ダニエルが「混乱」のために使っているヘブライ語の言葉は、bosheth（ボシェト）で、buwsh（創世記2:25の「恥ずかしい」という言葉）から派生したものです。ボシェトとは、「恥ずかしい（感情や状態、その原因）；暗示的には偶像：恥ずかしい、混乱」（ストロング辞典）という意味です。

このボシェトという言葉は、偶像と結びついていてとても面白いです。偶像とは、サタンが真の宗教を偽装したものです。聖書によると、木や銀や金でできた偶像を崇拝する者は、本当は偽りの神を崇拝しているのです。これらの神々は誰なのでしょうか？聖書はこのことをはっきりと説明しています。イスラエルの子供たちについて言えば、モーセはこう書いています。

> 彼らは外国の神々に嫉妬し、忌み嫌うことで神を怒りに駆り立てた。**彼らは神ではなく、悪魔のために、彼らの知らない神々のために、新しい神々のために、**あなたがたの先祖たちが恐れなかった新しい来訪者の**ために犠牲にした**（申命記32:16-17、強調しています）。

外国の神々」、すなわち偶像に生け贄を捧げることによって、人々は事実上、創造主エホバではなく、悪魔を崇拝していたのです。"悪魔」と「神々」は同じものであり，ルシファーの善悪の法則を受け入れた堕落した天使たちです。彼らは地上に混乱をもたらした者です。黙示録では、悪魔はまた、神のイメージ、石や木で作られた偶像と結びついています。

しかし、これらの災いによって殺されなかった残りの人類は、その手の業を悔い改めず、悪魔や、見ることも聞くことも歩くこともできない金、銀、真鍮、石、木の偶像を崇拝しないようにした（黙示録9:20）。

善悪の知識の木は、アダムとエバの心に混乱をもたらしました。善と悪とは、対になることのない二つの正反対のものが混ざり合ったものであり、共通点はないはずなのですが、この「善悪の知識の木」ではそれらは不可分なのです。

悪と善を混同し、善と悪の区別をなくすのはサタンの仕業である（『レビューとヘラルド』1900年12月4日） - {7BC, 958.1, emphasis added}。

神の政府と戦争をしている人たちが、どのようにして時折見せる知恵を手に入れることができるのでしょうか。サタンは天の宮廷で教育を受け、**善と悪の知識を持っています。彼は尊いものと卑しいものを混ぜ合わせ、それが彼を欺く力を与えているのです**。しかし、サタンは天の輝きの衣を身にまとっているので、私たちは彼を光の天使として受け入れることができるでしょうか。誘惑者には、彼の方法に従って教育され、彼の精神に触発され、彼の仕事に適応した工作員がいる。私たちは彼らに協力しましょうか。教育を受けるために必要不可欠なものとして，彼の代理人の働きを受けることができるでしょうか。

貴重なものと下品なものを混ぜることが サタンに"欺く力"を与えているのです。善と悪は何の関係があるのか？なぜそれらは生命の木と対照的な木に結合されているのでしょうか？これは混乱のためのレシピではありませんか？混乱はサタンの法則の自然な結果です。

イザヤ書14:4では、ルシファーはバビロンの王として語られています。バビロンは彼の王国の象徴です。驚くことではありませんが、バビロンは「混乱」を意味します。バビロンの混乱の原因は何でしょうか？それはバビロンの神々、善と悪の悪魔です。バビロンの混乱は、善と悪の道徳的法則、つまり恣意的な報酬と恣意的な罰の法則によってバビロンを支配していた神々に由来しています。神々はある瞬間には善人に報い、恩恵を与え、次の瞬間にはどんな軽犯罪にも厳しい罰を与えます。人々は、神々の怒りを抑えるために、自分の子供でさえも、大きな生贄を捧げることを余儀なくされる。

ルシファーに従った天使の第三の天使である悪魔たちは、この律法を神の律法よりも優れたものとして受け入れました。これは、彼ら自身が今、この法律によって生きていることを意味します - 彼らはまた、彼らは善と悪の二元論的な性格を持っているので、報酬と罰を与え、お互いに。彼らはまた、予測不可能な、揮発性であり、彼らにも同様に、 "顔の混乱"に属しているためです。

ルシファーと彼の都市バビロンは 堕落して存在しなくなる 生来の暴力のために彼らの"不義"に含まれているからだ

主があなたがたの悲しみと、あなたがたの恐れと、あなたがたが仕えるように仕えさせられた厳しい束縛からあなたがたに休息を与えてくださる日に、あなたがたはバビロンの王に対してこのことわざを取り上げて言うだろう。"あなたがたはバビロンの王に対して、このことわざを取り上げて、こう言うのです。「なんと抑圧**者は止まった、黄金の都は止まったのだ**」（イザヤ14:4、強調）。

混乱の都は崩壊**し**、すべての家は**閉ざされ**、誰も入ることができない。通りではぶどう酒を求める叫びがあり、すべての喜びは暗くなり、地の喜びは消えてしまう。街には荒廃**が残され**、門は**破壊に打たれている**（イザヤ24:10-12、強調）。

そして、強大な天使が大きな石臼のような石を持ち上げて、海に投げ込んで言った、「この**ようにして、その偉大な都市バビロンは、暴力をもって打ち倒され、もはや全く見つからないであろう**」（黙示録18:21、強調しています）。

このことは、園での出来事に対する新たな理解の道を開き、アダムとエバが「善悪の知識の木」の実を食べたとたんに、神への恐れで満たされてしまった理由を説明しています。彼らは新しい領域、すなわち善悪の王国に入ったために混乱しました。

アダムとエバは神が愛であることを知っていた... しかし今彼らは神を厳しく意地悪で懲らしめていると認識していた。彼らは神の命令に背いたのです...確かに神は彼らに怒っていました...神は彼らを罰するために来たのではなかったのでしょうか？

しかし、神は変わらない。では何が変わったのか？アダムとエバ...彼らは変わった彼らは世界を善と悪の濃淡で見るようになった。彼らは自分自身をそのように見て、お互いをそのように見て、そして神もまたそのように見た。

アダムとエバに実際に起こったことは、彼らが聖書的な意味での「不信仰者」になったということです。彼らは、もはやアガペーの愛の神ではなく、暴力的な神を信じていたのです。彼らの信仰は、全く神ではない二重の神に基づいていたのです。パウロはそのような神を崇拝したとき、自分を「不信仰者」と呼んだのです。

わたしたちの主キリスト・イエスに感謝します。主は、わたしを忠実な者とみなして、わたしを聖職に就かせてくださいました。

イエス・キリストに出会う前のパウロの行動は、彼が信じていた神を反映しています。そのため、彼は神を冒涜し、神について嘘をついていました。

アダムとイブが善悪の知識の木を食べた瞬間から人類は適者生存の時代に入った。なぜですか？彼らはもはや自分たちが神の愛とケアに値するとは考えていなかったからです。彼らはもはや自分たちが神に頼る価値があるとは考えていませんでした。イエス・キリストは次のようなことを言って、神についてのこの間違った考えを覆しました。

見よ，空の鳥たちを。彼らは種を蒔かず，刈り取らず，また納屋に集めてもいない。あなたがたは彼らよりもずっと優れているのではないか。野原の百合を考えてみなさい，彼らはどのように成長するかを。しかし，わたしはあなたがたに言う。ソロモンの栄光のすべてが，これらの者のように装われていたわけではないのだ。だから、もし神が、今日であって、明日はオーブンに投げ込まれる野原の草をそう着せられるならば、信仰の薄いあなたがたは、もっと多くのものを着せられないであろうか。

アダムとエバは神の真の姿を知らず、神からの最悪の事態を恐れて、自分たちの手で物事を進めました。神は、彼らが善悪の知識を通して、彼らが自分自身と地球にもたらした呪いを明らかにしたとき、このことを彼らに説明されました。

女に言った。

"私はあなたの悲しみと受胎を大きく増殖させる
痛みの中で、あなたは子供を産むのです。
"あなたの望みは夫にあり 彼があなたを支配する"

そしてアダムに言った。「あなたがたは，あなたがたの妻の声に耳を傾けたからである。
と言って，わたしがあなたがたに命じた木から食べてしまったのである。

"呪われた地面はあなたのために
労苦の中ではそれを食べなければならない
あなたの人生のすべての日。
あなたがたのために，茨とあざみの両方をもたらすであろう。
あなたがたは、畑の草を食べなければならない。
顔の汗をかいてパンを食べよう
地面に戻るまで
あなたが連れ去られたから
埃のために
そして、あなたがたは塵に帰らなければならない」（創世記3:16-19）。

夫婦関係はサタンの法則によって呪われていました。強い者が弱い者を力で支配するのです。地球そのものが呪われ、人類は死を余儀なくされるようになりました。私たちは顔の汗を流してパンを食べるようになり、神が私たちを養ってくださるという信仰を持たなくなりました。私たちは神の恵みではなく、私たちの「勤労」に頼るようになります。神への信仰を失った私たちは、自己中心的で不公平で詐欺的な行動をとるようになります。最も強く、最も暴力的で強引な者は、弱く無力な者を見捨ててしまうでしょう。

善行は報われ、悪行は罰せられることになります。人間はこの原則の知恵を心から信じるようになるので（それ自体はサタンから来ていることには気づかず，これが一般的な知恵であり常識であると考えています），わたしたち自身もこの道徳の法則を使って，お互いに適切と思われるようにお互いに報いたり罰したりしながら，お互いに取引をするようになるでしょう。アガペの愛の神の姿で栄光に満ちて造られた人間は、今ではサタンのようになり、サタンの姿に変えられてしまうのです。

しかし、この新しいパラダイムの最悪かつ最も有害な結果は、人類がこのプリズムを通して神を見るようになってしまったことでした。これが蛇がイヴに語った基本的な嘘でした。

> あなたは必ず死ぬことはありません。なぜなら、神はあなたがそれを食べる日にあなたの目が開かれ、**神のようになり、善悪を知るようになること**を知っているからです（創世記3:4,5、強調）。

神の木は「生命の木」であり、「善悪の知識の木」とは全く別の木でした。生命の木は、神の性格であり、神の存在の本質であるアガペの愛の法則を表していました。では、私たちは神ご自身の言葉をどう解釈すればよいのでしょうか。

> そこで主なる神は、「見よ、人は私たちの一人のようになり、善悪を知るようになった」（創世記3:22）と言われた。

神は善悪を知っていたのでしょうか？しかし、サタンやその天使たち、アダムとエバが善悪を知っていたのと同じ意味ではありません。サタンとその従者たちは経験的な意味で善悪を知っていました。神は善と悪の誤った主張と複雑さを知っていました-神は善と悪の最終的な終焉を予測することさえでき、それが私たちの心に何をするかを知っていました。神は善と悪が何であるかを知っていましたが、神は善と悪に同意せず、善と悪と調和していませんでした。実際、ヘブル1:9によると、神は不義を嫌っておられ、不義は善悪の道徳的な法則です。

神はまた、非常に特殊な方法で親密に善と悪を知っていた。それがもたらす痛みと苦しみを知っておられたのです。神はすでに善と悪の台頭のために苦しんでおられ、その下で人類がどのような苦しみを受けることになるのかをよくご存知でした。どんな親でも、自分の子供の痛みを目撃することの痛みが、自分の痛みよりもはるかに大きいことを知っています。そして神は、この地上に生まれたすべての人の痛みを親密に感じるだけでなく、いつの日か、イエス様が十字架にかけられたときに、ご自身がイエス様を通して、個人的にそれを経験されるのです。

神が何を言っても、何をしても、それが間違って解釈されてしまうので、善悪の神として認識されていることは、神にとって実際の問題を引き起こしました。私たちは善悪の知識のレンズを通して彼がしたすべてのものを知覚するだろう、とこれは彼から疎遠に私たちを保つだろう。

例えば、アダムとエバが「善悪の知識の木」を食べた時のことを考えてみましょう。

> そこで女は、その木が食べ物に適していて、目に心地よく、人を賢くするのにふさわしい木であることを見て、その実を取って食べた。彼女は自分の夫にも与えたが，夫は食べた。すると，二人の目が開かれて，自分たちが裸であることを知った。そして、彼らは日中の涼しいうちに、主なる神が園を歩く音を聞き、アダムとその妻は園の木の間に隠れて主なる神の前から身を隠した。そこで主なる神はアダムを呼んで言われた，**「あなたはどこにいるのですか」。**そこで彼は言った、「私は庭であなたの声を聞いたが、私は裸だったので怖くて、身を隠した」（創世記3:6-10、強調）。

これを読んで、神様はアダムとエバを脅していたと結論付けました。アダムとエバが神に従わなければ、神は彼らを殺すだろうと仮定しています。このことは、善悪の知識の木を単なる服従のテストとし、もしアダムとエバがそのテストに失敗したら、神は彼らを死で罰するということになります。これがこのテキストの主な解釈です。しかし、ここにはもっともっと深いことが起こっています。これを分析してみましょう。

第一に、禁断の木から食べる前、アダムとエバは神を恐れたことがなかったこと、つまり、神を**恐れたこと**がなかったことを証明しなければなりません。第二に、「善悪の木から食べてはいけない」という神の最初の命令が、アダムに何の恐れもなかったことを示すものはありません。

> それから主なる神はその人をエデンの園に入れて、その園を管理するように命じられた。そして、主なる神はその人に命じて言われた、「園のすべての木を自由に食べてもよいが、善悪の知識の木は食べてはならない。

さて、いくつかの命令は恐怖を誘発するものであり、実際に「こうしなければ…」という罰を暗示していることがわかっています。しかし、このテキストのどこにもそのような兆候はありません。アダムが神の命令に怯えたことを示唆するものは何もありません。もしそうだとしたら、神の声の中には、アダムに神を恐れさせるようなものは何もありません。もし神からの暴力のヒントがあったとしたら、神の「あなたは必ず死ぬ」という言葉は、アダムを恐怖に陥れ、その時でも神から離れていたでしょう。

アダムは必ず死ぬという神の言葉は、脅しではなく、事実を述べたものであり、神は嘘をつかないので、絶対的な真理でした。しかし、私たちはこれを善悪の観点から解釈すると、神に背いた罰として、神ご自身がアダムとエバを殺すことを意味しています。もしそうだとしたら、アダムは命令が下されるとすぐに神から隠れていたでしょうが、そのようなことはしませんでした。アダムとエバが禁断の木から食べる前ではなく、その後に恐怖が襲ってきたのです。

死は創造主であるキリストから来たのではない。

> **キリストはシステムに死の種を植えたことはありません。サタンは**アダムを誘惑して知識の木を食べさせたときに、**これらの種を植えました。**

サタンがイヴに「必ず死ぬことはない」と言って神に反論したとき、サタンは自分自身を手放しました。彼は、死は神からではなく、自分から来たものであることを証明したのです。どうしてでしょうか？もし神が死の原因であったなら、サタンはその知識を隠すことはなかったでしょう。しかし、自分自身が死の原因になるので、その情報を嘘で隠して、女が自分の木を食べてしまうようにしたのです。

善悪の法則がアダムとエバの心を支配したとき、それは彼らの神のアガペの愛についての知識を消し去り、創造主についての誤った知識で満たされました。創造主は、今ではサタン自身がしたことのすべての責任を負わされることになりました。

では、何が本当に恐怖を生み出したのでしょうか？それはサタンの「不義」であり、暴力が染みついています。次の節を見てください。

> その時、主なる神はアダムを呼び、彼に言った。そこで彼は言った、「私は園であなたの声を聞いたが、私は裸だったので怖かった。

神はアダムと心理ゲームをしていたのか？アダムの居場所を知らなかったのでしょうか？なぜ神はアダムに呼びかけたのでしょうか？

神はアダムの心に何が起こったかを知っていました。神は、アダムが今、自分がしたことをすべて間違った方向に解釈してしまうことを知っていたのです。では、なぜ神はそのような質問をしたのでしょうか？それは、神がアダムを追い詰めようとしていないことをアダムに示すためではなかったのでしょうか？もし神が本当にアダムを追い詰めようとしていたのなら、アダムの居場所を尋ねることはなかったでしょう。それが私たちが罪人を逮捕しようとする方法ではないでしょうか。神がアダムと会話をしていたという事実は、神が変わっていないことをアダムに示すためのものでした。神はいつものように平和のうちに来て、彼を罰するつもりはなかったのです。

アダムの「裸だったので怖かった、自分を隠した（創世記3:10）」という答えは、アダムのマインドセットを明らかにしています。アダムの中に恐怖を生み出したのはアダムの「裸」であり、神の次の質問はアダムの裸の真の原因を指摘しています。

> 誰があなたがたに裸だと言ったのか。私が食べてはいけないと命じた木から食べたのですか（創世記3:11）。

これは神について多くのことを明らかにしています。なぜ神は「誰があなたが裸だと言ったのか」と尋ねられたのでしょうか？それはまるで神様が「アダム、あなたが裸であることをどうして知っているのか」と言っているかのようです。知ってはいけないと思っていたのに、知って欲しくなかった。私が教えていないのに、誰が教えたのですか？"アダムは神の義、神の愛、神のあわれみ、神の無条件の恵みを理解していなかったので、自分が裸であることに気づいたのです。

神の次の文はさらに啓発的です。"あなたがたは、私が食べてはならないと命じた木から食べたのか？"神はここでアダムに真犯人を指し示しているのではないでしょうか？言い換えれば、「あなたはその木から食べたのか。そして、あなたは私の前で裸になり、私から隠れている。顔中チョコレートだらけだよ、アダム。だからクッキーの瓶に手を突っ込んだのは知ってるよ！"

アダムに対する神の対応は、アダムの恐れの原因が善悪の知識の木であることを明確に示しています。そして、その木の周りに誰が潜んでいたのか、私たちは皆知っています。

> すると男は言った "あなたが私と一緒になるためにお与えになった女は 木の実を私に与えた 私は食べた"主なる神は女に言われた "あなたは何をしたのですか？"女は言った、「蛇にだまされて、私は食べた」（創世記3:11-13）。

大蛇は今までどこにいたのか？それはずっとそこにありました　裏で働いていました 善悪の道徳的な法則を通して 彼らの心に働きかけていました 彼らに神を怒りに満ちた裁判官として見させていました

狡猾な蛇、すべての被造物の中で"最も賢い"あの堕落した天使は、"その美しさのために彼の知恵を堕落させた"彼らの恐怖の源だった。ここの園で彼は神よりも優れていると信じていた律法を実行していたのです。ここで初めて 彼の中にあった不義の結果を 正確に見ることができます 彼を"内なる暴力"で満たしたのです

善悪の知識の木から食べる前、アダムとエバは神を知っていて、神の性格について恐れたり、恥じたり、戸惑ったり、混乱したりすることはありませんでした。しかし，禁じられた木から食べるとすぐに，彼らは神について混乱した状態になりました。彼らは彼への信頼を失いました。ジキルとハイドの人格をどうやって信頼することができるのでしょうか。

彼らは自分たちの愛すべき造り手であり友人である主から逃げ出しました。彼らは神が自分たちを罰しに来るのではないかと考え、絶望的な恐怖の状態に陥りました。彼らは神を善と悪の両方として見るようになったので、不公平は彼らの心に混乱をもたらしました。宇宙の唯一の生命の源である神から距離を置くことによって、彼らは死に向かって着実に螺旋状に落ちていきました。900年と30年の間に、完全に創造されたアダムは墓の中にいました。

アダムとエバが「善悪の知識の木」を食べたことは、宇宙全体に大きな意味と大きな影響を与えました。彼らは事実上、地球の支配権をサタンに明け渡し、サタンを新たな支配者としたのです。サタンを信じ、サタンの木を「食べる」ことによって、彼らは新しい神、新しい主人、新しい王国、新しい法律を選び、今では、神の代わりを装った残酷な恣意的な専制君主が地球を支配することになりました。

アダムは創造された時、地球を支配するように置かれました。しかし、誘惑に屈することによって、彼はサタンの捕虜となりました。支配権は彼の征服者に移った。こうしてサタンは"この世の神"となったのです。第二コリント4:4しかし、キリストはその犠牲によって、人間を贖うだけでなく、彼が失った支配権を取り戻されたのです。最初のアダムによって失われたものはすべて、二番目のアダムによって回復されるのです。ミカ4:8 { EP 34.1}を参照してください。

サタンは「この世の神」であると同時に、この世の「支配者」となりました。しかし、キリストは私たちの救いのために来られます。キリストは私たちを贖い、私たちが失った支配権を回復し、最初のアダムによって失われたすべてのもの、すなわち神の真の知識を回復してくださるのです。

サタンがアダムとエバを克服した時、彼は自分がこの世界を支配したと思いました。堕落した種族は自分の正当な臣民であり，世界は自分のものであると主張しました。しかし、神はご自身の御子を与えて、罪の罰を負わせた。そうすれば，彼らは神の寵愛を回復され，エデンの家に戻されるかもしれませんでした。天国で始まった大きな論争は、サタンが自分のものとして主張していたのと同じ分野で、まさにこの世界で決まることになりました{EP 35.3}。

サタンは私たちの世界を 自分のものだと主張した私たちを乗っ取り 誘拐したのよどうやって？彼は私たちを捕虜にしました。神の性格を歪めて。私たちは神を厳しい支配者、厳しい裁判官として見始めました。その結果、私たちは神を恐れ、恐れが私たちを神から遠ざけました。キリストはわたしたちを救うために来られ、わたしたちを自由にするために来られ、どんなことをしてでも、神の真の知識をわたしたちに取り戻そうとされます。その時になって初めて，わたしたちは贖われ，「回復」され，恐れずに神と対面して交わるエデンの状態に「連れ戻される」のです。そうすればザカリアの預言は成就します。

"イスラエルの主なる神は祝福されている。
主はご自分の民を訪問し、贖われたからです。
そして、私たちのために救いの角を上げてくださいました。
主のしもべダビデの家で
聖なる預言者たちの口で語られたように
世界が始まって以来、誰が
私たちが敵から救われるように
私たちを憎む者たちの手からも
先祖に約束された慈悲を実行するために
そして、主の聖なる契約を思い出すために。
父アブラハムに誓った誓いだ
私たちに許可を与えるために
敵の手から解放される
恐れずに彼に仕えることができます。
人生のすべての日を主の前に聖さと義のうちに
ルカ1:68-75、強調）。

サタンはついに地上で、彼が天で望んでいたもの、すなわち不義の王国を手に入れることができました。今、宇宙は善悪の道徳律法の結果を目の当たりにすることになります。恣意的な報酬と刑罰の規則が律法となり、「自然の法則」として知られている土地の道徳的な法則となりました。しかし、この「自然法」は神のものではありません。それはサタンのものです。

アダムとエバは、堕落したケルビムに、彼が求めていた機会を与えました。彼らは彼に 領土を与えたのです 彼が不義の王国を 築くことができるようにそして、あなたと私は彼の王国の 臣民となった。預言者イザヤはサタンに直接語りかけています。

…あなたがたは、あなたがたの国を滅ぼし、あなたがたの民を殺した（イザヤ14:20）。

私たちの地球は神の土地となり、私たちは神の民となりました。しかし、神は私たちを"混乱の街"から恵みとあわれみの王国に出てくるように呼びかけています。

これらのことの後、私は別の天使が天から降ってくるのを見た、それは大きな権威を持っていて、地は彼の栄光に照らされていた。そして、彼は大声で叫んで言った、「偉大なるバビロンは堕落し、堕落し、悪霊の住処となり、あらゆる汚れた霊の牢獄となり、あらゆる汚れた鳥や嫌われた鳥の檻となった！」。すべての国が彼女の姦淫の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちが彼女と姦淫をし、地の商人たちが彼女の贅沢のために金持ちになったからだ。"わたしは天から別の声を聞いた、「わたしの民よ、彼女の罪に加わらないように、また彼女の災いを受けないように、彼女から出てきなさい」（黙示録18:1-4）。

11. 自由、平等なアクセス、そして公平性

サタンが地球を征服したことで、宇宙に新しいユニークな機会が生まれました。これまでで初めて、天使やその他の知的な存在は、神に逆らう者に対して神がどのように対処するかを観察する機会を得たのです。

地上で起こっている新たな不幸な状況を通して、神のお人柄についてより大きな洞察を得る可能性が現実のものとなりました。神の行動を見て、反乱の間、神がどのようにしてアガペの愛の原則を保っておられたかを調べることは、「天使でさえも調べたいと願う」第一ペテロ1:12に記されています。

私たちは、この大論争の勃発を分析していくうちに、神がいかにアガペー愛の原則を守り続けておられるかを知ることができます。ここでは、アガペの三つの側面、すなわち、自由、平等なアクセス、公平性について特に検討していきます。

自由

私たちのほとんどは、自由が愛の不可欠な要素であることを理解することができます。実際、自由のない愛は愛ではありません。一方の当事者が他方の当事者を支配するような愛の関係は愛の関係ではなくなり、主人と奴隷の関係になります。神が愛であるならば、神は人の選択の自由を支配したり、奪ったりすることはありません。

> **神は人間を法の下に置き、その存在の不可欠な条件として、人間を法の下に置いた**。彼は神の政府の対象であり**、法律のない政府はありえません**。神は、神の律法に背く力を持たずに人間を創造したかもしれませんし、アダムの手を禁断の果実に触れるのを控えたかもしれません**。選択の自由がなければ、彼の従順は自発的なものではなく、強制的なものになっていたでしょう。性格の発達もなかったでしょう**。そのような道を歩むことは、他の世界の住人を扱う上での神の計画に反していたでしょう。それは知的な存在としての人間にはふさわしくないものであり、神の恣意的な支配{PP 49.1, emphasis added}というサタンの告発を支持することになったでしょう。

律法-道徳律の下にあることは，人類の「不可欠な条件」です。私たちは神の道徳律の下にあるか、サタンの道徳律の下にあるかのどちらかです。さらに、「法なくして政府はありえません。これはサタンにも当てはまります。もし彼が政府を持つならば、彼は法律を持たなければなりません。神の政府の下では、選択の自由があります。この自由によって、私たちは自由な道徳的行為者となります。

神はアダムの手を　禁断の果実に触れさせなかったかもしれない神はどのようにしてそれをしたのでしょうか？文字通り、物理的にアダムの手を差し止めたのでしょうか？それともアダムの頭に罰を与えるという脅しをかけたのでしょうか？アダムの服従は自発的なものではなく、強制的なものだったのです。文字通りアダムの手をかざすか、あるいは罰を脅すか、どちらにしても力が必要であり、それは神のやり方に反しています。

愛は神の政府の法であり、神の法は神が被造物に強制できるものではありません。このように、アガペの愛の法則の本質的な性質によって、私たちは選択の自由を持っています。選択の自由がなければ、私たちの従順は自発的なものではなく、強制的なものになってしまいます。これは、その本質が愛である神が望んでおられることではありません。しかし、世界のほとんどの人は、神はコントロールフリークであると信じています。しかし、もし神が本当に力で操ることができるならば、神はアガペー愛の神ではないでしょう。神は単に非人間的な支配者であり、独裁者であり、サタンのような独裁者であるだけなのです。

もし私たちが神を拒絶したり、神に従うことをやめたら、神は私たちの自由を尊重しなくなるのでしょうか？これはいたずらな質問ではありません。しかし、考えてみてください。もし私たちが神を拒否したら、神が私たちの自由を尊重しなくなったとしたら、そもそも私たちには自由があったのでしょうか？答えはNOで、もしそうだとしたら、たとえ神に背いたとしても、私たちの自由はその場に残っていなければなりません。

ここでもう一つの質問があります。私たちが神を拒否し、神が私たちを罰するとしましょう。私たちを罰することによって、神は私たちの自由を尊重しているのでしょうか？いいえ、それはどのような自由でしょうか？神はまだ私たちを支配しているでしょう。

子供たちに言ったら？ "子供たち、今夜は映画に行かないでほしい。" "外で暴動が起きているという噂を聞いたから。" "今夜は外に出るのは安全ではない。"でも好きなようにしていいわ"子供たちはあなたの予約を理解していますが、彼らはとにかく映画に行きたいと決めます。結局のところ、あなたは彼らに自由を与えた。彼らが家に帰ると、あなたは彼らを厳しく叱り、夕食なしで彼らの部屋にそれらを送ります。彼らは本当に自由だったのでしょうか？自由と罰は共存できるのでしょうか？互いに矛盾しているのではないでしょうか？

同じように、神はアダムとエバに「その木を食べてはいけない」と言われました。しかし、あなたがたには選ぶ自由があります。アダムとエバは自由を行使しました。神は彼らを罰したのでしょうか？いいえ、神の国には罰はありません。なぜでしょうか？神は完全な愛であり、完全な愛は罰と関係のある恐れを追い出すからです。

愛には恐れはありません。しかし、完全な愛は恐れを打ち消します。しかし、恐れを抱く者は、愛のうちに完全なものとされていない（第一ヨハネ4:18、強調）。

サタンの王国には、報いと罰の恐怖があり、それはサタンが罰を通して活動しているからです。反乱そのものが、神が支配していない証拠です。

神の政府は自由意志の**政府で**あり、自由意志の行為ではない反抗や服従の行為はありません{ST June 5, 1901, par.4, emphasis added}。

アガペー愛の神は被造物に絶対的な自由を与えなければなりません。絶対的な自由とは、神が私たちを支配するために罰を使うことができないことを意味します。もし神が罰を使うならば、神の被造物は自由な主体ではなくなってしまいます。もし彼らが自由なエージェントでないなら、彼らは単なるオートマトン、ロボットに過ぎません。しかし、わたしたちはロボットではありません。私たちは皆、自由が私たちの自然な権利であることを本能的に理解しています。

ルシファーが神の"基準"に挑戦するまで、宇宙のすべてのものは、神の愛の性格と完全に調和していました。カバーリング・ケルブは天で反抗する完全な自由を持っていましたが、そうでなければ、神は彼の追跡を止めていたでしょう。しかし、ルシファーはまだここで地上を支配しています。ルシファーは自分が神の律法よりもはるかに優れたものを持っていると信じていました。しかし、神は自分が災いをもたらすことを知っていた……それでも、このことを知っていても、ルシファーの自由を撤回しなかった。

さらに、サタンは自分の「商品」を全宇宙に「売りつける」自由を持っていました。彼がそうする自由を持っていただけでなく、他の世界や天使たち自身も、彼らが望むならば、神のもとを離れて彼に加わる自由を持っていたのです。すべての人の自由は不可侵であり、神によって一度も制限されたことはありませんでした。私たちは、天使の三分の一がルシファーに加わる自由を行使し、残りの宇宙がルシファーを拒絶するために同じ自由を行使したことを知っています。

アダムとエバは他の宇宙と同じ選択を与えられましたが、その選択は単純なものでした。神は私たちを自由な道徳的行為者として創造されました。

神はアダムが禁断の果実に触れるのを阻止する力を持っていましたが、もしそうしていたとしたら、サタンは神の恣意的な支配に対す る彼の告訴を支持されていたでしょう。**人間は自由な道徳的行為者ではなく、単なる機械になっていたでしょう**（『レビューとヘラルド』1901年6月4日号） - {1BC 1084.2, emphasis added}。

エデンの園の物語の典型的な説明では、神が神に従わないからアダムとエバを殺すと脅していると非論理的に描かれています。しかし、もし神がアダムとエバを殺そうとしていたなら、サタンはその点を利用して、神に対してそれを利用したでしょう。神は「その木は必ずあなたがたを殺すだろう」と言われ、サタンは自分の木の致命的な結果を隠そうとし、彼らにその木を食べさせようとしました。

もし神の警告が脅威であったならば、アダムとエバにはそもそも意志の自由がなかったことになります。このパラダイムでは、「善悪の知識の木」は単なる服従のテストになってしまいます。そして、もしそれが脅威であったならば、アダムとエバがテストに失敗したとき、彼らは神によって死をもって罰せられることになります。しかし、この木にはそれだけではありません。この木自体が、私たちのすべての問題の原因なのです。死の原因となるのは、この木が象徴するものであって、神ではないのです。

私たちが神を拒否したり、神に従うことをやめたりしたら、神は私たちの自由を尊重しなくなるのでしょうか？なぜなら、もし私たちが神を拒否したら、神が私たちの自由を尊重することをやめてしまったならば、最初から自由はなかったでしょう。

死の脅迫は自由とは相容れない。むしろ、それは脅迫であり、強要であり、真っ向からの虐待です。私たちのほとんどは子供をそのように扱うことはありませんし、そのように扱う人を見下しています。では、完全な愛をお持ちの神様がこのように私たちを扱ってくださると思うのはなぜでしょうか。もし神がアダムとエバを罰すると脅したのなら、彼らにはそもそも自由がなかったことになります。

このような考え方は非論理的であるだけでなく、禁断の木の巨大な象徴性と、禁断の木が象徴する原理が見えなくなってしまいます。サタンが地球を支配し、私たち一人一人を欺いてきたのは、この原理に基づいています。私たちが目を開いて、最後にそれを見ることができますように。

死は神の警告通りに地上に来たが、神の手によってではなかった。では、園では実際に何が起こったのでしょうか？それは簡単なことで、神はアダムとエバに火の中に飛び込むなと言われました。アダムとエバは神の忠告を無視して飛び込んだのです。アダムとエバを燃やしたのは誰なのか、何が燃えたのか、神なのか、それとも火なのか？答えは明らかです。

自由と力は相反するものです。もし神が自由を与えるならば、力を使うこともできません。神は警告したり、助言したりしますが、その後、自由に選択することを許します。神は私たちに原因と結果を示し、それを聞くか聞かないかを決めるのは私たちに任せます。このような方法でルシファーの反抗に対処されましたが、アダムとエバへの対処にも同じ方法が見られます。主はルシファーに自分の選択の結果を警告され、アダムとエバにも同じことをされました。彼らは皆、主の警告を無視しました。原因と結果を示しながらも、自由を守ることが神の方法なのです。

私たちの最初の両親は自由に神に従うことができました。そうすれば，神を知り，神の友情を信じる喜びの中で，永遠に命の木から食べ続けることができました。しかし，神の警告を無視して，死をもたらす木を食べることも自由でした。選択の自由は非常に重要であり，それは必然的にすべての人間の運命と人類の運命を決定することになります。アダムとエバは死を選びましたが、それでも彼らの自由は侵すことができませんでした。

私たちのほとんどは、おそらく神とは少し違ったことをしたでしょう。サタンがアダムとエバに接触するのを防いだかもしれません。サタンの影響を受けないようにしたかもしれません。あるいは、禁断の木を人里離れた、人目につかない、人目につかない場所に置いたかもしれません。その代わりに、神はサタンが庭の中心に、「真ん中」に、生命の木のすぐ隣にいることを許したのです。神は自由と公平の概念を少し遠ざけすぎているのでしょうか？

もし神がサタンを何らかの方法でブロックしていたら、サタンは本当に神を非難する正当な理由を持っていたでしょう。しかし、サタンが神を牽制したかのように、あるいは、神が自分の評判を守りたいという利己的な願望から行動したかのようには思えません。自由は神の性格の一部であり，それを破ることは神の中にはありません。もし神がそれを犯したら、それは神自身の性格を変えることになり、宇宙に混沌をもたらすことになるでしょう。神はそのようなことが起こるのを許すにはあまりにも賢明です。

完全な自由がなければ、今日のような苦境に立たされることはなかったでしょう。それを考えてみてください。ルシファーの自由はそのまま残っていました。神は彼がアダムとエバを傷つけようとしていることを知っていたにもかかわらず、神の創造物の残りの部分を傷つけようとしていたのです。

神は、ルシファーが戦争に勝つためにどこまでも行くことを知っていたし、その範囲内で、彼は宇宙に絶対的に暗いと外国の何かを導入するだろうことを知っていました。その結果、永遠の破壊と破滅がもたらされ、その過程で神の愛する子供たちの多くが殺されることを知っていながら、神はルシファーの自由を尊重されました。神はルシファーを止めるために力を使ったり、アダムとエバにサタンの恐ろしい嘘を信じさせることもしませんでした。サタンが宇宙に導入した律法ほど邪悪なものはありませんでしたが、ルシファーにはそれを推進する完全な自由が与えられていたのです。神はどのようにしてこのように悪を扱うことができるのでしょうか。困惑しますよね。

これらのことは、神の性格を物語っています。アガペー愛の神だけがこのような自由を与えることができます。神は被造物の自由に何という価値を置いておられるのでしょうか。もし神にとって自由意志が重要でなかったら、神は悪の台頭に歯止めをかけていたでしょう。しかし、神はそうしなかったのではなく、それが起こるのを許したのです。これは、神のアガペの愛の完全性を示す明確な証拠です。

神の性格は、神が他の方法で行動したり、反応したりすることを許しません。もし神が力を使ったり、支配したりするならば、神は恣意的になり、一旦恣意的になると、神はアガペの愛であることをやめてしまうでしょう。このようにして、偉大な不正や悪は、ご自身に対してさえも発生するに違いありませんでした。しかし、神はさらに進んで、敵に善いことをし続け、彼らの反乱の間も彼らの命を維持していました。神は悪を克服するために悪を結びつけることはありません。

悪に打ち勝つのではなく、善をもって悪に打ち勝つのです（ローマ12：21）。

園から学んだ教訓から、私たちは、たとえそれが神の真理とみなすものと反対であると信じていても、何かや誰かの邪魔をしてはならないということがわかります。そうすることは、神の自由の原則に反することになります。そのような方法は、それ自体が、それを使う者が神と調和して行動していないことを示しています。神の真理を提示するための強引な方法や卑劣な方法は、神の原則と調和していないことを示しています。このように、神の真理に反対することを選ぶ者は皆、神からの脅迫や罰を恐れることなく、自分の意見を述べる自由を十分に持っています。

サタンの選択は宇宙にとって致命的なものでした。被造物全体が罪の悲惨さの下でうめき声を上げ、多くの人々がやがて神と永遠に過ごす喜びを失うことを選ぶようになります。神は、失われた子供たちの伴侶を失うことの痛みを永遠に感じることになるでしょう。しかし、神は愛であり、神ご自身が犠牲になっても、自由は常に存在します。そして、それが起こったのではないでしょうか？御子は十字架に釘付けにされたのではないでしょうか？

アダムとエバは、禁断の木を食べないようにという神の助言に従う限り、安全でした。この状況で神が持っていた唯一の力は神の愛の力でしたが、夫婦は残念ながらそれを無視してしまいました。

神の「力」は、私たちが神に暴力に基づく力を与えているという点で、大きく誤解されてきました。神は神の律法によって自由を提供し、ルシファーが神の心から逸脱したように、彼もまた自由から逸脱したのです。読者が思い起こせば、暴力は神の中ではなく、ルシファーの中で生まれました。しかし、私たちはまた、人間の選択の力を誤解しています。なぜなら、神は私たちの自由を尊重しなければならないからです。つまり、私たちが死に至る道を執拗に選んだ場合、神は私たちを止めることができないということです。

そのような自由は責任を伴うものです。私たちが利用できる選択肢は本当に二つしかありません。神の王国の生とサタンの王国の死です。ですから、私たちの選択の結果は生と死です。神は私たちの選択を尊重してくださいます。神は私たちの自由を大いに尊重してくださるので、私たちは非常に慎重に、そして賢明に選択しなければなりません。

神が私たちの自由を尊重されているからこそ、いのちである神を拒否すれば、私たちは永遠の死の危険にさらされるのです。彼らはサタンの死の領域に入ってしまい、神はそれを止めることができませんでした。彼らはサタンの死の領域に入り、神はそれを止めることができませんでした。私たちの苦境に対して神が持っていた唯一の解決策はこれでした。神の真理は、私たちの人生とこの惑星の方向性を変える力を持っています。

すべての選択には結果があり、アガペの愛の原則のために、神はそれを尊重しなければなりません。

> ですから，わたしたちは聞いたことにもっと真剣に注意を払わなければなりません。天使を通して語られた言葉が堅実であることを証明し，すべての罪や不従順が正当な報いを受けたとしたら，このような偉大な救いを無視していては，どうやって逃れることができるでしょうか。

正当な報酬」とは、私たちが選択した結果を受け取ることです。もし私たちが死の原則を選ぶならば、私たちは死を受け取り、もし私たちがいのちの原則を選ぶならば、私たちはいのちを受け取ります。神は御子イエス・キリストにあって、私たちに大きな救いを与えてくださいました。この救いは、神が誰であるかについての新しい理解です。この神の新しい理解は、私たちを死から救い、永遠のいのちを与えることができます。

> これは永遠の命であり、唯一の真の神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知るためのものです（ヨハネ17:3）。

神の知恵と原則は常に神の愛によって指示されているので、神が下すすべての決定は愛によってなされます。神の方法は、私たちの中には愚かに思える人もいるかもしれませんが、唯一の賢明な方法なのです。神は知恵を具現化した方です。神の方法は人生の唯一の方法なのです。すべてが言い尽くされたとき、神の方法は唯一の賢明な方法とみなされ、神の知恵を見た者は叫ぶでしょう。

> 全能の主なる神よ、あなたの御業は偉大であり、驚くべきものです。聖徒の王よ、あなたの道は正しく真実です。

平等なアクセス

また、園の中腹には、善悪の知識の木（創世記2：9）がありました。

平等なアクセスは自由と手を取り合っています。これは何を意味するのでしょうか？それは、神とルシファーの両方が宇宙の中で平等な土俵に立っていることを意味します。ルシファーの自由は、アダムとイブに自由にアクセスできることを意味します。神は彼を妨げませんでした。サタンがアダムとイブに近づくことを許されたのは、神の園の中だったのです。神は彼を自分の園に住まわせただけでなく、彼の死の原理を表す木を持つことも許されました。そして、その木は、神の生の原理を表す木と並んで、園の真ん中にありました。

この二つの木の位置関係は、神について多くのことを明らかにしています。神はサタンの木を園の奥の見えないところに置くことを禁じられていたかもしれません。その代わりに、神はサタンが平等に露出し、自分の商品を売り歩く機会を与え、生命の木の隣にサタンを住まわせることさえ許されました。つの木の中心的な位置は、神が自分の敵に対して何の優位性も与えていないことを示しています。

アダムとエバもまた、両方の木を平等に利用することができました。彼らは「善悪の知識の木」について警告されていましたが、「善悪の知識の木」を食べる自由は明らかに取り除かれていませんでした。確かに、サタンは「善悪の知識の木」でしか二人に近づくことができませんでした。それは、サタンがその一本の木だけを管轄していたからです。園の残りの部分は神の管轄下にあり、そこにはサタンが売り込むことができるものは何もありませんでした。サタンはこの木に閉じ込められていました。ですから、アダムとエバに影響を与えることができたのは、この木の上だけでした。しかし、神はサタンにご自身の生命の木と並んだプラットフォームを与えてくださいました。

イエス様は、「麦とあられ」のたとえ話の中で、平等なアクセスの良い例を示されました。このたとえ話の解釈では、麦とタレは隣り合わせに成長する真の信者と偽りの信者を表しているとしています。しかし、それだけではありません。この原則を増幅して、真実と誤りに適用することができます。このことについて、次の言葉に注目してください。

> 良い種を蒔いた者は人....王国の子であるが、いずしは邪悪な者の子である。良い種は、神の言葉、真理から生まれた者を表しています。いらずきは、**誤りや偽りの原理の**実や体現者を表しています。"彼らを蒔いた敵は悪魔である"神も天使たちも タレを生む種を蒔いたことはありませんタレは**いつも、神と人の敵であるサタンによって蒔かれています**{COL 70.3, emphasis added}。

この例え話の中で、私たちは、敵が、その実が熟すまで、神の真の信者の横に自分の信者を「植える」ことを許す神の姿を見ています。果実が熟すと、その果実自体が、どちらが真実でどちらが偽物かを示す十分な証拠となります。王国の偽りの子供たちは、ルシファーが導入した「偽りの原則」によって、不義によって、また、ルシファーを暴力的な存在に変えた「偽りの原則」によって、活動しています。

神は真実と偽りが隣り合わせに成長することを許すだろうか？歴史の中で真理と偽りが隣り合わせに成長してきたのは事実ではないでしょうか？真理と誤りの違いはほとんど区別がつかないほどで、蛇がその原理の誤りをもって全世界を欺いている（黙示録12:9）ほどです。このように、私たちが成熟して初めて、それらの間を見分けることができるようになり、それらが何であるかを知ることができるようになるのです。

聖書でさえも、この平等なアクセスの原則から免れることはできません-聖書はまた、神のお人柄についての真実と偽りを含んでいます。この自由は神の霊感によってもたらされたものであり、この自由によって、私たちは大論争の全貌を把握し、忠実な説明を得ることができます。聖書についてのパウロのテモテへの訓示は、このことを証明しています。

しかし、あなたがたは、誰から学んだのか、また、幼い頃から聖典を知っていたことを知っていて、それがキリスト・イエスにある信仰によって、あなたがたを救いのために賢くすることができることを知っていて、学んだこと、確信したことを続けなければなりません。すべての聖典は神の霊感によって与えられたものであり、教義、戒め、矯正、義の指導に有益であり、神の人が完全に完成し、すべての善い行いのために完全に備えられるようにします（第2テモテ3:14-16）。

"聖典は私たちを" "イエス・キリストにある信仰によって" "救いのために賢くすることができる"　ということに注目してください。キリストは、誤りと真理を見分ける方法を教えてくださいます。どのようにしてそれをされるのでしょうか？神様のお人柄についての真理を与えてくださるからです。イエス・キリストによって与えられた真理がなければ、私たちは永遠に、善悪の知識の木にあるサタンの嘘の迷路の中にいることになるでしょう。キリストは私たちに「いのちの木」の知識を与えてくれます。

神は聖書に見られる歴史的な記録を消毒されたのではありません。書いた人たちを鼓舞して、あるがままに書き留めるようにしたのです。また、サタンがそこから神様のお人柄についての嘘をはびこらせるのを防がなかったのです。また、サタンが人間の心に影響を与えるのを防ぐこともできませんでした。エリヤ、モーセ、ダビデ…など…彼らは皆、神の名の下に血を流しました。しかし、イエスはそこに来て、彼らの殺人的な模範に従いたいと思っている弟子たちに、彼らがどのような霊を持っているのか分からないと言いました。イエスが言っていた霊とは、もちろんサタンの霊でした。

さて，彼を迎え入れる時が来たので，彼はエルサレムに行くために顔を据え，彼の顔の前に使者を遣わした。そして，彼らが行くとき，彼らはサマリヤ人の村に入って，彼のために準備をした。しかし、彼らは彼を受け入れなかった。弟子のヤコブとヨハネはこれを見て言った，「主よ，エリヤのように火を天から降らせて，彼らを焼き尽くさせたいのですか」。しかし，主は振り返って彼らを叱責されて言われた，「あなたは，あなたがたがどのような霊であるかを知らない。人の子は人の命を滅ぼすために来たのではなく，彼らを救うために来たのだから」。そして、彼らは別の村に行った（ルカ9:51-56）。

そのためにイエス様が地上に来られたのです。イエス様だけが、神のお人柄についての絶対的な真理を世に与えて下さるのであり、この神のお人柄こそが、すべての論争の焦点となっているのです。なぜなら、例外なくすべての人に救いがあるのは、神の知識の中にあるからです。このように、イエスの御父の啓示だけが「道であり、真理であり、いのち」（ヨハネ14：6）であり、イエスを通してでなければ、誰もこの啓示にたどり着くことができません。

しかし、私たちは旧約聖書の神の性格に関する見解を捨てることはできても、旧約聖書を捨てたり、霊感がないと主張したりすることはありません。旧約聖書と格闘することによってイエスにたどり着くのです。旧約聖書はイエスを証するテキストであり（ヨハネ5：39），御父についての知識と理解の礎となるものです。

聖書の中で神が提供している平等なアクセスには、心を奪われます。私たち一人一人が聖書を読んで、自分の結論を選ぶことができます。ヘブライ語でさえ、このような選択の自由を提供しています。これは、翻訳者が自分の信念体系に沿った意味を選ぶことができることを意味しています。例えば、次のような一節を考えてみましょう。

私は光を形成し、暗闇を作り、平和を作り、災いを作り、主である私はこれらすべてのことを行う」（イザヤ45:7）。

闇」と「災難」の前にある「創造する」という言葉は、同じ「バラ」という言葉で、「創造する」という意味ですが、「切り倒す」という意味もあります。この新しい意味でこの節を書き直すと、文章はかなり変わってきます。

"私は光を形成して闇を切り捨て、平和を作り災いを切り捨てます。" "主である私はこれらすべてのことを行います。

神は闇の業には全く関与していないと信じる者として、私たちはこの第二訳の方がより正確であると信じることを選びます。このことをどのようにして確認することができるでしょうか。主は御霊の剣、すなわちイエス・キリストをもって、闇と災いを切り捨ててくださいます。彼は神についての真実であり、彼の「言葉」、すなわち彼の剣は彼の口から出てきます（黙示録19:15）。

収穫は世界の終わりにしかないというのは面白くないのでしょうか？なぜだと思いますか？それは、収穫直前に実が熟すために絶対に必要な「雨」である霊的な「後の雨」が、この世の終わりにだけ注がれるからでしょうか？後の雨は、不義に陥った世界、つまりサタンの道徳的律法に浸った世界に対する神の最後の希望のメッセージとなります。神についての真理は、そのような範囲で与えられ、それによって両方の原則が熟すことになるのです。

ダニエルは12章でこのように語っています。

"しかし、ダニエルよ、あなたは言葉を閉じて、終わりの時まで本を封印しなさい。多くの者は清められ、白くされ、洗練されるが、邪悪な者は邪悪なことをし、邪悪な者は誰も理解しないが、賢明な者は理解する」（ダニエル12:4, 9-10）。

嘘はあまりにも欺瞞的なので、神の知恵を持つ者だけがそれを見分けることができます。それまでは、ルシファーの偽りの「知恵」は真実に近く、論理的に見えるので、「可能であれば、選民でさえも騙されるだろう」と言われています（マタイ24:24）。真理を見ることによってのみ、私たちは誤りを見分けることができます。私たちは真理を知り、それが私たちを自由にしてくれるようにしなければなりません。

それは、**世界を包み込んでいるのは、神に対する誤った理解の**闇です。**人は神の性質についての知識を失っています。誤解され、誤解されているのです**。この時、神からのメッセージが宣べ伝えられ、その影響力で照らし、その力で救われるメッセージが宣べ伝えられます。**神のお人柄が知らされるのです。世の暗闇の中に、神の栄光の光、神の善良さとあわれみと真理の光が照らされるのです**{COL 415.3, emphasis added}。

真実と嘘の知識、麦とさざなみの知識は、最後の日には指数関数的に成長します。これは、神のアガペの愛の律法の下では、サタンと同様にご自身にも平等にアクセスできるからです。

インパリティ

あなたの神の主は神々の神であり、領主の主であり、偉大な神であり、強大であり、偉大な神であるからです。

わたしたちの神である主に対して不義はなく、不親切もなく、賄賂を受け取ることもないからです」（第二歴代誌19:7）。

しかし、主は王子たちに偏見を持たれることはなく、また、貧しい者よりも豊かな者の方を見下されることもありません。

神に対する偏見がないからです（ローマ2:11）。

…しかし、もしあなたがたが偏見を示すならば、あなたがたは罪を犯し、違反者として律法によって有罪とされます（ヤコブ2:9）。

しかし、上からの知恵は、まず純粋で、次に平安で、穏やかで、進んで降伏し、あわれみと良い実りに満ち、偏見と偽善のないものです（ヤコブ3:17）。

神のアガペー愛のもう一つの側面は、公平性です。公平性とは、すべての人間を同じレベルに置くことです。これは両刃の剣です。どのようにしてですか？

第一に、神は、神の愛のプリズムを通して私たち一人一人を見ておられます。アガペーを通して、私たちが善人であろうと悪人であろうと、神は私たちをすべて神の愛と配慮の対象として見ておられます。神のもとには、重要性や価値の階層はありません。私たちは皆、主にとって大切な存在であり、価値のある存在なのです。主は「良い人」と「悪い人」の両方を主の婚礼の晩餐に招待されています。

コインの反対側には、神は、知っていて進んでサタンのやり方を選んだ人は誰でも、その王国の結果に苦しむことを許すということがあります。たとえ私たちが神に賄賂を贈ろうとしても、神は私たちを恣意的に救うことはできません。神は私たちの選択の自由を決して崩されないので、私たちが自分の行動の結果を受けることを許しても、神を妨げるものは何もありません。神は最後の瞬間まで私たちに不義から立ち直るように絶えず求めますが、もしそれを拒否するならば、私たちが選んだ死の領域に入ることを許してくださいます。

イエス様のメッセージの焦点は、天の父の息子になるためには、「神は悪人と善人の上に太陽を昇らせ、正義と不正義の上に雨を降らせる」（マタイ5:45）ということを知らなければならないということです。これが神の公平性です。これが神の「完全さ」であり、神の「完全さ」です。私たち人間がそうであるように、神は部分的ではなく、ある人には善、ある人には悪ではありません。神はすべての人に善であり、「善」にも「悪」にも善であり、「正義」にも「不正義」にも善である。神の内なる性格は「全体」であり，「分割」されたものではありません。

神の**善良さは**私たちの選択を尊重してくださいます。それゆえに、神はまた、私たちの選択の結果に苦しむことを許してくださるのです。神は人々が蒔いたものを刈り取ることを許されないという歪んだ考えは大きな問題です。このことはイスラエルの歴史を見れば明らかです。

> イスラエルの歴史は、来たるべき世代の指導と警告のために記録されることになっていました。すべての未来の人々は、天の神を公平な支配者として見なければならず、いかなる場合も罪を正当化しません。しかし、罪の罪深さを理解している人はほとんどいません。人は、神はあまりにも善良すぎて、罪を犯した者を罰することができないと自分たちに言い聞かせています。しかし、聖書の歴史に照らしてみると、神様の善良さと愛が、宇宙の平和と幸福にとって 致命的な悪としての罪に対処するように、神様に働きかけていることは明らかです{PP 420.2}。

この本の最後の方に行くと、この文章を少し理解することができるようになるでしょう。神のいわゆる「罰」とは、神を拒絶する者を手放すことを意味します（「試練にさらされた神」シリーズの３冊目の本、*「神の怒り」の仮面を剥がされたものを*参照してください）。"手放す」ということは、私たちがサタンである非難者、破壊者に完全に支配されることを手放すことを意味します。"手放す」とは、神が私たちの選択の自由を尊重してくださることを意味します。

神にとって、どんな人も普通の人でも、汚れた人でもありません。ペテロのコルネリウスへの言葉は、神がすべての人に公平であることを明らかにしています：「神は、私がいかなる人をも平民と呼んではならないし、汚れた者と呼んではならないことを私に示されました。神はビジョンの中で、ペテロに公平性の原則を示されました。

> 次の日，彼らが旅に出て街に近づいたとき，ペテロは6時頃，家の上に登って祈った。その時，ペテロは非常に空腹になり，食べようとしたが，彼らが準備をしている間に，彼は恍惚の状態に陥った。その中には、地の四つ足の動物、野獣、這うようなもの、空中の鳥など、あらゆる種類のものがいた。すると、声が彼のところに来て、『ペテロよ、起きなさい、殺して食べなさい』と言った。しかしペテロは言った，「主よ，そうではありません。わたしは，ありふれたものも，汚れたものも食べたことがありませんから。神が清めてくださったものを、あなたがたは普通のものと呼んではならない」（使徒言行録10:9-15）。

ペテロは、神のお人柄についての誤った知識をあまりにも植え付けられていたので、このメッセージは３回繰り返されなければなりませんでした。"これは三回行われた。このことは三度行われた。そして、対象は再び天に引き上げられた」（使徒言行録10:16）。

しかし、この夢を見た後も、ペテロはイエス様が「神は悪人と善人の上に太陽を昇らせ、正義の人と不正義の人の上に雨を降らせる」と言われた意味を完全に理解していませんでした。その証拠に、ペテロは後に、異邦人のための儀式的な清めの必要性についてパウロと論争になっています。

ペテロの夢は、神様がユダヤ人と異邦人の間に偏見を示さないことを教えるために与えられました。ユダヤ人は神様に従うことを公言している人たちの代表であり、異邦人は神様に従わない人たちの代表です。ペテロの夢は、神様が神様の原則の外で生きている人たちを、神様に従う人たちと同じように慈しみをもって扱ってくださることを明らかにしました。神様の私たち一人一人に対する愛は、私たちの想像を超えています。神の主な目的は、私たち全員を救うことです。しかし、この目的を達成するために、誰に対しても力や強制、破壊をすることは決してありません。他の人を救うためにある人を破壊すると言うのは、神様の公平性の原則に反しています。

神の方法を採用することによって、神の信奉者は宇宙の真の神を讃えます。アガペの愛の神を拒否する人々は、神をどのように崇拝するかを自由に選ぶことができます。神が愛と力を混ぜ合わせた神であったならば、彼らは困ったことになるでしょう。暴力を選ぶことによって、彼らは破壊者の管轄下に置かれ（黙示録9：11）、彼の下で最も暴力的な結末を迎えることになるからです。

この節をもう一度考えてみてください。

> わたしたちの神である主に対して不義はなく、不親切もなく、賄賂を受け取ることもないからです」（第二歴代誌19:7）。

不義が"賄賂を受け取る"ことに 関係していることに気づいたか？このことについては、次の章で詳しくお話しします。

12.善悪の知識

真理の道は誤りの道の隣にあり、聖霊によって働かれておらず、したがって、真理と誤りの違いを見分けることができない心には、どちらの道も一つの道に見えるかもしれません{1SM 202.2}。

キリストは「世に出てくるすべての人を照らす光」(ヨハネ1:9)です。キリストを通してすべての人間が命を得たように、キリストを通してすべての魂が神聖な光の一筋を受けるのです。知的な力だけでなく、霊的な力、正しい認識、善への欲求がすべての心の中に存在しています。**しかし、これらの原則に反して、拮抗する力が闘っています。善悪の知識の木を食べた結果は、すべての人の経験に現れています。その人の本性の中には悪への傾向があり、その力には誰の助けも借りずには抗うことができません**。この力に耐え、魂の奥底で唯一価値のあるものとして受け入れている理想を達成するために、彼が助けを得ることができるのは、ただ一つの力だけです。その力とはキリストです。その力との協力こそが人間の最大の必要条件です{RC 106.5, emphasis added}。

我々は最終的に我々はより詳細にルシファーは、彼がアガペー愛の神の法則に逆らったときに考案した原理を議論する場所に到着しました。我々は、不義、善と悪の知識、善と悪の道徳的な法律、または単に善と悪を含む様々な名前でこの法律に対処します。

聖書は、ルシファーが反乱を起こした当初の問題が何であったのか、はっきりとは述べていません。パズルは一度に一つずつ組み立てなければなりません。真実のナゲットは、預言者イザヤによって説明されているように、聖書から採掘されなければなりません。

誰に知識を教え、誰に教義を理解させようか。 乳から乳を出し、乳房から引き出された者たちである。訓戒は訓戒の上に、訓戒は訓戒の上に、行は行の上に、行は行の上に、ここに少し、そこに少し（イザヤ28:9-10、KJV）。

"知識"と"教義"は、"乳から離乳し、乳房から引き出された者"によって理解され、"訓戒は訓戒の上に、訓戒の上に、訓戒の上に、線の上に、線の上に、線の上に、線の上に、ここに少し、そこに少し"採掘されるべきものである。固形の食物」とは何か、どのようにして「乳からの離乳」になるのか。

ヘブル人への手紙の著者は、「乳離れ」をすることは、霊的に成熟した者になることだと述べています。

この頃になると、あなたがたは教師になるべきですが、神の託宣の第一原理をもう一度教えてくれる人を必要としています。牛乳だけを飲む者は皆、義の言葉に習熟していない。しかし、固形の食べ物は、成人した人、つまり、使用することによって、善と悪の両方を見分けることができるように感覚が鍛えられた人のものです（ヘブル5:12-14）。

この御言葉によると、霊的に成熟した者になるには、「善と悪を見極める」ことが必要です。善と悪を見分けるのは難しいですか？私たちは皆、この二つの違いが分からないのでしょうか？子供でも分かるのではないでしょうか？パウロによれば、「善と悪の両方」を見分けることが霊的成熟、つまり「満年齢の人たちのための堅固な食物」を構成するからです。さらに、この箇所では、成熟とは「義の言葉」に習熟することを意味し、不義に習熟することとは対照的であることが暗示されています。

では、パウロは「善と悪を見分ける」とはどういう意味だったのでしょうか？どうやって見分けるのでしょうか？それは「善悪の知識の木」の善悪のことを言っていたのでしょうか？もしそうだとしたら、私たちはいくつかの問題にぶつかる可能性があります…生命の木は良いものですから、誰もそれに異議を唱えることはできません。しかし、「善悪の知識の木」は死を引き起こすので、悪でなければなりません。それは毒であり、神はそう言っています。それなのに、この木には善も含まれている…そうでしょう？

善悪の知識の木が死を引き起こすのであれば、この木の善はその毒の成分でなければなりません。このように、それは善であることができるのでしょうか？答えはノーです。

生命の木は善であり（「神以外に善い人はいない」マタイ19:17）、善悪の知識の木は悪である（「あなたがそれを食べた日には必ず死ぬ」創世記2:17）。これは本質的には、申命記でモーセが言っていることです。

"見よ、私は今日、あなたがたの前に**生と善、死と悪を**定めた…"　申命記30章15節、強調を加えた）。

先に読んだ偽預言者についてのイエス様の警告は、このことをさらに理解するのに役立ちます。イエス様は言われました。

すべての良い木は良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木は悪い実を結ぶことができず、悪い木は良い実を結ぶことができない。良い実を結ばない木はすべて切り倒され、火の中に投げ込まれる。ですから、あなたがたはその実によって彼らを知ることになります（マタイによる福音書7:17-20）。

死をもたらす木は"悪い木"です。ですから、どんな外見をしていても、「良い実を結ぶ」ことはできません。偽預言者たちを思い出してください。彼らは羊の服を着て来ましたが、実際は猛獣のような狼でした。律法学者とファリサイ派の人々は、美しい外見をしていましたが、中は死に満ちていました。

> 哀れなことに、律法学者とファリサイ派の偽善者たちよ、あなたがたは白塗りの墓のようなものである。あなたがたは白塗りの墓のようなもので、外見は**美しく見えるが、中は死んだ人の骨とすべての汚れたものでいっぱいだから**である（マタイ23:27、強調）。

ルシファーが提案した神の律法の変更は、生命の完全な律法から逸脱し、結果として死を引き起こしたという事実によって、良いものではありませんでした。

> **主の律法は完全である」ので、それに反するものはすべて悪でなければなりません**。神の戒めに背き、他の人にそうするように教える者は、キリストによって非難されます。救世主の従順な生活は、律法の主張を維持し、従順が育む人格の卓越性を示しました。彼がしたように従う人は皆、同様に律法が「聖なるものであり、公正なものであり、善いものである」と宣言しています{ST March 29, 1910, par.11, emphasis added}。

サタンの律法は、神の律法の「バリエーション」であり、それゆえに悪なのです。神の律法には、真の善は含まれていません。霊的な成熟とは、したがって、これらの二つの木の間を見分けることができることです。一方は生命の善であり、他方は死の悪です（申命記30:15）。

ここに問題があります。我々はすべての善と悪の知識の木の中に閉じ込められている。我々は、それが神のものであることを考えて、その良いを見てきました。我々は、真の善が何であるかを見るために、この木の外を考えなければならない - 我々は生活の木に見なければなりません。その後、我々は "善と悪の両方を見分ける"ことができるようになります。そして、私たちに「いのちの木」を示すことができるのは、イエス・キリストだけなのです。

エデンの園の真ん中にある二つの木は、私たちの心の中で「覇権を争う」二つの原則を表していました。この引用をもう一度考えてみてください。

> 聖書はそれ自身の暴露者である。聖典は聖典と比較されるべきものである。学生は、聖書を全体として捉え、その部分の関係を見ることを学ばなければなりません。彼は、その壮大な中心テーマ、世界のための神の元々の目的、大論争の勃興、贖いの業についての知識を得るべきです。**覇権を争っている二つの原則の**性質を理解し、**歴史と予言の記録を通して、その働きを偉大な完結に至るまで辿ることを学ぶべきです。**彼は、この論争が人間の経験のあらゆる段階にどのように入り込んでいるのか、人生のあらゆる行為において、彼自身が**二つの対立する動機の一方か他方かをどのよう**に明らかにしているのか、そして、彼がそうするかどうかにかかわらず、彼が論争のどちらの側にいるのかを今も決定しているのかを見るべきです{Ed 190.2, emphasis added}。

これらは深い言葉です。これらの言葉は、この二つの原則をめぐる論争を、私たちの生活の中に直接置いています-人生のあらゆる行為は、「二つの対立する動機のどちらか一方か他方を明らかにする」のです。そして、"意志があろうとなかろうと"、私たちは"今も論争のどちらの側にいるかを決めている"のです。霊的成熟とは、これらの"二つの対立する動機"の間を見分けることができることです。

善悪の道徳的な法則は非常に欺瞞的であり、その邪悪さを把握するのは難しいので、これは言うほど簡単なことではありません。それは非常に高度な欺瞞的な道徳的根拠の上に立っています。さらに，堕落した人間であるわたしたちの道徳的アイデンティティは，この道徳と完全に調和しています。アダムとエバが善悪の知識の木の実を食べた後，神は蛇と女の間に敵意を持たせると言われたのはこのためです。

恨みを晴らす
あなたと女の間で
そして あなたの種と彼女の種の間に
彼はあなたの頭にあざをつけるでしょう。
そして、あなたがたは彼のかかとをあざける」（創世記3:15）。

なぜ神は蛇と女の間に敵意を持たれたのでしょうか？その答えは、イヴが蛇の木を食べた瞬間から、二人の間に完全な共感があったからに他なりません。"敵意"は女の"種"を介して、イエス・キリストに言及したもう一つの比喩です。

庭でサタンに宣告された文の中で、主は宣言した。"わたしはあなたと女との間に敵意を、またあなたの種とその種との間に敵意を置く。創世記3:15**これは、偉大な敵の力がついに破られるという約束でした**。アダムとエバは、正義の裁判官の前に罪人として立っていましたが、彼らは、自分たちの分け前にならなければならない苦難と悲しみや、塵に帰らなければならないことを聞く前に、希望を与えずにはいられない言葉に耳を傾けていました。彼らは最終的な勝利を期待することができました{EP 33.1, emphasis added}。

イエスはサタンの頭をあざむく「種」でした。

さて、アブラハムとその種との間で約束されたのは、アブラハムとその種でした。アブラハムは、多くの人のように「そして、種に」と言っているのではなく、一人の人のように「そして、キリストであるあなたの種に」と言っています（ガラテヤ3:16）。

イエス様を唯一の真の義の模範として見なければ、サタンの律法の欺瞞的な性質を見ることはできません。実際、人間の道徳に関して、私たちがしばしば「真実」だと信じていることは、偽りであり、反逆者の律法の一部であることがわかります。そのため、私たちの多くは、真の真理が与えられたときにそれを受け入れることができず、悲しいことに真の神から目を背けてしまうのです。
預言者イザヤは、善悪の道徳律令の下にある人間の状態を描いています。

哀れな、罪深い国。
不義に満ちた民だ
悪人の群れだ
堕落した子供たち!
彼らは主を見捨てた。

彼らは怒りに駆られている
イスラエルの聖なる者
後ろ向きになってしまった。
なんでまた叩かれなきゃいけないの？
どんどん反乱が起きるでしょう。
頭全体が気持ち悪い。
そして、心全体が気を失う。足の裏から頭まで。
健全性がない。
しかし、傷やアザ、腐りかけのただれ。
閉鎖されているわけでも束縛されているわけでもありません。
あるいは軟膏で癒された（イザヤ1:4-6）。

そして、使徒パウロはこう述べています。

私たちは以前、ユダヤ人とギリシャ人の両方に罪を犯していると告発したからです。
書かれている通りです。
"正しい者は一人もいない、いや、一人もいない。
理解者は誰もいない。
神を求める者は一人もいない。
全員が脇を向いています。
一緒になって不採算になってしまった。
"善いことをする者は一人もいない"
"彼らの喉は開かれた墓場だ
彼らの舌で、彼らは欺瞞を実践してきた」。
"アスの毒は彼らの唇の下にある"
"誰の口は罵りと苦味に満ちている"
"彼らの足は血を流すのが早い
破壊と不幸は彼らのやり方にある。
"平和の道は彼らが知らなかった"
"彼らの目の前には神への恐れはない"（ローマ3:11-18）。

これはきれいな絵ではありませんが、それでもこれが私たちの現実です。なぜ私たちはこのような状態になっているのでしょうか。それは、私たちの内的な羅針盤である罪の道徳律法のせいです。"アスプの毒"、つまり蛇の原理は、私たちの"唇の下"にあります。"破壊と悲惨"は、サタンの道徳律法に命じられた私たちの考え方の中にあるのです。"平和の道"すなわち神のアガペー愛の法則を我々は知らなかった。

しかし、私たちは希望を失う必要はありません。しかし、その前に、私たちの心を完全にひっくり返さなければなりません。これが神が私たちに求めておられる「悔い改め」です。これはメタノイアであり、完全な心の変化、考え方の逆転です。これは「新しく生まれ変わる」ことであり、「新しい人」なのです。

ルシファーは、私たちが彼と同調するほど私たちを欺いてきたのですから、私たちは拒絶する前に、まず彼の欺瞞に気づくことができなければなりません。私たちの心は、神の愛によって溶かされなければなりません。そして、私たちが再び暗闇の中に戻らないように、私たちに光と真理を与えてくれる「ぶどうの木」と日々交わる必要があります。

わたしはぶどうの木であり、あなたがたは枝である。わたしにとどまり、わたしがその中にいる者は、多くの実を結ぶ。

そこでイエスは彼らに言われた、「光があなたがたと共にあるのは、もう少し先のことだ。暗闇に追い越されないように、光があるうちに歩きなさい。

ルシファーが神の律法に反抗した根本的な理由を理解したとき、私たちは善悪を理解し始めるでしょう。私たちはすでにルシファーが神の律法を弱く愚かなものと考えていたことを知っています。しかし、なぜ彼はそれを考えたのでしょうか？

大論争の冒頭で、サタンは、神の律法は従うことができない、正義はあわれみと矛盾している、律法が破られると、罪人を赦すことができなくなる、と宣言しました。**すべての罪はその罰を受けなければならない、**もし神が罪の罰を免れるならば、神は真実と正義の神ではないと**サタンは主張しました。**人が神の律法を破り、神の御心に逆らうと、サタンは反抗した。律法を守ることができず、人を赦すことができないことが証明されたのです。サタンは、人間は反抗した後、天から追放されたので、人類は永遠に神の寵愛から締め出されなければならないと主張しました。神は正義でありながら、罪人にあわれみを示すことはできない、とサタンは主張しました{DA 761.4, emphasis added}。

この言葉には意味がある"大論争の幕開け"とは エゼキエルの言葉と同じです "あなたの中に不義が見出されるまで　あなたのやり方は完璧だった"両方の記述は、愛の律法に対するサタンの反逆の始まりに言及しています。これらの箇所を一緒に並べると、「大論争の幕開け」でルシファーに「見出された」「不義」は、「正義」という新しい概念であったことがわかります。これは、「大論争の幕開け」で神に反抗して立ち上がった、彼の反逆の最初の段階での彼の基礎的な理由でした。

これは、私たちの道徳観を正しく表しているのではないでしょうか？ニュースで犯罪のニュースを聞くと、加害者は罪に応じて、それに応じた罰を受けなければならないと思いませんか？"自業自得"や"自業自得"といった表現もあります。

ルシファーが「正義は慈悲と矛盾している」と発表したことで、「正義」についての新しい考え方が明らかになりました。慈悲は神の正義であり、これが神の玉座の基礎です。幕屋では，律法はあわれみの座によって覆われていました。憐れみの席（玉座）は神の王国の象徴であり、憐れみは神の律法の基礎です。

"また、ダビデの幕屋では、真実にしてその上に座られ、裁き、正義を**求め、義を急がれる**」（イザヤ16:5、強調）。

正義と正義はあなたの御座の基礎であり、あわれみと真理はあなたの御顔の前にあります（詩篇89:14、強調）。

主のすべての道はあわれみと真理であり、主の契約と主の証しを守る者たちのために**ある**（詩篇25:10、強調）。

悪人には多くの悲しみがある**が、主に信頼する者には、あわれみが彼を包んでくれる**（詩篇32:10、強調）。

しかし、主であるあなたは、憐れみに満ち、慈悲深く、慈しみに満ち、**真実に満ちた神**です（詩篇86:15、強調しています）。

わたしは、**「あわれみは永遠に築き上げられ**、あなたの忠実さは天に確立される」（詩篇89:2、強調）と言ったからです。

ルシファーは、神の愛の律法の欠陥、弱点は恣意的な罰がないことだと主張しました。ルシファーは、アガペの愛は罰を与えなければ失敗する運命にあると主張しました。皮肉なことに、神の律法に固有の罰がないからこそ、ルシファー自身が神からの罰や滅亡を恐れることなく、自分の律法を持ち込む自由を持っていたのです。

もしそうだとしたら，天使の三分の一を自分の側に引き寄せることができたかどうかは非常に疑問です。サタンの道徳的法則を理解するのに役立つシンボルである「善悪の知識の木」は、「悪の木」ではなく、「善悪の知識の木」と呼ばれていました。それはサタンがそう徹底的に私たちを欺くために管理してきたことを、この混ざり合い、善と悪のこの混合物を介しているので、これは微妙ですが、非常に重要なニュアンスです。

悪魔の中に善があると主張することは、ある人にとっては絶対的な冒涜に見えるかもしれません。自然な人間の心はそのようなことを想像することはできませんし、当然そうです。しかし、ルシファーの法則は、善であるように見える側面を持っています。

彼が何のために活動しているかは知っています。彼は結局のところ悪魔であり、純粋な悪なのです。どんな形の善も、たとえ恣意的なものであっても、彼に由来するものだと提案するのは不条理なことのように思えます。彼についてのすべてのことが邪悪なものであると仮定していますが、最終的にはこれが真実です。では、この「善」をどのように理解すればよいのでしょうか。それは善なのか、それとも悪なのか？

神はアダムに「園のすべての木を自由に食べてもよいが、善悪の知識の木は食べてはならない。このように、この木は偽りの善であり、悪の木と一緒に死の原因となるからです。サタンは私たちにそう思わせたいのでしょうが、ここには真の善はありません。

サタンは神の敵です。したがって、サタンとそこから来るものはすべて、神と神のアガペー愛の原則とは完全に対立していなければなりません。善悪の道徳律法は、神の「生命の木」の原則と完全に対立していなければなりません。さらに、ルシファーの道徳は二つの原則で構成されているように見えても、実際には一つの原則にすぎません。それは単一の、合体した、堕落した原理です。

この原理を表すために一本の木を使うことで、神はこの相反する考えの法則が二つの対照的な面からなる一つの原理を表していることを示しました。善悪は一つの原理であるが、それは単一ではなく、二元論的であり、ハイブリッドな原理である。二つの原理は一緒に働き、分離することはできません。

表面的には、サタンの律法の善と悪は相反するもののように見えますが、本質的には両方とも破壊と死をもたらします。この律法の文脈では、善と悪は同じコインの表裏一体であり、ルシファーを「内なる暴力」で満たしたものであるため、両者とも暴力的なのです。

善悪の原理における「善」は一種の「愛」ですが、この「愛」は神の無条件のアガペーの愛とは全く正反対のものです。究極的には、この「愛」は「生命の木」の真の無条件の善とは全く正反対であるため、全く善であることができないのです。

> サタンは欺く力をもって、真理を不明瞭にする多数の誤りを持ち込んでいます。**誤りは単独では立ち上がることができず、真理の木に寄生するように自分自身を固定しなければ、すぐに絶滅してしまうでしょう。誤りは神の真理から命を得ています**。人間の伝統は、浮遊する細菌のように、神の真理に付着し、人間はそれらを真理の一部とみなします。偽りの教義によって、サタンは足がかりを得て、人の心を捕らえ、真理には何の根拠もない理論を持つようにします。人は大胆にも教義のために人の戒めを教えます。しかし、年齢が誤りを真実にするのではなく、また、その重荷が真実の植物を寄生させるのでもありません。真理の**木は、それ自身の真の実を結び、その真の起源と性質を示しています。誤りの寄生虫もまた、それ自身の実を結び、その性質が天の起源の植物とは異なることを明らかにします**{Ev 589.1, emphasis added}。
>
> 文化的で洗練された人々には、「闇の王子」は、より洗練された知的な側面を持つスピリチュアリズムを提示しています。**魅惑的なシーンや愛と慈愛を雄弁に描くことで空想を楽しませてくれます。**彼は人を自分の知恵に大きな誇りを持つように導き、その心の中で永遠のものを軽蔑するようにします。

ルシファーは、"神の真理から生命を引き出す"恩義の概念に固定されています。しかし、"誤りの寄生虫もまた、それ自身の果実を実らせ、その性質が天の起源の植物から多様であることを明らかにする"

サタンの善が実る「実」は死です。しかし、彼の善、彼の版の恩義は、彼の律法を通してどのように表現されているのでしょうか？サタンは賄賂のシステム、つまり報酬のシステムを考案しました。前の章で、「賄賂を受け取る」ことがどのように不義の一部であるかを見ました。不義は賄賂制度と刑罰制度から成り立っています。大まかに言えば、これが「善悪の知識」の意味です。

罰はサタン版の"正義"です。罰は善と悪の悪の側面だ報酬と罰は、サタンの律法の主な特徴です。より正確に言えば、これらの特徴は、善を行うための恣意的な報酬であり、悪を行うための恣意的な罰である。前述したように、罰はサタンの反乱の元々の理由でした。アガペーには罰が含まれていないので、アガペーは「欠陥がある」と考え、「すべての罪は罰を受けなければならない」と促しました。

善悪の知識は、恣意的な報酬や罰をインセンティブとして使う。これはルシファーの知恵です。これらの正のインセンティブと負のインセンティブは、一つの目的を持っています：秩序を生成し、良い行動を促進するために。この法律の善と悪の腕は、善の警官/悪の警官の考えにやや似ています。彼らは、一つの共通の目標である秩序を達成するための反対の方法または手段です。ルシファーは、普遍的な秩序のシステムのために神と競合していた。

彼の考えは高度に組織化された体系的なものであり、無法やプライドのようなみすぼらしい、あるいは弱い主張ではなかった。これらは間違いなく存在していましたが、彼の二元論的な道徳法則から出てきたものとして理解されなければなりません。彼の原則は非常に論理的であり、知的な天使の3分の1が心を込めてそれを信じていました。誰がこれまでに彼らのメインのチケットとして無法やプライドで政治キャンペーンを実行し、誰がこれまでにそのようなプラットフォームに投票するだろうか？

報酬も罰も、私たちに恣意的に課せられた外的動機です。そのようなものとして、それらは行動制御の暴力的な方法です。彼らは私たちの意志の自由を削除し、私たちの関係を損傷します。利己主義、恐れ、プライド、疎外感を生み出します。この律法は、私たちに恣意的に報いたり罰したりするのは神であると私たちに信じさせているので、神との関係を特に損なっています。

> 彼（サタン）は、自分の計画を進めるために、**ある者を優遇し、繁栄させ、また**、ある者**に災いをもたらし、人々を苦しめているのは神であると信じるように導くでしょう**{GC 589.2, emphasis added}。

善悪の知識の木からのサタンの嘘は、私たちが神を恐れる原因となり、その結果、私たちはすべての愛、喜び、命の唯一の源である神から逃げ出してしまうのです。本質的には、報いと罰はパブロフ的条件付け以外の何物でもありません。この種の条件付けは私たちを人間性を奪い、神の自由な息子であり娘である私たちの真のアイデンティティーを奪います。

二重性に対抗する二重性は、サタンの重要なシグネチャーです。二重の蛇は多くの文化で流行しており、これを反映しています。アメリカ医師会のロゴは良い例です。これは二匹の蛇でできていて、蛇は善悪の知識を表しています。ロゴの上部、蛇の上にある天使の翼は、"鳥"であり、"ドラゴン"である堕天使との別のリンクを追加します。現代医学で使用されている薬には善と悪があり、癒しをもたらすかもしれませんが、同時に有害な副作用も引き起こします。二重性は蛇の解剖学的構造にも見られます。蛇は舌が分かれていますが、これは偶然でしょうか？

ヨブ記では、サタンの象徴であるリヴァイアサンは、"二重の手綱"を持っているように描かれています。

あなたは、鉤をもってリヴァイアサンを引き出すことができるか、その舌を、あなたが降ろす紐をもって引き出すことができるか。その衣の顔を見破ることができるのはだれか。 その**二重の手綱を**持って彼のところに来ることができるのはだれか。

手綱」とは、馬に指示を出すための道具です。サタンが人間の心を導くために使う「二重の手綱」は、報酬と罰の道徳的法則であり、ダイアドと呼ばれています。ダイアドとは、二つの対立する要素からなる一つのものです。興味深いことに、馬は聖書の教会のメタファーです。一般的に宗教家は、サタンの「二重の手綱」に導かれて、自分たちが神に導かれていると思い込んでしまうことがどれほど多いでしょうか。

イエスは私たちを導くために手綱を使われません。イエス様は私たちをイエス様と一緒にくびき、私たちは隣り合わせになって親密な関係で歩んでいます。イエスの「くびきは簡単だ」（マタイ11：30）。なぜなら、イエスのくびきはアガペの愛とあわれみと恵みの律法だからです。

これらのことから、ルシファーが罪を犯す前に持っていた完璧さを新たに理解することができます。罪を犯す前のルシファーは、「全体」であったことを覚えておいてください。アガペーは彼を、完全で、道徳的に完全で、道徳的に完全で、完全で、完全で、道徳的に汚れがなく、傷もシミもなく、直立していて、誠実さと真実に満ちた存在にしてくれました。善と悪が入り混じった不公平さが、彼を二重人格にしてしまいました。彼は、分裂し、部分的で、分裂し、二重になり、気まぐれで、混乱し、混乱し、暴力的になり、非難し、非難するようになりました。

咎が善と悪に分かれているので、ルシファーは偽善者であり、偽りの人物であるという二面性を持った人物に変えてしまいました。それは彼をジキルとハイドに変えました。今ルシファーは、どのような状況に応じて、善と悪の間で簡単に前後に交差します。これは、彼が明らかに良い面と邪悪な面を持っていることを意味しますが、我々は常にそれがアガペーではないので、彼の良いは、まだ悪であることを念頭に置いておく必要があります。

神の生命の木にはそのような二重性はありません-それは単一性であるギリシャ語のハプロテス）、統一された不変の愛の原理です。それはモナドであり、「一」という数を意味しています。イエスの傑出した性格的特徴は、この単一性であり、サタンがエバを欺いていたことの一つでもあります。このことは、イエスが引用した「すべての戒めの第一」に大きな意味を与えています。

すべての戒めの第一は、「イスラエルよ、聞け、わたしたちの神は**一つの主**である」（マルコ12:29、強調追加）です。

イエス様はモーセの言葉を引用していました。

"イスラエルよ、聞け、『私**たちの神、主は一つである**（申命記6:4、強調追加）。

ヘブライ語で「エチャド」という数字は、神の唯一性、神の不変の性格を指しています。これは「すべての戒めの第一」であり、善と悪の二重人格を持つこの世のすべての偽りの神々と真の神を見分けるのに役立つからです。

13. 罰と報い

刑罰

罰はルシファーの道徳律の右腕。罰はあからさまに暴力的です。サタンは恣意的な罰なしに秩序を維持することはできず、恣意的な罰は暴力なしには存在できない。

秩序を保つ手段としての罰という考えは、アガペー愛に対する反応であり、無条件の愛、憐れみ、赦しを拒絶するものでした。サタンはまた、罰を抑止力として、また暴力的なものではありますが教育の道具としても見ていました。

罰はいくつかの異なる形をとることができますが、本質的には常に暴力的です。脅しとして表現されることもあれば、言葉や身体的な暴力、体の暴力によって表現されることもあります。あるいは、侮辱、罰則、制裁、降格、恥をかかせることによって与えられることもあります。サタンは、対象者に「ポジティブ」な行動変化をもたらすために、あらゆる種類の否定的な「矯正」方法を用いています。彼のシステムの積極的なメンバーとして、私たちがしなければならないことは、それが私たちに、または私たちによってどのように使用されているかを確認するために自分自身を見ることです。

体罰は、最も目に見える暴力の形態であり、死刑は最も抜本的なものです。受動的な攻撃と呼ばれるより繊細な形態は、平和的に見えるかもしれませんが、あからさまな力と同じくらいダメージを与え、致死的です。暴力は、拒絶、黙殺、陰口を叩く、噂話をする、性格を貶める、嘘をつく、盗む、感情的・心理的虐待などの形で行われることがあります....。

それが何であれ、サタンの懲罰的な手段は、残酷であり、不親切であり、攻撃的であり、人間にダメージを与えるものです。このようにして、サタンは「彼の聖域」「彼の」人々を破壊してきました。そして、私たち自身が彼の破壊的な方法を使うとき、私たちは他の人を傷つけるだけでなく、自分自身も傷つけてしまいます。

神は憐れみ深く、無限に赦してくださるので、罰は神の語彙の外にあります。神の教え方は常に義の道です。なぜなら、暴力はルシファーの中で生まれた「咎」の本質的な部分だからです。

多くの親が子供を罰するのは、聖書が子供の罰を促進すると信じているからです。このような考えは，"棒を惜しまず，子供を甘やかしてはいけない"というよくある言葉に基づいています。これは文字通りの聖書の言葉ではありませんが、箴言集から引用した格言に基づいています。

竿を惜しむ者はその子を憎むが、愛する者は速やかにその子を懲らしめる（箴言13：24）。

残念なことに、ほとんどの親は、ロッドの聖書の意味を誤解しており、その結果、彼らは良い行動に向かって子供を強制的に体罰の様々な形態を使用しています。竿は善良な羊飼いが羊を導くために使う道具であり、羊を傷つけるためのものではありませんでした。ここで言う棒とは、詩篇2:9とヨハネの黙示録2:26-27で語られているのと同じものです。これらの箇所では、「鉄の棒」とは、イエス・キリストによって啓示された神の永遠の愛の律法の破れない性質を指しています。イエスは良き羊飼いです。誰かを罰するために、文字通りの鉄の棒を使ったことはありませんでした。

子供に暴力を使うたびに、私たちは本当に何をしているのでしょうか？暴力は問題を解決するための最良の方法だと教えているのです。最終的には、私たちは子供たちに暴力的になるように教えているのです。他に何があるのでしょうか。神の方法がより良い選択肢なのです。神はどのように教えておられるのでしょうか？神様は原因と結果を示すことによって教えてくださいます。私たちは子供たちと一緒に座って、子供たちと一緒に理由を考え、子供たちがある行動をとったらどうなるかを教えなければなりません。彼らの否定的な行動の結果を示し、彼らと一緒に、そして彼らのために祈りましょう。もし子供たちが間違った方向に進み続けるならば、私たちは子供たちが自分の行動の結果を刈り取ることができるようにしなければなりません。これらはどの年齢層にも通用する大まかな原則です。私たちは子供たちと子供たちの選択の自由を尊重しなければなりません。

これが神が私たちを扱う方法であり，神は私たちに警告し，それから私たちにどの道を進むかを選択させます。そして神はいつも私たちが蒔いたものを刈り取ることを許してくださいます。もしそうしなければ、私たちの自由を侵害していることになります。しかし、もし私たちが神と神の道に立ち返れば、神は無条件に私たちを受け入れ、私たちを癒してくださいます。

アガペー愛には暴力は絶対にありません。神の愛の律法に違反することはすべて暴力です。だからこそ、ヤコブは「もし私たちが一つの戒めを破るなら、私たちはすべての戒めを破ることになる」と言うことができるのです。もし私たちが横の次元で神の愛の法則に違反した場合、つまり人間に対して違反した場合、たとえそう見えなくても、私たちは暴力の罪を犯しているのです。私たちが誰かに危害を加えれば、その人に対して暴力を加えていることになります。窃盗は暴力です。不倫は暴力です。私たちが親に対して邪悪で不公平な方法で対処する場合も同様です。殺すこと、生命を破壊すること、偽りの証言をすること、盗みをすること、これらはすべて暴力です。これらのことはすべて、誰かを傷つけたり、破壊したりしているので、本質的に暴力的なのです。

サタンの報いと罰の方法を使うのをやめて、神の無条件の愛の原則を使うようになったら、他人に肉体的、心理的、感情的な暴力を振るわなくなります。その代わりに、彼らの幸福が私たちの関心事となり、私たちは自分を犠牲にしてでも彼らの幸福を気にかけるようになります。これがイエスの模範です。

神の無条件愛のシステムには罰はありません。神の愛の律法の下にいる限り、その中から罰を受けることはありません。もし私たちが神のアガペの愛の保護から外れると、私たちはデフォルトでサタンの王国の臣民となります。その後、善悪の知識の領域内から私たちは罰を受けることになります。サタンは私たちを罰しているのは神であると思わせますが、そうではありません。

サタンの最大の欺瞞の一つは、善の名の下に暴力を使うことです。例えば、「正当な戦争」という概念は、このカテゴリーに当てはまります。マキアヴェッリの著書『王子』は、政府における支配と暴力の必要性についてのサタンのメンタリティを非常によく説明しています。

報酬

ルシファーの善悪の法則の善の腕は、報酬システムです。罰と同じように、彼の王国は彼の法の報酬の要素なしでは生き残れませんでした。

ルシファーは、善は条件付きで、受け取る側の善意に基づくべきだと考えていたため、創造主の無条件の愛の原則に反対しました。こうして彼は、条件付きの功徳制度、つまり徳と悪徳のバランスをとる制度を作ったのです。善悪の功徳は、状況に応じて変化する条件付きの功徳である。性格が善悪の道徳律によって動かされている人は、他人の状況によって変化する不安定な人である。

サタンの木の善はアガペー愛の偽物です。それは、条件付きの愛であり、どんな状況でも変化する可能性があり、自分の裁量や気まぐれに左右される恣意的な愛であるため、偽りの愛となります。この木に基づく愛は、過ぎ去るものであり、無常であり、変化するものであり、いつでも愛から憎しみへと変化する可能性があります。この善は報酬に基づいているため、利己主義を促進します。これは、他人を犠牲にしてでも自分の利己的な利益を最大化しようとし、自分自身のために最善の結果を求める自己中心的で自己中心的な人間の心の原因となっています。この報酬体系は、後述するように、ルシファーの高慢さの原因にもなっています。

サタンは、よりよく欺くために光の衣を身にまといました。彼は人々を整然とさせるために、恣意的な報酬、インセンティブ、賞品を提供し、さらには願い事までも与えています。彼のシステムは、私たちが善良であることを動機づけるために、私たちの目の前にニンジンの棒をぶら下げます。このため、私たちの善は、真の善には全く及ばないのです。私たちが善を行うのは、報酬を欲しているからであって、私たちが本来善人であるからではありません。私たちは、キャンディーバーを獲得するために、良い行動をするように条件づけられているのです。

どのくらいの頻度で、私たちは下心のある利己的な動機で良いことをするのでしょうか？どのくらいの頻度で私たちはそれに何の利益がないので、良いことをやってから自分自身を停止するのですか？彼らは私たちのニーズを満たすために、またはそのような名声、お金やステータスなど、私たちが望むことを何かを持っているので、どのくらいの頻度で私たちは他人を仲良くしていますか？結婚のような重い決断でさえ、しばしば利己的な観点から行われています。私たちの内側には、しばしば、私たちも気づいていないいくつかの利己的な議題が潜んでいるときに、私たちが上に置くファサードについてはどうでしょうか？

サタンの報酬システムもまた、プライドを助長します。それは、私たちが善い行いをするように影響を与えるように、善い行いの露出を最大化することによってそうしているのです。このシステムは、恣意的な報酬だけでなく、恣意的な承認と恣意的な受容によっても、善い行いをした者を称えます。徳のある者は全世界から拍手喝采を受け、その大らかさに驚嘆します。そして、それを見ている人たちは、羨ましくなり、同じ注意を切望します。偶像のように多くのことを成し遂げようとする者もいて、自分たちも注目の的となり、認められるようになるまで、労働をやめない。

利己的な人間の精神は、認識と拍手を求め、他の人の上に上昇し、自分自身を区別するために必要性を満たすために非常に長い時間を行く。この条件は、善悪の法則のために存在しています。それは、競争、プライド、自己陶酔の環境を促進する恣意的な報酬のこのシステムです。だから今では、ルシファーのプライドがどのようにして最初に生まれてきたかを見るのは簡単です。

慈善団体や価値のある目的のためにボランティアや寄付をすることが、これほど人気のある理由でもあります。多くの大学では、慈善活動を何時間も行っていない志願者を考慮してくれません。慈善奉仕には何も問題はありません - 動機は、しかし、何がそれを善悪の知識のサタンの木から "善"、または生命の木から神のアガペー愛のいずれかにレンダリングされます。私たちは利己的な理由で慈善活動をしているのでしょうか、あるいは不運な人たちのために本当の愛と関心を持っているのでしょうか？利己主義の究極の形は、可能な限りの最大の報酬を求めることである-たとえこれらの報酬が単に認識と拍手であっても。

サタンの善によって行動するとき、私たちは誰にもあからさまな危害を加えないかもしれませんが、いざとなれば、危険に直面したときには、他の人よりも自分の保護を求めるでしょう。また、それを達成するために必要な暴力的な手段を使う可能性が高いです。自己が最も重要なものになり、他人の苦境は私たちの関心事ではありません。

我々は善と悪の道徳的な法則に購入するとき、我々は常に他の人と比較して私たちの成功を判断します。我々は、成功のはしごの中で私たちの位置を非常に意識するようになり、他の人を犠牲にしても、トップに上昇するために何でもします。自己は私たちの全体の焦点となり、私たち自身のビューでは、我々は常に良いですし、私たちを脅かす誰もが悪である。私たちは「良い」仕事をすることによって、本当の利己的な野心を覆い隠して隠すことができますが、それにもかかわらず、私たちは自己中心的なままです。私たちが獲得する報酬が多ければ多いほど、私たち自身の価値は私たちの尊敬の中で上昇していきます。この報酬のシステムは、世界のすべての階層的なはしごを作ります。プライド、自己高揚、自己模索、競争、貪欲と嫉妬 - すべては善悪の法則に埋め込まれたこの階層システムから発生します。

混沌、破壊、死がどのように悪に起因するかを理解するのは簡単ですが、どのように善に起因するのでしょうか？善が利己主義によって動機づけられているとき、彼らはそうする。悪と手を組むことによって、この善は全く良いものではありません。善と悪に存在する善は、神のアガペの愛の本質に反しています。

神は無私です - 神の愛は純粋で、利己的な動機と混ざり合っていません。神は私たちのために自分の命、つまり永遠の命を捨てることさえ躊躇しません。一方、私たちは欲しいものを手に入れるために、簡単に人を殺してしまいます。私たちは、自分が欲しがっている地位を確保するために、簡単に誰かの頭の上を踏み越えてしまいます。第二の思考がなければ、我々は利己的に何か良いものの名の下に恐ろしい破壊を引き起こすことができます。このように善と悪の善は、その対応するものとして、神に相容れないと不倶戴天であり、悪は、ある。

14.暴力

ルシファーは、彼の不義の法則が暴力的であるため、内なる暴力で満たされていました。不義の法は暴力と力に依存しており、それは恣意的に私たちに強制されているからです。また、ルシファーが宇宙に導入した新しい外国の概念「罰」のために暴力的なのです。不義は愛の力では機能しないので、その唯一の選択肢は、報酬と罰を通じて力を行使することです。次の引用を考えてみましょう。

> 神の性格の原則は、天の天使たちの前に常に保たれている教育の基礎となっていました。これらの原則とは、善と憐れみと愛でした。自己を証明する光は、信頼と権力の立場にあるすべての人に認められ、**自由に受け入れられなければなりませんでした。**彼らは神の原則を受け入れ、真理と義を示すことによって、神に仕えるすべての人を納得させなければなりませんでした。これが使われるべき唯一の力であった。力は**決して入ってはならない**。自分たちの立場が仲間の存在に命令する力を与え、良心を制御する力を与えていると考えていたすべての人は、自分たちの立場を奪われなければなりません；これは神の計画ではないからです（RH、1897年9月7日、8 par.

サタンは権力を持つ立場にあり、光の運び手として、力なく真理と正義を提示していました。しかし、ある時点で、彼は強制と制御が必要であると信じ始めました。そこで彼は報酬と罰の二元論的なシステムを考案しました。この新しい道徳システムの執行者として、サタンは独裁者となり、その結果、「内なる暴力で満たされる」ようになりました。このことは、サタンの王座が、アガペの愛、あわれみ、自由、義、善によって支配する神（詩編94:20）との交わりを全く持たない理由を説明しています。

もしイエス様が神の人格に関する最終的な権威であり、聖書によればイエス様がそうであるならば、神の中に暴力はありません。イザヤは、外見に関係なく（神殿の清めやイチジクの木の呪いのように）、イエス様には暴力が全くなかったことをはっきりと教えています。

> 彼らは彼の墓を悪人と一緒にしたが、彼の死に際には金持ちと一緒にした。

"Iniquity"は、私たちに神が善と悪の混乱した二元性によって運営されていると考えさせるので、神の性格に関して完全にマークを見逃すようになります。善と悪の知識は、神が私たちを導き、支配し、正すために、恣意的な報酬と罰を通じて暴力と力を使うと信じるように私たちの心を捻じ曲げてきました。

サタンの暴力的なシステムは、神の非暴力に対する反動であり、神の非暴力的な愛の法則を否定するものでした。彼は、調和と安定が存在するためには力が必要だと信じていたので、内なる暴力で満たされるようになりました。

サタンの視点から見ると、無条件の愛は弱く、非現実的で、非現実的で、特に悪に直面したときには非現実的なものでした。彼は、愛が物事を秩序ある状態に保つのに十分な強さを持っているとは信じていませんでした。彼は自分の状況を見て、神に言ったかもしれません。「あなたの愛の法則は完璧な世界では機能するかもしれませんが、今、私はあなたに反するシステムを導入したので、あなたの愛の法則は何をするのでしょうか？あなたはどのように力を使わずに、私のような人に対処するつもりですか？"

しかし、神は暴力に反対され、暴力を完全に拒否されます。表面の下に目を向けると、このことが聖書全体に当てはまることがわかります。いくつかの例を見てみましょう。聖書には、先史時代の人々は腐敗していて、暴力に満ちていたと書かれています。

> 地もまた神の前に堕落し、**地は暴力に満ちていた**（創世記6:11、強調）。

ストロング辞典によると、"corrupt" - Shâchath - は、"腐敗、破滅、破壊、滅びる、こぼれる、台無しにする、全く無駄にする"という意味だそうです。

これは暴力についての記述です。聖書的に言えば、腐敗は暴力に相当します。洪水の前に住んでいた人々を堕落させたのは暴力でした。サタンが「知恵を堕落させた」のは、サタンが持っていた純粋なアガペーの愛を堕落させたのは、彼が暴力を発明したからです。このように、ルシファーの人身売買は「堕落した行政の象徴」であったと述べた前言に戻ると、ここでの「堕落した」という言葉は「暴力」という言葉と同等であることが理解できるでしょう-「人身売買」は暴力的な行政の象徴です。(4BC 1163.7})

そして、私たちは、蛇が「イエス・キリストのシンプルさから」エバの心を堕落させたことを忘れてはなりません。イザヤは、人類を「罪深い民族、不義に満ちた民、悪人の群れ、堕落した子供たち（イザヤ1:4、強調）」と表現しています。

次の引用文をもう一度見てください。"腐敗"という言葉に新しい意味の"暴力"が加わりました。

> 天国でのサタンの働きの原理は、この世でサタンが人間の工作員を通して働くのと同じ原理です。このような腐敗**する原則**[VIOLENT PRINCIPLES]によって、すべての地上の帝国と教会は**ますます腐敗して**きました[BECOMING VIOLENT]。サタンはこれらの原理を働かせることによって、**最初から最後まで全世界を欺き、堕落させています**。サタンは、もともと天の宇宙で始まったこの同じ方針を続けています。**彼は、ノアの時代に世界を堕落させた彼の暴力で全世界を活気づけています**（手紙156、1897年）。- 4BC 1163.8, emphasis added}。

他の世界が洪水をどのように見ていたかにも注目してください。

他の世界の聖なる住人たちは、地上で起こっている出来事に深い関心を持って見守っていました。**大洪水の前に存在していた世界の様子を見ていると，ルシファーがキリストの権威を拒否し，神の律法を捨てて，天に統治を確立しようとしていた結果が明らかになっていました**。大洪水以前の世界に存在していた罪人たちの中には，サタンが支配していた臣下がいたのです。人の心の思いは絶えず悪でしかありませんでした。創世記6:5 あらゆる感情、衝動、想像力が、純粋さと平和と愛という神の原則と対立していました。これは、神の被造物から神の聖なる律法の制限を取り除こうとするサタンの方針の結果として生じた、ひどい堕落の例でした。

"大洪水の前に存在していた世界の状態は" "ルシファーがキリストの権威を拒否し、神の律法を脇に置くことによって、天で確立しようとしていた管理の結果であった"大洪水の前の世界の状態はどうだったのでしょうか？"人の心は悪に満ちていた"アガペー愛の神の非暴力的な律法を脇に置き、善悪の道徳的な律法を制定することで、サタンは暴力に満ちた世界を作り出しました。この暴力が大洪水をもたらしたのです。具体的にはどうやって？分かりません。しかし、洪水の前に住んでいた人々は、肉体的にも知的にも巨人であったことは分かっています。彼らは1000年近く生きていた彼らが開発した技術が 洪水をもたらしたのか？

今日の私たちの世界を見ると、サタンの影響を受けた人類の手によって、破壊の可能性が非常に高くなっていることがわかります。地球が水によって再び破壊されることはないことを私たちは知っていますが、そのための条件はもはや整っていません。上にあった水の天蓋も、下にあった神が設計した複雑な地下灌漑システムも壊れてしまい、洪水を引き起こしました。しかし、次の世界的な破壊は火によるものであり、そのためには「神の行為」は必要ありません。私たちには、地球を何度も何度も破壊するのに十分な火力（暴力は自分たちを守るために必要だというサタンの理論を信じてしまった人間によって生み出された）があるのです。

イエスは、私たちの時代、つまり最後の時代は、ノアの時代のようになるだろうと予言されました。彼は、同じ条件が存在すると言いました。1.不摂生と2.結婚と結婚に与える：混沌とした人間関係（複数の結婚、近親相姦、不倫、乱婚、性別の混乱）。

"しかし、ノアの時代がそうであったように、人の子の到来もまたそうである。大洪水の前の時代のように、ノアが箱舟に入る日まで、彼らは食べたり飲んだり、結婚したり、授かったりしていたからである」（マタイによる福音書24:37-38）。

このような、神が私たちへの祝福として設計された家族の社会構造の崩壊は、大洪水の前にも明らかになっていました。

人が地の表面に増え始め、彼らに娘が生まれたとき、神の子らは人の娘たちが美しいのを見て、彼らが選んだすべての人の妻を娶った（創世記6:1-2）。

この二つの理由、不謹慎と家庭の崩壊は、私たちの世界を再び世界規模で暴力で満たすことになるでしょう。私たち自身の暴力がいかにして私たちを滅ぼしてしまうかを理解するのは難しいことではありません。

しかし、神が洪水によって世界を滅ぼされたとしましょう。ここには、非常に大きな矛盾があります。聖書によると、大洪水の理由は何だったのでしょうか？それは、人々が常に暴力的だったからではないでしょうか？

> その時、主は、人間の邪悪さが地中に大きく、その心の思いのすべての意図が絶えず悪であることを見られた（創世記6:5）。

神が人間の何倍もの力を持った大規模な暴力（洪水）を使って、暴力的な人々を罰することは理にかなっているのでしょうか？神は自己矛盾した非論理的で非合理的な暴君なのでしょうか。神ご自身が指数関数的に大きなスケールで使用しているものを使用するために、どのように神は私たちを罰することができますか？ある人は、自分の立場を守るために、神が暴力を使うとき、それは暴力ではなく、慈悲だと言うでしょう。そのような不合理な議論に対して、何と言えばよいでしょうか。

さらに、洪水はどのような解決策だったのでしょうか。神はうまくいかない解決策を使うのでしょうか？洪水は本当に地上の暴力の問題を解決したのでしょうか？洪水が解決しなかったことをわたしたちは知っています。洪水の後に暴力と不義が再び地上に蔓延し、救われた人々のうちの8人だけが救われたことを知っています。

では、このような節をどうするか。

> すべての肉の終わりはわたしの前に来た。彼らを通して地は暴力で満たされ、見よ、わたしは彼らを地と共に滅ぼす（創世記6:13）。

別の方法でこれを見たらどうなるでしょうか…神は暴力を通して人類が何らかの形で世界的な大災害を起こそうとしていると予測できたとしましょう…神がご自身で設計された素晴らしいアクアシステムのあちこちで水漏れを見ることができたとしましょう…そして、神が座って簡単な数学的計算をしたとしましょう…あっという間に…。神は天才です…そして、神が創造した美しく完璧な惑星が転換点に達しているのが見えたとします…そして、神がここを見下ろし、地球上のすべての人々を見たとき、神を「恐れている」一人の人間を選んだとします…神の「まだ小さな声」を聞いて真剣に受け止めようとした一人の人間がいたとします。その人がノアでした。そして神はノアに言った "ノアは船を作りなさい 物事はすぐに崩壊するから"

神はノアを通して一人でも多くの人々を救おうとされました。しかし、その警告を聞いたのは８人だけでした。神は救おうとしたが 破壊はしなかった彼は１００年後、２０年後にはダムが文字通り決壊することを知っていました…しかし、旧約聖書で起こったすべてのことがそうであったように、神は破壊の責任を負いました。サタンと彼の原理が人間を介して働いて、彼らの仕事を行い、神は責任を受けました。

しかし、別の例を見てみましょう。イスラエルの子供たちがエジプトを出てカナンに入るという話は、罪（サタンの原則）を捨てて、神（神の原則）の国に入るということを表しています。出エジプトで起こったことをまとめたヘブル書を研究するならば、イスラエルの子供たちの古い世代が約束の地カナンに入る資格を失ったのは暴力であったことがわかります。書いている人は言います。

> 兄弟たちよ、生ける神[いのちの木の神]から離れようとする不信仰の悪しき心が、あなたがたの中にもないように気をつけなさい。今日、もしあなたがたが主の声を聞くならば、反逆の時のように心を固くしてはならない」と言われている間に、私たちはキリストの仲間になったのです。誰が聞いて反抗したのか。本当に，モーセに導かれてエジプトから出てきた者たち全員ではなかったのか。40年間，主は誰に怒っておられたのか。罪を犯し，その死体が荒野に落ちた者たちではなかったか。主は誰に対して，彼らが主の安息の地に入らないと誓われたのか，従わない者に対して誓われたのか。ですから、彼らは不信仰のために入ることができなかったことがわかります（ヘブル3:12-19、強調しています）。

ここで私たちは、「その死体が荒野に落ちた」人々が罪を犯したことを学びます。彼らの罪は何だったのでしょうか？彼らは従わなかったどうして従わなかったのでしょうか？彼らは信じなかった彼らは何を信じなかったのでしょうか？作家はそこで終わります。彼らが信じなかったので、約束の地に入ることができなかったと言っています。そして、約束の地に入ることは、神の休息に入ることと同じだと言っています。では、私たちはどう考えればいいのでしょうか？

言葉そのものを掘り下げてみると、その意味がはっきりしてきます。例えば、ここで「死体」という意味で使われているギリシャ語の単語はkolonで、「（まるで切り取られたかのように）身体の四肢：--carcase」（Strong's Concordance）を意味します。Kolonはkolazoという単語に由来していて、「適切に、抑制する、つまり（比喩的に）懲らしめる（または罰する）」という意味です（Strong's　Concordance）。これらの定義は、これらの「死体」の死因が何らかの暴力によるものであったことを暗示しています。

旧約聖書では、この古い世代がカナンに入らなかった理由は何と書かれているのでしょうか。モーセは書いています。

> カデシュ・バルネアからゼレドの谷を渡るまでにかかった時間は三十八年で、主が彼らに宣誓されたように、戦争の男たちのすべての世代が**陣営の中腹から焼き尽くされるまでであった。**本当に主の御手は彼らに敵対し，陣営の中から焼き尽くされるまで彼らを滅ぼそうとされたからである。**それで、ついにすべての戦争の男たちが民の間から滅びたとき、主は私に言われた、こう言った。**"今日、あなたはモアブの境界であるアルで渡りなさい。アンモンの民に近づいても、彼らに嫌がらせをしたり、彼らに干渉したりしてはならない。

３８年間の戦争この期間の終わりには、戦争の男たちはすべて暴力と戦争によって死んでいました。主はどのようにしてこれらの人々を焼き尽くされたのでしょうか？主はどのようにして「陣営の中から彼らを滅ぼされた」のでしょうか？彼らがやりたいことをする自由、つまり戦争をする自由を与えたからです。

これらの戦争の男たちについて語る第二の節があります。それはヨシュア書に記載されています。

> イスラエルの子らは荒野を四十年歩いたが、**エジプトから出てきた軍人であったすべての民が、**主の**声に従わなかったために、焼き尽くされた**。彼らは割礼を受けていなかったので、彼らは割礼を受けていませんでした（ヨシュア5:6-7、強調）。

ここには、戦争をしていた人々が「主の声に従わなかった」ことがわかります。そもそも彼らが戦争に参加することは神の意図ではありませんでした。しかし、自由を与える神は、彼らが自分たちの暴力の結果に苦しむことを許す以外に何ができるでしょうか。ヘブル書に書かれているように、彼らは戦争に入ることができませんでした。それは「生ける神」を信じていなかったからです。彼らは暴力的な神、死と破壊の神を信じていました。彼は彼らの神でした。

カナンは約束の地でした。それは文字通りの地理的な地域でした。しかし，それはもっと偉大なもの，すなわち神の王国の比喩でもありました。カナンは神の義の原則，神のアガペー愛の律法，神の非暴力的な方法の象徴です。暴力を信じ、暴力によって生きる者は皆、神の非暴力の王国を受け継ぐことはできません。暴力を拒否する者は皆、すでに神の国に入っているのです。カナンは、神が人間の心に約束された安息のメタファーでした。安息とは、神を本当の姿であるがままに知ることによってのみ得られるものです。聖書はその王国がどのようなものであるかを説明しています。

> "オオカミもまた、子羊と一緒に住む。
> ヒョウは若いヤギと一緒に横たわる。
> 子牛と若獅子と太った子牛を一緒に。
> 小さな子供が彼らを導く。
> 牛と熊は草を食む。
> 彼らの若いものは一緒に横たわるものとする。
> ライオンは牛のように藁を食べる。
> 授乳中の子供は、コブラの穴のそばで遊ぶものとする。
> また、離乳した子は、その手を毒蛇の巣に入れなければならない。
> かれらは，わたしの聖なる山のすべてを傷つけず，また滅ぼしてもならない。
> 地は主の知識に満ち溢れている。
> 水が海を覆うように」（イザヤ11:6-9）。
> "オオカミと子羊は一緒に食事をする。
> 獅子は牛のように藁を食べる。
> 塵は蛇の餌となる。
> 彼らはわたしの聖なる山のすべてを 傷つけたり滅ぼしたりすることはない。
> 主は言う（イザヤ56:25）。

彼らはその剣を鋤の穂に、その槍を刈り込み用の鉤に打ち込む。

彼は多くの民の間で裁き、遠く離れた強国を懲らしめ、その剣を鋤の穂に、その槍を刈り込み用の鉤に打ち、国は国に対して剣を振り上げず、彼らはもう戦争を習わない（ミカ4:3）。

戦場の男たちの死体は砂漠に散らばっていました バラバラにされ 切り落とされていました 暴力でカナンに入ろうとしていたからです彼らは自分自身と周囲の人々を破壊しました。彼らは「不信仰の邪悪な心」、つまり「生きている神」、非暴力的な神、命の神を信じていなかったことで罪を犯しました。彼らが全員死んだ後、神は基本的にヨシュアに「さあ、渡り、この地を占領しなさい」と言われました。

旧約聖書のもう一つの例がヨナです。彼はニネブ人に、彼らが悪しき道から変わらない限り、破滅が来ることを警告するために送られました。彼のメッセージに注目してください。

人も獣も、群れも群れも、何も味わうことなく、餌を与えず、水を飲ませず、人も獣も袋帯で覆われ、神に向かって力強く叫ぶよう**に**。

洗礼者ヨハネはヨナと同じメッセージを持っていました。彼が兵士たちに言ったことに注目してください。

兵士たちもまた、彼に尋ねて言った、「わたしたちは何をしようか」。そして彼は彼らに言った、「**人に暴力を振るってはならない、誰にも不当な非難をしてはならない、あなたがたの賃金に満足しなさい**」（ルカ3:14, KJV, emphasis added）。

イエスはヨハネについてこのように言われました。

そして、バプテスマのヨハネの時代から今に至るまで、**天の国は暴力を受け、暴力的な者は力づくでそれを奪う**（マタイ11:12、KJV、強調）。

イエスは何を言っていたのでしょうか？暴力的な人々が暴力的な神を望んでいると言っているのでしょうか？暴力的な人たちが神の国に暴力を振るうのは、暴力的な神を望んでいるからだと言っているのでしょうか？しかし、イエスがバプテスマのヨハネについて言っていることにも注目してください。

すべての預言者と律法はヨハネ（マタイ11:13）まで預言されていたからです。

イエス様は何を意味していたのでしょうか？もしかしたら、ヨハネまでのすべての預言者たちは、神が暴力的であると信じていたから、神に暴力を振るったのではないでしょうか？イエスは、ヨハネは預言者以上の存在だったと言い続けます。

でも何を見に行ったの？預言者？そう，あなたがたに言おう。預言者というよりも，それ以上のものである。この者こそが，こう書かれている者である。見よ、わたしはあなたの顔の前にわたしの使者を遣わし、あなたの前にあなたの道を用意する」（マタイ11:9-10）と書かれています。

ヨハネは神からの直接のメッセージを持つ「使者」でした。彼のメッセージは、非暴力的な生き物である小羊を指し示しており、非暴力的な神の代表として小羊を見ることができます。

詩篇師は暴力についてこう書いています。

主は正しい者を試すが、悪人**と暴力を愛する者は、その魂を憎む**（詩篇11:5　KJV、強調付

そして、ソロモンは知恵について語って、こう述べています。

悪人の道に入ってはならず、悪人の道に行ってはならない。悪人の道に入ってはならない。彼らは悪さをした者以外は眠らない。彼らは悪のパンを食べ、**暴力の酒を飲むから**である。しかし，正義の人の道は，完全な日に向けてますます輝く光のようである。悪しき者**の道は暗闇のようであり、彼らは何につまずくのかを知らない**（箴言4:14、強調しています）。

サタンの善悪の法則に生きている悪魔は暴力を染み込ませており、その行動はそれを示しています。

イエスが反対側のゲルゲネスの国に来たとき、二人の悪魔に取り憑かれた男たちが**墓から出てきて、非常に凶暴で**、誰もその道を通れないようにしていた。彼らは突然叫んで言った，「神の子イエスよ，あなたに何の関係があるのですか。時が来る前に，わたしたちを苦しめるためにここに来たのですか」。彼らから遠く離れたところに，たくさんの豚の群れがいて，餌を与えていた．そこで悪魔たちはイエスに懇願して言った 「もしあなたが私たちを追い出したならば，私たちが豚の群れの中に入ることを許可してください」そして神は彼らに言った "行け"と。彼らが出てくると豚の群れの中に入っていったすると**突然、豚の群れは、急**なところを激しく**駆け**下りて海に落ち、水の中で死んでしまった（マタイ8:28-32、強調）。

この悪魔に取り憑かれた男たちは、墓の中に住んでいて、「非常に激しく、誰もその道を通れないように」していたことに注目してください。彼らは墓の中に住んでいたので、死と死についての考えで満たされていました。彼らは死者の中で最も快適だったのです。ルカは、たった一人の男の話をしているにもかかわらず、彼らの様子をさらに詳しく述べています。

それから彼らはガリラヤの反対側にあるガダレネスの国に航海した。彼がその地に出たとき，そこには長い間悪魔を持っていた町のある人がいた。彼は服を着ておらず、家に住んでいたが、墓の中にしか住んでいなかった。イエスを見ると、彼は泣き叫んで、イエスの前に倒れて、大きな声で言った、「最も高い神の御子イエス、あなたと何の関係がありますか。私を苦しめないでください。イエスは汚れた霊が出てくるように命じられたからである。その霊はしばしば彼を捕らえていたので、彼は鎖と手錠で縛られて、見張りをつけられていた。イエスは彼に尋ねられて言った，「あなたの名は何ですか」。イエスは彼に尋ねられて、「あなたの名は何ですか」と言われた。そして、彼らは、イエスが彼らに深淵に出て行くように命じないようにと、イエスに懇願した。多くの豚の群れが山の上で餌を食べていた。そこで、彼らは主に、彼らがその中に入ることを許可してくださるようにと懇願した。すると，主は彼らを許された。すると、悪霊がその人から出て行って、豚の中に入り込んだので、群れは急なところを激しく駆け下りて湖に入り、溺れてしまった（ルカ8:26-33）。

これらの箇所の両方とも、悪の天使たちの心の中も明らかにしています。彼らは神を「いじめる者」として、拷問する者として見ています。彼らの言葉は、将来、神が彼らにまさにそのようなことをするであろうと期待していることを明らかにしています-「その時が来る前に私たちを苦しめるために来たのか？

神の本質はアガペの愛であり、神には暴力がないことを拒否する者は、"生ける神から離れることに不信の邪悪な心を持っている"のです。彼らは「生ける神」、すなわちいのちの神を崇拝しているのではありません。むしろ、彼らの神は暴力と死の神なのです。生ける神」から離れることで、彼らは不信仰の邪悪な心を持ち、腐敗と死を受け継ぐことになります。

以上のように述べてきましたが、次はパウロの言うことを見てみましょう。

兄弟たちよ、肉も**血も神の国を受け継ぐことはできません**し、堕落も堕落を受け継ぐことは**できません**（第一コリント15:50、強調）。

"生身の人間は、善と悪の堕落した死すべき人間の性質の比喩ですが、神の国を継承することはできません。また、「堕落」も「堕落」を継承することはできません。これらは同じことを言う二つの言い方です。このように、「肉と血」は「堕落」に相当し、「神の国」は「堕落」に相当します。

神の国とは、永遠のいのち、不滅です。肉体はサタンの善悪の暴力的な死の原理によって動かされているため、不死を受け継ぐことができません。堕落は、神のアガペー愛の原理、すなわち生命の木の原理によってのみ可能なのです。

論理的に考えれば、神の王国には暴力、力、脅迫、強要、操作などはあり得ません。もし神が暴力的であったならば、神は堕落しているので、「堕落」と不死を持つことができません。

バビロンはサタンの王国を象徴する都市であり、混乱を意味します。この混乱は、善と悪という彼女の道徳律法の二重性によって引き起こされます。その結果、バビロンは暴力に満ちています。彼女の終焉は、彼女自身の暴力によって引き起こされます。

そして、強大な天使が大きな石臼のような石を持ち上げて、海に投げ込んで言った、「**こうして、その大いなる都市バビロンは、暴力をもって打ち倒され**、もはや全く見つからないであろう」（黙示録18:21、強調）。

神の信者は暴力に頼ることはできません。"生ける神"の真の信者になるためには。暴力を使って攻撃したり、自分の身を守るために暴力を使ってはいけません。信仰や愛する人を守るために暴力に訴えることさえできません。もしそうするならば、彼らは神の信者であることをやめて、サタンの信者になるのです。

神の真理は挑戦され、攻撃され、反抗され、激しい精査を受けることになります。結局のところ、世界はまだ神の最大の敵、神の愛の律法を憎む者の支配下にあります。しかし、神の真の信者はアガペの愛によって動かされており、アガペの愛だけがそのような攻撃に打ち勝つでしょう。神と神の真理を守るために暴力を使うことは矛盾しています。暴力を行使する者は、その行動によって、自分たちが神の性格を正しく理解していないか、あるいは限定的に理解していることを証明しているのです。

では、なぜ聖書は暴力的な神を描くのでしょうか？ここにいくつかの可能性のある答えがあります。

1. 旧約聖書の記述者は、大論争の非常に限られた理解を持っていた
2 .「現在の真実」は進歩的である
3. すべての人間は暴力的であり、神を表現するために暴力的な言葉を使う
4. 神は私たちの暴力的な人間の言葉を取りますが、それを再定義します。

例えば、**イエス様は十字架上で死ぬことによって悪魔を滅ぼされました。**
"子供たちが肉の一部である以上
かれ自身もまた，同じように血を浴びたのである。
死によって、力を持つ者を滅ぼされるかもしれない。
死、すなわち悪魔」（ヘブル2:14、強調）。
神は剣を使うことについても語っていますが、神の剣は"
"御霊""救いの兜と剣を取りなさい
神の言葉である御霊のうちに」（エペソ6:17
5.5.神に帰するすべての暴力は、私たちと暴力の生みの親であるサタンによって行われました。
裁判中の神
6.神が悪しき者を滅ぼされると言う時、それは、命の源である神から離れるという悪しき者の選択を尊重されるという意味であり、これはローマ1:18-32に定義されている「神の怒り」です。
7.神様は私たちが敵を愛することによって「滅ぼす」ことを教えてくださいました。
8.神は彼らに自由を与え、彼らが選んだ支配者である破壊者サタンの領域に入ることを可能にすることで、国家を「滅ぼす」のです。
9. 神は私たちに真理を与えて罪を「滅ぼす」。
10. 神は暴力で暴力と戦うことはない
11. 神が暴力的であると言うとき、私たちは神を私たちのイメージで作っているのであり、私たち自身が暴力的であることを示し、暴力的な神を望んでいることを示しています。

12. 聖書の言葉を理解するためには、聖句と聖句を比較しなければなりません。

15

ご注文

私たちは、サタンは害と死と破壊と悪を引き起こすことだけに興味を持っていると甘く考えています。これは確かに彼の道徳律法の究極の結果ですが、彼には見た目以上のものがあります。サタンが神に反逆して、実際に良いものを創造しようとしていたことを理解している人はほとんどいません。秩序こそが、彼の報いと罰のシステムのすべての理由なのです。

> ルシファーが神の政府に文句を言い、**天に確立されていた秩序の転覆を求めるように**促したのは、プライドと野心でした{PP 403.3, emphasis added}。

> サタンとその宿主が堕落したのは、神の正当な命令に従わなかったためでした。アダムとエバは、**それだけで秩序と公平性が維持される可能性があった律法を**尊重すべきであるということが、どれほど重要なことなのでしょうか{PP 52.2, emphasis added}。

ルシファーは、天の"秩序"を"転覆"させようとした。"天に確立されていた秩序"は、神のアガペー愛の律法によって行われていました。なぜサタンはそれを覆そうとしたのでしょうか？彼には新しい考えがあったのです。彼の意図は、報いと罰の制度を通して、新しい普遍的な秩序を作り出そうとしていたのです。秩序そのものが彼の反抗の理由でした。

ルシファーの命令はここエデンの園でアダムとエバが禁断の果実を食べた時に実行されました。それ以来、私たちはこの命令を受けて生きてきました。今、世界の歴史の中でこの時期に、ルシファーは彼の命令に新しい顔を与え、「新世界秩序」、別名「社会正義」と呼んでいます。多くの人々は、これらの用語に騙され、その根本的な原則に気付いていません。他の人たちは知っていて、これが良いシステムだと信じてルシファーに味方しています。

ルシファーは、神の律法に代わるものとして無政府状態や混沌を提供するほどナイーブではありませんでした。彼が提供していたものには実体があるように見え、尊敬されていました。しかし、神が原因と結果を示して警告したにもかかわらず、彼はそれを認めませんでした。

神の命令は、人々が悪を行った場合に受けるであろう罰を避けるために善を行うことを前提にして達成されています。リヴァイアサンのことを改めて語ると、神は言われました。

> 彼の心は石のように固く、石臼のように硬い。彼が自分を上げるとき、強者たちは恐れ、裂け目のために自分を清める（ヨブ41:1, 11, 13, 24、強調）。

"壊れる"という言葉はシアベルであり，その意味のいくつかは"壊れる，比喩的には破滅，苦悩，裂け目，破れ目，衝突，破壊，傷つき，苦悩"である。リヴァイアサンは私たちを脅して 恐怖から自分自身を"浄化"するように仕向けています

興味深いことに、ここで使われているヘブライ語の「浄化する」という言葉は、ルシファーの罪-châlâlâlを説明するのに使われているのと同じ言葉です。これは、ヘブライ語の単語が二つの反対の意味を持つことは珍しくないという事実のためではないので、混乱を招くことになるでしょう。

> ヘブライ語の単語の中には、文脈によって全く異なる意味を持つものもあれば、全く逆の意味を持つものもあります（Vine's Complete Expository Dictionary Of Hebrew Words, by W.E. Vine, Merrill F. Unger, William White, Jr.

このようにヘブライ語では "罪"という言葉は "清める"と"清める"という意味にもなりますリヴァイアサンは 痛みによって 私たちを"浄化"できると考えている "断ち切り"だどうやって？

もし心の奥底で、一線を踏み外したら罰せられることを知っていたら、自分の行動を正そうと、行動しようという気にはならないでしょうか？確かに私たちは皆、そのような状況に陥ったことがあります。それは私たちをどのように感じさせたのでしょうか？私たちは自由を感じたのでしょうか、それとも強制を感じたのでしょうか？私たちの良い行動は本当に良いものだったのでしょうか、それとも痛みを避けるための行動だったのでしょうか？罰は愛や恐れ、怒りや憎しみを引き出すものだったのでしょうか？これは、この戦争地帯の人々にとってはお馴染みの領域です。

秩序を作るために意図されたルシファーの原則は、人間の論理が合理的なものとして受け入れるようになってきたという誤った概念に基づいています：より多くの報酬は、善を行うために人を動機づけるために配置されているほど、その人はより良く、より少ない悪になります。しかし、これが機能しない場合は、より恐ろしい悪は、より抜本的な罰は、それを抑制し、再び善の行動をもたらすためにでなければならない。ある時点で恐怖がキックインしないので、これは、ある程度まで動作します。恐怖は、我々はすべて知っているように、強力な抑止力になることができますが、どのようなコストでそのような順序が確立されていますか？

サタンの報いと罰のシステムで使用されている方法は、目的とする最終的な順序が達成されている限り、重要ではありません。彼のシステムでは、終わりが手段を正当化します。ルシファーの法則は、善と悪のバランスによって何らかの形の秩序が達成される限り、残忍で暴力的な行為を正当化します。

報酬についてはどうですか？秩序を作り出すべきではないですか？報酬が多ければ多いほど、悪事が起きにくくなるからです。しかし、良い行動のために子供に報酬を与え始めると、すぐに私たちはプライドが上昇するのを見始め、それが問題を作成し、その後、罰によって対処する必要があります-私たちは悪循環を見ることができます。

ルシファーは、自分の律法のプラスとマイナスの力が、神の純粋な愛と慈悲と恵みよりも秩序を形成するのに効果的であると思い描いていました。彼は、モデル社会をもたらすこの方法が、無条件の愛だけで行われる神の方法よりも優れていると信じていました。

神の律法の元守護者である彼は、報酬と罰という二つの強力な動機を通して、人の価値が自動的に階層構造の中にはめ込まれるという全く新しい政府の形を作りました。彼は、このようなヒエラルキーは、すべての人が同じ土俵に立つ神の公平な自由のシステムよりも、社会の基礎として成功すると信じていた。

結局のところ、ルシファーの秩序はパブロフのユートピア以外の何ものでもない。報酬と罰は単なるポジティブとネガティブの刺激であり、私たちの反応は条件付きの反射的なものに過ぎない。私たちは、この事例研究の被験者であり、目撃者でもあるのです。どう思う？うまくいっているのだろうか？これは実行可能な政府のシステムなのか？神はそれを採用すべきだったのでしょうか？宇宙はそのようなシステムを生き延びるのでしょうか、それとも地球が経験するような最終的な終わりを迎えるのでしょうか？

神の宇宙に散らばっている知的な存在は賢く，この法則を拒否していました。実際、彼らは地上でこの法則が実行されるのを、絶対的な恐怖をもって見ていたに違いありません。神はこの地上で起こっているすべての混乱、破壊、痛み、苦しみから彼らを守っているのではありません。彼らはこの大きな論争に強い関心を持って従い、サタンのシステムの機微と欺瞞を理解するようになりました。それだけでなく、彼らは以前よりもさらによく神を知るようになりました。パウロの言葉を考えてみましょう。

> すべての聖徒の中でも最も少ない者である私に、この恵みが与えられたのは、異邦人の間でキリストの探り知れない豊かさを宣べ伝え、また、時代の初めからイエス・キリストを通して万物を創造された神の中に隠されていた神秘の交わりとは何かをすべての人に知ってもらうためです。**それは、神**が私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた永遠の目的にしたがって、神の**多様な知恵が、今、教会によって天の地の支配者と権力者に知られるようにするためである。**エペソ3:8-12、強調)

天の地の支配者と権力者」は、神のアガペー愛の原則に基づいて生きる人々である教会を通して、「神の多様な知恵」を学んでいるのです。

わたしたちの中にもこれらのことを理解している人がいます。わたしたちは、神の人格と律法に対する攻撃という大きな論争のより深い問題を学んでいます。サタンの暴力的なシステムは秩序以外のものを生み出すものではなく、完全な失敗であることを学んでいます。

しかし、ルシファーは最後の戦いなしにこの戦争をあきらめません。今、彼はこの論争に心を込めて入ったので、勝つためには何でもするだろうし、最後まで突き進むだろう。したがって、彼は秩序を維持するために何でもするでしょう、たとえそれがもはや彼のシステムの中で生きることを選択しない人々を破壊することを意味するとしても。

16

神の善とサタンの善

神は不変です。状況に応じて変わることはありません。ですから、私たち一人一人を扱う上での神の原則は、私たちが誰であるかに関係なく同じです。

神に対する偏見はありません（ローマ2:11）。

神の善良さは神の愛です。神はそれ自体の秩序よりも、被造物との関係に関心があります。神にとって秩序は愛の副産物であり、生命と自由を尊重した結果です。神の善はサタンの善とは全く異なり、律法のような秩序を生み出すだけのサタンの善とは全く異なります。

金持ちの若き支配者との会話の中で、イエスは神の善と悪の善を区別した。

見よ，ある者が来て，彼に言った。「よい先生，永遠の命を得るためには，何かよいことをしなければなりませんか。そこで彼は言った『なぜあなたはわたしを善人と呼ぶのですか。わたしを善人と呼ぶのはなぜですか。しかし、いのちに入りたければ、戒めを守りなさい』（マタイ19：16、17）。

金持ちの若い支配者の質問は、彼を駆り立てたのは善悪の法則であったことを明らかにします。彼は、永遠の命を得るに値する、あるいは得るために、どのような善い行いができるのかを知りたかったのです。彼は、救いが自由に与えられているのは、神の恵み、つまり神が私たちを愛してくださっているからだということを知りませんでした。彼は条件を考えていたので、救いを得るために自分が満たさなければならない条件とは何かを知りたかったのです。彼にとって天国とは取引であり、善いことをすれば永遠の命という報いを受けることができるのです。そして、その報酬が欲しかったからこそ、彼は善人になりたかったのです。イエスは彼の誤解に対処するのではなく、本当の「善」とは何かという彼の認識を正し、彼を神に指し示しました。"なぜあなたは私を善人と呼ぶのですか？神のほかに良い人はいません。

なぜなら、イエス様も本当の意味で良い方だからです。イエス様は神でしたので、「神のほかに良い人はいない」と言われたとき、イエス様ご自身についても語られていたのです。では、イエスは何を言おうとされたのでしょうか？イエス様は間違いなく、この青年に自分が神であり、メシアであることを認めて欲しかったのです。しかし、もう一つ、彼がその若者に伝えたかったことがあります。それは、何が"良いこと"なのかという考え方のレベルを上げたかったということです。

イエス様は、神の善と善悪の原理の善とを分けておられました。人間の善と神の善、どちらの善のことを言っているのでしょうか？その上で、「神以外の善はない」と述べられました。言い換えれば、世界のすべての善は、それが利己的な動機や意図によって欠陥があり、善悪の知識の木に由来するため、偽造、欺瞞である。

神の無条件のアガペーの愛だけが真に善であると言えるのは、アガペーはいかなる悪にも汚染されていないからです。アガペーはいかなる悪にも汚染されていないからです。若い支配者の善行は、救いを得たいという利己的な欲求に突き動かされたものであって、神や同胞を愛するためのものではありませんでした。もし彼が本当に神を愛していたならば、イエス様も愛していたでしょうし、イエス様に従うようにというイエス様の驚くべき招きを受け入れていたでしょう。

アガペー愛は、神の十戒の根底にある原理です。使徒ヤコブは、もし私たちが一つの戒めを破ると、すべての戒めを破ることになると言いました。どうしてでしょうか。もし私たちがある分野でアガペーの愛から外れた行動をとるならば、私たちは律法の精神である原則を破ることになります。もし私たちがある分野で愛から外れた行動をとれば、別の分野でも愛から外れた行動をとることになります。もし私たちの心を支配する根本的な原理がアガペーでなければ、私たちの行動はすべて神の律法と調和していないものになってしまいます。

主の律法は完全である」（詩篇19:7）と詩人は言います。**エホバの律法は，その単純さ，包括性，完全性において，なんと素晴らしいことでしょうか。律法は，すべての戒律を簡単に記憶に留めておくことができるほど簡潔でありながら，神の意志全体を表現し，外面的な行動だけでなく，心の思考や意図，欲望や感情をも認識するほどに広範囲に及んでいます。**人間の法律ではこれを行うことはできません。人間の法律は、外面的な行為だけを扱うことができます。ある人は罪を犯したにもかかわらず、人の目から悪行を隠すことができます。泥棒、殺人者、姦淫者などの犯罪者であっても、その人が発見されない限り、律法はその人を有罪とみなすことはできません。神の律法は、嫉妬、妬み、憎しみ、悪意、復讐、欲望、野心など、魂の中に湧き上がっているにもかかわらず、意思ではなく機会がなかったために、外に向かっての行動には表れていない感情に注目しています。そして、これらの罪深い感情は、「神は、それが善であろうと悪であろうと、すべての秘密のことをもって、すべての業を裁きにかける」（伝道者の書12:14）- {1SM 217.1, emphasis added}日に説明に持ち込まれるでしょう。

パリサイ人たちは、自分たちの心を善行の陰に隠すことができると信じていました。それは、彼らの道徳律法が報いと罰のシステムに基づいていたからです。アガペの愛だけが神の律法を成就させることができます。私たちの誰もがこの愛を生み出すことはできませんが、それを可能にするのは神の超自然的な行為です。私たちはそれを願わなければなりません。そして神はそれを与えてくださるのです。

> なぜなら、あなたがたの中で、神の喜びのために、あなたがたの中で**意志をもって、また**神の喜びのために**行うように**働かれるのは、神だからです（ピリピ2:13、強調）。

では、もし神が欲望と力を与えてくださるならば、私たちはどのような部分を持っているのでしょうか？私たちは同意しなければなりません。神が私たちに道を示し、願望を与えてくださるならば、私たちは自由にその道を選ばなければなりません。神は私たちを決して手放されることはありませんし、私たちは神を決して手放してはなりません。

では、人間の愛と神の愛を本当に区別するにはどうすればよいのでしょうか。霊的な観点から見ると，神の本質という文脈では，神の愛と人間の愛には全く共通点がありません。人間の愛は常に利己的です。

神のお人柄を理解するためには、アガペーと善悪の無限の違いを理解しなければなりません。したがって、神の愛と人間の愛を区別することが非常に重要なのです。

人間の愛は、その対象の美しさや善しさに依存しているので、可変的で部分的である。人間の愛は、自分自身、友人や家族、善とされる者を好ましく思い、敵や悪と認識される者を非難します。これはアガペー愛ではなく、善悪の善である。

善悪の善は感情、感情、態度に基づいていますが、一方でアガペーは、決して揺らぐことのない無私の愛の内向きの原則によって感情、感情、態度を制御します。このようにアガペーは、無条件に、公平なコミットメントのための基礎を提供しています。善悪の善は、関係を確立するための基礎を提供することができますが、それは表面的で不安定な基盤です。アガペは、一方で、耐久性、信頼性があり、関係を壊すことはありません。アガペーは生き残り、すべての状況を超越しながら、状況に良い降伏。

善悪の善はサタンが神の愛の代用品であり、容赦なく利己的であり、神の道徳律法に支配されていない。アガペーは、すべての知的生命関係のための神の計画であり、サタンの善悪の頼りなさを克服する原理です。アガペーは常に寛大で寛容であり、それが私たちの道徳律法となるとき、私たちの人生のあらゆる面を支配します。

対照的に、善悪の善に由来する愛は、コントロールに基づいています-それは他の人を制御するために努力しています。それはそれ故にそれが必死に把握し、コントロールを失うことを恐れて任意の力を行使する不安定である。アガペーは、自己の代わりに他の人を制御しようとし、それは恐れずに電源を付与します。善と悪の善はプライドを育むが、アガペは、この破壊的で盲目の感情に勝利しています。それは感情的なカオスに遭遇したときに良いストレスや緊張と完全に崩壊に直面しています。対照的に、アガペは、ストレスや緊張を克服し、すべての感情的な混乱に耐える。

ご覧のように、神のアガペの愛と、従来の世俗的な意味での"愛"との間には大きな違いがあります。このことが、私たちが神の叡智に気づく一助になればと願っています。もし私たちが皆、アガペの愛によって運営されていたら、世界は全く違うものになっているのではないでしょうか？無私の愛、与える愛、無条件の愛、無限の愛、終わりのないアガペの愛を原動力とした世界を想像してみてください。それは天国のようなことではないでしょうか？この愛は確かに私たちを癒してくれるでしょう。

アガペーの愛は、愛する者の善良さに基づくものではなく、愛する者の完全性に基づくものであるから、神の愛と、いわゆる善悪の領域の「愛」は、世界的に隔絶されている。アガペーは生命を与える原理です。神のアガペーの愛は、私たちの目には愛されるに値しない、最も堕落した犯罪者やテロリストでさえも、すべての人に届くのです。それが真の希望ではないでしょうか？一部の人だけでなく、すべての人に届く希望ではないでしょうか？

これはキリストが私たちのために死なれたときに動機づけられた愛です。"不道徳な者"、"罪人"、"敵"であるキリストのために。

> 私たちがまだ力を失っていた時に、キリストは不敬虔な者のために死んでくださったのです。正しい人のために人が死ぬことはほとんどありませんが、善良な人のためには死ぬ勇気があるかもしれません。**しかし、神は、私たちがまだ罪人であったときに、キリストが私たちのために死んでくださったという点で、私たちに対するご自身の愛を示してくださっています。**私たちが敵であったときに、御子の死によって神と和解したならば、和解した私たちは、その命によって救われるのです（ローマ5:6-8,10、強調）。

神はご自分の愛-敵であることを示されました-私たちがまだ神に敵対している間に、私たちのために死ぬことによって。敵を愛するとは、神が神に敵対する者をどのように扱うかということです。もしイエスが私たちに敵を愛するようにと指示されたならば、私たちはイエスと父も同じことをしていると思うかもしれません。イエスのいのちの言葉に耳を傾けてください。

"目には目を、歯には歯を"と言われたと聞いたことがあるだろう。しかし、悪人には逆らうなと言います。しかし、あなたがたの右の頬を平手打ちする者は、他の頬をその者に向けなさい。あなたがたは、『あなたがたは隣人を愛し、敵を憎みなさい』と言われたことを聞いたことがある。しかし、あなたがたに言う、あなたがたの敵を愛し、あなたがたを呪う者を祝福し、あなたがたを憎む者に善い行いをし、あなたがたを悪用し、迫害する者のために祈りなさい。

イエス様のように、神のお人柄について、これほど権威と簡潔さ、洞察力をもって語られた方はいませんでした。敵を愛せと言うことによって、イエスは神について知る必要があるすべてのことを語ってくださいました。敵を愛することを教えることによって、アダムとエバが罪を犯して以来、創造主についての真の知識から私たちを遠ざけてきた、神の性格についての間違った概念をすべて覆してくださいました。キリストの啓示のおかげで、私たちは今、神のご性質についての理解の突破口を体験することができます。

神は、ご自身が守られていない道徳的な規範に従うように私たちに求めることはできません。私たちが「神を模した者」（エペソ5:1）になるためには、神ご自身が私たちに求められていることを信じて行動しなければなりません。イエスは神の姿を現した者として、神が私たちに求めておられることを信じて行動されたので、私たちが従うべき典型的な模範です。イエスには矛盾はありません。

神は、私たちが互いに、特に敵対者に対して、アガペの愛をもって接することを望んでおられます。神の目には、すべての人に対して公平な愛を持つことが完璧であると映っています。イエスはご自分の太陽を悪人と善人の上に昇らせ、正義の人と不正義の人の上に雨を降らせる。…それゆえ、あなたがたは完全な者となり、天にいるあなたがたの父が完全であるように」（マタイ5:45, 48）。

この言葉は私たちのやり方とは正反対のものだ！聖書が「肉」と呼んでいる私たちの内なる羅針盤に、この言葉は鋭く切りつけられています。それが私たちの本性に反しているのに、私たちはどうやって神のアガペの愛を示すことができるのでしょうか？

もし私たちがそれを望むなら、神は私たちに力を与えてくださいます。神の愛は、私たちが敵にどのように接するかによって真の意味で示されるでしょう。アガペの愛は、たとえ敵が私たちを憎み、私たちを滅ぼそうとしていても、敵に危害を加えるのではなく、死を選ぶときに、私たちの中に完全に表れます。

神の善はどのようにして敵に示されてきたのでしょうか？イエス様が地球を創造された時、すべてのものを完全な状態にしてくださいました。

…神は世界を造られた。神の栄光の輝きであり、神ご自身の姿を現したものであり、神の力の言葉によってすべてのものを支えておられる…ヘブル1:2-3）。

イエス様がすべての生きとし生けるものに絶えず命を与えてくださるのは、「御自分の力の言葉によって」です。アダムを通して罪が世界に入った後、神は被造物を維持するために必要なエネルギーと生命を与える力を取り除かれませんでした。地球のゆっくりとした死は、間違った選択から始まり、間違った選択のために今日まで続いています。これらの間違った選択によって、私たちは神の持続的な力を打ち消し、それを無効にしてしまいます。しかし、神はご自身の「敵」を支持する御言葉の力を取り除かれたことは一度もありませんでした。

私たちが地球を滅亡させるほど破壊しても、神はまだ神に開かれているあらゆる手段を使って世界を祝福し続けています。もし神が神の持続的な維持管理の一部を取り除いていたならば、罪が導入された最初の瞬間から地球は自滅していたでしょう。

神は、神の愛の最後の一筋が、頑固な反抗に囚われた世界によって遮られたり、拒絶されたりするまで、可能な限りの祝福を送り続けます。しかし、その時でも、神のアガペの愛は衰えることなく続きます。

> そして、新しい天と新しい地を見た（黙示録21：1）。
>
> その時、玉座に座られた方が言われた『見よ、わたしはすべてのものを新しくする』。そして彼は私に言った『この言葉は真実で忠実なものだから、書きなさい』（黙示録21:5）。

人類は善悪の知識に積極的に参加しています。アガペー愛の神の原理が地球上で使われていないことは経験的に明らかです。もし私たちが神のアガペー愛を信じて実践していたら、地球は現在の混沌とした状態にはなっていないでしょう。善悪をアガペーに切り替えるにはどうすればよいのでしょうか。

先ほども言いましたが、私たちにはできません。私たちが神を許すならば、神は私たちのためにこのようなことをしてくださいます。そうすれば、私たちは利己的な目的で愛することをやめ、自分を犠牲にしてでも他人の長期的な向上のために愛するようになり、アガペの愛によって生きるようになります。そうすれば、私たちはアガペの愛によって生きることができるようになります。

> 狭い門から入って、広い門は破滅につながる道であり、広い門を通って入る者は多い。狭い門は門であり、狭い門は命に通じる道であり、それを見つける者は少ないからです（マタイ7:13-14）。

神の最大の善意の現れは、御子イエス・キリストをお与えになったことでした。キリストは神の無条件の愛を明らかにするためにこの世に来られました。キリストの愛には何の条件もありませんでした。キリストは私たちのためにご自身を犠牲にされ、ご自身を捧げることは無条件であり、普遍的に適用されます。

> …しかし、今、時代の終わりに一度、ご自身のいけにえによって罪を取り除くために現れました（ヘブル9:26）。

キリストは「罪を片付けるために現れてくださった」のです。その一つの誤解を取り除くことによって、キリストは私たちのすべての「罪」をも取り除いてくださいました-私たちはすべて赦され、義とされ、「天国に座る」のです。

救いは、私たちが行うかもしれない働きに基づいているのではないので、人類の罪のためのイエス・キリストの死の功徳が充当される前に、満たされるべき定められた条件はありません。

> しかし、働かずに、不義を裁いてくださる方を信じる者には、その信仰が義とされます（ローマ4:5）。

> それは、神が唯一の御子をお与えになったので、神を信じる者は誰でも滅びることなく、永遠の命を得ることができるからです（ヨハネ3:16）。

神の御子は、私たちから肯定的な反応を受ける前に、罪人である私たちに御自身をお与えになりました。御子は、不敬虔な者、世界、そして罪深い人類全体に御自身をお与えになりました。アガペの愛から無条件にご自身をお与えになりました。私たちがまだ邪悪で、邪悪で、神の敵であったとき、キリストは私たちのために死んでくださいました。神は、イエス・キリストというお方を通して、私たちをサタンの嘘から救うために、私たちの中に入ってきてくださいました。私たちがまだ神に敵対している間に、神が私たちのために命を与えてくださったことを内在化し、信じるとき、私たちは主観的にこの救いを受けることができます。

神のアガペの愛は、私たちをご自身に引き寄せる巨大な磁石のようなものです。

> そして、もし私が地上から引き上げられたならば、すべての民を自分のもとに**引き寄せるで**あろう（ヨハネ12:32、強調）。

神のアガペの愛の力が私たちを惹きつけて初めて、私たちは神に積極的に反応し始めます。イエスは，十字架の上でご自身の愛を示し，持ち上げられたことによって，わたしたちがご自身と御父に引き寄せられることを知っておられました。主の愛の引き寄せの力は，恐れからではなく，愛から主に従う力を与えてくれます。

神はいつも私たちに和解してくださいました。私たちが神の愛を人生の支配原理として受け入れるとき、私たちは神と和解します。アガペの愛が私たちの生活を支配する原則とならない限り、私たちは神と和解することはできません。もし私たちが神の公平なアガペの愛を拒否するならば、私たちは自動的にサタンの部分的で恣意的な善悪の領域に忠誠心を移し、そこで私たちは罰と痛みと破滅に苦しみます。

我々は偽りの神々とその法律に向けるとき、我々は神の管轄から自分自身を解除し、デフォルトでは、我々は善と悪のサタンの管轄に自分自身を配置します。我々はアガペ愛の原則を受け入れるとき、善と悪の条件付きの法律は、私たちに君臨しなくなります。神の無条件の愛は、闇を滅ぼす光です。

神がアガペー愛の神でなければ、世界のすべての悲劇は避けられたと言えるでしょう。どうしてでしょうか？もし神がアガペーでなかったら、神は最初からルシファーを滅ぼされていたでしょう。

ルシファーは、神が善悪の知識を宇宙の法則として実装することを望んでいた。もし神がその法則を採用するように助言に従っていたら、ルシファーの自由を奪うか、ルシファーを絶滅させ、私たちの世界を圧倒する騒乱にさらされることはなかったでしょう。そうすれば、悪の問題の根本原因は解決したのでしょうか？

いいえ、神がルシファーを全滅させたならば、一時的な平和は達成されたかもしれませんが、神ご自身は悪になっていたでしょう。彼はもはやアガペー愛の神ではなく、完全に非常に異なる存在であったであろう。彼は究極の恣意的な独裁者、究極の制御者となっていたでしょう。宇宙は文字通りの地獄となっていたでしょう。なぜなら、誰もが神の全知全能で恣意的な制御から逃れることができなかったからです。神はまさにサタンが非難していた通りの存在、つまり、恣意的に支配する独裁者になっていたでしょう。神がアガペの愛の神であったことは何と幸いなことでしょうか。

17

著作物の法則

先ほど、罪について話したとき、イエス様は罪に関心を持っておられ、一方、サタンは私たちを罪に集中させることに関心を持っておられると述べました。罪は、私たちの行い、すなわち、善い行いと悪い行いに関係しています。これらはどちらも善の業と悪の業に該当し、これらは業による義に関わる業です。

善悪の知識の木は、業による義の原則を体現しています。これは偽りの義です。働きによる義は、行動と実績に焦点を当てています。作品による正義は、善と悪の両方の作品が組み込まれています。このシステムは、行動と実績に基づいているので、神様に従うためのすべての間違った動機を生み出します。このシステムは罪に焦点を当てています。

ほとんどの信者は、神と永遠に過ごすことほど素晴らしい報酬はないということに同意するでしょう。恣意的な報酬と罰の功徳制度におけるこの最高の報酬は、多くの場合、神との関係の唯一の動機であり、利己主義の非常に微妙で偽装された形に基づいています。それなのに、多くの信者は、神がこのように運営されていると信じているため、この制度を通して神の受け入れを得ようとしているのです。しかし、神は完全に別の法則によって動かされていて、私たちの働きが神の愛や約束を変えることはありません。

> わたしたち自身もまた，かつては愚かで，不従順で，惑わされ，さまざまな欲や快楽に仕え，悪意とねたみの中で生き，互いに憎み合い，憎み合っていたからです。**しかし，救い主である神の人に対する優しさと愛が現れたとき，わたしたちが行った義の行いによってではなく，神のあわれみによって，わたしたちを**救い主イエス・キリストを通してわたしたちの上に豊かに注いでくださった聖霊の再生と新生の洗い流しによって，わたし**たちを救ってくださいました。**

神は私たちを「あわれみによって」「救ってくださった」のであって、私たちの働きによるものではありません。私たちの行いが私たちに対する神の愛を変えることはありません。アガペーの神として、神は私たちを無条件に愛しておられます。

放蕩息子のたとえを考えてみましょう。神は，道の下を熱心に見て，息子が帰ってくることを切望する父です。息子が何をしたか、何をしていないかは気にせず、ただ息子が自分の腕の中に戻ってくることを望んでおられます。放蕩息子をご自分の心に縛り付けるには、ご自分の愛が十二分に十分であることをご存じです。道に迷った息子が父の愛の大きさに気づくと、彼は神だけでなく、他の人類に対しても平安を得ることができます。父は「最高の衣を命じて、それを着せた」（ルカ15:22）。この衣は、先ほど話した義の衣です。それは、アダムが「善悪の知識の木」から食べたときに失われたのと同じ衣であり、神が大祭司ヨシュアを覆ったのと同じ衣なのです。

私たちのほとんどは、天国に到達するためには、我々は多くのフープを飛び越えなければならないことを考えて私たちの精神的な旅を開始します。そして、私たちの目標はまさにそれです。これが救いの一般的な理解です。このマインドセットの中には、神は私たちが満たすべき多くの前提条件を提示し、私たちがそれを満たせば、神は永遠の命をもって報いてくださるという考えもあります。これは神の救いに関する誤ったイメージです。しかし、神の条件を満たした後に永遠の命の賜物を受け取ることの何がそんなに悪いことなのでしょうか。

第一に、私たちは神様の要求を満たすことができません。自分自身のことですが、私たちは決して神の完全さに達することはできません。私たちはそれを受け入れるか拒否するかを選択するだけです。神が私たちを受け入れてくれるように、私たちは十分に良い人間になれると考えるのは、大きな誤りです。

第二に、この考え方には、関係ではなく取引が含まれています。この取引では、神を信じて従うことは、神の利益と引き換えに私たちが行う善行にすぎません。賜物の神である創造主ご自身は、私たちが望む最終的な結果を得るための手段にすぎません。わたしたちは約束された贈り物を受け取るために，この正式な契約の要件と規定に従います。私たちは神の恩恵である天国を得るために、ただ信じて規定された条件に従います。このシナリオでは、神と私たちの間にアガペの愛の関係はありません。これらはすべて善悪の知識に由来する利己的な作品です。

神は私たちがどのように考えているかを知っています。それなのに，私たちに対する神の態度は変わりません。私たちの利己主義があっても、私たちに対する神の無条件の愛は変わりません。しかし、神は私たちに報いてくださるのでしょうか。

聖書は「祝福の道」の境界を定めています。この道には内在する祝福が含まれています。神からの祝福と報酬は，神の道に従うことに内在するものです。例えば、敵を愛せば、平和という報いを受けることができます。健康の法則に従えば、健康を得ることができます。もし私たちが無条件に他人を愛するならば，私たちは純粋な心を刈り取ります。地上のすべての取引において正直であれば，清い良心を刈り取ることができます。

これらの祝福は気まぐれな神からの報いではありません。また、これらの報酬と祝福を受けるために、人は神の原則に従って生きるのではありません。人は、神の愛に感動してから、神の原理によって生きるのです。人は神の偉大な愛に応えて、神の生きるための賢明な助言を受け入れるのです。

神は、人間の行動を変える唯一のものは、心の変化であることを知っています。心の変化は、神の愛を理解し、直接体験することによってのみ得られます。それによって、私たちは神のアガペの愛の原則によって生きる力を与えられます。そうすれば、働きの中で死んでいた心に、神の心から流れる無条件の愛の原理が染み込むことになります。

対照的に、二重人格で気まぐれで恣意的な神に従うならば、このような心の変化を経験することはできません。報酬を得るために神の戒めに従おうと努力しても、心は石のように冷たいままです。私たちは美徳とあらゆる種類の利益のための仕事を推進するかもしれませんが、すべての背後には、報酬を得るための利己的な動機があるでしょう。そのような関係の中で、報酬が最も重要な役割を果たしているのです。

> 私たちはキリストの学校で学ばなければなりません。キリストの義以外には，恵みの契約の祝福の一つを受ける資格はありません。わたし**たちは長い間，これらの祝福を得ようと願い，それを得ようとしてきましたが，その祝福を得ることができませんでした。**イエスが生ける救い主であることを信じて、自分から目をそらしてはいません。**私たちは、自分の恵みや功徳だけで救われると思ってはいけません。**主は預言者を通して、「悪しき者はその道を捨て、不義な者はその思いを捨て、主のもとに帰れば、主は彼をあわれんでくださる。イザヤ書55:7私たちは裸の約束を信じなければなりません。私たちが神を完全に信頼し、罪を赦す救い主としてのイエスの功徳に頼るとき、私たちは望むすべての助けを受けることができます{CCh 47.4, emphasis added}。

この報いと罰のシステムが神との関係の基礎であるならば、私たちの心と人生に隙間ができてしまいます。永遠の命の報いが神との関係の基礎であり究極の理由であるならば、そのような関係はアガペの愛の空虚なものとなるでしょう。このようにして、私たちは宇宙で最も驚くべき経験、すなわちイエスがご自身と父との間で私たちが経験するようにと祈られた経験を逃すことになるのです。

> 父なるあなたがわたしの中におられ、わたしがあなたの中におられるように、**彼らもまた、わたしたちの中で一つとなり、**世界があなたがわたしを遣わしたことを信じるように。また、あなたがわたしに与えてくださった栄光を、わたしは彼らに与えました**。それは、彼ら**が一つとなるように、私が彼らの中**にいて、あなたが私の中にいて、あなたが**私を愛したように、彼らを愛したことを世間が知るためです（ヨハネ17:20-26、強調しています）。

神が私たちとの間に望んでおられる絆は、御子との間に結ばれているものと同じです。神は御子を愛しておられるのと同じように、私たちを愛しておられることを知ってほしいと願っておられます。私たちはそのようなことを理解することができるでしょうか。このような無限の愛を理解することができるでしょうか。父と子がこの世の建国以前から永遠に共有していたのと同じ愛を理解することができるでしょうか。神との永遠の愛は報酬ではなく、真の愛への回帰です。それは堕落前の状態への回帰であり，神との直接の愛の関係です。

金持ちの若い支配者の話は、私たちがどのように報いと罰のメンタリティで神を崇拝してしまうのかを示す完璧な例です。若い金持ちの支配者は、神の子との親密な関係を求められたとき、悲しいことにその話を断ってしまいました。彼は創造主との再会に興味があったのではなく、永遠の死への恐怖に突き動かされ、永遠の命を得るために神を喜ばせるために、自分の力でできる限りのことをしたいと願っていたのです。

サタンの働きの律法の下で神に従わなければならないもう一つの、そしてはるかに有害な理由は「恐れ」です。これが法治主義です。悲しいことに、これはキリスト教の世界ではアガペの愛と呼ばれているものです。これもまた、神の要求に従うための利己的な理由であるにもかかわらず、真実として受け入れられています。

私たちの多くは、もし私たちが神のやり方に反した行動をしたら、神は私たちに恐ろしい罰を与えられるのではないかという恐怖に麻痺しています。神はわたしたちに災いをもたらし，わたしたちを永遠の地獄に突き落とすとさえ信じています。このように，わたしたちを「信仰」に駆り立てるのは，報復的な罰への恐れです。ですから、わたしたちは主の命令に従おうと努力します。しかし、私たちは、主人と奴隷の関係に囚われたまま、絶望的な恐怖の中で神様に従います。これは神が従うことを望まれている方法ではありません。

> 神はすべての被造物に**愛の**奉仕**を望まれます**。神は**強制的な服従を喜ばれず、**すべての人に**意志の自由を**与え、彼らが**自発的に**神に**奉仕**することができるようにしています{EP 9.5, emphasis added}。

> しかし、真の礼拝者が霊と真理をもって御父を礼拝する時が来ています。神は御霊であり、神を礼拝する者は霊と真理を礼拝しなければなりません」（ヨハネ4:23-24）。

神は強制的な服従を喜ばれません。神は"神の人格の評価"から"愛の奉仕"を望んでおられます。これこそが、「霊と真理をもって礼拝する」ことの意味です。恐れが服従の基礎となる理由であるならば、アガペの愛は存在しません。

使徒パウロは、作品による救いのシステムを、古代カナンの異教の神バアルに属するものと特定しました。

それとも聖書に書かれている エリヤのことを知らないのか 彼はイスラエルに対して 神に嘆願してこう言った "主よ 彼らはあなたの預言者を殺し 祭壇を引き裂きしかし，神の答えは何と言うでしょうか。**"バアルにひざまずかない七千人の者を，わたしは自分のために予約している"と。そうであって**も、この時点では、**恵みの選択に応じて残りの者がいます。もし恵みによるものであれば、それはもはや業によるものではなく、そうで**なければ、恵みはもはや恵みではありません。しかし、もしそれが働きによるものであるならば、それはもはや恵みではなく、そうでなければ、働きはもはや働きではありません（ローマ11:2-6、強調）。

パウロは、神の恵みに信頼する者を「反乱者」と呼んでいます。善と悪の律法-働き-は、もはや彼らを駆り立てるものではありません。彼らは、業の神バアル-サタンにひざまずいていないのです。パウロは次の言葉によって、働きによる救いというサタンのシステムを再び無効にしました。

…人は律法の働きによってではなく、イエス・キリストへの信仰によって義とされることを知っていますが、私たちもキリスト・イエスを信じています。

"律法の働き"とは 善悪の知識の木の働きだこの木の働きは、"肉を持たない"ことを正当化するものです。"業"は、私たちが生まれながらにして持っている罪悪感や罪悪感を取り除くことはできません。キリストが真の神について私たちに啓示してくださったことを信じることだけが、私たちに平安をもたらし、サタンのシステムの重さと圧迫からの解放をもたらしてくれるのです。御業のシステムがどのように木と結びついているかに注目してください。

良い木は良い実を結ぶ。もしその実が味気なく、価値のないものであれば、その木は悪です。ですから、生活の中で実る実は、心の状態と人格の卓越性を証します。**善行は決して救いを買うことはできませんが、愛によって行動し、魂を清めてくれる信仰の証です。永遠の報いは、わたしたちの功績のために与えられるのではありませんが、キリストの恵みによってなされた業に応じて与えられるのです**{DA 314.2, emphasis added}。

任意の報酬を受けるために律法に従う者は、誰も義とされません。義とされるのは、私たちに対する神の永遠の愛を信じる信仰によってのみ得られるのです。任意の報酬を得るために善を行うというサタンの原則は、イエス・キリストの福音にはありません。もし私たちが善悪の原理の霊によって神の律法を守るならば、私たちの従順は何の意味もありません。

神の律法は、愛によって従われる場合にのみ、適切に従うことができます。私たちが自由に律法に従うとき、神の全面的な愛に進んで応える心を持ってこそ、私たちの従順は真の意味を持つようになります。律法は、愛によって律法の精神に基づいて守られなければなりません。律法は、目の前にぶら下がっているニンジンの棒や、罰を恐れるような外的な圧力から守ることはできません。

愛とは、キリスト教の木に実る実であり、**国々のいやしのためのいのちの木の葉の**ような実です{2SM 187.1, emphasis added}。

"愛は生命の木の実"であり、その葉は"国々の癒し"のためのものです。これはアガペの愛であり，神の永遠の律法の根底にある愛です。

では、私たちは神の道徳律法である十戒をどのように扱うのでしょうか？私たちはどのように律法を守るのでしょうか。それは，誰が神の道徳律法をどのように見るべきかを教えているかによります。サタンは律法を利用して、報いと罰の原則を拡大するために律法を利用します。報酬を受けるために律法を守るように促し、失敗すれば罰を受けると信じさせます。サタンは律法を告発の道具として使い、律法の要件を守れない者に罪に見合った罰を規定します。

例えば、神の律法は「姦淫をしてはならない」（出エジプト記20:16）と明確に命じています。サタンの善悪の原理は、この律法を利用して、律法に違反した者に最も厳しい罰、つまり旧約聖書に記されている死を求めています。

> 他の男の妻と姦通した者、隣人の妻と姦通した者、姦通者と姦通女は、必ず死刑に処される（レビ記20:10）。

イエス様が来られて、この罰のシステムを無効にしてくださいました。姦淫の場合、罰は石打ちでした。律法学者とファリサイ派の人々が姦淫した女性をイエス様の前に連れてきたとき、イエス様は彼らの要求である石打ちを承認しませんでした。あなたがたの中に罪のない者は、まずその女に石を投げなさい」（ヨハネ8:7）と言われました。

イエスは不倫した女の告発者たちの殺人的な欲望を否定し、彼らと論争することなく、彼らは一人ずつ去っていきました。アガペーの愛の原則を用いて、イエスはこの罪を女に押し付けませんでした。また、女を告発した罪を告発者たちに負わせることもしませんでした。パウロは、イエス様の行動の背後にある原理を明らかにしています。

> 無法な行いが赦され、その罪が覆われる者は祝福され、主が罪を負わない者は祝福される（ローマ4:7-8）。

イエス様は、姦淫した女に罪を負わせないことによって、寛容になられたのではありません。彼女を罰しないということは、イエスが彼女の罪を容認しているということではありません。主は彼女が変わることを望んでおられましたが，恐れから変わることを望んでおられたのではありません。イエスは彼女が主の愛を自分自身で理解して変わることを望んでおられたのです。イエスは自分の人生がどうあるべきかという新しいビジョンを彼女に与えておられ、そのビジョンを受け入れるか拒否するかの自由を尊重しておられました。彼女は、イエスがこれまでに出会ったすべての人とは全く異なる存在であることを認識していました。彼女はビジョンを見てそれを受け入れ，彼女を尊敬して扱ってくれる唯一の人である救い主と恋に落ちました。

イエス様は、非難する者を非難しないことによって、非難を容認されたのではありません。それどころか、彼らを非難しないことによって、イエスは非難そのものを非難したのです。神はすべての罪を憎みます。しかし、神はサタンとは全く異なる方法で私たちの罪を扱われます。神は、私たちが善良な市民になるようにプログラムすることを望んではいません。また、私たちを無人機にすることにも興味がありません。神は私たちに自由意志を与えられ、知的な存在との関係を望んでおられ、ポジティブな刺激やネガティブな刺激によって条件付けされる生き物ではないのです。

姦淫した女の心を変えたのはキリストのあわれみでした。彼女は、人間の知恵とは全く違う知恵を持ったキリストに感謝と愛と賞賛の気持ちでいっぱいになりました。彼女はキリストの最も熱心な信者となり、喜んで罪の生活から離れ、新しい生き物となりました。後に彼女の涙で足に油を塗り、髪の毛で乾かした彼女について、イエスは言われました。

> "この福音が全世界で宣べ伝えられるところはどこでも、この女性がしたことは、彼女の記念としても語られるでしょう。

神は私たちの"無法な行い"をすべて赦してくださいました。神は私たちのすべての罪を"覆って"くださったのです。神は私たちに何かを「帰属させる」ことはありません。これは、私たち全員に当てはまる普遍的な真理です。これには、過去、現在、未来のすべての罪が含まれています。このことを信じるとき、私たちは祝福され、そのような恵みが、神のこの愛を知るすべての人を包み込み、聖別してくれるのです。これこそが、本当の意味で私たちを「清め」てくれるものなのです。

"働きによる義」は、神の義ではないので、実際には「不義」なのです。神の義については、ローマ人への手紙3:21-26で説明されています。

> しかし今、律法から離れた神の義が明らかにされ、律法と預言者たちによって証され、イエス・キリストへの信仰によって、すべての人と、信じるすべての人の上に、神の義が示されたのです。なぜなら、すべての人が罪を犯し、神の栄光を得ることができなかったからです。神はご自身の血による贖いとして定められたキリスト・**イエスにある贖いによって、神の恵みによって自由に義とされたのです。**

神の義は、すべてを自由に正当化してくださいます。神の義は「私たちの罪を越えて」、私たちが善悪の律法の下で行ってきたこと、現在行っていること、そしてこれからも行うであろうことをすべて赦してくださいました。イエス様の生と死によって示された私たちへの愛を信じ、受け入れるとき、私たちはこの知識の恩恵を受け、完全に神と和解することができるのです。そのような偉大な愛は変容をもたらします。これこそが天地を創造された神様であり、私たちが永遠に賛美する神様なのです。

この素晴らしい知識をどのようにして私たちの生活に生かすことができるのでしょうか？子供たちは親を観察することから学び、私たちはイエス様が与えてくださった模範から学びます。使徒ヨハネは、私たちがどのようにして神の義を生活に生かすことができるかを説明しています。

この中には、神の子と悪魔の子が現れています。義を実践しない者は神の子ではないし、兄弟を愛さない者も神の子ではない。これは、あなたがたが最初から聞いていた、互いに愛し合いなさいというメッセージです（第一ヨハネ3:10,11）。

私たちは神の真似をする者となり、神が私たちのためにしてくださったことを、他の人にもしてあげなければなりません。義とは，互いに無条件にアガペーの愛を注ぐことです。義とは「七十回の七」まで赦すことを意味します。「七」は聖書の数字で完全さを示し、イエスは無条件の赦しを象徴するために用いました（マタイ18：22）。義は完全に、そして無限に赦します。

ほとんどのクリスチャンは、働きによる義はサタンのものであり、神のものではないことを理解しています。しかし、彼らは、神が恣意的に「善」の業を報い、恣意的に「悪」の業を罰すると信じることによって、うっかりサタンの罠に落ちてしまいます。これを信じることによって、彼らは知らず知らずのうちに、業による義は神のものであると信じています。

サタンは絶え間なく善悪の法則を私たち一人一人に説き、強圧的に宣伝しています。しかし、彼の報いと罰のメカニズムは、この目的を達成することができませんでした。

私たちが神の愛の法則から外れるとき、私たちは自動的にサタンの善悪の法則をデフォルトにします。私たちが神に背くことを決めるとき、私たちは自動的にサタンを支持することになります。アガペの愛がなければ、私たちは「惨めで、惨めで、貧しく、盲目で、裸で」、黙示録3:17のような状態になります。

善悪が人間のデフォルトになっているので、サタンの性格的特徴を神に帰属させても不思議ではありません。

…**あなたがたは、わたしがあなたがたとまったく同じだと思っていた**が、わたしはあなたがたを懲らしめて、あなたがたの目の前でそれらを整える。賛美をささげる者はだれでもわたしをほめたたえ、正しい行いをする者には、わたしは神の救いを示す（詩篇50:21-23、強調）。

神は私たちとは全く違う存在です。私たちは、アガペの愛の中で、自分の人生を正しく生きるようにしなければなりません。もし私たちが神の非暴力の原則を理解していなければ、この詩篇の二番目から最後の文は特に恐ろしいものになるでしょう。神は破壊者ではないということを理解して初めて、アガペの愛をもって、霊的な心をもってこの詩篇を読むことができるのです。そうすると、この詩篇は、その意味するところとは正反対の意味を持つようになります。言い換えれば、次のような意味になります。

神がすべての人に無条件の愛を持っておられることを忘れているあなたがたは、神があなたを滅ぼされると考えないようにしなさい。そうすれば、怒っている神をなだめるために動物を殺すという懺悔の代わりに、神に感謝と賛美だけを捧げることができるようになります。神を恐れる理由がないことを知っている者が神を敬うのです。神に対する理解を正す人は、同胞に対する行動も正します。そのような人には、神は自分をどれほど愛しておられるか、また、神が自分と全人類のためにどれほど大きな救いを持っておられるかを示してくださいます。

律法の働きによっては誰も救われないからです。他に考えられる唯一の解釈は、上記のようなものです。

神の方法はアガペの愛であるため、神の方法は私たちの方法よりも高くなっています。

"「わたしの思いはあなたがたの思いではなく、あなたがたの道でもない。"天が地よりも高いように、わたしの道もあなたがたの道よりも高く、わたしの思いもあなたがたの思いよりも高い" （イザヤ55:8-9）。

私たちは、神を善と悪の二面性を持った自分たちと同じような神にしないように細心の注意を払わなければなりません。

結局のところ、業による義は、神がキリストにあって、イエスが人類の罪のために十字架上で死なれたときに示されたことを否定します。働きによる義は、善と悪の知識による欺瞞を助長します。すなわち、神は恣意的に善行に救いを与え、悪行には死と永遠の苦悩を与えることを罰するということです。これは不義、無法であり、十字架上で示された神の義とは正反対のものです。十字架の上で、神は私たちの罪を私たちに負わせたのではなく、ご自身で罪を負われたのです。

真の義とは，義とは無条件の愛であるため，律法の肯定的な働きも否定的な働きも，神の私たちに対する態度や行動に影響を与えないことを意味します。

信仰による救いと業による救いは、人類の歴史の初めから、カインとアベルの人生に典型的に見られていました。

カインは、約束のいけにえといけにえの供え物の必要性について、心の中でつぶやいたり、不貞をしたりして、神の前に来ました。彼の献げ物には罪への懺悔はありませんでした。彼は，今では多くの人が感じているように，神が示した正確な計画に従うことは，自分の救いを約束された救世主の贖いに完全に信頼するという弱さを認めることになると感じていました。**彼は自分自身に依存する道を選びました。彼は自分の力で来たのです**。彼は子羊を連れて来て、その血を自分の供え物に混ぜるのではなく、自分の労働の成果である自分の果実を捧げたのです。カインは自分の供え物を神への好意として提示し、それによって神の承認を得ようとしたのです。カインは祭壇を建てる際に従順であり，いけにえを持ってくる際に従順であったが，彼は部分的な従順をしたに過ぎなかった。本質的な部分、すなわち、贖い主の必要性を認識することが省かれていました{PP 72.1, emphasis added}。

カインとアベルは、時が終わるまでこの世に存在する二つの階級を表しています。**彼ら**の犠牲は神の仲介という美徳のない犠牲であり、**人を神に好意を抱かせることはできません**。イエスの功徳によってのみ、私たちの罪は赦されるのです。キリストの血の必要性を感じず、神の恵みがなければ、自分の**働きによって**神の承認を得ること**ができる**と感じている人は、カインと同じ過ちを犯しています。**もし彼らが清めの血を受け入れなければ、彼らは非難の対象となります。彼らが罪の王座から解放されるための**規定は他にはありません。

カインの模範に従う崇拝者たちは、世界のはるかに多くの人々を含んでいます。**ほとんどすべての偽りの宗教は、同じ原理に基づいています**。ある人たちは、人類に必要なのは贖罪ではなく、発展であり、**自分自身を磨き上げ、高め、再生させる**ことだと主張しています。カインがいけにえの血を欠いた供え物によって神の寵愛を得ようと考えたように，贖罪とは無関係に人類を神の基準にまで高めようと考えているのです。カインの歴史は、その結果がどうなるかを示しています。それは、キリストから離れた人間がどのようになるかを示しています。人間には、**自分自身を再生する力がありません**。人間は上に向かって、神の方に向かっていくのではなく、下に向かって、悪魔の方に向かっていくのです。キリストは私たちの唯一の希望です。"人の間では天の下に他に名前はない""他に救いはありません"使徒言行録4:12 {PP 73.1, emphasis added}。

"人間は自分自身を再生する力を持っていない"キリストは確かに"私たちの唯一の希望"です。キリストだけがアガペの愛の神を私たちに明らかにしてくださるからです。

そして、これは永遠の命であり、彼らが**唯一の真の神であるあなたと**、あなたが遣わされたイエス・キリストを**知る**ためのものです（ヨハネ17:3、強調）。

18

判定

ルシファーがアガペー愛の神の法則の無条件の性質を捨てたら、彼は自動的に裁きのシステムを導入しなければなりませんでした。人類の行動と動機は、彼が善と悪のカテゴリに私たちを分けることができるように判断されなければなりませんでした。他にどのようにして神は誰に報い、誰を罰するかを決定することができたのでしょうか？

善悪のシステムは、報酬や罰を与える前に、まず自分の功罪を確立する必要があります。1つの無実または有罪を決定するためのこのプロセスは、善と悪のバランスに1つの行動を量ることによって行われます。どちらか一方の側が重く傾いた方が判決の結果を決定します。

神の愛が無条件であるならば、神はこのような裁きに頼ることができるのでしょうか。イエスは山の上の説教でこの問題を取り上げられました。

> 裁かれないように、裁いてはならない。なぜなら、あなたがたが何を裁くかによって、あなたがたは裁かれ、あなたがたが使ったはかりによって、あなたがたはそれを測り返されるからである。あなたがたはなぜ、兄弟の目の中にあるまだら模様を見ても、自分の目の中にある板のことを考えないのか。あるいは、あなたの兄弟に「あなたの目の中の斑点を取り除こう」と言うことができますか。偽善者め。まず、自分の目の中の板を取り除いてから、兄弟の目の中の斑点を取り除くことがはっきりと分かるようになります（マタイ7:1-5）。

"裁かれないために裁くな"この簡潔ではありますが、負荷のかかるフレーズで、イエスは私たちの運命を決定することができる原則を私たちに与えています。なぜ私たちは裁かないのでしょうか？裁かれないためです。しかし、もし私たちが他の人を裁いたら、誰が私たちを裁くのでしょうか？神でしょうか？サタン？私たち自身でしょうか？これらは重要な質問であり、私たちはそれに答えようとしています。

ルカ書では、イエスは「さばき」という言葉を増幅して、非難を意味しています。

> 裁いてはならない、あなたがたは裁かれてはならない。咎めてはならない、そうすれば咎められてはならない。赦せ、そうすればあなたがたは赦される。そうすれば、それはあなたがたに乞われるであろう。あなたがたが使っているのと同じはかりで、それはあなたがたに計られて戻ってくるからである（ルカ6：37）。

他人を裁く人の目に映る板とは何でしょうか？目の板は「裁き」そのものであり、この種の裁きは非難の対象であり、善悪の道徳律法から来ているからです。イエスはこれを、兄弟の目の中の破片よりもはるかに大きな梁のような、より重大な欠陥として特徴づけています。

私たちが他人を裁き、重さを量ることは、私たちが死の領域にいることを証明しています。人を裁き、過ちを見つけること自体が、他人の過ちを見つけることよりも大きな罪なのです。結局のところ、わたしたちは皆罪人であり、皆不完全なのです。告発することは、より大きな罪です。

パウロも同じような警告をしています。

> 食べる者は食べない者を軽蔑してはならず、食べない者は食べる者を裁いてはならない。あなたがたは誰のしもべを裁くのか。彼は自分の主人のために立つか、倒れるかである。確かに、神は彼を立たせることができるので、彼は立たされるのです（ローマ14:3-4）。

> しかし、なぜあなたは兄弟を裁くのですか？あるいは、なぜ兄弟を軽蔑するのか。私たちは皆、キリストの裁きの座の前に立つからです。こう書かれているからです　"私が生きている間は、すべてのひざは私にひれ伏し、すべての舌は神に告白する。ですから、私たち一人一人が神に自分のことを説明しなければなりません。ですから、私たちはもうお互いを裁くのではなく、むしろこのことを決意し、兄弟の道につまずきや転落の原因を置かないようにしましょう（ローマ14:10-13）。

> しかし、私の場合は、あなたや人間の法廷で裁かれるべきだというのは、とても小さなことです。実際、わたしは自分自身を裁くことさえしていません。わたしは自分に不利なことは何も知らないからです。主は暗闇の隠されたものを明らかにし、心の相談を明らかにされる方です。そうすれば、一人一人の賛美が神からもたらされる（第一コリント4:3-5）。

パウロは、自分自身を裁くことさえせず、神は神のアガペの愛によって、自分とすべての人を立たせることができると言っています。肉の後に兄弟に不利なことを言って裁く者は、無条件の愛の律法を裁き、サタンと一緒になって神の律法を非効率的で欠陥のあるものだと宣言します。ルシファーのように、彼もまた神の律法を裁いて、それが愚かで弱いものであることを知ったのです。彼は、善悪の律法よりも無条件の愛を拒否しています。神の無条件の原則を拒否することで、神ご自身を拒否しているのです。

兄弟たちよ、互いに悪口を言ってはならない。兄弟の悪口を言って兄弟を裁く者は、律法の悪口を言って律法を裁く。しかし、律法を裁く者は、律法を行う者ではなく、律法を裁く者である。救うことも滅ぼすこともできる律法者は一人です。あなたがたは誰が他の人を裁くのでしょうか（ヤコブ4:11-12）。

真の律法の創造主はただ一人であり、天地の創造主であり、最高の永遠の律法、すなわち甘えの愛を持っています。彼の律法こそが真の律法です。ルシファーの律法は欺瞞であり、時の試練に耐えられない失敗作です。彼の律法によって、彼は地球とその住民を滅ぼそうとしているのです。最後には、神の律法は守られ、それはいつもそうであったように永遠に続くのです。

"彼は救うことも破壊することもできる"という言葉をどう考えるか？裁くことによって、私たちは破壊の危険にさらされています。ここでのキーワードは "自由"です神は私たちに生の律法と死の律法の間で選択する究極の自由を与えることによって、救いと破壊を行っています。破滅も救いも、私たちの選択には内在しています。お互いを裁くことは、私たちを明らかにサタンの管轄下に置くことになります。

互いを裁くことの危険性とは？なぜ、イエス様は私たちに裁かないようにと警告しているのでしょうか？私たちは心が読めないので、間違った判断をしてしまうからだと言われるかもしれません。その通りです。裁くことは愛を殺し、心を冷たくするとも言えるでしょう。

しかし、別の、私たちへの本当の危険はこれです：他の人を測定するために善悪のシステムを使用することによって、我々は実際に自分自身を測定すること。他者を判断することによって、私たちは私たちの道徳的な法律が善悪の道徳的な法律であることを状態にします。功罪のバランスで他人を量ることによって、私たちは神の無条件のアガペー愛の法則を無視し、私たちが神よりもサタンを選んだことを示しています-私たちは死の王国の臣民なのです。このように、サタンの非難の律法が私たちを裁くことになり、サタンのシステムにはあわれみはありません。

他人を裁くことによって、私たちは自分自身を裁きます。他人に罪を押し付けることによって、私たちは自分自身にも罪を押し付けます。これは、自己非難の結果となり、当然のことながら、完全な暗闇の中で。これがルシファーとその天使たちの運命です。

また、自分たちの領域を守らず、自分たちの居場所を離れた天使たちは、大いなる日の裁きのために、暗闇の下で永遠に鎖につながれている（ユダ1:6）。

一つの命を永遠の死に落とすことは、無意味な、必要のない損失です。神は無限の愛と慈悲です。誰も失う必要はありません。神が私たちを非難しないならば、誰が非難するのでしょうか？私たちは自分自身を非難しています。私たちが十字架を研究するとき、サタンの非難の力がどれほど致命的なものであるかが非常に明確になるでしょう。

イエス様は、この非難の「裁き」は、（善悪の道徳律法に支配されている）「肉の心」に従って行われると説明されました。

あなたがたは肉に従って裁くが、わたしは誰も裁かない。なぜなら、わたしは一人ではなく、わたしを遣わした父と一緒だからです（ヨハネ8:15-16）。

肉に従って裁く」人たちは、善悪の原則を自分の尺度としています。"私は誰も裁かない」-イエスは善悪の道徳律法によって誰も裁かないのです。しかし、もし私が裁くならば、私の裁きは真実である」という言葉はどうでしょうか。もし、神が恣意的に報いたり罰したりするために、誰も裁かないとしたら、神はどのように裁くのでしょうか？

神の裁きは、善悪の原理に内在する裁きと混同してはならない。

見た目で裁くのではなく、正しい裁きで裁いてください（ヨハネ7:24）。

最後に、義の冠が私のために置かれています。それは義のさばき人である主が、その日に私に与えてくださるもので、私だけではなく、主の出現を愛するすべての人にも与えられます（2テモテ4:8）。

"義の裁き"は義のみに基づいています。神の「正しい裁き」は、神の無条件の愛と調和していなければなりません。そのため、「義の裁き」は、報いと罰のシステムを伴うことはできません。

神は「肉の後」を裁くことも、無条件に愛することもできません。どちらか一方か他方なのです。イエス様が「私の裁きは真実である」とおっしゃった裁きは、善悪ではなく、アガペの愛に基づく裁きです。ですから、「正しい裁き」とは、神が私たち一人一人を同じように、無条件の公平な愛で扱ってくださることを意味します。これには、私たちの選択の自由を尊重することも含まれています。神の最終的な裁きは"義の裁き"によって行われます。それはどのようなものでしょうか。

それはとてもシンプルなことです。最後の審判において、神の「正しい裁き」は、私たちに自由を与え、私たちの選択の結果を尊重してくださるのです。神は、私たちが現世で選択した管轄の結果を完全に受け取ることを許してくださるのです。もし私たちが生の管轄権を選んだならば、私たちは生を受けることになります。もし私たちが死の管轄権を選んだならば、私たちは死を受けることになります。これはアガペの愛に由来する正しい裁きです。

私たちはどのようにして司法権を選ぶのでしょうか？私たちが現世で道徳的なルールとして採用する律法によってです。もし私たちがアガペ一愛の無条件法によって生きることを選ぶならば、私たちは神の管轄下に置かれ、永遠の命の賜物を受け継ぐことになります。もし私たちが善悪の条件付きの律法によって生きるならば、私たちはサタンの管轄下に置かれ、死を刈り取ることになります。このように、私たちは蒔いたものを刈り取るのです。神の「正しい裁き」とは、私たちの選択を尊重することであり、「正しい裁き」は、私たちの自由が守られ、私たちの選択が尊重されるようにしてくださいます。

"正しい裁きは、その日に主が現れることを愛する者に命の冠を与える""主の出現を愛する者"は、イエスの再臨での復活を願って死んだ。彼らは自分の善良さや自分の働きを信じませんでした。彼らは、永遠の命の贈り物を無条件に与えてくださった神に信頼を置きました。彼らは神のあわれみと恵みを信頼していました。すべての人に自由に与えられたいのちの贈り物を受け入れ、イエスの御父の無条件の愛の啓示を信じたのです。

聖書には、私たちの行いが私たちを裁くと書いてありますよね？もし「正しい裁判官」が、私たちの救いを自分の行いに基づいて判断しないのであれば、どのようにして私たちを裁くのでしょうか？

作品は私たちの思考の目に見える証拠です。それは私たちの内側にあるものを明らかにします。ですから，わたしたちの行動は，わたしたちが誰であるかを示す「証拠」であり，宇宙の法廷で使われる証拠なのです。神は私たちの弁護人であり、サタンは私たちの検察官です。私たちの行動は、神の無条件の愛についてキリストが語ったことを信じ、それに従っているか、それともサタンの恣意的な律法、すなわち非難と非難の王国に束縛されたままでいるかを示しています。

神は私たちを善悪から強制することはできません。神は私たちの自由を侵害することはできません。もし私たちがその中に留まることを選んだならば、神は私たちをそこに置き去りにすることを余儀なくされ、そこで私たちは死を刈り取ることになります。私たちの人生は秤にかけられ、証拠が調べられ、私たちがどの法律で生きることを選んだのかをすべての人が知ることができるようになります。透明性があるからこそ、この調査的判断がなされるのです。それぞれの律法には独自のルールがあります。サタンの律法は非難するものですが、神の律法は赦すものです。私たちはどの律法に従って生きているのでしょうか？

キリストは、神が世に与えられた贈り物であり、神の非裁き、非裁きの性格を明らかにするために与えられたものです。父なる神と御子なるイエス様に関する限り、神の裁きに関して唯一の否定的なことは、私たちが与えられた光に対する私たちの反応に関係しています。私たちは光を受け入れることも拒否することもできます。もし神が真理を与えて下さったのに、私たちがそれを拒否したら、神は私たちを暗闇に帰すことを許して下さるのです。神の手は縛られているのです。

大洪水は，世界が創造されてから2,000年後の審判でした。福音の光は，前生代の人々に与えられました。

キリストもまた、かつてノアの時代に、箱舟が準備されている間、神の慈しみが待っていたときに、かつては不従順であった獄中の霊たちに行って説教されたのです。

ノアの時代の人々はイエス・キリストの福音を拒否し、その結果、非難者である破壊者の手によって洪水が来ました。

最初の降臨は、エデンから四千年も離れた別の裁きでした。光」、「真理」を地上にもたらす行為は、まさに裁きをもたらしたのです。イエスは言われました。

"私がこの世に来たのは 裁きのためである" "見えない者が見えるようにするためである" "見える者は盲目にされるかもしれない"そこで、イエスと一緒にいたパリサイ人たちの何人かがこの言葉を聞いて、イエスに言った、「私たちも盲目なのか」。イエスは彼らに言われた。「もしあなたが目が見えていたなら、あなたは罪を犯すことはない。ですから、あなたがたの罪は残っています」（ヨハネ 9:39-41）。

イエス様はイスラエルの子供たちに神様のお人柄を明らかにされました。彼らは神の愛を世に伝えることになっていました。しかし、彼らのほとんどは神の御子を拒否し、十字架につけました。イエスの時代の人々は、真理を拒否することによって、自分たち自身をサタンの手に渡してしまったのです。

ユダヤ人は自分たちの束縛を偽造し、自分たちのために復讐の杯を満たしていた。彼らに降りかかった民族としての完全な破壊と、彼らの離散に続くすべての苦難の中で、彼らは自分たちの手で蒔いた収穫を刈り取っていたに過ぎなかったのである。預言者は言う"イスラエルよ、あなたは自分を滅ぼした。ホセア13:9;　14:1彼らの苦しみは、しばしば神の直接の命令によって彼らに与えられた罰として表現されています。このようにして、偉大な詐欺師は自分の業を隠そうとします。神の愛と憐れみを頑なに拒否することで、ユダヤ人は神の保護を受けられなくなり、サタンが自分の意志に従ってユダヤ人を支配することが許されたのです。エルサレムの破壊で行われた恐ろしい残虐行為は、サタンの支配に屈した者に対する執念深い力を示しています{GC 35.3}。

アダムとエバが善悪の知識の木の実を食べてから6,000年後に、もう一つの裁きが行われようとしています。

神様のお人柄の光が今与えられています。神様は世界中の使者たちに光を注いで、すべての人に光を伝えようとされています。無条件の愛という神の御性質の光は、地球全体を覆うようになるでしょう。

かれらは，わたしの聖なる山のすべてを傷つけず，また滅ぼしてもならない。
地は主の知識に満ち溢れている。
水が海を覆うように（イザヤ11:9）。

"流血で町を作る者に哀れみを
誰が不義をもって都を建てるのか。
見よ，それは万軍の主のものではない。
民衆が火を養うために労働することを
諸国は無駄に疲弊しているのか？
地は満たされるのだから
主の栄光の知識をもって。
水が海を覆うように」（ハバクク2:12-14）。

私は別の天使が天の中を飛んでいるのを見た。その天使は、地上に住むすべての民族、部族、舌、民に永遠の福音を説くために、大きな声で言った。

この知識が拒否されると、黙示録9:11に記述されている破壊者の手によって、再び滅亡が訪れることになります。

そして、彼らは底なし穴の天使を王とし、その名はヘブライ語ではアバドンであるが、ギリシャ語ではアポリオンと呼ばれていた（黙示録9:11）。

悲しいことに、多くの人々は神の性格についての真理を拒否します。この真理を拒否すると、彼らは破壊者の管轄下に置かれます。そして、破壊者の手による破壊は、黙示録16章の7つの最後の災いによってもたらされます。

私たちには選択の自由があります。イエス様の証を受け入れることも拒否することもできます。この裁きは、イエスが神について教え、啓示されたすべてのこと、特にイエスの無条件の愛の原則に関して、私たちがどうするかに関係しています。この裁きは、イエスが神についての真理を宣言した瞬間に発動し、もし私たちがそれを拒否するならば、私たちは自分自身を裁くことになります。私たちを裁くのは、キリストが神の性質に照らしてくださった光を、私たちが受け入れるか否かです。この点でのキリストの言葉に注目してください。

わたしの言葉を聞いて信じない人がいても、わたし**はその人を裁かない。わたしを拒み、わたし**の言葉を受け取らない者は、自分を裁くものを持っている。わたしは自分の権威で語ったのではなく、わたしを遣わしてくださった父が、わたしに命令を与えてくださったのです。わたしは、その命令が永遠の命であることを知っています。ですから、わたしが話すことは何でも、父がわたしに言われたように、わたしも話すのです（ヨハネ12:47-50、強調付）。

イエス様は、この世に来られた真の光でした。イエス様は光を与えるために来られましたが、世界はイエス様を受け入れませんでした。

それは、この世に出てくるすべての人に光を与える真の光だった。

主は世におられ、世は主を通して造られ、世は主を知らなかった。主はご自身のところに来られたが、ご自身は主を受け取らなかった。しかし、彼を受けた多くの者には、彼の名を信じる者に、神の子となる権利を与えられたのです。

世界は彼を通して造られたにもかかわらず、世界は彼を知り、受け取り、受け入れることができませんでした。世界はサタンの善悪の法則を好んだため、アガペの愛の原理を受け入れることができませんでした。

そして、これは、光が世に入ってきて、人が光よりも闇を愛したこと、その行いが悪であったからである（ヨハネ3:19）。

多くの人にとって、サタンの法則は無条件の愛よりもはるかに理にかなっています。結局のところ、どのようにして犯罪者を罰しないことができるのでしょうか？愛だけでどうやって彼らを改革することができるのでしょうか？家族や子供たち、そして私たち自身を守るために、どうして暴力を使わないことができるのでしょうか？どうして力を使わずに秩序を保つことができるのでしょうか？

神への真の愛は、結果に盲目である従順を導き出します-これは殉教者の人生を見れば明らかです。ダニエルとその友人たちは、自分を救うためには世に従わなければならないという議論に対して、唯一の真実で正しい答えを持っていました。

> ネブカドネザルよ 答える必要はありませんもしそうであれば，わたしたちが仕える神は，わたしたちを燃える火の炉から救い出すことができ，王よ，あなたの手からわたしたちを救い出してくださいます。しかし、そうでない場合は、王よ、私たちはあなたの神々に仕えず、また、あなたが立てた金の像を拝むこともないことを、あなたに知らしめてください（ダニエル3:16-18）。

直感的ではないかもしれませんが、イエスは「自分の命を救おうとする者はそれを失うが、わたしのために自分の命を失う者はそれを見つける」（マタイ16:25）と言われました。神の非暴力的な愛の原則のために命を失うことは、この世では得られない報酬、永遠の命をもたらすでしょう。しかし、その場合でも、私たちは利己的な理由で神に従わないように注意されています。

> わたしは人と天使の異言を話しても、愛がなくても、わたしは金管の音やシンバルの音になってしまいました。また、預言の賜物を持ち、すべての神秘と知識を理解し、すべての信仰を持ち、山を取り除くことができたとしても、愛がなければ、わたしは何もありません。また、貧しい人々を養うためにすべての財をささげ、自分の体を焼かれるためにささげても、愛がなくても、何の得にもなりません（第一コリント13：1-3）。

人類はこの世界の神の法則で飽和しています。いずれにしても、サタンの恣意的な道徳律法が私たちの心をつかんでいます。私たちの唯一の希望は、イエス様が私たちの心の中に入ってこられるように扉を開けることです。イエスはドアをノックしています。私たちの唯一の希望は、「キリストの裁きの座」の前に立つことです。なぜなら、キリストには非難がなく、すべての人が自由に赦されているからです。

> ですから、キリスト・イエスにあって、肉に従って歩むのではなく、御霊に従って歩む人たちには、今では何の責めもありません（ローマ8:1）。

神は私たちをサタンのシステムから抜け出し、差し迫った破壊に加担しないように呼びかけておられます。神は私たちに二重の性質を捨てる力を与え、神の義を私たちに与えてくださいます。神は決して私たちに対して力を行使したり、私たちの自由意志を侵害したりはしません。選択は私たちのものであり、私たちはどちらの立場に立つかを選ばなければなりません。

19

ジャスティス

正義の概念は、神とサタンの戦いを理解する上で非常に重要です。なぜでしょうか？それは、ルシファーが大論争の幕開けで最初に神から逸脱したのは、この特定の点にあったからです。

聖書の中の「正義」という言葉を調べていくと、裁きには二種類あるように、神の正義とサタンの正義という二種類の正義があることが明らかになってきます。善悪（咎）に従った正義と、アガペの愛（義）に従った正義があります。そうでなければ、「正義」を善悪の法則に従って解釈するという人間的な誤りに陥ってしまいます。繰り返しになりますが、聖書は私たちの解釈者であり、用語の定義者でなければなりません。神の正義は決してあわれみから切り離されることはありません。

> **神の愛は、神のあわれみと同様に、神の正義の中にも表現されています。正義は神の玉座の基礎であり、神の愛の実です。真実と正義からあわれみを切り離すのがサタンの目的でした。彼は、神の律法の正義が平和の敵であることを証明しようとしたのです**。しかし、キリストは、神の計画の中では、これらは互いに不可分に結びついており、一方が他方なしには存在できないことを示しています。憐れみと真理は共にあり、義と平安は互いにキスをしている」。詩篇85:10 {DA 762.3, emphasis added}。

慈悲と神の愛の法則は切っても切れないものです。慈悲は神の真の正義です。

その時，主の言葉がゼカリヤに来て，「万軍の主はこのように言われる。

"真の正義を実行する
慈悲と哀れみを示す
誰もが彼の弟に
未亡人や父のない者を圧迫してはならない。
宇宙人か貧乏人か。
汝らの心に悪事を企ててはならない
その兄弟に対して」（ゼカリヤ7:8-9、強調）。

モーセの聖域では，神の憐れみは十戒を含む契約の箱舟を覆う蓋によって表されていました。その蓋は"あわれみの席"と呼ばれていました慈悲の席とは何ですか？本質的には神のあわれみの"玉座"です。神はあわれみの席を建てる方法をモーセに指示しました。

"あなたがたは**純金であわれみの座を**作り、その長さを2.5キュビト、幅を1.5キュビトとする。また、あなたは金で二つのケルビムを作り、慈悲の座の両端に金槌で作ってください。一方の端に一つのケルビムを作り、他方の端にもう一つのケルビムを作り、その両端のケルビムをあわれみの座と一体のものにしなければならない。また、ケルビムはその翼を上に伸ばし、その翼であわれみの座を覆い、互いに向かい合う。あなたがたはあわれみの座を箱舟の上に置き、箱舟の中に、わたしがあなたがたに与えるあかしを入れなければならない。**そこでわたしはあなたがたに会い、あわれみの座の上から、あかしの**箱の上にある二つのケルビムの間から、わたしがイスラエルの子らに戒めとしてあなたがたに与えるすべてのことについて、あなたがた**と話す**」(出エジプト記25:17-22、強調)。

ケルビムは慈悲の座と一体となっていました。彼らは互いに向き合い、その顔は慈悲の座に向けられることになっていました。これは、ルシファーが反乱を起こす前に占めていた位置と、その天での意味を非常によく表しています。ルシファーは神との信頼関係を崩したとき、あわれみの席から顔をそむけました。そうすることで、あわれみと正義は切り離せないものであるという概念を否定したのです。

詩篇はこう述べています。

義と正義はあなたの御座の基礎であり、あわれみと真理はあなたの御顔の前にあります（詩篇89:14）。

神の義、正義、あわれみ、真理は神の愛の律法と本質的に絡み合っており、互いに矛盾することはありません。イエスがご自身の生と死において明らかにされたように、これらは調和のとれたパッケージなのです。

憐れみは神の御座の「土台」ですから、サタンの反乱の最初から、神への攻撃の焦点はまさに正義と憐れみの問題にあったことは驚くに値しません。ファリサイ派の人々と話していた時、イエスは正義とあわれみが「律法の中で最も重い問題」であることを示されました。

災いなるかな，律法者とファリサイ派の偽善者たちよ。あなたがたはミントとアニスとクミンの什分の一を払い、律**法のもっと重い事柄、すなわち、正義と憐れみと信仰を怠っている**からである。これらはあなたがたが行うべきことであり、他のことを放置することなく行うべきであった（マタイ23:23、強調）。

先に読んだように "大論争の冒頭で サタンは神の律法は従えないと宣言しました正義と慈悲は矛盾しています"この引用をもう一度見てください。

大論争の冒頭で、サタンは、神の律法は従うことができない、**正義はあわれみと矛盾している**、律法が破られると、罪人を赦すことができなくなる、と宣言しました。**すべての罪はその罰を受けなければならない、**もし神が罪の罰を免れるならば、神は真実と正義の神ではないと**サタンは主張しました。**人が神の律法を破り、神の御心に逆らうと、サタンは反抗した。律法を守ることができず、人を赦すことができないことが証明されたのです。サタンは、人間は反抗した後、天から追放されたので、人類は永遠に神の寵愛から締め出されなければならないと主張しました。神は正義でありながら、罪人にあわれみを示すことはできない、とサタンは主張しました{DA 761.4, emphasis added}。

サタンは「正義はあわれみと矛盾していた」という言葉が何を意味していたのでしょうか？神の正義は確かにあわれみと矛盾していたということでしょうか？それとも、自分の考えでは、正義と慈悲は一致しないということでしょうか。正義はあわれみと矛盾していた」という言葉と「すべての罪は罰を受けなければならない、サタンが促した」という記述を比較してみると、後者であると結論せざるを得ません。思い起こせば、ヘブライ語で咎を表す言葉の一つであるâvônは罰を意味します。ルシファーの中に不義があったとき、罰の概念が生まれたのです。

サタンは反抗期のある時点で、正義を罰に相当するものと認識するようになり、愛に反抗するうちに、神に自分の新しい正義の定義を受け入れるように促し始めました。彼にとって、罰は正義の概念の中心となりました。

聖職に就いている者として、**彼（ルシフェル）は正義を過度に求めていましたが、それは正義の偽物であり、神の愛と憐れみとあわれみに**完全に**反して**いました{RH September 7, 1897, par.4, emphasis added}。

彼の目的は悪を扇動することであり，それが成功した時には，誘惑された者にすべての非難を投げかけ，罪の黒い衣を身にまとい，最も厳しい刑罰を彼に与えようとする。**彼は慈悲のない正義を求めた**が悔い改めは許さない悔い改めは許されないと彼は主張します。7, emphasis added}。

これらの記述をエゼキエルのルシファーの堕落の記述と比較してみると、神の律法に対するサタンの攻撃の性質について、新たな洞察を得ることができるでしょう。

あなたは創造された日から、あなたの中に不義が見出されるまで、あなたの道は完全であったのです」（エゼキエル28:15-16）。"豊かな交易によって、あなたがたは内なる暴力に満たされ、罪を犯した"（エゼキエル28:15-16）。

この一節を解釈すると、「すべての罪は罰せられなければならない」という新しい正義の概念が彼の心の中に生じるまでは、ルシファーは彼のやり方で完璧だったということになります。このように、彼の中に見出された不義は、正義とは何か、罰則的な正義、神によれば全く正義ではない正義についての新しい理解だったのです。

今，私たちは二種類の正義に直面しています。この二つを見分けるためには、聖書の中で、どちらの正義が神によるもので、どちらがサタンによるものなのかを見分けなければなりません。サタンの正義は、彼を「内なる暴力」で満たしていました。このように、彼の正義は暴力を用いているのです。

聖書では、神の正義はしばしば神の義と対になっています。もし正義が義の精神で行われるならば、それは神のものです。神の正義の中心にあるのは、善、愛と優しさ、真実とあわれみの概念です。それが神の義です。逆に、もし正義が暴力によって達成されるならば、それはサタンのものです。

姦淫した女のケースは、サタンの正義と神の正義の両方の明確な例です。ファリサイ派の人々は、彼女にサタンの正義を与えようとし、彼女を石打ちの刑に処す準備をしていました。イエスは彼女に神の正義、すなわちあわれみを与えられました。姦通していた女性は神の正義を受け、その瞬間から彼女の人生は変えられました。

次に、正義についての次の節を考えてみましょう。

主**は義と正義を愛し、**地は主の善に満ちている（詩篇33:5、強調）。

正義と正義はあなたの御座の基礎であり、あわれみと真理はあなたの御顔の前にあります（詩篇89:14、強調）。

主は、抑圧されているすべての人のために義**と正義を実行される**（詩篇103:6、強調）。

シオンは**正義**によって贖われ、その悔悛者は**義**によって贖われる（イザヤ1:27、強調）。

そして、ダビデの幕屋で、真実にその上に座らせ、裁き、正義を**求め、義を急がせる**」（イザヤ16:5、強調）。

また、わたしは**正義を**測る線とし、義**を**急落させ、あられは嘘の避難所を一掃し、水は隠れた場所を覆う（イザヤ28:17、強調）。

見よ、**王は義をもって君臨し、王子たちは正義をもって統治する**（イザヤ32:1、強調）。

主は高みに住まわれ、シオンを**正義と義で**満たしておられるからです（イザヤ33:5、強調）。

"そう、わたしはあなたがたを**義と正義、愛とあわれみのうちに、**わたしのもとに永遠に引き渡すのです」（ホセア2:19、強調）。

これらの節によると、神の正義は善、慈悲、真実、愛と優しさ、そして義に等しいとされています。正義とは、正しさ、直さ、道徳的な美徳であり、神のアガペー愛とそのすべての属性と一致していなければ、それは義ではありません。神の正義には暴力についての言及はありません。

正義」という言葉は、正しいことを意味します。神のアガペー愛の律法に関連して、それは公平性を意味し、定義上は公平で無条件のものです。繰り返しになりますが、神の正義は神のアガペー愛のパラメーターの範囲内で行使されなければなりません。アガペの愛から外れた正義は偽りの正義であり、それはサタンによる正義の倒錯です。

サタンは、アガペの愛の外で動作する新しいタイプの正しさ、正しさ、道徳的な美徳、新しい正義を創造しました。サタンの正義は、善良さ、憐れみ、真実、そして愛と優しさに満ちていません。むしろ、それは残酷であり、意地悪であり、破壊的であり、暴力的なのです。次の言葉を考えてみましょう。

> **サタンの非難の力は、慈悲と矛盾する正義の理論を彼に仕掛けることになります**。彼は神の声と力を司っていると主張し、彼の決定は正義であり、純粋で誤りのないものであると主張します。このようにして、彼は裁きの席で自分の立場を取り、彼の助言は無謬であると宣言します。**ここに彼の無慈悲な正義が入ってくるのですが、これは正義の偽物であり、神を忌み嫌うものです**。

サタンは「正義の理論」、つまり「慈悲と矛盾する偽の正義」を生み出しました。これは、彼の正義が「慈悲を欠いた無慈悲な正義」であることを意味しています。

それだけでなく、彼は宇宙を欺いて、自分の正義が神から来たものだと思い込ませました。そして、彼は自分の正義が正しいものであると主張し、「彼の決定は正義であり、純粋で誤りのないものである」と主張しています。"このようにして彼は審判の席で自分の立場を取り、彼の助言が無謬であることを宣言する。"

神はあわれみの擬人化であるため、これは「神を忌み嫌う」ことです。実際、神にとって、サタンのいわゆる正義は、実際には不正であり、この不正は、偽の正義によって行われ、不正の本質です。

これは、ヘブル書に記されているように、「イエスは義を愛し、咎を憎んでいた」という理由を説明しています。

しかし、御子にはこう言われます。

> "神よ、あなたの玉座は永遠に永遠にあります。
> 義の笏は、あなたの王国の笏である。あなたは義を愛し、無法を憎んでおられます[INIQUITY]。
> それゆえ、あなたがたの神は、あなたがたに油を注がれた。
> あなたの仲間よりも喜びの油をもって」（ヘブル1:8¬9、強調追加）。

サタンの偽りの正義とは、他人を裁き、非難する「検閲」のようなものです。

> **サタンが唱える偽りの正義は、神によって忌み嫌われています**。神の慈悲**と愛の一部である者は、彼の制裁を真似してはならない。**兄弟よ、姉妹よ、自分の魂を守りなさい。最初の嫉妬心や、**他人を疑ったり裁いたりする**ような提案がないか、注意深く見守りなさい。わたしたちは他人の弱さに厳しくならず，自分自身の個々のケースに熱心に耳を傾けなければなりません。10, emphasis added}。

他人を疑ったり、裁いたりすることは、サタンの偽りの正義のパッケージの一部です。他人を検閲したり批判したりすることに肯定的なことは何もなく、むしろ批判は非難したり非難したりしようとする厳しい精神を露わにするだけです。これがサタンが私たちの道徳的な構成にしたことです。このような霊は、神の公平な善と憐れみと愛からはかけ離れています。

次の節を考えてみましょう-正義の文脈で暴力を使うことは矛盾であり、倒錯であることを示しています。

もしあなたがたが、ある地方で貧しい人々の弾圧や、正義**と義の暴力的な倒錯を**目にしても、そのことに驚嘆してはならない。

主に背いて嘘をつき、神から離れている。
弾圧と反乱を語る。
虚実の言葉を心の中から思いつき、口にすること。
正義は裏目に出ている。
正義は遠くに立っている。
真実は通りに落ちているからだ。
また、公平は入ることができません（イザヤ59:13-14。

神の正義は、神の正義の偽りの暴力的な倒錯によって取引され、妨げられることがあります。このように，正義は「遠くに立っている」「通りに倒れている」「公正は入ることができない」のです。次の節では，暴力と正義がいかに相容れないものであるかを示していますが，正義と義はしばしば，あるべきではないものへと曲解されてしまうことがあります。

"主なる神はこう言われる。**暴力と略奪を取り除き、正義と義を実行し**、わたしの民を奪うのを止めなさい』と主なる神は言われる」（エゼキエル45:9、強調）。

"主がヨセフの家の中で火のように火を噴き出し、それを食い荒らし、ベテルでそれを鎮める者がいなくならないように、主**を**求めて生きなさい。

馬は岩の上を走るのか？牛と一緒にそこを耕すのか。それなのに、あなたがたは正義**を胆汁に、義の**実を**ヨモギに変えてしまった**（アモス6:12、強調）。

真の正義は義の実です。しかし、サタンはこの言葉を「胆」と「ヨモギ」に変えてしまいました。サタンの正義は暴力と抑圧に満ちており、公平ではありません。

私たちは皆，サタンの正義のタイプをよく知っており，その懲罰的で破壊的な性質を経験してきました。たとえ一時的にそのように見えたとしても、彼のスタイルの正義からは何も良いことはありません。彼のシステムの最終的な最終的な結果は、疎外、反抗、痛み、争い、破壊と死です。

ルシファーは最初の罪人であり、彼自身の推論によれば、神は彼を罰するべきだった。それが論理的な結論ではないでしょうか？しかし、神はそのようなことはしませんでした。ルシファーが天国から追放されたのは、神の恣意的な行為ではありませんでした。彼らは彼の狡猾な欺瞞に耳を貸さなくなり、天は彼の「知恵」を拒絶したのです。

さらに、彼を神の寵愛から追放したのは、彼自身の心、彼自身の思考でした。ルシファーは最初の不信仰者となりました。彼の新しい正義の概念のために、彼は自分自身のためにも、他の人のためにも、赦しを信じることができませんでした。

> 堕落した天使の長であるサタンは、かつて天で高貴な地位にあった。彼はキリストの次に名誉ある存在でした。彼と彼と一緒に落ちてきた天使たちが、神の性質、神の善良さ、神のあわれみ、知恵、そして優れた栄光について持っていた知識が、彼らの罪を容赦ないものにしたのです{Con 21.1}。

ルシファーは慈悲そのものを拒否し、そうすることによって、彼は許されない罪を犯しました。これは、神がルシファーを赦すことができなかったからではなく、神の視点から見れば、ルシファーはすでに赦されているからです。神の愛が無条件で公平であれば、サタンでさえも赦されているのです。しかし、気づいてください。

> 天国の言いようのない栄光を目の当たりにして楽しみ、神の恐るべき威厳を目の当たりにし、この栄光の前で神に反抗してしまった人々には、救いの希望はありませんでした。**神の崇高な力の新しい素晴らしい展示は，彼らがすでに経験したものほど深く印象づけられるものはありませんでした**。言葉では言い表せないほどの栄光の前で反抗することができたとしても，それが**証明されるためには，これ以上有利な状況に置かれることはありませんでした。力の予備力はなく，また，彼らの嫉妬深い疑念と反抗的なつぶやきを打ち消すような無限の栄光の高みと深みはありませんでした。彼らの**罪と罰は，天の法廷における彼らの高貴な特権に比例するものでなければなりません{Con 21.2, emphasis added}。

もしサタンがあわれみと愛の体現者に反抗することができたとしたら、彼が神のもとに戻ってくる希望があるでしょうか？サタンはすでに愛の神に完全にさらされていましたが、神を拒絶しました。このようにして彼は自分の罠にはまってしまいました。神がそれを要求したからではなく、自分の心がそうしたからです。彼が受ける罰は、彼自身の善悪の法則、つまり「不信仰の邪悪な心」から来ているのです。次の節を考えてみましょう。

> 兄弟たちよ、生ける神から離れようとする不信仰の邪悪な心を持つ者が、あなたがたの中にいないように気をつけなさい。私たちはキリストの仲間になったのです。"今日、もしあなたがたが主の声を聞くなら、反逆の時のように心を固くしてはならない」（ヘブル3:12-15）と言われています。

"不信仰の邪悪な心"は、無条件の愛の神から私たちを引き離す唯一のものです。私たちの誰一人として、神が私たちを許すことができないほど落ち込んだ者はいません。私たちの誰一人として、神が私たちを改心させることができないほど背信的で邪悪になった者はいません。赦すことができない唯一の罪は、神の真の性格を信じないという罪です。

コーランでは、悪魔はイブリスと呼ばれています。Encyclopedia Mythicaによると、この言葉の定義に注意してください。

> イブリスはクルアーンに登場する悪魔の名前です。悪魔」という言葉はギリシャ語のディアボロスに由来するが、ムスリムはアラビア語のバラサ、「彼は絶望した」に由来する名前で、「神の慈悲に絶望した」と解釈できるが、彼はアル・シャイラン、サタン、"神の敵"でもある。後者のサタンの側面は、イスラム教徒とキリスト教徒の両方に共通する信仰である。ある伝承によると、アッラーが天使たちに、新しく創造された人間アダムにひれ伏すように命じられたとき、イブリスはそれを拒否した。彼は人間を誘惑し続け、特に囁き（ワスワス、「彼は囁いた」）と偽りの暗示（ハイフ）によって人間を誘惑し続けている。最後には、彼はジャハナム（地獄）に投げ込まれると信じられている。両宗教に共通するもう一つの信念は、個人的な生活の中での悪の普遍的な存在は、通常、個人的なエージェントである悪魔の結果として経験されるということです。サタンとシャイランの両方が識別されていますが、シャイランもまた、おそらく誘惑の擬人化であるジンズのリーダーとして、明確な存在を持っています。これは、各個人には2つの個人的な霊的存在が伴うというムスリムの信念と一致しています。Encyclopedia Mythica Mythica Onlineより。 <http://www.pantheon.org/articles/i/iblis.html> [Accessed March 02, 2016]）。)

彼のアラビア語の名前の由来は "彼は絶望した"という意味であり "神の慈悲に絶望した"と解釈できるイブリスが神の慈悲に絶望したのは　神が慈悲を持っていないからではなく イブリスが慈悲を完全に信じなくなったからだイブリスと彼の天使たちが、人間の「すべての善行」と「悪行」を記録していることに注目してください。コリント１３章によると、神は悪事を記録しておらず、私たちの良い行いが私たちの救いを得られないのであれば、これらのことを記録しているのは悪魔と彼の天使であることは明らかです。彼らは、神の前に私たちを非難できるように、記録を残しているのです。

> 昼も夜も私たちの神の前で彼らを告発していた私たちの同胞たちの告発者が打ちのめされたからである」（黙示録12：10）と天で言う大きな声が聞こえた。

神のあわれみと愛を信じないことで、私たちはあわれみから身を切ります。"不信仰の邪悪な心"は、私たちが永遠の命を得ることを妨げる唯一のものです。パウロが"不信仰の邪悪な心"と呼ぶのも不思議ではありません。私たちはイエス様の愛とあわれみに、命のいかだのようにしがみつかなければなりません。

もし、サタンの魅力的で幻想的な魅力から目を背け、**イエスの愛を見て理解するのに十分な時間をかけてイエスに目を向ける**ならば、人はもはや罪の奴隷ではなくなるでしょう。新しい習慣が形成され、悪のための強力な傾向が抑えられるでしょう。私たちの指導者は征服者であり、私たちを確実な勝利へと導いてくれます。私たちの擁護者であるイエスは、私たちのために御父の御座の前で嘆願し、罪人に向かってこう言っています。神はキリストを通して、人をサタンの欺瞞から救うために、可能な限りのことをしてくださったのではないでしょうか？神はご自分の身を捧げられなかったのでしょうか？私たちのために貧しくなられたのではなく、その貧しさによって私たちが豊かになるために、私たちのために貧しくなられたのではないでしょうか？キリストはよみがえられた救い主であり、私たちのために執り成しをするために生きておられるのではないでしょうか？すべての心の上で聖霊の働きによって贖いの大いなる業を続けておられるのではないでしょうか。**キリストを個人的な救い主として信じるすべての人が永遠の命を持つという事実を証しています。慈悲と正義は神の遺産を扱う際に混ざり合っています**{ST September 19, 1895, par.2, emphasis added}。

すべての人間に、自分の善悪に基づくものではなく、自由に与えられているが、多くの人間は信じないだけでそれを失うという、計り知れない未来の永遠の命が提供されているということを、あなたは想像できますか？罪の欺瞞」とは何でしょうか。それは、ルシファーが神の正義と憐れみから逸脱した時に心を鷲掴みにしたのと同じ不信仰です。彼が天使や人間に「植え付けた」のと同じ不信仰です。

サタンが天使たちの心に植え付けた「ここでの言葉とそこでの言葉」は、仮説の長いリストへの道を開きました。彼の巧妙なやり方で、彼はそれらから疑念の表現を引き出しました。そして、インタビューを受けたとき、彼は自分が教育してきた者たちを非難した。彼はすべての不満を自分が指導してきた者のせいにした。聖職に就いている者として、彼は正義を過度に求めていましたが、それは正義の偽物であり、神の愛と憐れみとあわれみに完全に反していました。4, emphasis added}。

サタンは、天使たちから疑いの表現を引き出しながら、不信仰の種を蒔いていました。彼の不信仰の種の特定のターゲットは、神の正義でした。サタンは、神の正義に関して、天の群衆の一部始終を不信仰に導いていたのです。

イエス様が地上におられた時、堕落した天使たちがイエス様にどのように反応したかを見れば、イエス様の成功は明らかです。彼らはしばしば恐れを抱いてイエスから離れ、「私たちの時代の前に私たちを滅ぼしに来たのか」と叫んだのです。彼らもまた、善悪の道徳律法に騙され、イエスがサタンの正義の偽物を使うことを期待していました。これが彼らが今信じている唯一の正義であり、結果として、これが彼らが神を見る方法なのです。

人類は長い間、サタンの欺瞞の虜になっていました。アダムが善悪を知る木の実を食べて以来、私たちは神の正義とサタンの正義を交換してきました。私たちはすべてのものを、聖書でさえも同じフィルターを使って解釈しています。その結果、私たちは神を非難していると見なして、神から遠ざかっているのです。しかし、すべての非難は例外なく、サタンの不義の律法に由来し、彼の偽りの正義の副産物なのです。

> 神は、イエス・キリストを通して私たちをご自身に和解させ、私たちに和解の働きを与えてくださいました。つまり、**神はキリストにあって、世界をご自身に和解させ、彼らの罪を彼らに押し付けることなく、和解の**言葉を私たちに託してくださったのです。私たちは、神が私たちを通して懇願しているかのように、キリストの代弁者です。

神のあわれみが終わることがないのは、愛が終わることがないからです。神は「昨日も今日も永遠に変わらない」（ヘブル13：8）。それは神の慈悲を見て、自分自身のためにそれを充当することから私たちをブロックする、私たちの心に刻まれた善悪の知識の木の欺瞞である。

> 人が一度決定をしたときにはそれに従わなければならず、その決定を決して変更してはならないという立場を取るとき、その人は神に反抗したときのルシファーと同じ立場にあります。彼は、天の統治に関する彼の計画を、高尚な、変更不可能な理論として保持していました{3BC 1161.6}。

私たちは証拠を見ることに心を開き，神のお人柄に関する私たちの心や考え方を変えることができるでしょうか。

20

恐怖

ああ、私と共に主を大きくし、共に主の御名を高揚させましょう。私は主を求めたが、主は私の声を聞いて、私のすべての恐れから私を救い出してくださった（詩篇34:3-4）。

神の愛は完全です。定義によれば、神の愛は常にその義の原則を守り、そこから逸脱することはありません（1コリント13）。自由はアガペの愛に固有の要素です。自由がなければ、愛は愛ではなくなり、奴隷となります。真の愛は、外からの圧力を受けずに、私たちの内から自然な反応を引き出します。愛が自由を与えるならば、力を使うこともできません。また、いつ、どこで自由を与えるかという恣意的な選択もできません。このような矛盾はアガペーの愛の一部にはなりえません。アガペーの自由は絶対的なものでなければなりません。これは、アガペーが暴力的であることができないことを意味します。アガペーが暴力的であることができないのであれば、アガペーは決して恐怖を引き出すことはできません。

これはまさに、イエス様と最も近い関係を経験した使徒ヨハネが書いたことです。

愛には恐れはありません。しかし、完全な愛は恐れを打ち消します。しかし、恐れを抱く者は、愛のうちに完全なものとされていないのです。私たちが彼を愛するのは、彼が最初に私たちを愛してくださったからです（1ヨハネ4:18,19）。

神は完全な愛です。神の完全な愛には恐れはありません。恐れは"苦悩"を伴うヨハネは何を意味していたのでしょうか？

ギリシャ語で「苦しめる」はkólasis。

懲らしめ、罰、苦しめ、おそらく剥奪の考えを含んでいる」(Strong's Concordance)とあります。Kólasis は kolaphos-"a buffeting, a blow-適切には、罰を受けた者に"フィットする"（マッチする）罰（R. Trench）から来ています；自分の義務を怠っていることから来る審判の恐怖の中で生きていることによる苦悩（HELPS Word-Studies）。

恐怖は暴力や罰に対する反応です。罰は痛みへの期待を引き出すので、それは「苦悩」を伴います。私たちは、罰が他人によって、また私たちによって毎日使われるシステムの中に住んでいます。世界全体が何らかの形で罰に関わっています。私たちの多くは、ポジティブなことが起こるためには、ネガティブなインプットが必要だと信じています。そして、多くの人は、神がそれに大きく依存していると信じています。私たちはあえてこのパラダイムを疑ってみましょうか？

罰は罪に見合ったものでなければならないという考えは、サタンの善悪の法則の中心となっています。サタンは様々な手段を使って、人類の歴史の中でこの法則を売り込んできました。インドではこれはカルマと呼ばれ、アジア諸国では陰陽師やタオと呼ばれています。西洋世界では、サタンの道徳律の2つの主要な普及者は、フリーメーソンとローマ・カトリック教会であったが、彼らは決してこの道徳律の唯一の推進者ではない。蛇は「全世界を欺く」（黙示録12：9）。善悪の道徳律法の最新版には、「社会的正義」という非常に良心的で魅力的なタイトルが付けられています。この運動を始めたのは、ローマ・カトリック教会のイエズス会教団の創始者であるイグナチオス・デ・ロヨラです。

しかし、私たちはもう騙される必要はありません。もし何かに暴力が含まれているとすれば、それは神のものではないことがわかります。もし何かが恐怖を引き起こしたり、恐怖をコントロールするための道具として使うならば、それは神のものではないことを知ることができます。

ヨハネは言った "愛には恐れはない""完全な愛は恐れを打ち消す"ヨハネはこの章の最初の方で、「愛を持たない者は神を知らない。これらの箇所から、私たちは何を推測することができるでしょうか？

神が完全な愛であることを疑う人はいないでしょう。ここで私たちは恐れと完全な愛が混ざらないことを学びます。事実、「完全な愛は恐れを打ち消す」のです。これは、もし私たちが神に恐れを抱いているならば、私たちは神と神の完全な愛を本当に知らないということを意味しています。これはまた、神の完全な愛を知るようになれば、恐れは私たちの中から追い出され、もはや神を恐れることはないということを意味しています。

ヨハネはここで深遠な発言をしています。彼は本質的に、私たちが神を恐れるようなことは神の中には何もないと言っています。もし私たちが神を恐れるとしたら、それは神が恐れているからではなく、私たちが神を誤解し、誤った判断をしているからです。この聖句によると、もし私たちが神を恐れて神に応答することができるものが神の中にあるとしたら、神は完全なアガペの愛ではなくなってしまうでしょう。

私たちはどのような壮大な結論に達するのでしょうか？もし愛に恐れがなく、恐れが罰によって引き起こされるならば、完全な愛である神は、実際には、罰を与えることはありません。そうです。恐れに満ちた反応は、単にアガペの愛と互換性がありません。もし神との関係に恐れがあったとしたら、私たちが完全な愛になることは不可能でしょう。

ヨハネはまた、「私たちが神を愛するのは、神が最初に私たちを愛してくださったからです」（第一ヨハネ4:19）とも述べています。もし神が最初にアガペの愛を示されなかったら、私たちは神に愛で応えることができたでしょうか？いいえ、なぜでしょうか？神の愛を知らなければ、私たちはいつも恐れの中で神に応答することになるでしょう。もし神がアガペの愛を示されなかったら、私たちは真の無条件の愛とは何かを知ることはできなかったでしょう。

人間の愛は気まぐれで変化しやすいものであることを知っています。ですから、神はまず私たちにご自分の愛を示して、私たちが二つの違いを知ることができるようにしなければなりませんでした。パウロがこのことをどのように説明しているか注目してください。

> **私**たちがまだ力を失っていた時に、キリストは不敬虔な者のために死んでくださったのです。正しい人のために人が死ぬことはほとんどありませんが、善良な人のためには死ぬ勇気があるかもしれません。**しかし、神は、私たちがまだ罪人であったときに、キリストが私たちのために死んでくださったという点で、私たちに対する神ご自身の愛を示してくださいました**（ローマ5:6-8、強調しています）。

"私たちがまだ力を失っていたとき"-善悪の道徳律法によって弱くなっていたとき（私たちは「国を弱くした」神によって弱くされた）、キリストは「不義な者」である私たちのために死んでくださいました（「不義な者」は神と違っています）。ここには、神が功利主義で行動していたのではないことがわかります。神はふさわしくない者、つまり不徳な者のために死なれ、私たちの功徳は関係ありませんでした。

しかし、パウロはこの点についてさらに詳しく述べています。"正しい人のために人が死ぬことはほとんどないが、善良な人のためには死ぬ勇気があるかもしれない"利己的で条件付きの善悪のシステムでは、自分が正しいかどうかに関わらず、他人のために自分の命を捧げる勇気を持つ人はほとんどいません。しかし、おそらく私たちは、私たちの愛に値する、私たちに良いことをしてくれた人のために自分の命を捧げる勇気があるでしょう。価値のない人のために、ましてや「神にふさわしくない」悪人のために命を捧げることはないでしょう。

"しかし、神はご自身の愛を私たちに示しています。" "神は私たちに対して絶対的で無条件の愛を示しています。どのようにして？神はどのようにしてわたしたちのために絶対的な無条件の愛を示しておられるのでしょうか。私たちは神の愛に値しませんでした。しかし、神は私たちを愛し、私たちのためにご自分の命を捧げてくださいました。私たちのために神の愛を証明するのに、これ以上のものが必要でしょうか？

イエス・キリストを通して神が私たちに注がれた愛を見れば、私たちの心の中から罰への恐れの痕跡はすべて取り除かれるはずです。神からの罰はなく、神のアガペの愛を知ることによって、それだけで私たちの恐れを取り除くことができるのです。

恐怖についてもう少し詳しく分析してみましょう。恐怖とは、差し迫った悪い経験が起きようとしているという信念によって引き起こされる苦痛な感情である。恐怖は私たちの心と体にパニックを引き起こし、私たちをあらゆる種類の絶望的な、さらには非合理的な行動に従事させます。

感情であることに加えて、恐怖は強力なモチベーターとしても機能します。私たちはこれまでに何度、単に恐怖心から行動に移されたことがあるでしょうか？その回数は数え切れません。人間は誰もが子供の頃から恐怖に直面しており、恐怖は私たちを不安にさせ、安全ではないと感じさせてきました。

ヨハネは「完全な愛は恐れを打ち消す」と言っていますが、これが意味するのは、神の国には恐れが存在しないということです。サタンのシステムは恐怖をもたらしましたが、神のアガペの愛を示すことによって、神は私たちの恐怖を取り除き、愛、保証、安心、安全に代えてくださいました。

アダムとエバが善悪の知識の木の実を食べた直後、恐怖が地上に現れました。その木の実が、罰を恐れて神を恐れるようになりました。恐怖のために、彼らは神から隠れてしまいました。神は罰を与えに来たのではありませんでした。しかし、彼らの心にはサタンの道徳律法が染みついていて、恐れは神の愛を覆い隠していました。

それ以来、神は神から逃げ惑う種族を相手にしてきたが、神は彼らの友情だけを求めている。放蕩息子の父は、地平線に息子が現れるのを期待して、毎日道を見ていました。遠くに放蕩息子の姿を見た瞬間、彼はその子のもとに駆け寄りましたが、彼の頭の中には非難や罰のことなど一度も思い浮かびませんでした。

愛情をもってすべてのものを与えてくださった創造主である神は、そのような恐怖を呼び起こすほどの怪物なのでしょうか？イエスの御父の啓示は、そのような恐怖を助長したのでしょうか？答えはノーです。問題は神ではなく、神に対する私たちの見方にあるのです。実際、私たちは聖書の至る所で、天の存在が人間と交信する時、彼らが最初に言うのは「恐れるな」「恐れるな」「恐れるな」という言葉であることに気づいています。神は私たちに連絡を取ろうとされていますが、まず私たちが神のもとに来て命を受け入れるように、私たちの恐れを取り除かなければなりません。

そう言ったところで、次の節は誰のことを言っていると思いますか？神なのか、それともサタンなのか？

> また、肉体を殺しても魂を殺すことができない者を恐れてはならない。むしろ、地獄で魂も肉体も滅ぼすことができる方を恐れてはいけません（マタイ10:28）。

肉体は殺しても魂は殺せない」人は人間ですよね。人間には魂を滅ぼす力はありません。しかし、私たちを欺き、魂も肉体も永遠に破壊することができるのは誰なのでしょうか？もちろん、それはサタンですが、神が私たちの側におられる時、私たちはサタンを恐れる必要があるのでしょうか？この箇所の次の言葉を見てください。

二羽の雀は銅貨で売られているのではないか？父上の御心から離れて 地面に落ちることはありませんしかし、あなたの頭の毛にはすべて番号が付けられている。だから恐れてはならない。あなたがたは多くの雀よりも価値があるのだ（マタイ10:29-31）。

ある人はこの一節全体を読んで、私たちが恐れるべきは神であり、「地獄で魂と体の両方を破壊することができるのは神だ」と主張します。しかし、文脈を見ると、イエスは全く逆のことを言っているのです。なぜなら、私たちは「多くのスズメよりも価値のある存在」であり、創造主によって一羽一羽が個別に注意を払われているからです。もし神が下等な生命体であるスズメに愛情を持って関心を持っておられるならば、私たちはどうでしょうか？私たちは神様にとって、多くのスズメを合わせたものよりもずっと価値のある存在なのです。

完全な愛を理解していない人たちは、私たちを永遠の滅びの地に連れて行くことを躊躇しないからです。サタンは自分の嘘によって、地獄で魂と体の両方を破壊することができ、私たちが神についての欺瞞にしがみついていれば、そうすることができます。

イエスがロバの上に座ってエルサレムに入ったとき、ヨハネは預言者ゼカリヤが与えたその出来事の預言を引用しました。

それから、イエスは若いロバを見つけて、ロバの上に座られた。"見よ、あなたがたの王が来て、ロバの子馬の上に座っている」（ヨハネ12:14-15）。

ゼカリヤに戻ると、元の預言には全く違うことが書かれていることがわかります。

ザイオンの娘よ 歓喜せよ！エルサレムの娘よ、叫べ。見よ、あなたがたの王があなたがたのところに来ている。彼は正義であり、救いを持っていて、卑しく、ロバの子馬に乗っている（ゼカリヤ9:9）。

なぜヨハネは「大いに喜ぶ」という言葉を取り出し、「恐れない」という言葉を挿入したのでしょうか？"大きく喜ぶ"という言葉は、"大きく恐れるのではなく、大きく喜ぶ"という意味だと解釈したのでしょうか？

神はイエスのお姿で地上に来られ、そのメッセージははっきりと次のようなものでした：「神が来られた。神は罰ではなく、救いをもたらしてくださるのです。主は卑しく、へりくだっていて、ロバの子馬である子馬にも乗っています。

動物でさえ彼を信頼している。動物たちは彼を恐れる理由があっても、彼に近寄らないだろう。動物たちはそれを理解している。私たちはいつになるのでしょうか？恐怖の王国はイザヤ書14章に書かれています。

主があなたがた**の悲しみと恐れ**と、あなたがたが仕えるために作られた厳しい束縛**からあなたがた**に**休息を**与えられる日に、あなたがたはバビロンの王に対してこのことわざを取り上げて言うだろう。"何と抑圧者が止まり、黄金の都が止まったことか！主はバビロンの王の杖を折られた。主は邪悪な者の杖、支配者の笏を折られた。怒りに満ちて民を打ち続けた者、怒りに満ちて諸国を支配した者は、迫害され、誰も妨げない。全地は安らかに静まり，彼らは歌い出す。ヒノキの木はあなたのことを喜び，レバノンの杉は『あなたが切り倒されて以来，誰も私たちに立ち向かってこなかった』と言っている。イザヤ14:3-8、強調）。

バビロンの王」とは誰なのか？地の民を圧迫し、絶え間ない怒りと怒りの笏で彼らを支配しているのは誰なのでしょうか？その答えは、数節下の12節に与えられています。

ルシファーよ、朝の子よ、あなたは何と天から落ちているのか！あなたは何と地に切り倒されたのでしょうか。あなたがたは心の中で言った。『わたしは天に昇り、神の星々の上に自分の玉座を高く掲げ、また北の最も遠い側にある会衆の山の上に座り、雲の高みの上に昇り、最高の高みの者のようになる』。しかし、あなたがたは、シェオール［墓］に連れてこられ、穴の最も低い深さに落ちていく（イザヤ14:12-15、強調しています）。

神のアガペー愛の法則を覆そうとするルシファーの壮大な計画は、何も起こらないでしょう。神の愛の法則は、平和と共存と生命のための唯一の答えです。ルシファーはシェオール（墓場）に落とされます。彼の暴力のシステムそのものが、彼と彼に従うことを選ぶ者を殺すだろう。

恐怖を利用して私たちを善い行動に動機づける暴力の王国が崩壊し、終焉を迎えようとしているため、恐怖のない未来がすぐに訪れます。そうすれば、もう恐れはなくなります。

しかし、すべての人は、そのぶどうの木の下、いちじくの木の下に座り、**誰も彼らを恐れさせてはならない**。

私たちを怖がらせる者がいなくなる時が来る。これは、善悪の道徳律がなくなり、サタンがいなくなるので、罰がなくなることを意味しています。

もし神が今、罰を使ったならば、神は永遠に罰を使い続けなければなりません。そして、もし神が永遠に罰を使うならば、恐怖も永遠に存在するでしょう。しかし、ありがたいことに、神は秩序を達成するために、そのような卑劣で残酷な手段に頼ることはありません。上記の節の前にある節を見てみましょう。

後世になって、主の家の山が山の上に建てられ、丘の上にそびえ立ち、民がそこに流れ込むようになる。多くの国々が来て言った、「来て、主**の**山、ヤコブの神の家に上がろう。シオンから律法が出て、エルサレムから主の言葉が出てくるからである。主は多くの民の間をさばき、遠く離れた強国を叱責し、その剣を鍬**に、その槍を剪定用の鉤に打ち、国は国に対して剣を振りかざしてはならず、また戦争を習ってもならない。**しかし、すべての人は自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下に座り、**誰も彼らを恐れさせてはならない**。

最後の時代、私たちの時代に、「王国」の象徴である神の山が、ついにルシファーの王国の上にそびえ立つというのは、何と興味深いことでしょうか!ルシファーは六千年間支配してきましたが、私たちは彼の怒りの支配は神から来ていると思っていました!しかし、最後の日には「神の王国」が成立します。これは、まだ確立されていないことを意味しています。つまり、過去６千年間の支配は、神ではなく、サタンの王国から始まったということです。サタンには通れない境界線がありましたが、今まではこの世界の神であったのです。

人々は神のもとに行き、神の道、神の道、神の律法を学ぶのです。アガペの愛の律法は、神の都シオンから、そして平和の都エルサレムから、「主の言葉」が出てきます。神は、アガペの愛をもって、私たちを義として裁いてくださいます。神は私たちをあわれみ、神の愛は私たちをいやしてくださいます。

私たちが主の道，主の道，主の律法を学ぶときに何が起こるかにも注目してください。暴力と死のために使われる道具を，平和と生命の道具に変えてしまうのです。鋤や剪定用の鉤は，生命を育てるための園芸用の道具であって，生命を破壊するための道具ではありません。"国家は国家に対して剣を振りかざしてはならない。" "彼らはもう戦争を学ぶことはない。"なぜですか？私たちは主の道を学んだからです。主の道を学んだのです。主の愛の法則を！私たちは何の恐れもなく 木の下に座っています 誰かが来て 私たちの家と私たちを破壊することを恐れずになんて良いニュースなんだ！

この詩が世界の平和のない地域社会にどのように語りかけるのか想像できますか？真夜中に家が砲撃されている地域社会を？この聖句が本当に私たちに伝えているのは、ルシファーは、私たちの中に恐怖をもたらした彼の暴力のシステムとともに消えてしまうということです。

この次の節を見てください、ゼパニヤからです。

イスラエルの残党は、不義を行ってはならず、嘘を語ってはならず、また、その口には偽りの舌があってはならず、彼らは群れを養い、横たわっていなければならず、**誰も彼らを恐れさせない**（ゼパニヤ3:13、強調）。

イスラエルの残党」とは何者なのでしょうか？それは、「不義を行わない」人たち、つまり咎を犯さない人たちのことです。彼らは神についてこれ以上の嘘を言わず、「欺瞞に満ちた言葉を吐かない」人たちです。彼らは神の真の愛の姿を見て、神が神の姿、すなわち「あがめの愛」に造り変えてくださるのです。このような人々は、誰にも恐れさせられない愛の王国に住むことになります。

完全な愛はすべての恐れを追い出すでしょう。私たちは、神が罰の脅しによって誰かを強制的に従わせるような仕事をしているわけではないことを知るでしょう。しかし、このようなことは、私たちにとってあまりにも異質なことだと言うかもしれません。私たちが知っているのはこの罰のシステムだけなのに、どうやって理解することができるのでしょうか。確かに、私たちはどのようにして神の方法を知ることができるのでしょうか。

神はこの問題に一つの解決策を持っています。神は私たちにイエス・キリストを遣わされました。彼を見ることで、私たちは神の方法を学ぶことができます。

ザカリアスの息子の誕生（バプテスマのヨハネ）を機にした預言では、イエス・キリストが私たちが束縛されてきた恐怖から私たちを解放してくださると言っています。

"イスラエルの主なる神は祝福されている。
主はご自分の民を訪問し、贖われたからです。
そして、私たちのために救いの角を上げてくださいました。
主のしもべダビデの家で
聖なる預言者たちの口で語られたように
世界が始まって以来、誰が
私たちが敵から救われるように
私たちを憎む者たちの手からも
先祖に約束された慈悲を実行するために
そして、主の聖なる契約を思い出すために。
父アブラハムに誓った誓いだ
私たちに許可を与えるために
敵の手から解放される
恐れずに彼に仕えることができます。
私たちの人生のすべての日、主の前の聖さと義のうちに」（ルカ1:68-75）。

そして、自分の息子について、ザカリアスは言う。

"そして、あなたは、子供よ、最高の預言者と呼ばれるだろう。
あなたがたは主の御顔の前に出て、主の道を準備するために行くのです。
主の民に救いの知識を与えるために
罪の赦しによって
私たちの神の優しい慈悲によって
高みから来たデイズスプリングが訪れた。
闇の中に座る者に光を与え、死の影を
私たちの足を平和の道に導くために」（ルカ1:76-79、強調）。

バプテスマのヨハネは、愛の神の真の啓示を私たちに与えてくださる神を受け取るために、人々（すべての人々）を準備することによって、主の「道」を「準備」しました。バプテスマのヨハネは彼らに「救いの知識」を与え、自分たちの罪が「私たちの神の優しいあわれみによって」常に赦されていることを見られるようにしてくださいます。これは、「暗闇と死の影の中にいる人々」、つまり善悪の知識の木の影の下に座っている人々に与えられる光なのです。

イエス様は、ご自分の道を達成するために、何らかの方法で罰を用いられたのでしょうか？恐れを使ったことはあったのでしょうか？答えは、イエス様がそのようなことをしているのを見たことは一度もありません。しかし、神殿の清めについてはどうでしょうか？イエスはそこで恐れを使われなかったのでしょうか？

イエスはテーブルを投げつけたのではなく、ただひっくり返しただけでした。これは暴力的な行為ではなく、象徴的な行為でした。両替商のテーブルをひっくり返すことによって、イエスは両替商の神の性格に対する彼らの誤った概念をひっくり返しました。

つまり、神が私たちを赦す前に動物のいけにえを要求したということです。イエス様は、彼らの伝統や儀式を動揺させたのです。自制心は聖霊の実であり、イエス様の御霊ですから、イエス様は自制心を持っていたに違いありません。激怒している人の行動は違っていますが、イエス様は決して暴れていませんでした。イエス様が神殿を清められた時、誰かを鞭打ったり、怒ってテーブルを投げつけたりはしませんでした。テーブルをひっくり返すことによって、イエスは神殿の伝統をひっくり返したのです。

もしイエスが神殿の浄化で恐怖を使っていたら、子供たちは真っ先にその場から逃げ出していたでしょう。恐れていた人々は、暴力と恐れのパラダイムから来ていたのです。同じことが再臨の時にも起こります。一つは、イエス様を死ぬほど恐れ、自分たちの上に山が降ってくるようにお願いしているグループです。

> そして、地の王たち、偉い人たち、富める人たち、指揮官、強大な人たち、奴隷と自由な人たちは、洞窟と山の岩の中に身を隠して、山と岩に向かって言った、「私たちの上に倒れて、玉座に座る神の顔と小羊の怒りから私たちを隠してください」（黙示録6:15-16）。

神はイエス様を象徴するために、最も平和で非暴力的な動物を選ばれました。子羊はどれほど怒りに満ちているのでしょうか？このグループが感じている恐怖は、子羊が原因ではありません。彼らは、神が報いと罰を与えると信じていて、神が罰を与えに来ると思い込んでいます。神を知る者は、イエス様の姿を見て大喜びします。

> その日のうちに言われるであろう。"見よ、これがわたしたちの神であり、わたしたちは彼を待ち望んでいた。見よ、これが私たちの神であり、私たちは彼を待ち望んでいた。

テサロニケ2章でパウロは、神の愛についてのイエス・キリストの証しを信じたからこそ、彼らはイエス・キリストを「慕う」ことになると言っています。

> これらの者たち［神を知らず、イエス・キリストの御言葉に従わない者］は、その日に主が来られて、主の聖徒たちの中で栄光を受け、信じる者すべての中で称賛されるために、主の御前からも、主の力の栄光からも、永遠の滅びの罰を受ける。

神は私たちの神に対する間違った認識を変えることができるのでしょうか。それは御子イエス・キリストを通してです。もし私たちが御子の証を信じなければ、神が御自分の資源から引き出せるものは何もありません。イエスは究極の啓示であり、最終的な真理であり、真の証人であり、神の人格に関する完全な権威なのです。

21

あかりがあるように

ヘブライ語聖書の最初の数節には、多くの考察と研究に値する比喩が示されています。創世記1章1節から5節にはこう書かれています。

> 初めに神は天と地を創造された。地は形がなく、空虚で、深淵の顔には暗闇があった。そして、神の霊が水の顔の上に浮かんでいた。そこで神は「光があるように」と言われ、光があった。神はその光が良いものであることを見て、神は光を暗闇から分けられた。神は光を昼と呼び、闇を夜と呼んだ。だから、夕方と朝が第一日目であった（創世記1:1-5、強調）。

光と闇の比喩である「昼と夜」が、聖書の中で私たちに最初に提示されたテーマであることは非常に重要です。この冒頭の言葉は、地球の創造だけでなく、神とサタンとの間の大きな論争の壮大なテーマをも明らかにしています。光と闇は、共通の敵の欺瞞によって私たちの目から隠されていた真実を見るのを助けるために、神によって選ばれた比喩です。これまで見てきたように、これらの欺瞞は主に神の性格に関係していました。

新約聖書の次の節でも、この二つの言葉が同じように使われていることに注目してください。

> **それは、暗闇から光を輝かせるように命じられた神が、イエス・キリストの顔にある神の栄光の知識の光を**与えるために、私たちの心の中で光を放ってくださったからです（第二コリント4:6、強調追加）。

この節でパウロは、創世記1章3節に直接言及しています。神は天地創造の最初の日に、「光があるように」と言われた時に、「暗闇の中から光を放つように」と命じられました。"暗闇から光を放つ」ということは、暗闇がすでに存在していたことを意味し、暗闇はサタンを表しているので（「神は光であり、その中には全く暗闇がない」、ヨハネ1:5）、サタンがすでに神と神の律法に反抗していたことを意味しています。地の創造におけるサタンの存在は、上記の５節で「暗闇」という言葉を通して明らかにされています。彼はすでに善悪の律法によって積極的に活動しており、宇宙全体に神に関する混乱を広げていたのです。

2コリント人への手紙4:6によると、神が暗闇から照らすように命じられた光とは何だったのでしょうか？それは「**イエス・キリストの顔にある神の栄光を知る光**」でした。これは、天地創造の最初の日に、イエス様が「彼（神）によって世界を造られた方（ヘブル1:2）」が、宇宙と未来の人類に「神の栄光を知る光」を啓示されたことを意味します。神が暗闇から照らすように命じられた光（暗闇とは、神の人格に対するサタンの非難であった）は、地球創造のプロセスそのものであり、地球創造そのものが"神の栄光の知識の光"であったのです。これは何を意味しているのでしょうか。

聖書は、イエス様が御父と共に創造主であることを明らかにしたのは、地球の創造そのものであったことを示しています。宇宙の知的な存在は、御父が創造主であることは知っていましたが、イエス様が創造主であることは知りませんでした。誰もイエスが創造主であることを知らなかったからこそ、イエスを創造主として明らかにするという行為が必要になったのです。これはどうしてでしょうか。

読者が思い起こせば、天国での戦争はミカエルとドラゴンの間にあった。

> そして、天で戦争が起こった。ミ**カエルとその天使たちは竜と戦い、**竜とその天使たちは戦ったが、彼らは勝てず、もはや天に彼らの居場所はなかった。それで、大蛇が追い出された。その大蛇とは、悪魔とサタンと呼ばれる昔からの蛇で、全世界を欺く者である。その時、私は天で大きな声で言うのを聞いた、「今、救い（十字架）と力と、力と、わたしたちの神の国と、神のキリストの力が来た。そして、彼らは**小羊の血**と証しの言葉によって彼に打ち勝ち、自分の命を死ぬまで愛さなかった。それゆえ天よ，天とその中に住むあなたがたよ，喜べ。地と海の住人に災いあれ。悪魔があなたがたのところに降りてきて、大きな怒りを持っているからだ。

マイケルとは何者か？この箇所は、ミカエルが誰であったかを明らかにしています。彼は神の「キリスト」であり、「小羊」であり、ご自身の血、つまり「小羊の血」によって神の真の人格を明らかにすることによって、「告発者」の嘘を打ち破り、破壊した方でした。

> 子供たち（人間）が肉と血を受けたので、ご自身（羊、キリスト）も同じように、**死（十字架）を通して、死の力を持つ者、すなわち悪魔を滅ぼされたのです**（ヘブル2:14、強調しています）。

天国では，ミカエルとルシファーが，覆いかぶさるようにして隣り合わせに立っていました。ミカエルは神であり、ミカエルという言葉は「神のような者は誰か」という意味ですが、ミカエルが人間になったときに地上で行ったように、被造物の形をしていました。

天国での戦争は、2つのカバーリング・ケルブ、2つの保護者、律法の守護者の間で争われました。そのうちの一人は律法に反旗を翻し、律法を変えようとしていました。神の子ミカエルは、ルシファーが提案した変更には従わなかった。ミカエルは「義を愛し、不義を憎んだ」のです。彼は、真の律法を司る者である彼を知っていました。彼と父が永遠であるように、彼の律法も永遠であることを。

ルシファーの中に不義があった後、時が来て、神がキリストの正体を明らかにするために、天のすべての天使たちを集めて、御父ご自身が発表されました。

宇宙の王は天の万軍を御前に召喚されました。彼らの前で御子の真の位置を明らかにし、すべての被造物との関係を示されました。神の子は父の玉座を共有し、永遠に存在する自己存在の方の栄光が両方を取り囲んでいました。神の御座の周りには聖なる天使たちが集まっていました。その数は膨大な数ではありませんが、「一万倍の一万人、何千人、何千人」（黙示録5:11）で、最も高貴な天使たちが大臣として、また臣下として、神の臨在から降り注ぐ光を喜んでいました。**天国の住民が**集まってくる前に、**王は、神のひとり子であるキリスト以外には、神の目的に完全に入ることができないと宣言し、神の意志の強大な計画を実行することを神に委ねられたのです。神の子は、天の万軍の創造において父の御心を実現したのであり、神への敬意と忠誠は、神へのものであるのと同様に、キリストへのものであった。キリストは、地とその住人の創造において、まだ神の力を行使することになっていました。**しかし、このすべてのことにおいて、キリストは神の計画に反して自分のために力や高揚を求めるのではなく、御父の栄光を高揚させ、恩と愛の目的を実行するのです{PP 36.2, emphasis added}。

"宇宙の王"である父はすべての天使を召喚した　"彼らの前で御子であるミカエルの真の位置を示すために"彼らは彼を自分たちの一人、天使、覆いのあるケルブとして知っていた。今、彼らは初めて彼の正体を見て、地球の創造は神の発表を確認することになりました。このようにして御父は言われました。

天使たちの誰に向かって言ったのか。
"あなたは私の息子だ
今日、私はあなたを産んだ」？
そして、もう一度。
"私は彼の父となる
彼は私の子となる」？
しかし、再び長子をこの世に連れて来られたときに、主は言われます。
"神のすべての天使が彼を崇拝するように"
天使たちは言う。
"天使を霊にする者
彼の大臣たちは火の炎である。"
しかし、御子にはこう言われます。
"神よ、あなたの玉座は永遠に永遠にあります。
義の笏は、あなたの王国の笏です。
あなたは義を愛し、無法を憎んできた。
ｲﾆｰｸｲｱｲﾃﾑ]。
それゆえ、あなたがたの神は、あなたがたに油を注がれた。
"あなたの仲間よりも喜びの油で"
と。
"主よ、あなたは初めに地の基礎を築きました。
天はあなたの手の業である。
彼らは滅びるが，あなたは残る。

そして皆、衣服のように老いていくのです。
マントのように、あなたはそれらを折り畳むでしょう。
そして、彼らを変えていくのです。
しかし、あなたは同じです。
"あなたの年は失敗しない"
しかし、どの天使に向かって言われたことがあるのか。
"私の右手に座れ
私があなたの敵をあなたの足台にするまで」（ヘブル1:5-13、強調）？

なぜ神は御子と天使を区別しているのでしょうか？神はこの発表の前に御子の真の位置を明らかにされていませんでした。どうしてそんなことが可能なのでしょうか？

聖書によると、イエス様が創造された時、イエス様が話され、物事が生まれました。

信仰によって、**世界は神の言葉によって組み立てられたものであり、目に見えるもの**は目**に見えるもの**で作られたものではないことを理解しています（ヘブル11：3、強調）。

"世界は神の言葉によって枠にはめられた"　"目に見えるものは目に見えるものから作られたのではない"このことは、地球が創造される前のキリストの創造過程が目に見えないものであったことを示唆しています。もしかすると、宇宙は御子によって、御子によって作られたことを誰も知らないように作られたと言うこともできるかもしれません。

サタンが神の人格に異議を唱え、中傷した後は、神が御子の本性を明らかにすることが最も必要となりました（地球の救済のためだけでなく、全宇宙の救済のためにも）。なぜでしょうか。それは、御子が詐欺師の嘘を暴き、父なる神の純粋なアガペー愛を明らかにすることができる唯一の方だったからです。イエス様の信任状が明らかにされ、その権威が確立されなければなりません。真実は、神がこの宇宙戦争で使用された唯一の武器でした。

聖書は様々な場所でキリストの真の位置を明らかにしています。

すべての聖徒の中で最も少ない者である私に、この恵みが与えられたのは、異邦人の間でキリストの探り知れない豊かさを宣べ伝え、神秘の交わりとは何かをすべて**の**人に見てもらうためです（エペソ3:8-9、強調）。

…天にあるものも地にあるものも、目に見えるものも目に見えないものも、王座も支配者も支配者も権力も、すべて彼**によって創造されたからです。すべてのものは、彼を通して、彼のために創造されたのです**（コロサイ1:16、強調）。

サタンは神についての嘘を広めていたので、神は真理と光を与えるように命じられ、御子を通してそれを実行されました。

神は、過去に様々な時代に、様々な方法で、預言者たちによって先祖たちに語られましたが、この**末に、**万物の後継者に任命された**御子によって、私たちに語られ、御子**を通して世界を造られました。御子は、御自分の栄光の輝きであり、御自身の姿を現し、御自身の力の言葉によってすべてのものを支えておられ、御自身が私たちの罪を清められたときに、高みにある陛下の右手に座られ、御自身が相続によって彼らよりも優れた名を得られたように、天使たちよりもはるかに優れた者となられました（ヘブル1.ヘブル1:1-4、強調追加）。)

神は御子イエス・キリストを通して「世界を創られた」のです。御子は"御自分の姿を現したもの"でありそして、御子は「御自分の力の言葉によってすべてのものを支えておられる」のです。イエスは「ご自分の力の言葉」によって、「そこに…」を創造されたのです。

聖書の最初に与えられたこの最初の証拠は、キリストが誰であるか、キリストの真の位置は何であるかを明らかにしています。しかし、この証拠はまた、キリストが「父の現われた姿」であるからこそ、神が誰であるか、すなわち神の性格をも明らかにしています。1　節では、父と子の両方の人格がどのように明らかにされているのでしょうか？

"初めに、神は天と地を創造されました。御父は、創造のすべての仕事を実行する責任を負った御子を通して、これを行いました。創世記１章１節で、御子はご自身が創造主であることを明らかにしています。イエス様は創造主であり、これは光であり、「光の父であり、変わることも影で回ることもない」、ジェームズ 1:17 であることを示す真理です。イエスは「光の父」です。これが意味するのは、イエス様は御父が誰であるかについての究極の光であるということです。イエスは光であり、「道であり、真理であり、いのちである」（ヨハネ 14:6）。

"わたしは世の光である。わたしに従う者は、暗闇の中を歩むのではなく、いのちの光を持つ」（ヨハネ8:12、強調）。

創世記1章2節では、暗闇が生じていますが、これは創造主の仕業ではありません。闇は死と破壊であり、破壊者の仕業です。しかし、神は光であり、いのちを与える者です。この「光」は3節で再び語られています。"光があって、光があった。

太陽が後から創られたとすると、神は最初の日にどのような光を創られたのでしょうか、四日目に創られたのでしょうか。3節で言及されている「光」はどれでしょうか。この光は神から直接出ているとしか考えられず、また、この光は今日私たちが目で見ることができる光ではないので、創造の残りの部分を見るように（私たちは太陽からの光を見るように、文字通りの意味で今日見ることはありません）、この光は比喩的なものである可能性があります。

もしこれが真実ならば、神が初日に創造した光は次のようなものだったことになります。これは宇宙が今まで自分たちの目で見たことのない光であり、創造主が働いている姿でした。

世界が創造されて以来、彼の目に見えない属性ははっきりと見られ、造られたものによって理解され、彼の永遠の力と神の頭でさえも理解されているからです（ローマ1:20）。

宇宙も天使も知的存在である「星」も「神の子」も、地球を創造する過程で御子である神を見て歓喜の声を上げたと言われています。

"「...相談を暗くする者は誰だ」
知識のない言葉で？
男としての準備をしろ
私はあなたがたに質問し、あなたがたは私に答えなければならない。
"私が地球の基礎を築いた時、あなたはどこにいましたか？
理解があるなら教えてくれ
誰がその測定値を決定したのか？
知っているはずだ
それとも誰がその上に線を伸ばしたのか？
その基礎は何に固定されていたのでしょうか？
または、その礎を築いた人。
朝の星が一緒に歌った時
そして、神の子らは皆、喜びのために叫んだか。"(ヨブ記38:2-7、強調追加)？

先ほど、聖書がイエスを「建設者たちが拒んだ礎石」と呼んでいることを見ましたが、「石」という言葉の意味と、神の国を建てるという文脈での意味を見ました。ここでは、ヨブ記38:6と創世記1にこの「礎石」が敷かれています。初めに、神の子らが喜びの声を上げたのは、イエスが比喩的な礎石を創造されるのを見たからでした。創造することによって、イエスは神についての私たちの理解の基礎となる礎石を敷かれたのです。イエスは、神を知るための「建物」全体を建てるための土台を築いておられたのです。神は全宇宙に神が創造主であることを示されたのです。そして，神がそうされたとき，宇宙は畏敬の念に立ち，「一緒に歌い」，「喜びのために叫んだ」のです。それはなんというコーラスだったに違いない！いつか私たちも彼らの歌声を聞くだろう。それは何と嬉しいことだろう！私たちは彼らと一緒に創造主の賛美を歌うのだ！

聖書の「光」という言葉の痕跡をたどっていくと、サタンの偽りの告発のすべてから、神を免罪するために必要な証拠をすべて見つけることができます。これは、「神は光である」という弁護のための第一証拠です。聖書では「光」という言葉が比喩的に使われていますが、これは常に神を指して使われていることに異論を唱える人はいないでしょう。この比喩の多くの使用は、その複雑さに追いつくのが難しいほど複雑な情報網を作り出しています。

詩篇は創造主について宣言しています。

あなたがいのちの泉であり、あなたの光の中に私たちは光を見るのです（詩篇36:9）。

主はあなたの義を光とし、あなたの正義を昼の光とする（詩篇37:6）。

この二つの節は、神の光が命、義、そして慈悲深い正義と複雑に結びついていることを教えています。神の光は神の義であり、神の義は神の正義であり、サタンの「正義」とは全く対照的なものです。

創世記１章２節には、すでに暗闇が働いていたことが書かれています。「地は形がなく、空虚であり、暗闇は深淵の顔にあった」。神が光であるならば、この闇は何なのでしょうか？この暗闇はサタンとその原理を表しているとしか思えません。そして、サタンの闇には、光と闇が混ざったような混乱した欺瞞的な二面性が含まれていることを常に心に留めておかなければなりません。実際、地球が「形のない」「空虚な」状態になる原因は、この混乱した二面性にあります。

創世記１章１節、２節、３節をどのように解釈すればよいのでしょうか？神は１節で地球を創造し、２節でサタンが地球を滅ぼしたのでしょうか？そして、神は３節で再び地球の再生を始めたのでしょうか？これは意味がありません。特に、２節の「形のない」と「空虚な」というヘブライ語の意味を見てみると、意味がわかりません。

これらの言葉は、この暗黒の時代の間、知的生命が存在していたことを暗示していますが、それはある時点で存在しなくなりました。冒頭の二つの節を論理的に考える唯一の方法は、この大論争の中で最も短く簡潔な預言史と考えることです。つまり、１節と２節は、地球の創造から千年紀、つまり７千年の歴史を要約しているのです。神が地球を創造されたのは１節ですが、７千年の間にサタンとその善悪のシステムが地球を滅ぼしたのは２節です。神は、サタンの善悪の知識が地球とその住民に何をするかを予言していたのです。

三節では、再び最初から始まります。まるで、神様が最初に全体像を与えてくださり、次にそれを分解して小さな部分を見るようにしてくださっているかのようです。その全体像とは、次のようなものです。神が地球を創造し、サタンが地球を滅ぼしたということです。

神が地球を創造された時、すでにサタンは天に反乱を起こしていました。神は純粋な光ですが、私たちの地球の歴史の初めには、すでにサタンを通して闇が存在していたのです。その証拠に、善悪の知識の木がエデンの園にあったのです。地は形がなく、空虚で、暗闇が深淵の顔の上にあった」（創世記１章２節）と書かれています。この地球の滅亡の過程は六千年かかります。七千年目には、地球は完全な究極の混沌の中に横たわっています。

使徒ペテロは言う。

> しかし、愛する者たちよ、この一つのことを忘れてはなりません。**主との一日は千年のようであり、千年は一日のようである**ということです」（第二ペテロ3:8、強調）。

天地創造の週は文字通りの週であるだけでなく，私たちの一週間のサイクルを得ることができるだけでなく，7,000年という象徴的で預言的な期間でもあります。創造の週の一日一日は人類の歴史の千年に相当します。この千年に一日の週の中で、神は大論争の中での地球の歴史を、簡単に言えば、私たちに啓示してくださいました。このように、文字通りの創造の週は、大論争の歴史を示す象徴的な週でもあります。

創造の週の各日の終わりには「だから夕べと朝は...」というフレーズがあります。"夕方と朝は夜と昼を表しています"　"闇と光を表していますこれは、6,000年に及ぶ大論争の間、サタンと神の原則、「覇権を争う二つの原則」が、この地上で互いに平行していたことを象徴しています。サタンの原理は闇があり、神の原理は光があります。

初日、神は光と闇を分けられ、ご自身が創造主であることを明らかにされました。それは、私たちがその後の千年の間に破壊が起こるのを見て、これが神の仕事だと思って混乱してはいけないということを示していたのです。神は「光と闇」を分けて、「光は昼」と呼び、闇は「夜」と呼ぶことで、命を与える御業と、命を破壊するサタンの御業を分けておられるのです。このことは、神様のお人柄を理解するための基礎、礎石を築くことになります。

2日目には、神は上の水と下の水を分けます-洪水は第2千年紀に起こりました（モーセが「神はそれが良いことを見た」と書かなかった唯一の日）。三日目には、乾いた土地が現れ、植物の生命体（下等生物）が湧き出てきます。土地、大地は、不安定な水とは対照的に、しっかりとした地面を意味しています。これは、アブラハムの子孫に与えられた神の真理の地上での上昇です。植物が地を覆うように、イスラエルは神の知識を広めていくことになり、イスラエルは第三千年紀に登場しました。イスラエルの神の性質に関する限られた知識は、義の太陽がまだ地上に来ていなかったので、植生によって象徴されています。

4日目、神は太陽と月と星を創造されました。これは義の太陽であるイエスを表しています。太陽の光を反射する月は初期の教会を表しています。これらの大いなる光は、真理は誤りから、生命の木は善悪の知識の木から、闇から光を分けています。

5日目、神は水の生き物と空の鳥を創造されます。これは初代教会と暗黒時代の始まりの時期です。興味深いのは、水の生き物と空中の鳥たちは、聖書の中でサタンとその天使、ヨナを飲み込んだ大きな魚（ヨナ1:17）、リヴァイアサン（ヨブ41:1）、ドラゴンと「すべての汚れた鳥」（黙示録18:2）を描写するために使用されているシンボルであるということです。

六日目の初めに私たちは読んでいます。

> 地はその種類に応じて、生き物を生み出そう。家畜も、地の這うものも、地の獣も、それぞれその種類に応じて」と言って、そうした。そして神は、地の獣をその種類に応じて、牛をその種類に応じて、地に這うものはすべてその種類に応じて造られた（創世記1:24-25）。

これはまた、サタンに関連した象徴です。ローマ人への手紙一章では、全く同じ象徴が使われています。

彼らは賢者を装って愚か者となり、堕落しない神の栄光を、堕落した人間のような像、鳥や四つ足の動物、這うようなものに変えてしまったのです（ローマ1:22-23）。

これらは異教の神々の象徴です。多くの古代の神々は、鳥（イシスやホルス）、四つ足の動物（バアル、オシリス）、忍び寄るもの（多数の蛇神）として崇拝されていました。六千年目は暗黒時代から始まり、ルネサンス、そして啓蒙の時代に入ります。忍び寄るもの（蛇）は、これらの異なる動きの背後にいたサタンのもう一つの象徴です。啓蒙の時代はエジプト、ギリシャおよびローマの古代神々からの教えで満ちています。彼らの教えは、善悪の知識の木の報酬と罰の教義に完全に基づいていました。この間、神の教会である生命の木は、荒野の地下にありました（黙示録12:6-14）。

そして、神は六日目の終わりに、ご自分の姿で人を造られました。これはまた、神の民が神の真の姿で封印されるのは、大論争の終わり（六千年の終わり）であることを象徴しています。六日目に神が忍び寄るものと人間の両方を創造されたという事実は重要です。これは、大論争の両極化、人類の分裂を表しています。地上の人々の分裂は、ヨハネの黙示録では、封印と獣のしるしによって説明されています。彼らの額には御父の印が押されています。無条件で公平なアガペー、慈悲深い愛という御父の性質があります。彼らはルシファーがかつて持っていたのと同じ印を持っています。

サタンの側にいる者は獣の印を受けます。サタンの民は、サタンの力と暴力の原則を選び、その性格がサタンの報酬と罰の道徳律法を反映しているという点で、獣の印を受けています。

7 日目は千年紀であり、創造の週の安息日です。昼も夜も休むことなく」（黙示録14:11）、サタンに味方した者たちもまた、千年の間、死の中で休んでいるのです。

この最後の「日」が始まる前に、六千年目の終わりに、イエス様が来られて、神様の無条件の恵みを受け入れた人たちをすべてご自分のもとに連れて行かれます。彼らは千年の間、地上が荒廃している間、イエスと共に君臨する（黙示録20:4）。これは広いストロークでまとめられた絵であり、聖書はこれらのテーマを別の場所でより詳細に展開しています。

創世記第一章二節の「あった」という言葉を少し調べてみると、このような結論が出てきます。この節では、「地は形がなく、空っぽであった」と書いてありますが、ヘブライ語の hâyâh-was-was は、「なった」という意味です。Hyââh は意味します。

存在する、つまり、ある、なる、成就する（ストロング辞典）。

この節をこう言い換えることができます"the earth became without form, and void" or "and it came to pass that the earth became without form, and void"と言い換えることができます。これは全く新しい理解の道を開きます。 地球が「形もなく、空っぽになった」ということは、どのようにして「起こるようになった」のでしょうか。形のない」と「空虚」という言葉を見てみると、どのようにしてできたのかがわかるでしょう。

"形のない"という意味だ

to lie waste; (表面の)荒廃、すなわち砂漠;比喩的には、無価値なもの;副詞的には、無駄に:混乱、空虚な場所、形のない、何もない、(物の)無価値、虚栄、浪費、荒野(Strong's Concordance)のこと。

その定義の中にある言葉の混乱に注目してください。"Void" -bôhûw- の意味です。

空虚であること、すなわち、表面的には見分けがつかないような廃墟であること。

この二つの言葉は、かつては生命があったことを暗示していますが、今は廃墟と荒廃しかありません。では、なぜ地球はこのような形のない空虚な状態になってしまったのでしょうか？それは、サタンの暴力の六千年の間、地球を完全に破滅の状態に陥れたからです。

さて、この二つの言葉、tôhûw と bôhûw は、後に聖書の中で、サタンの支配の終わり、六千年の終わり、千年紀の間の地球の状態を表すためにも使われています。預言者エレミヤはこう述べています。

わたしは地を見たが，それは形がなく，空虚であった。
そして天には光がなかった。
私は山々を見たが，確かに山々は震えていた。
そして、すべての丘が前後に動いた。
私は見たが，確かに人はいなかった。
そして、天の鳥たちはすべて逃げていった。
わたしは見たが，実りある地は荒野であった。
その都市はすべて破壊された
主の御前で
その激しい怒りによって（エレミヤ4:23-26、強調）。

預言者イザヤはまた、サタンの善悪の道徳律法によって六千年生きてきた後の地球はどうなるのかについても述べています。

見よ、主は地を空っぽにして浪費される。
表面を歪める
そして、**その住民を海外に散らした。**
土地は完全**に空になり，完全に略奪される。**

主がこの言葉を語られたからです。
大地は嘆き、消えていく。
世の中は、ぐったりして衰退していきます。
驕り高ぶる地の民は、ぐずぐずしている（イザヤ24:1、3-4、強調を加える）。

イザヤは続けて、なぜ地球がこのような状態にあるのかを教えています。

地球もまた、**その住人の下で汚されている。**
彼らは法律に違反しているからです。
条例を変更しました。
永遠の契約が破られた
それゆえ、呪いは地をむさぼってしまった。
そこに住む者は荒涼としている。
そのため、地球の住人は焼かれてしまう。
そして、ほとんどの人が残っていない（イザヤ24:5-6、強調）。

アダムとエバが「善悪の知識の木」を食べた瞬間から、地球は滅びの運命にありました。地球が滅びの苦しみを受けるのは、地球の住人たちが、サタンの暴力的な善悪の律法によって生きることによって、神の愛の律法から離れ、「律法に背き、掟を変え、永遠の契約を破った」からです。その結果、私たちは彼のようになり、彼のように破壊者となったのです。地球を破壊しているのは、彼の混合原理によって、私たちなのです。これらはすべて、神のアガペー愛の律法に違反し、永遠の「永遠の契約」、愛の非暴力律法を破った直接の結果です。

地球の完全な破壊は、神の律法を脇に置き、任意の報酬と罰のサタンの律法に置き換えた直接の結果です。

イザヤは、「混乱の都」と呼ばれる地の民から喜びのすべてが奪われていく様子を述べています。興味深いことに、この節の「混乱」という言葉は、先ほど見たのと同じ言葉で、創世記１章２節で「形のない」と訳されているヘブライ語のtôhûwです。

混乱の都（トウフウ）を崩す。
全ての家は誰も入れないように 閉鎖されている
通りではワインを求める声があがっています。
すべての喜びは闇に包まれている。
土地の歓喜は消えた。
街には荒廃が残されている。
そして、門は滅びに打たれている。
それが民衆の間で，このように地の中にあるとき。
それは、オリーブの木が揺れるようなものでなければならない。
ヴィンテージが終わった時のブドウの収穫のように（イザヤ24:10–13, emphasis added）。)

預言者はその後、サタンの紛らわしい道徳律を採用した結果、私たちの小さな惑星に何が起こるのかを要約しています。

恐怖と落とし穴とスネア
地球の住人よ、あなたの上に。
そうでなければならない。
恐怖の騒音から逃げる者は
落とし穴に落ちるだろう。
竪穴の中から上がってくる者は
罠にはまってしまう。
高いところからの窓は開いています。
そして、地の基礎が揺らぐ。
地球は激しく壊れている。
地球は裂け目が開いている。
大地がひどく揺れる。
大地は酔っぱらいのように 巻き起こるだろう
小屋のようによろめきながら
その罪は重くのしかかる。
そして、それは落下し、二度と上昇しない。
その日のうちに成就する
主は高貴な者たちの群れを高く罰するだろう。
そして、地の上には、地の王たちがいる。
集まってきます。
囚人たちが竪穴に集まってくると
そして、刑務所に閉じ込められることになります。
何日も経った後、彼らは罰を受けることになります。
そうすれば月は恥をかく
太陽は恥じて，万軍の主が君臨するからである。
シオン山とエルサレムで
そして、その長老たちの前に、栄光をもって（イザヤ24:10-13、17-23、強調します）。

ここに描かれているのは、サタンの律法によって人々を支配している地上の王や教会の指導者たちです。彼らは善悪のヒエラルキーの中で"高貴な"存在であり、力と暴力で地上を支配しています。"囚人が穴に集まるように、彼らは集められる」-聖書の言葉で「穴」とは死を意味します。イザヤは、「サタンはシェオール（墓）に連れてこられ、穴の最も低いところに連れてこられる」（イザヤ14:15）と言っています。しかし、「落とし穴」は単なる死を意味するのではなく、永遠の死を意味しています。詩篇作家は次のように述べています。

永遠に生き続けて、落とし穴を見ないようにすること（詩篇49：9）。

サタンとその従者たちは、二度目の復活の後まで、二度目の死を完全に経験することはありません。サタンに従う者たちは、「牢獄に閉じ込められて」死に至り、「何日も経ってから罰せられ」、千年後には「罰せられる」のです。千年紀の終わりには復活し、その時にサタンの律法の罰を全面的に受けることになります。彼らは神によって罰せられるのではありませんが、神は彼らがサタンの懲罰的な道徳律法にしがみつくことを選択した結果を完全に刈り取ることを許されるのです。

彼らの復活、第二の復活についてのイエス様の言葉に注目してください。

> 父がご自身の内にいのちを持っておられるように、御子にもご自身の内にいのちを持つことをお与えになり、また、御子が人の子であるがゆえに、裁きを執行する権能をお与えになったからです。墓の中にいるすべての人が主の声を聞いて出てくる時が来るからである。善いことをした者はいのちの復活のために、悪いことをした者は罪の**復活**のために出てくるのである（ヨハネ5:26-29、強調）。

"善い行いをした者」は、宗教、人種、地位、年齢に関係なく、愛と恵みとあわれみを人生の支配原則として受け入れています。"悪を行った者"はアガペの愛を拒否し、サタンの暴力的な道徳律法によって生きることを選んだのです。誰が彼らを罰するのでしょうか？彼らが使っている裁きのシステムそのものが、彼ら自身を非難するのです。彼らは自分自身を非難するのです。彼らは、彼らが支持しているサタンの非難システムによって非難されるのです。彼らは「すでに非難されている」のです。

黙示録では、ヨハネはこの図を拡大して言います。

> そこで私は天使が太陽の上に立っているのを見た 天の中を飛ぶすべての鳥たちに向かって 大いなる神の晩餐のために集まって言った "王の肉、船長の肉、強者の肉、馬の肉とその上に座る者の肉、そしてすべての民の肉、自由人も奴隷も、小さいものも大きいものも含めて食べなさい"**そして私は獣と地の王たちとその軍勢が集まって馬の上に座る者とその軍勢との間で戦争をしているのを見た。それから獣**は捕らえられ、彼の前でしるしをした偽預言者も一緒に捕らえられた。これらの二人は生きたまま、焼け石に焼かれた火の池に投げ込まれた。残りの者は、馬の上に座る者の口から出た剣で殺された。そして、すべての鳥はその肉で満たされた（黙示録19:17-21、強調）。

> その時、私は天使が天から降りてくるのを見た。彼は、悪魔であり、サタンでもある、昔の大蛇である竜を捕らえ、千年の間、彼を縛り付けた。しかし、これらのことの後、彼はしばらくの間、解放されなければならなかった。そして、わたしは玉座を見て、彼らがその上に座り、裁きが彼らに下された。そして私は、イエスへの証しと神の言葉のために首をはねられた者たちの魂を見て、獣やその像を崇拝せず、額や手にイエスの印を受けていない者たちを見た。そして、彼らは千年の間、キリストとともに生き、君臨した。**しかし、残りの死者は、千年が終わるまで、再び生きることはありませんでした**。これが最初の復活です。最初の復活に参加する者は祝福され、聖なる者である。しかし、彼らは神とキリストの祭司となり、千年の間、神と共に君臨する（黙示録20:1-6、強調）。

この地球の歴史全体が、創世記１章２節に書かれていることです。これは、罪の始まりから終わりまでの歴史です。そして、３節では、神は光と闇を分けておられます。光と暗闇は、神が園の真ん中にある二つの木、すなわち「いのちの木」（光）と「善悪の知識の木」（暗闇）を指し示す時に、再び対比されています。

地球を完全に混乱させているのは、サタンの闇が矛盾した二元性で構成されているという事実です。善と悪、光と闇。すべての混乱を取り除くために、イエス・キリストは使徒ヨハネに明確で正確なメッセージを与えました。イエス・キリストは最初に弟子たちにこのメッセージを与え、今、世界の終わりに、私たちの心を開いておられます。このメッセージは歴史の中でも特に重要なものであり、神がこのメッセージを与えておられるのは、私たちが神の人格についての純粋で不完全な啓示を切実に必要としていることを知っておられるからです。

> これは、私たちが神から聞いたメッセージであり、神は光であり、神のうちには全く暗闇がないことを、あなたがたに宣言するものです（第一ヨハネ1:5）。

使徒ヨハネはその著作の中で、神の性格を表すために二つの言葉を使っています。一つは「光」（第一ヨハネ1:5）、もう一つは「愛」（第一ヨハネ4:8）です。愛は神の本質であり、光は神の愛の性格に関連して、この真理を象徴するものです。神には全く闇がない」とはどういうことでしょうか。人間ではなく、聖書は暗闇をどのように象徴的、寓意的に定義しているのでしょうか。

> もし私たちが「主と交わりを持っている」と言って、闇の中を歩むならば、私たちは嘘をつき、真理を実践していません。しかし、もし私たちが主が光の中におられるように光の中を歩むならば、私たちは互いに交わりを持ち、御子イエス・キリストの血は私たちをすべての罪から清めてくれます（第一ヨハネ1:6-7）。

もし私たちが神を愛している、つまり神と交わりを持っていると言うならば、私たちは他人に対してだけでなく、自分自身に対しても嘘をついていることになります。神が光の中におられるように光の中を歩むならば、「私たちは互いに交わりを持つ」、すなわち神との交わりを持つことになります。神の無条件で公平な愛が私たちを変えてくださるからです。

神についての知識は常に最初にあります。この知識から、私たちの同胞との関係が生まれます。同様に，最初の4つの戒めは，まず神を知り，感謝することに関係しています。残りの6つの戒めは，わたしたちが同胞である人間にどのように接するかを示しています。

> **さて，このことによって，わたしたちは彼の戒めを守るならば，彼を知っていることを知っています。わたしは彼を知っている」と言って，彼の戒めを守らない者は，嘘つきであり，真理は彼の中にはありません。しかし，主の言葉を守る者は誰でも，本当に神の愛がその人のうちに完全なものとなります**。このことによって、わたしたちは自分が神のうちにいることを知っています。主の中にいると言う者は、主が歩まれたように、自分も歩まなければなりません。兄弟たちよ、私はあなたがたに新しい戒めを書くのではなく、あなたがたが最初から持っている古い戒めを書きます。古い戒めとは、あなたがたが最初から聞いていた言葉です。闇は過ぎ去り、真の光がすでに輝いているからです。**自分は光の中にいると言って、自分の兄弟を憎む者は、今まで暗闇の中にいた。兄弟を愛する者は光の中にあり、その中でつまずくことはない。しかし、兄弟を憎む者は暗闇の中にいて、暗闇の中を歩き、自分がどこに向かっているのか分からず、暗闇が彼の目を盲目にしているからである**（第一ヨハネ2:3-11、強調）。

これらの節によると、「光」は愛であり、「闇」は憎しみです。アガペの愛は義の実であり、憎しみは善悪の実です。私たちが憎むのは、無条件の愛を持っていないからであり、私たちが無条件の愛を持っていないのは、善と悪によって運営されているからです。それならば、善悪は闇です。ヨハネが「神は光であり、神のうちには全く闇がない」と言うとき、神の愛は純粋であり、善悪の領域から闇の粒子を全く含んでいないことを意味しているに違いありません。

"暗闇は全くない」というのは、このメッセージの必要性があったことを暗示しています。それは、人々が神には闇があると考えていたことを暗示しています。イエス・キリストのメッセージは、暗闇の王国のあらゆる側面を神の性質に帰することに重大な誤りを犯していたことを世界に知らせることでした。

闇はそれ自体で完結している。闇に関連して使われる場合、「全く」という言葉は意図的に強調しすぎです。"全く暗闇がない」というのは、私たちが神を見るときには、全く混ざり合ってはいけないということを主張しています。善悪の光と闇の両方を神の人格に帰属させてはいけないのです。

ヨハネのメッセージは、聖書から、闇に染まった神を信じる人々へのものでした。イエスは、暗闇は邪悪な者の特徴であって、聖なる者の特徴ではないと教えました。これは人類が聞くべきメッセージです。

使徒パウロは、闇は神の人格に関する誤った知識と関係があると述べています。

> それは、暗闇から光を輝かせるように命じられた神が、**イエス・キリストの顔にある神の栄光の知識の光を**与えるために、私たちの心の中で光を放ってくださったからです（第二コリント4:6、強調追加）。

この箇所は、神に関する人々の心には暗闇があったことを前提としており、特に旧約聖書に記されている神の御託宣を与えられた人々の心には暗闇があったのです。ここで与えられた「光」とは、「イエス・キリストの顔にある神の栄光を知ること」です。このようにキリストは言われました。

> 私は世の光です。わたしに従う者は、暗闇の中を歩むのではなく、いのちの光を持つ（ヨハネ8:12）。

いのちの光であるイエス・キリストは、暗闇を取り除き、神が罰と死に関与しているという私たちの誤った理解を取り除きます。これは人類の間で優勢な信仰となっていました。神の栄光とは、神の善良さ、憐れみ、アガペー愛の本質であり、それは「わたしと父は一つである」（ヨハネ10：30）と言ったイエス・キリストの人となりに反映されています。

そして、使徒ヨハネは、バプテスマのヨハネのイエス様についての証しについて、次のように述べています。

> 神から遣わされた男がいた その名はヨハネであったこの人は，彼を通してすべての人が信じることができるように，**光の**証人となるために来ました。彼はその光ではなく、その光の証人となるために遣わされたのです。それが、**世に出てくるすべての人に光を与える真の光でした**（ヨハネ1:6-9、強調）。

ヨハネは、イエス・キリストを「世に出てくるすべての人に光を与える真の光」と言うことで、「真の光」が来るまでは、偽りの光が与えられていたことを暗示しています。

生まれつき目が見えない男の癒しは、その男の人生におけるサタンの働きを元に戻すための慈悲深い行為でした。しかし、彼の癒しは全人類にとっても大きな霊的意味を持っています。なぜなら、失明は人間の心に浸透した闇のメタファーだからです。

> さて、イエスが通りかかったとき、彼は生まれつき目の見えない男を見た。弟子たちはイエスに尋ねて言った，「ラビ，この人と両親のどちらが罪を犯したのでしょうか，彼は生まれつき目が見えないのですか」。イエスは答えられた。『この人も両親も罪を犯したのではありません。私は昼間に私を遣わしてくださった方の御業を働かなければなりません。私が世にいる限り、私は世の光である』（ヨハネ9:1-5）。

私たちと同じように、使徒たちは善悪の知識を染み込ませていた。彼らはイエスに尋ねた "ラビ、誰が罪を犯したのですか？" "この男や彼の両親は、彼が盲目に生まれたことを？""イエスは答えた この男も両親も罪を犯していない"イエスは何と言った？この男と彼の両親は、私たちの残りの部分と同じように、罪人ではなかったのですか？すべての人間は罪人ではないのか？

使徒たちが本当に求めていたのは，「誰の罪がこの人にこのような罰を与えたのか，自分か両親か」ということでした。使徒たちは、彼の盲目は神からの罰だと信じていました。彼らは、善悪の法則、功罪、報いと罰の条件付き法則によって考えていたのです。

この男も両親も罪人でしたが、イエスは、彼の盲目は神からの罰ではないというメッセージを伝えたかったのです。イエス様の答えは、神が恣意的な報いと罰の律法によって働くことを否定しています。その代わりに、サタンが悪のために意図していたことを、神は善のために変えることができることを示しています。これが神の栄光です。

サタンの破壊的な働き、この場合は盲目であることを逆転させることによって、イエス様は神様が病気や弱さの原因ではないことを明らかにされました。もしそうであったなら、イエスは御父の御心に反して行動することはなかったでしょう。イエスは決して御父に逆らうことはなく、御父と完全に調和していたのです。

私たちは霊的に生まれながらにして、神の人格についての真の知識を知ることができません。イエスは私たちの目を開き、霊的な目を与えるために来られたのです。これが永遠の破滅と永遠の救いを分けるものです。

> 世の中には、神を知る階級と、神を知らない階級の二つしかありません。霊的な人は前者のクラスに属し、自然な人は後者の**クラス**に属します。**魂がイエスの愛に満たされている人が、神を父であり友人であると見るのは自然なことです。彼は自分の心の部屋を照らす光と調和して他の人に教えることができますし、またそうするでしょう。**彼は人に罪から義への一方的な道を教え、道であり真理であり命であるイエスの人柄を世に明らかにします。贖いの計画によって、罪人を破滅の淵から神の楽園へと導く道が用意されています。この規定は、父と子の側の無限の犠牲によって実現されました。しかし、キリストは失われた世界に与えられ、私たちが罪の中ではなく、罪から救われるために与えられました。

イザヤは、世の光であるイエス・キリストが、私たちの神に対する間違った見方を正すと預言していました。イエス様はミニストリーの初めに預言者の言葉を引用されました。

> そしてナザレを出て、海沿いのカペルナウムに来て、ゼブルンとナフタリの地に住んでおられた。"ゼブルンの地と海沿いのナフタリの地、ヨルダンを越えた異邦人のガリラヤ、**暗闇の中に居座っていた人々には大きな光が見え、死の領域と影の中に居座っていた人々には、光が明けた**」（マタイ4:13-16、強調）。

ここでは「暗闇」は「死の影」と同じ意味です。死の領域と死の影」に座る者は、神の性質に関して暗闇の中にいます。死の影」は死の原理に支配されています。死が闇であるならば、光であり、「その中には全く闇がない」神のものであるはずがありません。

大きな光を見た」「光が明けた」というフレーズは、どちらもイエス様のことを指しています。闇」と「死の影」は神の国には属さないことを明らかにされました。

啓蒙主義時代の哲学者たちは、コントラストのない自由はありえない、光と闇は同時に存在しなければならないと主張していました。これはまさにサタンが反抗期の初めに主張していたことです。

例えば、エマニュエル・カントは、人間の堕落は、本能的な行動から意識的な合理的思考への移行を表し、それによって人類が真の選択を持つことができると信じていました。カントが意味するものは、 "本能的な行動"で、彼は善悪の知識の木を食べる前にアダムを支配したアガペー愛の単一の、純粋な原則であり、 "合理的思考"によって、彼は禁断の木から食べた後、アダムは人類全体に渡された善悪の新しいマインドセットを意味していました。しかし、秋から、アガペーはもはや私たちの本能的な行動ではありません - 善と悪は今、私たちのデフォルトです。さらに、意識的な合理的思考、つまり、善と悪の間の選択は、蜃気楼です。善と悪の両方が同じコインの両面であるため、そのような選択は、実際には存在しません。

カントにとっては、善と悪を持つという対照的な考えは、神の本来のデザインであるアガペー愛の単一性よりも優れていた。カントにとって、善と悪に支配された心を持つことは、私たちが単一の原理に支配された単なるロボットではなく、合理的な思考を持つことを可能にしたのである。彼はそれが善と悪の二元性の導入前に人類に知られていなかった悪と悪癖を引き起こしたかもしれないことを認めているにもかかわらず、このように彼の意見では、秋は、絶対に必要であった。悪事にかかわらず、彼にとってこの新しい状態は、堕落以前に存在していた無邪気で無知な状態よりも好ましいものでした。

M.S.エイブラムスは、啓蒙主義時代の哲学者や詩人を論じた本の中で、エッセー『人間の歴史の推測的起源』から、人類の堕落した状態に対するカントの評価を引用しています。

> この状態からの第一歩は、道徳的な面では堕落であり、物理的な面では、この堕落の結果は、これまでに知られていなかった人生の悪のホスト（結果として、罰のモード）であった（Meyer Howard Abrams, Natural Supernaturalism.ロマン派文学における伝統と革命 (New York: W.W. Norton & Company Inc, 1971, p. 205)。

カントは、「善悪の知識の木」が「生活の中に多くの悪をもたらす」ことを理解し、それが罰をもたらすことも理解していました（彼は、私たちの他の人々と同じように、私たちを罰しているのは神であると考えていたに違いありませんが）。

もう一人の思想家、ウィリアム・ブレイクはこう述べています。

> コントラリなしでは、進行はありません。引き寄せと反発、理性とエネルギー、愛と憎しみは、人間の存在に必要なものです。宗教的には善と悪を呼び出すものこれらの対照的な春から。善は理性に従う受動的なものです。悪は、エネルギーからのアクティブな湧きである。良いは天国です。悪は地獄です（ウィリアム-ブレイク、初期の照らされた本、ニュージャージー。プリンストン大学出版局、1993年、144頁）。)

とシラーは書いています。

> この本能からの人間の落下（アブフォール）は、確かに創造物に道徳的な悪をもたらしたが、そこに道徳的な善を可能にするためだけに、矛盾なく、人類の歴史の中で最も幸運で最大の出来事である（Meyer Howard Abrams, Natural Supernaturalism.ロマン派文学における伝統と革命（ニューヨーク：W.W.ノートン＆カンパニー社、1971年、208頁、209頁

このように、世界の推論では、もし神が光であり、唯一の光であるならば、神はどのような選択肢を提供しているのでしょうか？人間の知恵は、真の選択が存在するためには、対照的なものがなければならないと主張しています。つまり、真の選択が存在するためには、光と闇がなければならないということです。しかし、聖書は、神には闇が全くないと教えています。

> これは、私たちが神から聞いたメッセージであり、神は光であり、神のうちには全く暗闇がないことを、あなたがたに宣言するものです（第一ヨハネ1:5）。

ルシファーは、彼は素晴らしいと思われるアイデアを考案しました。このアイデアは、彼の誇りに満ちていました。彼は、それが究極の知恵だと考えていたからです。しかし、聖書の光と闇の比喩は、真理と誤りだけでなく、生と死をも意味しています。彼の「知識の木」は死に責任があるので、いわゆる「光」と「闇」を混ぜ合わせた原理は、完全に「闇」になってしまうということです。

しかし、サタンは自分の律法が選択の自由を提供していると主張しました。善と悪は二つの異なる概念を表すように見えたが、それは選択が原理自体の中に存在するという考えを伝えるように見えたからである。しかし、本質的に、善と悪は、その善と悪の両方が混沌、破壊と死で絶頂に達したので、それが示唆するように現れた選択を提供することができませんでした。死で終わる2つのいわゆる反対の間にどのような選択があるか。真の選択は生命の木と善悪の知識の木の間にあることを意味する生と死の間にある。

もしサタンが宇宙を支配していたら、自由は過去のものになっていたでしょう。もし彼が絶対的な権威を持っていたならば、宇宙の政府を絶対的に独裁的に支配していたでしょうし、善悪の法則以外のものが存在することを許さなかったでしょう。彼は可能であれば、神自身を消し去っていただろう。

サタンの法則は、自由の欠如が彼の原理の恣意的な性質によって本質的に確立されているので、利用可能な代替案がないだろうことを保証しています。聖書がサタンの王国を奴隷制と表現しているのはこのためです。このことを知っていたイエスは、私たちが永遠に失われるであろう真の代替案、すなわち人生の道を与えるために来られたのです。

聖書の中でエジプトは、善悪の原理である罪と咎の一種である。イスラエルのエジプトでの奴隷化は、サタンの報いと罰の原理の下での全人類の奴隷化を象徴しています。なぜエジプトがサタンの政府の象徴として選ばれたのでしょうか？それにはいくつかの非常に良い理由があります。

古代エジプトでは、「知恵」は神々から直接エジプトの神官に与えられていました。エジプトの神々は彼らに善悪の法則を教え、それを"文明"と呼んだ。報酬と罰はエジプトを支配していた法則であり、その証拠は彼らの象徴にある。ファラオは、報酬と罰の象徴である「かぎとヒラメ」を持っているように描かれています。頭部のレガリアには攻撃モードのコブラ（蛇）が描かれています。人類は、アダムとイブがそれを寄生して以来、善と悪の知識への奴隷に保持されています-私たちは、精神的なエジプトのすべてであり、誕生以来、善と悪の私たちの肉食、二元論的な道徳的性質への奴隷として束縛されています。

人々をエジプトから連れ出し，律法を与えられたモーセは，律法を司るイエスご自身のタイプでした。イエスは人々を蛇の律法から遠ざけ、神のあわれみの律法、すなわち無条件で公平な愛の王国、すなわち約束の地の安全な場所に連れて行かれました。アガペの愛の神についての真理を与えることによって、キリストは私たちをサタンの報いと罰のシステムから解放し、アガペの愛と義が君臨する乳と蜜の流れる地、カナンに導くことができます。

神はすべての知的存在に選択の自由を与えています。その証拠に、自由がなければ、サタンは宇宙に善悪の致命的な知識を持ち込むことはできなかったでしょう。しかし、イエスは、私たちが神の性質に関する真理を受け入れるとき、私たちを死に導くサタンの欺瞞から解放されることを約束してくれました。キリストは真理を与えてくれますが、それを信じて受け入れるかどうかの私たちの選択はまだ残っています。

本書で提供されている証拠が、読者が希望、平和、愛、そして人生につながる選択をする助けとなることを、私たちは願っています。神は私たち一人一人を無限の愛で愛しておられ、私たちが神と永遠に共にあることは神の御心です。

> 死も命も、天使も支配者も権力者も、現存するものも来たるべきものも、高さも深さも、その他のいかなる被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはできないと確信しています（ローマ8・38〜39）。

> 愛は私たちの間で完全なものとなりました。それは、裁きの日に大胆になるためです。愛には恐れはありません。しかし、完全な愛は恐れを打ち消します。しかし、恐れを抱く者は、愛の中で完全なものとされていません。私たちが彼を愛するのは、彼が最初に私たちを愛してくださったからです（1ヨハネ3:17-19）。

イエス・キリストに啓示された神の無条件のアガペの愛は、私たちを揺るがすことのできない確固たる基盤です。神の不変の愛を知ることによって、私たちは目の前の預言的な困難な時代を乗り越え、恐れずに神と対面することができるようになります。私たちが皆、イエス・キリストに啓示された無条件のアガペの愛の光を受け入れることができますように。

付録
EGWの略語への鍵

AHアドベンティスト・ホーム
1BC聖書解説、SDA、第1巻（第2巻などは2BC）。
教会のための聖職者会議
COL キリストの目的のレッスン
対決
保護者・教師・生徒へのCTカウンセリング
凱旋するキリスト
DA Desire of Ages, The
DD 夜明け前の闇
エド教育
EP 永遠の過去から
エバンジェリズム
EW初期の著作
HF ここから永遠に
LHU リフトヒムアップ
MB 祝福の山からの思い
エムエムエム医学省
原稿、E.G.ホワイトさん
PP 家長と預言者
キリストを反映したRC
RHレビューとヘラルド
1SM選りすぐりのメッセージ、ブックワン(ブック2などは2SM)
1SP予言の霊、The、Vol.1 (Vol.2などは2SP)
ST時代のしるし SW南部の仕事、The

THE GOD ON TRIAL BOOK SERIES

Book One: 神の悪魔化はマスクされていない
第二巻：裁判中の神私たちは嘘をついたのか？神は殺人者なのか？
第三巻"神の怒り"の正体を暴く

注文方法。宛先: graceunlimitedministries@hotmail.com
ウェブ上: grace-unlimited-ministries.org godontrial.org, godontrial.org
バーチャルコミュニティ/アプリ: members.godontrial.org
YouTubeでグレース・アンリミテッド・ミニストリー
Facebookページ。ゴドントリアル777
インスタグラムで裁判中の神